
おまけ召喚 第三部 雪深き学び舎に潜む影

草野 瀬津璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おまけ召喚 第三部 雪深き学び舎に潜む影

【Nコード】

N0698Q

【作者名】

草野 瀬津璃

【あらすじ】

ひよんなことから異世界ラーザイナ・フィールドにやって来てしまった折部流衣だが、さまざまな困難を乗り越えて、ようやく魔法学校に辿り着く。そこで、セトの条件をクリアすべく助手として働くが、身分差別が邪魔をしてなかなか上手くいかない。それでも何とか生徒達と繋がりを得ていくけれど……。学校編です。【 気弱で常に逃げ腰な主人公が、異世界で厄介ごとに巻き込まれながら成長していく感じの話です。男の友情が大好きなので、そういうのを中心に書いてます。目的もなくうろろろろる感じが苦手な方はご

注意下さい。恋愛要素がそこそこ入ってくる予定です】

メインの登場人物紹介（ネタバレれ含みます）

＝ 主な登場人物 ＝

* 作者のメモ用として作成したもので、長いですが、あしからず。

・折部流衣（16） 黒髪・黒目・男・人間・魔法使い
霊感が少しあり、ちょっと記憶力が良いくらい、ほとんど取り柄のない中学三年生の少年。勘の良さのせいで異世界ラーザイナ・フィールドに飛ばされ、帰る為に奮闘中。

身長155cmという背の低さと、見た目が地味な割に、大きめな目をした顔立ちせいで、女の子と間違われることが多い。

常に弱腰・弱気で、人前に出るのが苦手、その上泣き虫だが、優しい性格をしている為に震えながらも敵に立ち向かう、度胸があるのかなのか分からない性格の持ち主。

料理は出来るが、それ以外の家事は苦手。他にも、何かを作っているのが好き。好きな科目は数学や理科。動物が大好き。

パティシエを目指す七つ年上の兄を持つ。

武器：名匠ヴェルダの遺作「水の七」の杖型。

得意魔法：習得過程なので不明。

・オルクス（？） 黄緑色のオウム・オス・使い魔

女神ツィールカに仕える高位の使い魔。

女神に頼まれた為、流衣の案内役として使い魔となる。

流衣のことを気に入り、主人としてよく慕っているが、ちょっと過保護気味。結構気が短く、すぐに報復など怖いことに走るので流

衣は止めるのに必死。

長生きをしている為に博学で、魔法も使える。

主人である流衣の血と魔力と許可を貰えば、人型に化けることも出来る。

性格的に合わないのか、よくリドと喧嘩している。また、魔物らしく敵には一切容赦がない。

---人型オルクス---

見た目は亜人。耳が黄緑色の羽で、黄色に近い金髪と黒い目をしている、二十代後半の青年姿。

黄緑色の長衣・黄色いシャツ・黒いズボン・赤い羽根飾りのついた生成り色のブーツを身に着けており、凛々しい佇まいをしている。

穏やかな笑みを浮かべながら、策士のようなしたたかさも垣間見える。

武器：無し。人型であれば、素手でも強い。

使える魔法領域：光、風、火系統

得意聖法：術三・癒し。

・リド（本名：リディクス・グレッセン）（18） 赤髪・琥珀色の目・人間・風の精霊の子

ルマルディー王国東の辺境にある 言葉交わしの森 に住む木こりの少年。盗賊団襲撃事件以来、流衣の行く先に興味を持ち、旅に同行する。

風を自由に扱う 精霊の子。優秀なダガー使いで、身が軽い。

盗賊団の件の為、自分の家族や故郷の記憶がなかったが、風の神殿エアリーゼで記憶を取り戻す。グレッセン家の跡取りだが、二年后に継ぐことになったので、それまで自由に旅をしている。

父親に似たのか、治癒の聖法が得意。薬草調合にも興味があるらしい。

頼りになる兄貴然としていて、実際、とても頼りになる。生い立ちがそうさせるのか、とても世渡り上手。そして澁刺としていて、爽やかな空気を持っている。またさばと口調に飾り気がなく、同性に好かれやすい気質の持ち主。が、意外に短気で喧嘩っばやい。根本的なところで人が好い為、憎めない感じの好青年。性格的に合わないのか、よくオルクスと喧嘩している。

武器：ダガーでの二刀流。

魔法ではないが、風を自由に扱える接近戦タイプ。

得意聖法：術三・癒し、術四・薬効強化

・デイルクラウド・レシム・カイゼル（18） 白に近い銀髪・水色の目・人間・魔法騎士見習い

光弾の騎士 リリエノーラを師匠と仰ぐ魔法騎士見習いの少年。レヤード侯爵家の三男だが、家を継げない為、騎士を志す。家に伯爵の地位を貰っており、レヤード侯爵領内にある臣下のカイゼル家に婿養子として入ることが決まっているので、カイゼルの家名を名乗っている。

病気がちで吐血ばかりしている気の優しい長男フィルフと、それを補佐する堅物だが家族思いの次男である兄ヴァンと、王都にいる貴族に嫁いだ姉ミアナがいる。上から順に、フィルフ、ミアナ、ヴァン、デイルで、デイルが末っ子。

超がつく真面目な少年で、見た目の冷たそうな印象と異なり、とても親切。それどころか、兄の影響で少々世話焼き気味。騎士の自分を追求しており、誠実な人柄をしているが、堅物なのが玉に瑕。熱血でちよつと暑苦しい。

リリエノーラに一人放り出されてしまい途方に暮れるが、面白そうだからと流衣達についてくる。ただいま、行方不明中。

武器：大剣、短剣、素手（格闘術）

一応、貴族の嗜みとして弓術も使える。が、接近戦の方が

得意。

ただし魔法も使える為、どちらかといえは中距離戦タイプ。

得意魔法：光系統中、リリエノーラオリジナルの術・光弾が得意。

・ノエル（1） オス・小型竜^{ミニドラゴン}

真つ白い鱗、水色の目、青い翼をもった小型竜。一年で70cmほどに成長している。これでも大人。

孵化時の刷り込みによりデイルを親と認識し、絶対服従している。ノエルにとってデイルは親だが、デイルはノエルを使い魔としている。

地球で、十二月二十五日のキリスト教での聖なる日に生まれた子どもをノエルと付ける、という流衣の言葉で名が決まる。

武器（？）：爪、牙、口から吐く炎^{ファイア・ブレス}

・アルモニカ・グレッセン（14） 赤髪・濃緑色の目・人間

「杖の宝」と呼ばれる杖連盟の幹部にして、ヘイゼルの弟子。また、風の神殿の跡取り娘。

口が悪くて暴力に走りがちな少女だが、気遣い屋で気にしがちなところがある。

魔力は凡人並みだが、魔法道具開発にかけて右に出る者は滅多にいない。研究に没頭して引きこもりがちだが、それは母親から外出禁止を言い渡されている影響。

スノウリード魔法学校では、女史とあだ名されている。

武器：桃灰色の石をはめたロッド（短い丈の杖）

得意魔法：火、風系統

サブキャラ紹介

＝主に出てくるサブキャラ＝

・リリエノーラ・ヴェルディー（26） 薄茶の髪・右目が緑、左目が金・女・魔法騎士

ルマルディー国近衛騎士団の騎士団長。 光弾の騎士 と呼ばれる。

気さくな人柄であるが、少々おちゃらけ過ぎている。が、実際は結構誠実。

弟子であるディルをからかうのが趣味。 貴族ではないのだが、ロザリーとは小さい頃からの親友。

・ヴィンセント・クロディクス・シャノン（16） 白っぽい金髪・青紫の目・男・人間・シャノン領主

通称、ヴィンス。世間では、「シャノン公爵」もしくは「王弟殿下」と呼ばれている。

王都に向かう途中で襲撃に遭い、逃げていた所を流衣達が助け、親しくなる。

繊細で儂げな見た目をしているが、意外に苦勞人。よく気をつける性格な為、十五にも関わらず、分を弁えた言動や行動をとる。貴族にしては気さくな性格。

・ロザリー・クロディクス・エマ・ルマルディー42世（25）

深紅の髪・スカイブルーの目・女・人間・ルマルディー国女王

男前な美女。宰相であり婚約者でもあるマギィに一目惚れして以降ぞっこん。また、ブラコンに近い勢いで、実弟であるヴィンスを可愛がっている。

さばさばと切れのある話し方をし、気さくな性格。子供の頃はおてんばとしてその名を馳せていた。

好きなことは乗馬と城下町散策。嫌いなことはデスクワーク。外で剣の素振りをしている方が楽しいという、淑女らしくない女性。

二年前に王位を継いでからというのも騒動が絶えず、時折悩んでいる素振りを見せる。

・レッド（6） 赤茶の髪・灰色の目・男・竜

塔 で働く青年。実は赤竜の化けた姿。

真面目な性格だが、喧嘩っばやい。大変賢く、速読が得意な為にまだ六歳だが膨大な知識量を誇る。また、その為に精神的に落ち着いている。基本的に人間の味方。というより、杖連盟本部 塔 メンバーの味方。

アルモニカを妹分と言っているが、本当はレッドの方が弟分。ヘイゼルの弟子。

・ヘイゼル・スペリエンタ（69） 黒ウサギ族の獣人・男・魔法使い

黒ウサギ族の獣人。ラーザイナ魔法使い連盟の組合長。アルモニカの魔法の師匠で、グレッセン卿の教育係だった人物。

弟子からはクソジジイ呼ばわりをされているが、懐の広さや博識さ、魔法の腕から全魔法使いの憧れの存在となっている。その一方で、塔 に所属する魔法使いにはふざけた爺さんだとも思われて

いる。

・セト・クレメント・オルドリッジ（38） 灰色の髪・ダークグレイの目・男・人間・魔法使い

「灰色のセト」と呼ばれる。

魔法学校で研究している、転移魔法の権威の魔法使い。

ボルド村に居を構えており、宿屋ホワイトベルの女主人シフォーネと息子のナゼルの隣人。ナゼルとともに仲が良く、休みには魔法を教えている。

・デューク・グレッセン卿（37） 深紅の髪・深緑の目・男・神官

風の神殿エアリーゼの神殿長。治癒のエキスパート。

話しているだけで辺りを和やかにさせる、落ち着いた空気の人。物静かであるが、無視できない存在感の持ち主。

静かな所で、風の音を聞くのが好き。

|| 悪魔の瞳 サイド ||

・ヴィクトル・アーツ（34） 白に近い銀髪・深紅の目・男・人間

悪魔の瞳 の教祖。

貴族ではなく、富豪の家の出身であるが、見た目の異様さに加え先見の才を持つ為に父母には疎まれて育った。

幕間1より登場。

・サイモン・アーツ（16） 黒髪・金目・男・カラス族の亜人

悪魔の瞳 の幹部。スローイングナイフの使い手。

元々、暗殺を生業にしているカラス族の里生まれなので、戦闘力は遥かに高い。が、破滅的に気が短い。

ラーザイナ・フィールド北部に暮らす珍しい亜人であるカラス族である為、幼少時に里から人買いにさらわれ、扱いの酷さの為に逃げ出し、路地裏に大怪我で倒れている所をヴィクトルに助けられ、それ以来、ヴィクトルを慕っている。

人買いにさらわれて以来、他人に触れられるのを毛嫌いしており、唯一ヴィクトルだけは触るのを許している。また、人買いや誘拐での売買を憎んでいるので、そういう者は容赦なく抹殺する。サイモン自身が歩く理不尽であるにも関わらず、理不尽な輩が目ざわりなので、自分のテリトリー内の犯罪者を取り締まっていたりもするから、ある意味では社会貢献をしている。

ヴィクトルの計らいで、一応、養子という立場にいる。

十一章より登場。

・ラズリード（21） 茶髪・右目が赤、左目が青・男・人間

悪魔の瞳 の下っ端。サイモンの部下。サイモンをリーダーと呼んで慕っている。

両目の色がきついせいで家族に不気味がられ、居場所がなくなつて家を出て、所持金をすられて途方に暮れていたところをサイモンに拾われる。その為、教祖よりもサイモンの方に恩義を感じている。サイモンの性格が性格なので敵ばかりの中、唯一まともに付き合い合っている部下。そのせいか、サイモンにはラズリーと呼ばれて少しだけ気を許されている。

四十五章より登場。

・ユリア（26） 金髪・青目・女・人間

悪魔の瞳 の幹部。有能な魔法使い。

小柄な美女だが、顔の右半分に火傷の痕がある。他の 悪魔の瞳

メンバーと同じく、事情を持つ。
九章より登場。

おまけ

大幅に略してます。

〓 移動劇団スカイフローラメンバー〓

・クレメンス・スクレドニ

リメランの実父。劇団の団長。味覚オンチ。

元は王都で魔法について研究する学者だった。

・リメラン(24)

クレメンスの実の娘。

ゆるゆるな空気をしている綺麗な女性。吟遊詩人でもあり、劇団の花形のヒロインに扮する。

・ジエシカ(7)

茶髪緑目。ツインテールの女の子。

無邪気で見ているとても可愛らしい。泣き虫。少々おませなところもある女の子。

ランスのことを呼び捨てにしては、兄と呼べと怒られているが、一向に懲りない。

・ルディー(17)

薄紫の髪と薄青い目をした少女。黒いカチューシャがお気に入り。質素な薄紫のワンピースを好んで着ている。

劇団の調理場を仕切っていて、子ども達の面倒を見る姉、を通り越して母親役。

勝ち気ですぐに手が出る。怪力なので、結構拳骨は痛い。意外に涙もろい。

・ランス（13）

金髪灰色目の快活な少年。少々口が悪く態度もでかい。

口ではなんだかんだと文句を言いながら、ジェシカの面倒をみていたり、世話焼きなところもある。憎めない感じ。劇団の皆のことを家族だと思い、大切に思っている。

元は孤児院にいたが、待遇のひどさに耐えかねて逃げ出して広場にいたところ、クレメンスに出会う。

サジエと仲が良く、たいてい一緒に行動している。兄弟とも親友ともいえる間柄。

・サジエ（13）

黒茶の髪を伸ばして後ろで纏め、緑色の目をした少年。

少々痩せぎすで、いかにもインドア派といった感じ。知恵が回って頭が良く、知識欲旺盛。

ランスと仲が良く、たいてい一緒に行動している。兄弟とも親友ともいえる間柄。

他、大人では、青年一人と男が一人、女が二人と、中年女が一人。

団員は全部で十一人いる。

登場人物紹介・おまけ

〓おまけな登場人物紹介〓

*勇者サイドや同一知り合いですが、物語には少ししか出てこないです。あくまでおまけ。

・ 川瀬達也（18） 黒髪・黒目・人間・勇者

地球から「最も勇者に相応しい人物」という名目のもと召喚された少年。

寡黙な人柄。

ちよつと学校生活が嫌になっていた所、階段から落つこちてその先にあつた鏡から異世界へ。

実は、流衣の兄、怜治が三年前に一年だけ家庭教師をしていた人だつたりする。「怜治さん」と呼んでいた。

北条学園の高校二年生で、フェンシング部の部長。

少し目つきが悪いのと寡黙な為、どこか近付きにくい空気であるが、この一匹狼なところが良いのだと女生徒達に人気がある。が、本人は少し女性嫌悪気味なので女子と距離をとりがち。 母親が小さい頃に出て行ったせい。

川瀬明紘あきひろという、一つ年下の弟がいる。

武器：サーベル

得意魔法：光系統の魔法と、風系統。

闇以外は精霊が味方するので大体使える。

・ リンキスタ・オーグ・エスニルカ（13） 銀髪・青灰色の目・

人間・カザニフの託宣の巫女

通称、リンク。ツインテールの、無邪気な女の子。魔法と聖法の使い手だが、本人はまだ子供。託宣の巫女としての力量は抜群で、神様が光臨する器として活躍中。

いつもどこか楽しげで、ほわほわと笑っている。ちょっと天然と
いうか不思議ちゃん。

勇者のお付きで旅している。リンクは初めて神殿の外に出られて
すっごい楽しい、らしい。

自分のことを「リンク」と言ったり、「わたくし」と言ったり、
場面で使い分ける。

達也のことをタツと呼ぶ。

大きな狼の使い魔「ルーデル」に乗っているので、旅もへっちゃ
ら。

武器：唱短の杖（詠唱を短縮しても、短縮しない時と同じ強さを
出す。普段はカザニフの神殿に置いているが、必要な時だけ召喚す
る）

得意魔法：闇以外、一通り使用可能。

得意聖法：一通り使える。

・ルーデル（？） 灰色と白の毛の狼・オス・使い魔

上から七番目の魔物で、人間界に出てくる使い魔としては高位。

人間好きで、必死に練習して、人間語をマスター。動物型使い魔
の中では一番上手かも？

ただしまだ年月が足りないので、人型には化けられない。

「オレ」、「ご主人」、他、呼び捨て。

すっごく男らしい狼。

氷と植物と地の魔法を操る。

・ゼノ・リユージェル（26）

くすんだ金髪・ライトグリーンの

目・男・亜人でトビウオ族・神官

視力が弱いので、いつも黒いサングラスをしている胡散臭げな神官だが、めちやくちやお人好しな青年。いつもにこにこしている。

トビウオ族なので、耳が羽のようなヒレ。亜人に見られるように魚に変身出来るが、水のない所では死ぬので化けない。寒がりなので厚着ぎみ。

魔物や敵には可哀相と思っても容赦しない主義。

お茶を淹れるのが大好き。日がな一日ぼーっとしてられる、よく分からない特技を持つ。

神官としても魔法使いとしても優秀だが、一番得意なのは杖で戦う棒術。身体能力の高さを生かした亜人ならではの。実は治癒方面が不得手であるが、呪いを解くのは得意。

最初は女性神官の方が良いだろうとされていたが、達也が必死に男にしてくれと頼んだので、選ばれた。名誉なことだなあとのほほんと思っている。

武器：水宝珠連杖。（普段は棒に青色の玉飾りが付いているだけだが、使い手が魔力を込めることで水の刃が出て槍になる）

得意魔法：水、風

得意聖法：術一・解呪、術二・解毒、術三・浄化。

・折部怜治（れいじ）（22）

流衣の兄。パティシエを目指して、レストランのオーナーに弟子入りして下積み中。

忙しい両親を応援したり、弟の面倒をみたりと、しっかり者。だが、家事がその辺の女子より余程出来るので、それが原因で振られやすい。

料理好きで、特に菓子作りに情熱を注いでいる。

設定資料

設定についての、作者が利用する為に作ったメモ。
もしごちゃごちゃして来たら、これを読めば大丈夫なはずです。

〓 世界名 〓

ラーザイナ・フィールド

〓 神様 〓

愛と慈悲の女神ツイールカ

運命と生命の女神レシアンテ

知と戦の神ソールブ

この三柱が守護しており、世界のあちこちに建っている神殿は全てこの神様を祀っている。

〓 六大神殿 〓

中央神殿であるカザニフを頂点とし、火の神殿ヒノック、風の神殿エアリーゼ、水の神殿ウィルテル、地の神殿ツリーエブ、光の神殿フェルノアがある。

カザニフには託宣を担う巫女があり、この神殿に勇者が呼び出される。

カザニフでは魔王の骸を、他の五つの神殿では、魔王の魔力を五つに分けて保管する聖具が置かれ、瘴気を清めている。神殿が五芒星の形になるように建っているのは、それにより結界を張ることで清めの効果を増幅する為。

〓 他の神殿 〓

世界各地に神殿があるが、これは六大神殿の下位にある。しかし各地の神殿の長は力がある者がついているので、能力で見れば優劣さはあまりない。

強いていえば、神殿の守る役割により優劣がついているだけ。

〓 宗教遺跡 〓

流衣が放り出された黄昏の遺跡など、捨て去られた神殿跡も多い。しかし元々が聖なる役割を持っているので、神聖さは変わらないことが多い。そのような場所には魔物は出ない。

〓 魔法 〓

火・水・地・風・光・闇の六属性が基本属性。

これらを変化させたもの、例えば光 雷、水 氷、地 植物などは特殊属性である。

他にも、魔力とイメージを使うことで移動したり物を移動させる術・転移魔法や、使い魔を呼び出す召喚魔法がある。

勇者の場合、女神が呼び出すので、一般でいう召喚魔法とは意味合いがずれる。

初歩の魔法は日常生活に根ざしたものが多く、下らないけれども役に立つ。

例：水の魔法の初歩「畑に水遣りする術」、など。

〓 聖法 〓

神官が、才能もしくは修練によって身につける術。

聖法の術一・解呪、術二・解毒、術三・浄化、術四・薬効強化、術五・癒しの五つがある。

数字が小さいほど習得が難しいとされるが、人によって向き不向きがあるので、術一が使えても術五はさっぱり、という者も中にい

る。また、数字が小さいほど危険度も高い。

〓魔王〓

数百年に一度生まれる、魔物の王。

形はそのときどきで変わるが、そこにいるというそれだけで世界の秩序を乱す。

世界に溜まった負の要素が形を持ってあらわれる姿だというのが定説。

魔王が生まれると、魔物が凶暴化したり、常識を外れた行動をとる。

しかし魔王の持つ魔力は膨大であり、聖具をもって力を封じなければ勇者の力でも倒すことは出来ない。

〓魔物〓

一般的に「魔物」といった場合、使い魔ではなく、魔王率いる闇の眷属とされる方を指す。

魔物と動物の見分け方は簡単。魔物ならば、身体のどこかに先の細いダイア型の黒いシミを持って生まれるからだ。

大概において魔物の血肉には毒があるため、食用には向かない。いつの間にか生まれ、いつの間にか徘徊しており、人に害をなす。

魔物もまた、負の要素が形をとった物といわれており、魔王が倒されても消滅することはない。

ウシネズミのような雑魚から、竜のような凶暴な物まで種々様々。

〓貨幣〓

世界共通貨幣としてクリエステル貨幣がある。

金貨一枚〓銀貨十枚

銀貨一枚〓銅貨百枚に相当する。

食費のみの計算なら、独身男性なら銀貨五枚もあれば一ヶ月を楽に過ごせる。

＝ラーザイナ・フィールドの暦など＝

一般的に大陸暦が使われている。

一年は十五ヶ月あり、一月は三十日で構成される。

そして、一週間は六日で、光・火・水・木・風・地の曜日があり、光の曜日は「始まりの光」で、地の曜日は「眠りの地」と呼ばれている。日本でいうところの日曜日が、ここでは地の曜日である。

また、一日は二十四時間、一時間は六十分、一分は六十秒となる。

季節は四つに別れており、一月と二月、それから十二月、十三月、十四月、十五月は「静謐」、三月と四月と五月は「祝福」、六月と七月と八月は「輝き」、九月と十月と十一月は「豊穡」と呼ぶ。

例えば「祝福の第一の月」と呼ぶことで、三月を意味している。つまり、その季節の中の月を番号付けで呼ぶのである。

これは一般的な呼び方で、正確に記述する際は「大陸暦〓〓年、三月、〓〓日」と記す。

＝単位＝

1ケルテル＝1センチ

1エナ・ケルテル＝1メートル

幕間 8 (前書き)

文章中、少々残酷な表現を含みます。

幕間 8

しつこい奴らだ。

デイルは歯がみし、リリエとヴィンスの後を追うように森の中を走る。ときどき後ろから魔法による攻撃が飛んでくるので、それを光弾で撃ち落とす。

王城が反乱軍によって占領された際、リリエがヴィンスを連れて王城を逃げたという話を聞いて、リドにおおよその居場所を調べて貰い、そこへ駆けつけた。風の精霊の力を借りられて本当に助かった、のは良かったのだが、その際、人を探していると聞いて敵と勘違いしたりリエに光弾を乱れ撃ちされて危うく死ぬところだったので、師匠によりもたらされたトラウマが一つ増えることになった。

再会したりリエの話だと、反乱時に女王の執務室に駆けつけた時には、すでに宰相は殺されていて女王の姿は無かったらしい。代わりに椅子には女王の叔父であるアルスベル公爵が座っていて、リリエは逆上して斬りかかりかけたが、怒りよりも女王の安否を優先して執務室を飛び出し、襲ってくる反乱軍を斬り伏せながら城を駆け回り、傷を負いながらもヴィンスだけは助けだした。そして、二人が逃げる時に一役買ったのが、デイルの後ろを走る黒いシルクハットに黒いタキシードを着た老人だった。

「デイル、後ろは任せて先にお行きなさい」

「了解しました、カルティエ様！」

女王の影の護衛であるカルティエは、窓から転落したものの無事だった。無事とはいえ、魔力を八割がた喰われた拳句、左肩に大怪我をしていた。闇夜に紛れて執務室まで戻ろうとしていたら、ヴィンスを連れて遁走しているリリエを見つけて合流し、竜の姿に戻っ

て逃げおおせた。ここまできたらと執務室に竜の姿で突っ込む覚悟でいたのに、リリエの話では執務室に女王の姿がないと聞き、大きな魔力が動いた気配は女王が転移させられたからだだと判断したのだそうだ。

そういうわけで、カルティエはヴィンスの味方についており、ヴィンスを安全な所まで届けてから女王を探しに行くとしたので、傷が深くてもあまり長時間飛び回れないからだそうで、傷を癒すついでらしい。

王弟殿下の護衛がついでというカルティエの言い分には面食らったデイルだが、師匠が相変わらずねえと笑い飛ばしたので気にしないことにした。師匠曰く、カルティエは女王の盟友であって、それ以外の人間は身分があろうと扱いが雑なんだそうだ。ヴィンスのことを気にするのは、盟友が大事にしている弟だからという一点の為だ。

「殿下！」

ヴィンスが蔓草に足をとられて転んだのを見て、デイルはざっと顔色を変える。

実の姉である女王の安否や叔父の反乱、加えて追っ手に追われながらの慣れない徒歩の旅のせいで、ヴィンスはすっかり疲弊している。一週間前に再会した時ですら、すでに顔色が悪かった。王城を目指して逃げている時とは比べ物にならない重圧が、小柄なヴィンスの肩に重くのしかかっているのだ。

剣を構えつつ、さっと側にしゃがんでヴィンスを助け起こすりり工。

「師匠！ 殿下！」

二人の右横、ずっと奥の暗がりには黒い衣服を見つけ、デイルは飛び出していた。

黒い衣服の者が放った魔法が飛んでくる。黒い光の固まり 闇属性の魔法の一種だ。

それが何か分からないまま、デイルは大剣を引き抜いた。

「はあ！」

そして、勢いよく剣を振り下ろし、光を叩き斬る。防護の加護付きの大剣だから、普通の剣と違って、たいていの魔法は斬ることが出来る。

ただ一つ、呪いのろを除いては。

「げっ」

だから、叩き斬った黒い光の玉から黒い文字のようなものが飛び出した時、デイルは引きつった声を上げた。

「しまっ……！」

分断された文字の羅列が、まるで水飛沫のようにかかる。

そしてその瞬間、雷に打たれたかと思うような凄まじい痛みが衝撃となつて襲い、デイルは声を上げる暇もなく地面に崩れ落ちた。

「……………ル！ デイル！ しっかりなさい！」

ゆっさゆっさと振動を感じ、しかも頬に痛みを感じてデイルは薄らと目を開ける。

すると、青ざめた顔をしたリリエがデイルを見下ろしていた。

この人もこんな顔をするのがあるのだなあ。デイルはぼんやりする頭でそう考えながら、リリエを見つめる。

「こうなったら、拳こぶしで起こすしかないようね……………！」

そして、鬼気迫った顔でリリエが右の拳を握ったのに気付いて、慌てて目蓋を持ち上げ、ついでに腕で顔を庇う。このままでは起こされる前に永遠の眠りについてしまいかもしれない。

「ちよっ、待って下さい。師匠！」

デイルは必死で叫んでみて、ん？ と眉を寄せる。

なんだか、今の自分の声はおかしかった。

恐る恐る腕をどけると、リリエもまた奇妙な顔をしていた。

「あなた、小鳥薬こどりくすりでも飲んだの？」

小鳥薬というのは、半日ほど声を高くする薬だ。杖連盟公認で、

魔法道具屋にも売っている品だ。声色を変えたい者や、低い声を気にする女性の間でよく使われる。

「いえ、そんな物を飲んだ覚えはありませんが……」

「やっぱりおかしい。声が少し高いような気がする。」

ゆるゆると半身を起こし、それから服の袖が余っているのに気付いて眉をひそめる。

（何だ……？ いや、そんなことより殿下は……！）

ハッと思い至り、慌てて周りを見回す。

「……………」

そして、言葉を失くした。

周囲は死屍累々の有り様だった。

十人はいるだろう追っ手達が、周りにばたばたと倒れ伏している。大半は無傷で気絶しているようだが、三人ほどは怪我をして地面で呻いている。血の臭いがした。恐らく、無傷の者がカルティエに昏倒された者で、三人はリリエノールにより斬り伏せられた者なのだろう。カルティエの武器はステッキだから、簡単に想像がついた。

「カルティエなら周辺を警戒しに行ったわ。殿下はそちら」

リリエの言う通り、ヴィンスは少し離れた木の下に座っていた。相変わらず顔色が悪いが、デイルに気付いて心配そうな顔をする。

本当に優しい方だ。ご自分の方が大変だろうに。

シャノン公爵は王族とは思えない程に気さくな方だが、隠せない高貴さが滲み出ている。顔が綺麗なだけではない、恐らく心根からくるもの。

デイルは、ヴィンスの気遣いを見ただけで、リリエの元に馳せ参じた自分を誇らしく思った。

「私は大丈夫です、殿下。何やら声がおかしく服まで伸びたようですが」

服が全体的にだばつとしている。手の甲と腕を守る籠手ですら、固定しているベルトが緩んでいた。

首をひねりつつ、痛む場所がないかとあちこち触り、ふいに硬直

する。

？

「ん？ なんだ、これは。腫^はれている！」

胸に手を当てると、何故か僅かに膨らんでいて、ディルは呪いのせいで腫れたのかと仰天した。

すぐに手当てをしなくては！

周りにはすでに脅威はない。だからディルは、襟を飾るレヤード家の紋章を刻んだ銅板を外し、上着に手をかけた。

「あんた、一応、私は女なんだから少しは気になさ……あ？」
躊躇なく上着を脱ぎだすディルにリリエは不満を言いかけ、言葉をぶった切る。

上着の下、肌着である木綿のシャツの胸元が盛り上がっているのを、呆然と凝視する。

「やはりあの呪いのせいですね！ 見て下さい、腫れてます！ どんな呪いが……ってうわっ、何ですか！」

急に物凄い勢いでリリエに上着を被せられて、ディルは目を白黒させる。

「殿下の目に毒だから、それをとっととしまいなさい！ このどアホが！」

「は？ え？ でも師匠、腫れているので、薬を塗らねば」

「うっさい！ 黙って言う事きけっ！」

「はい！」

よく分からないがリリエの剣幕が恐ろしかったので、ディルはすばっと返事をした。

目を点にして疑問符を飛ばしまくっているディルの前で、何やらリリエは頭が痛そうにしている。

「くあーっ、まさかそんな風に呪われるなんて！ なんて面倒臭い！」

キーツと胸元まである薄茶の髪を掻き回して叫ぶリリエ。

「だ、大丈夫ですか？ リリエノーラ……」

驚いたヴィンスが問うと、リリエはぶんぶんと首を振る。

「いいえっ、大丈夫なんかじゃありませんわ！ 私より良い女なのがまたム力つきます！」

「はあ？」

首を傾げるヴィンス。デイルもまた奇異の視線を師匠に向ける。

何を突然言い出すのか、この人は。女王が行方不明、王弟殿下は追っ手に追われるというこの現状が相当ストレスになっているのかもしれない。

デイルはリリエをたくさん労わろうとそつと心に誓う。

とりあえず、上着を着るように急かしてくるので、渋々ながら上着を着直す。治療しないで悪化したら盛大に恨もう。そして袖をまくって籠手を締め直し、妙に緩んでいる腰のベルトも締め、更には裾が余っているズボンを折り曲げていく。

「全く、おかしいことだな。呪いのせいで体が縮んだのだろうか？ 首をひねって立ち上がり、そこでぐしゃっと無様に膝から地面に落ちる。」

「どわ！ なんだ、重っ！」

デイルは何事が起きたのかと、理解出来ずに呆然とする。

倒れるまでは重さなどほとんど感じず、自分の身体の一部のようになっただけの大剣がまるで岩のようだ。それに、鉄製の部分鎧や左手に装着している小さな盾ですら重く感じた。ありえないことだ。

座ったままぶるぶると震えながら、それでも立ち上がろうと努力している、リリエがあっさり大剣を奪い取った。

「今のおんたじゃ、これは無理よ。足の部分鎧も外しな。籠手と盾はそのままにした方が安全だから我慢なさい」

「へ？ あの、ですが」

困惑するデイルに、リリエは一言問う。

「だって、持てないでしょ？ そのなりじゃ」

「は、え、ええと」

「呪いのせいで、女になっちゃってんだもん。仕方ないわよ」

「はあ、そうですね……」

デイルは頷いてしゃがんだ姿勢で部分鎧の留め金を外していく。そして全部外して部分鎧を地面に置いたところで、リリエの言葉にとんでもない単語が紛れているのに気付いた。

「え？ あの、師匠。今、なんて」

嘘だ。嘘と言ってくれ。いや、聞き間違いであってくれ。

顔が引きつっているのを自覚しながら、リリエを見上げる。

リリエは猫のように目を細め　右目が緑、左目が金という色合いのせいで、ますます猫みたいだ　仕方なさそうに息を吐く。そして、デイルの前に座ると、デイルの顔をがっしり掴み、言い聞かせるように丁寧に言う。

「だから、あんたは今、呪いのせいで女になってるの。女よ、女。分かる？」

「い、いいえ。分かりません」

というか、理解したくありません。

あまりの理解したくなさ逃避に走りたいのに、リリエは逃避を許さない。デイルの返事に、また目が細くなる。

「ふうん、私が言ってるのに理解出来ないんだ、あんた。そう……」
そしてぽいつと手を放すと、自分の荷を漁って鏡を取り出す。

「ほら、これをよく見なさい！　じっくり！　余すことなく！　完全に現実を受け入れるのよ！」

ずいずいと鏡を突きつけてくるリリエに、デイルは悲鳴にも似た叫びを上げる。

「い、嫌だああ　っ！」

*

十分後。

リリエの脅迫じみた説得により現実を受け入れたデイルは、自分に呪いをかけただろう魔法使いを起こして尋問したが、呪いを解く方法は分からなかった。

「は？ 女になる呪い？ 俺がかけたのは、三日ほど動けなくなる呪いだぞ」

そんなふざけた返事に、切れたデイルが思い切り魔法使いを殴り飛ばしたが、誰も責められなかった。あまりに不憫すぎて。

呪いを薄める為に血を少々奪っても効果がなく、自分が呪いを剣で叩き斬った影響の為だろうから誰も責められず、デイルは近くにあった木に頭突きをすることで自分を落ち着けた。

「お、落ち着きなさいよ。デイル……」
乱心しちゃったのかしら、この子。

流石のリリエも弟子の態度に強い言葉をかけられず、恐る恐る言う。

デイルは幹に額をつけたまま静まり返っていたが、やがて不気味に笑いだした。

「ふ、ふふふふ。絶対。絶対に男に戻る！」

そして迫力たつぷりに空に向かって宣言したのだった。

幕間8（後書き）

＝蛇足の後書き＝

えーと、強烈な回から第三部スタートです。なんかスイマセン…
…。

デイルはなんでこう可哀想な役回りが多いのか。ほんと書いてて
不思議。

別にこれ、性別転換とかって注意書きとかいらなそうですよね？
ギャグですよ、ギャグ。

例えば身体が女になるうとどこまでも男気溢れるデイル。木に頭突
き……。

ま、再度デイル登場シーンをお楽しみに（笑

最初の方、説明っぽくなったのは仕様です。ここを省くのは無理
でした。

まだまだ続きますけれど、なんだかんだでお楽しみ頂ければ幸い
です。そろそろ読者様が飽きちゃいそうで怖いなあ。私は書いてて
とっても楽しいですが（＾ ＾）
では、またよろしくお願いします。

五十章 スノウリード夫妻

ボルド村の人達曰く「壁の中」というアカデミアタウンは、案外普通の街だった。ただ、ラーザイナ魔法使い連盟本部である塔の敷地がそれ以上に匹敵する、広大な街という点では普通ではなかった。

街道がメインストリートになっていて、商店街が建ち並んでおり、他は家か屋敷ばかりだ。家というのが一般庶民の住む民家やアパートで、屋敷は貴族の屋敷や別荘なんだそうだ。屋敷というくらいだから塀で囲われた土地は広いし、家自体も横に広い。アカデミアタウンが、スノウリード魔法学校に通う貴族や富豪の令息令嬢の落とすお金で活気づいている街、というのは本当らしい。

街を抜けて小高い丘を上ると、ようやくスノウリード魔法学校に着いた。灰色の石材で造られた巨大な門がどんと立ちそびえ、左右の柱の上には、空を見上げる竜と伏せて通行者を見守る竜の石像があった。立派だ。

「リド、君は次からはあちらの門を使いなさい。使用人用の門だ」「分かりました」

セトは、大門の左向こうにある小さな門を指差す。そこから細い道が緩やかに街道まで伸びているが、大門までの道よりも移動距離が長い。ごんまりとした小さな門といい、目立たないように造られているようだ。

セトが校長に相談したら用務員の職をくれたので、リドは使用人サイドから情報収集に当たることになった。確かに、使用人内にも魔力増幅剤をばらまいている者がいるかもしれないから、妥当な着目点だろう。リドが使用人というのが、今一釈然としないけれど。

「僕もあっちからですか？」

流衣は助手だし、小さな門の方がいい気がしたが、セトは首を振る。

「私の助手だ、こっちで良いに決まっている」

「そ、そうですか」

きっぱりと断言され、控え目に頷く流衣。どこから来るのだろう、その自信は。

（セトさんは魔法使いの中では売れっ子研究者みただし、相当地位が高いのかな……？）

いまいち魔法使い事情が分からない。でも、転移魔法の権威だというから、きつとそうなのだ。あのアルモニカですら尊敬しているのだから、偉い人なのだろう。

その偉い人が「壁の外」の村に居を構えているのが、流衣は急に不思議に思えてきた。

（うへえ、おつかない門……）

それにしても、この門の上に乗っている竜の像は怖い。緻密な彫刻がされていて、まるで生きているかのようで迫力満点だ。

思わずまじまじと像を見つめっていると、目がキラリと光った。ぎよつと後ずさる。

「なつなななつ、セトさんっ、あの像つてもしかして生きて!？」

「そんな訳ないだろう」

「でも、今、目が光って……っ」

「ああ。たまに校長が監視の魔法を使うから、それでだろう」

「そうなんですか」

流衣はどきまぎしつと頷く。そんな魔法もあるのか。どういう分類だろう。

「オルドリッジ教諭、そちらの二人が新入りですよにや？」

なんとも間の抜ける問いかけに緊張が解けるのを感じながら、流衣は左側を見る。大門の左の四角い柱の下に木製の扉がついていて、そこから猫が現れた。

身長は流衣の目線と同じくらいで、藍色のローブを着た青みがか

った黒い毛をした猫の獣人だ。腰にナイフを装着している。

黒猫の獣人が、黒い毛で覆われた足でぼてぼてと雪の積もった地面を叩きながら近づいてくるのに、セトは返す。

「ああ、そうだ。二人とも、彼は猫族のニケだ。で、あちらのレディーが双子の妹のミケ。この学校の守衛だが、だいたいはここで門番をしている」

セトの紹介通り、ニケの後に続いて白い体毛の猫も出てきた。身長はやや黒猫より低い程度で、白いローブと深紅のスカートをはいている。ミケは片手に白い木製の杖を持っていた。

「セトさんの助手になりました、ルイ・オリベです。よろしくお願ひします」

「俺はリドです。用務員として働くことになりましたので、よろしくお願ひします」

丁寧は頭を下げる流衣と、やはり頭を下げてから人好きのする笑みを浮かべるリド。

ミケはニケと同じ宝石みたいに澄んだ青い目を細める。

「ご丁寧にも。困ったことがあったら、遠慮なく聞いてちょうだい。これからよろしくね」

「そーにや。面倒なことは全部ミケに聞いてくれ。あとにや、助手の方、この門の開門時間は平日は朝七時から八時、夕方の四時から六時にや。地の曜日は、朝七時から夕方の七時まで開けてる」

そこでニケは小門をまるまるつとした手で示す。

「時間外はそつちの小門を使ってくれにや。戻る時は呼び鈴を鳴らしてくれればおいらかミケが開けに出てくるし、出る時は勝手に開く。そういう門にや。生徒は無理だけにや、職員なら大丈夫。んで、そつちの坊主はにや、勤務時間内に外に出る時は許可証か鍵があるんだにや。そこは勤務先で聞いてくれ」

ニケが何歳なのかは分からないが、何とも愛嬌のある喋り方に流衣は頬を緩める。猫が大きくて二足歩行していると迫力があるが、親しみを持てる。

(うわあ、可愛いなあ。猫だ、猫)

流衣は動物が大好きだ。猫だって勿論好きなのだが、何故かいつも引つ搔かれる。犬にも噛まれた。流衣は好きだけれど、犬猫は流衣のことは好きではないらしい。そんなオーラでも出ているのだろうか。残念だ。

「挨拶も済んだし、行くぞ。校長に会わせよう」

「あ、はいっ」

そう言っただけで広い歩幅ですたすと歩き始めるセト。流衣はニケとミケに会釈をし、セトを追う。

「今日は授業はいいんですか？」

質問したら呆れた顔をされた。

「今日は地の曜日だぞ。授業は無い」

そうだったのか。

旅をしていると日にち感覚だけでなく曜日感覚もあやふやだ。

「まあ、私の講義は週に三回であるし、午前の時もあれば午後の時もあるからな。講義が無い日は研究室か自宅にいるよ」

なるほど。一人納得する流衣。

「校長室は学校の一番奥だ。途中、生徒とすれ違っても、目を合わせないでいるか合っても会釈する程度でいい。私についてくるので必死な振りでもしていなさい」

セトは親切にそう付け加える。流衣は、目を合わせるなっただけ面倒臭い生徒なんだと内心でおののいた。思わず後ろをついてくるリドを見たら、何故か神妙な顔をして何度も頷いている。まるでその通りだと言わんばかりに。

そして広大な敷地を歩くこと二十分。ようやく校長室に辿り着いた頃には、すっかり身体は冷え切っていた。

「よく毎日ここを移動できますね……」

思わず感心してしまうと、再びセトの呆れた一言が飛んでくる。

「君は私が転移魔法の開発者だと忘れていないかね？ 転移するに決まっている」

ああ、そうでした。
お荷物ですみません。

*

「はあい、よーこそ、我が学校へ。私は校長のスノウリドよ。グレース・スノウリドっていうの、よろしくね」

腰まである癖の無い美しい銀髪、ガラス玉のような青色の目、雪のような真っ白な肌。どう見ても二十代にしか見えないその女性は、青い布の張られた長椅子にだらりと寝そべったまま、そう言った。全体的に気だるげな空気を纏っているせいで、真っ白いシンプルなドレスを着ているのに清楚というより妖艶に見えた。金色の鱗(ウスケ)をした大蛇を身体に巻き付けているので、天使を装った悪魔に見えなくもない。

(校長……！？ いや、なんかもう色々すっ飛ばして、この態度はおかしくない！？)

直立不動で硬直したまま、内心で頭を抱える。

「あのように厚かましい姿勢ですが、アレは確かに校長ですので、お気を確かに持たれて下さい。私は校長の補佐……というより、すでに執務の大半をこなしているトーリドと申します」

校長室の扉を開けてくれた執事らしき黒服の青年は穏やかな口調で言い、フォローする気はないらしい。緩やかにお辞儀をする。黒髪と金目をした目鼻立ちの整った背の高いトーリドは、肌が褐色な為表情が読みにくいのが、どうやら呆れているようだ。眉間に皺が刻まれている。

「トーリドはねえ、あたしの旦那様なのよお。好きなこととして過ごしていいっていうから結婚したの。良い人でしょ？」

「ありがとうございます、グレース。ああ、すみません、オールドリッジ教諭。それからオリベさんとリドさん。ああ見えて彼女は意外に働き者ですし、可愛いので許してあげて下さい」

!?

さりげなく付け加えられた言葉に、流衣は再び固まった。

いかにもクールそうな外見でさらりと何を言うんだ、この人。

それとも今のは流衣にだけ聞こえた幻聴だろうか。思わずそつとセトとリドを見ると、セトはうんざりとした顔をしていて、リドは豆鉄砲を食らったみたいなお前の抜けた表情をしていた。

うん、どうやら幻聴ではなかったようだ。確認したところで嬉しくないが。

『ほお、白竜ホロイト・テラマンク・テリリンと黒竜の夫婦ですか。世にも奇妙で珍しい取り合わせがあるものですね』

反応に困ってとりあえず苦笑いをしてしていると、肩に乗ったオルクスがぼそりと流衣にだけ聞こえるように呟いた。

「白竜と黒竜……?」

言っていることがあまりに突飛だったので、流衣は思わず確認するようにオルクスの言葉を口に出して繰り返してしまう。

すると客人相手にも関わらず長椅子でだらけていたグレースが、すつと身を起こす。

「何故分かったの？ 私達の変化はそう簡単に見破れないはずよ」
ゆるゆるとした空気を一変し、グレースは鋭い気配を纏う。見た目と名前の通り、まるで雪のような冷たさだ。

視線にたじろいだだが、流衣は大事になる前にとオルクスを示す。

「僕の使い魔がそう言ったので……」

「使い魔が、ですって?」

更に剣呑な空気を帯びるグレース。流衣は背筋がひやりとし、慌ててこくこくと頷く。

「ふうん、面白い。あなたのその使い魔、よっぽど鼻がきくのね。

鳥のくせに」

グレースは一人呟いて、それからきちんと椅子に座り直す。蛇は

膝の上で丸くなった。

「いかにも、私は白竜よ。元々は山奥で魔法を探求していたのだけど、たまたま拾って育てた人間の子がえらく優秀な魔法使いになっちゃってね、それで噂を聞きつけた人間の弟子入り志願者が増えて……。私、ほんとは人間って大嫌いなんだけど、大金持ってきたら魔法を教えるなんて言ったら本当に持つてくるから渋々教えて、氣付いたらこうして学校をするはめにまでなっちゃったわ」

それから二百年と少し、ずっとここで校長よ。
ふう、と切なげに溜息を漏らすグレース。そつと右頬に手を当てる。

「ほんと、お金や光り物が大好きすぎて困るわ……。宝物に魅せられる竜ドラゴンの哀しい性ね」

そこへ、トードが相変わらず表情の薄い顔で口を挟む。

「などと言っています、竜がみんな金の亡者であるわけではありませんので、そこを勘違いしないで下さいね。お金好きは彼女の性質です」

「トード、そんな注釈はいらないわよ。あなただってお金稼ぐの好きじゃない」

不満そうに口を尖らせるグレース。トードは淡々と言う。

「稼ぐ原理を工夫するのが楽しいんですよ。それに、私はお金を稼ぐよりずっとグレースの方が好きです」

なんの照れもなく、あっさりと言うトード。

「……」

外野の男達は無言のまま視線を脇に反らす。

「んふふ。私もあなたのこと好きよ、宝石の次に」

「嘘はいけませんね。本当は一番なのは知っています」

じつと見つめ合う異種族夫婦。ほんわりと甘い空気が校長室に漂う。

セトはそんな空気を吹き飛ばそうといわんばかりに、盛大に咳払いをする。

「ん〜ゴホンツ！ スノウリード夫妻、夫婦の甘い語らいは私達のない時にして下さい。あなた達が、雇った人間を一度会わせると言うから連れて来たんです。用がないなら帰りますよ」

明らかに不機嫌そうなセトの声に、空気を読まないグレースのくすくす笑いが返る。

「あら嫌だ、妬みかしら？ 悔しかったら、とつとと番を見つけないな。……と、違ったわね。結婚しなさいな、ね。んふふ、ときどき間違っちゃうのよね」

「そんなときどき抜けているグレースも魅力的ですよ」

「ありがとう。私もトードの無愛想な顔、大好きよ」

につこりと微笑むグレースと、僅かに笑みを浮かべるトード。また空気がキラキラし始めた。

駄目だ、この夫婦。手に負えない。

夫婦以外の三人と一羽は同時にそう思ってげんなりした。

「まあ、セトのことはいいわ。見たところ、合格ね。ちょっとルイの方は心配な感じだけど、どうにかなるんじゃないかしら。セトの助手だしね。リドの方はしっかりしてそうだから平気なんじゃない？ 用務員は掃除の手伝いや修理や庭師の手伝い、とにかく雑用がメインだから頑張ってるね。行動範囲は広いから情報収集はしやすいと思うわよ」

怠惰そうにあくびをしながら言うグレース。美人が大欠伸をする可愛く見えるのだから、得していると思う。

しかし、面倒臭そうな割にきちんと考えてはいるようなので安堵する。

「それでね、今回呼んだのは、まあ査定も兼ねてはいたけれど、こちの件よ。働いている間はそこで寝泊まりするといいわ」

執務用のデスクに置かれた紙を二枚、浮遊の術で宙に浮かべ、流衣とリドに渡すグレース。ぐってりと手すりにもたれかかる姿勢に

なっている。紙を取りに行くのも面倒みたいだ。

ひらり、と飛んできた紙を見下ろす。

簡単な地図に記された家と、管理者の名前、その管理者のいる住所が書かれている。

じつと紙切れを見つめる流衣とリドに、グレースは続けて言う。

「家賃はこつちで持つわ。元々住んでいた人が引つ越した時に家具をそのままにしていたさうだから、少し道具を足す程度で使えるはずよ。庭も屋敷内も好きにしていいわ。内装が気に食わなかったら変えてもいい。ただし、その経費は全部あなた達が持つてね。そこまで面倒見ないわ」

「庭つきのお屋敷つて、そんなの使つて良いんですか？」

びっくりする流衣に、グレースは頷く。

「ええ。まあ、詳細はその管理者のヨーザに聞いてちょうだい」
グレースはそう言うのと、もう行つていいわよーと促した。

いつまでの調査になるかも不明だし、宿での連泊では高くつくから、確かに一軒家を借りた方が安上がりだ。気を使わなくて済むのもいい。

宿ではなく一つの場所に足を落ち着けられることに、流衣は安堵めいた喜びを覚えた。

(なんて良い人なんだ、校長先生)

お陰でグレースの評価はウナギ上りであつた流衣は、まさかこの後、旨い話には裏があるという言葉、自分の身でもって体感するはめになるとは思いもしなかつた。

五十一章 ゴーストハウス

アカデミアタウンには、街に住む者なら皆知っている屋敷がある。その屋敷は街外れにあり、神殿に属する孤児院の隣にあった。人々は声を潜めてまことしやかにささやく。

あの屋敷は呪われている。変な声が風に乗って聞こえてくる。たまに爆音が響く。奇声が轟く。虹色の煙が煙突から吐き出される、などなど。奇怪なものが大半を占めていたが、極めつけはこれだった。

誰も、主人の顔を見たことがない。

それは、主人がいつも黒いフードを目深に被っていたからだ。四十代であるはずの奥方はいつも生花を髪に飾り、フリルやレースがたっぷりな、見る者が皆思わず目を背けてしまうピンク色の痛々しいドレスを着ているので有名だったが、誰も主人の顔を知らない。

屋敷からは出ようとせず、たまに客の応対に出てもぼそぼそと空気のかすれる声で喋る始末で、どうやって生計を立てているのかも謎だ。

その為に、謎の主人の正体を人々は勝手に想像した。

曰く、ただの実験好きな狂人。

曰く、悪い魔法使いで、近づいた動物を実験の道具にしてしまう。

曰く、実はあのフードの中は空っぽだ。

などなど。

常識的なものから怪談的なものまで勢ぞろいだ。

そして、人々は理解出来ないせいでその屋敷を不気味がり、いつの頃からかこう呼んだ。

ゴーストハウス、と。

その呼び名は、屋敷の夫婦が引越した後でも続いていた。

「なんか疲れたね……」

「ああ、すげえな、あの人達」

魔法学校を出て、アカデミアタウンのメインストリートを歩きながら、ぐったりとして言葉を交わす流衣とリド。

学校内ですれ違う生徒達にじろじろと不審物を見るような目で見られたのもあったが、それ以上に疲れたのがスノウリード夫妻のやり取りだ。あんなナチュラルに目の前でいちゃいちゃされたのは初めてだ。精神的に疲れた。気まずくて仕方がない上に、お邪魔虫感満載で疲労度上昇だ。

「二人とも、私はこれで失礼するよ。君達は、ボルド村に戻る前に宿泊先を確認してきなさい。この道を真っ直ぐ行けば町役場があるから、そこで問い合わせればいい。明日の出勤時刻は七時半だから、遅刻しないように。分かったね、二人とも」

「はい！ 頑張りますのでよろしくお願いします！」

「ありがとうございます」

それぞれ頭を下げると、セトは歯を見せて豪快な笑みを見せ、すぐさま歩き出す。あまり愛想がいい方ではないが、セトは子ども好きなのか流衣達に親切だ。

明日からの仕事については、校長室への行き帰りで説明して貰った。セトの研究室やリドの仕事場の位置などが主だ。

「思ったより普通な所で良かったな。魔法学校っていうから、もっとこう、えげつなさそうな想像してた」

魔法使いについてどういう偏見を持っているのか、リドが苦笑気味に言うので、流衣は興味をひかれる。

「えげつないって？」

「ほら、トカゲや蛙がその辺に干してあるとか、でかいキノコが生えてるとか、実験用の魔物の奇声が聞こえる、とかさ」

「お馬鹿ですネ。あなたの想像力は幼児並です」

流衣とリドに聞こえる程度の声で、馬鹿にしたように言うオルクス。リドの眉がぴくりと動くのも厭わず、オルクスは更に続ける。

「貴族の子どもが、行儀見習いを兼ねて、通うような場所ですヨ。北の大山脈みたいな、奇天烈怪異な危険な場所であるわけがないでしょう」

北の大山脈というのは、ルマルディー王国の最北に横たわる大山脈だ。この中のどこかに魔王の出現した洞窟があるんだそうだ。瘴気がたまりやすい場所らしく魔物の強さが半端ない上に、一年を通して雪が積もる大地なのに、生態系が狂っていて、巨大植物が生える所もあれば、貴重な薬草や宝石が採れたりもする奇妙な山だ。魔物の最上位に位置する竜の生息地域であるのも有名だ。アルモニカが前に話していた未開の地と肩を並べる危険地帯である。

そんな所に魔王を退治に行かねばならないのだから、勇者というのは大変だ。

そう思ったところで、流衣は自然と今代勇者の川瀬達也が、無事に地球に帰れることを祈った。思うに、こつちの世界の都合で勝手に呼び出され、魔王を封印してこいと仕事を押し付けられるのだから、勇者にはたまったものではないだろう。必ずしも異世界から召喚されるわけではないらしいが、それでも傍迷惑なものには変わりがない。

「うるせーよ、阿呆オウム」

「なっ、誰が阿呆ですか！」

「おめえに決まってるんだろ、阿呆オウム」

「キーンツ！ クソガキな上に赤猿の分際でっ！」

小声での文句の応酬に、流衣は溜息をつく。

(喧嘩するんなら僕を間に挟まないで欲しいなあ……)

オルクスが左肩に乗っていて、リドが流衣の右側を歩いているせいで、しっかりと巻き込まれる位置にいるのだから困る。ぎゃあぎゃああと悪口を言い合っている二人の間を見つめ、言葉を滑りこませ

る。

「それにしても、紹介してくれた家ってどんな所なんだろうね」

リドとオルクスの喧嘩がぴたつと終わる。

「住み心地が良いと、よろしいですね」

オルクスが言うのに、リドも頷く。

「そうだな。ま、暖を取れて寝床が確保されてりゃ、俺としては十分だが」

「ええー、流石にベッドだけは辛いよ。僕は箆笥や机や椅子もあって、使いやすそうな調理場があつて、出来れば風呂があつたらもつと良いな」

「風呂なんて、貴族様が使う代物だろ。民家にあるわけがねえ」

リドの返事に、流衣は首を傾げる。

「でも、紹介されてる家ってお屋敷みたいだよ。もしかしたらついでるかもよ？」

「あ、言われてみりゃあそうだな。元が貴族様の屋敷だったとしたら、あるかもしれねえなあ。……ルイってほんとに風呂好きだよな。女みてえ」

付け足された言葉に少しムツとし、流衣は常識の違いを説明する。何故か初対面の人には男女どちらか分からないようで必ずといっていいほど性別を訊かれるが、どう見ても自分は男だと思っっている流衣には、女みたいという言葉はコンプレックスを刺激する一言なのだ。

「あのね、そもそも、ここの人達がお風呂に入らなさすぎるんだよ。僕の国じゃ、大部分の人が毎日風呂に入るんだから」

「毎日!? お前の国、どれだけ裕福なんだ? そういや、ルイが平民って割に育ち良さそうなのは国全体が豊かだからってことか?」

リドは仰天し、口早に問うてくる。

「うーん、そうだね、家がなくて路上で生活してる人もいるけど、大半の人は家や集合住宅で暮らしてるし、食べ物がなくて困ることもほとんどないよ」

「飢えがないってのはすげえな。そんな楽園みたいな国があるのか」
「生活は豊かだけど、最近じゃ人の繋がりがなくて苦労する話だとか、心の病気が増えている話をよく聞くよ」

「ふうん、完璧な国ってのはないもんなんだな……」
複雑そうにうなるリド。

「そうだね、そんな気がする。他の国じゃ戦争の話を聞くし、貧しい国だって勿論あるし。僕の国も六十年前まで戦争してたから、豊かになったのは結構最近なんだけどね。僕が生まれる前くらいに良くなっただけだから、いまいち分らないけどさ」

毎日風呂に入れるのも、水に恵まれた土地っていうのが大きいかもね。流衣は考えながら、最後にそう付け足しておく。

凍りついている路面で足を滑らせないように気を付けて歩きながら、流衣はリドを見上げる。少し背は伸びたが、リドも身長が伸びているのであまり変わった気がしない。それどころか以前より高く感じる。180cmを越えてそうだ。

「こういう雪国って、平民の人達はどうやって風呂に入るんだろう。水浴びなんてとても出来ないから不思議だな。リドは水浴び以外は どうしてるの？」

「俺か？ ポロス爺さんに教えて貰ったやつだと、沸かした湯を盥たらいに入れて水で薄めるんだ。それを桶おけですくって使ってたな。ま、冬は一週間から十日に一度ってところか」

「お爺さんのやり方じゃないとどうなるの？」

「よほどのことがない限り、祝福の月まで風呂に入らない、かな。気になる時は濡らした布を絞って身体を拭くな」

「……そ、そう」

流衣はそろりと視線をずらす。ポロスが清潔好きな人で良かった。濡れた布で身体を拭こうとするだけマシだが。

「みんな、だいたいそんなもんだ。湯を沸かすのだって燃料がかかるとだぞ。日々の生活でいっぱいいっぱいなのに、気を遣ってらねえよ」

「……そうだね」

流衣は頷きながら、湯を沸かすのが楽だったら皆風呂に入れるの
だろうかと考えていた。

（お湯かあ）

湯を沸かす魔法っていうのは存在しないのだろうか？

庭に水遣りする術が、まるでシャワーみたいな杖の先から水が出
てくるのだから、やろうと思えば温水シャワーにもなるかもしれない。
でもそうすると水を温めるといふ行為が必要になるわけで、火
の魔法を利用して熱を出すしかない。

もしかしたらお湯を出す魔法があるかもしれないから、今度探し
てみよう。流衣は一人頷く。

「ルイ、どこまで行くんだ？ 役場はこっちだぞ」

一人つらつらと考え事をしていたら背後から声がかかる。振り返
ると、だいぶ後ろにリドが立っていて、怪訝そうな顔をしている。

「あ、ごめん。気付かなかった」

流衣は一言謝ると、地面が凍りついているのも忘れて走り出す。

お陰で派手に転んでしまったのは、出来れば秘密にしておいて欲
しい。

*

「あの屋敷に、やっと住人が出来るのか！ 今日なんて良い日な
んだ！ ありがとう、ありがとう！ これでもう掃除に出入りしな
くて済むっ！！」

屋敷の管理者であるヨーザは、流衣達の訪問を泣いて喜んだ。

正直、五十代にさしかかっている白髪混じりの男に、出会い頭に
号泣された流衣達は内心でどん引きだ。

ヨーザは背の低い小男。それでも160cm半ばくらいはある
で、こげ茶色の髪と目をしている。痩せぎすではあるが、黙っ
ていれば品があるおじさんで済んでいたのに、勿体ない。そう、ほ

んの少し前、流衣達の訪問理由を知るまでは、確かに彼は役場の業務をこなす品の良いおじさんだったのだ。

「ありがとうつ、スノウリード校長ーっ！ 金好きな変人など思
つててすみませんでした！ あんたもたまには善行をするんだなっ
！」

ヒートアップしたヨーザは、アカデミアタウンのある方角を向い
て祈るように手を組んで、失礼極まりないことを叫んでいる。しば
らく拝み倒していたが、流衣達や周りの職員の生ぬるい視線でハッ
と我に返った。

「いやあ、すまんすまん。あのゴーストハウスにようやく人が住む
かと思うと、嬉しくて、つい、な。よしよし、さっそく案内しよう
こっちだ」

浮き浮きとした様子で外套を着こみ、机の引き出しから鍵束を取
り出してポケットに突っ込むと、さあさあと促し始める。

「え？ ゴーストハウス？」

ぼつりと流衣は疑問を零すが、ヨーザは全く聞いていない。鼻歌
を歌いながら役所を出ていくので、流衣達はとりあえず追いかける。

「……おい、さっきゴーストがどうのと聞こえたのは気のせいかな？
メインストリートに戻ってヨーザの後ろを歩きながら、リドが耐
えかねたように小声で問うてくる。

「僕も聞こえた。ゴーストハウスって……」

すっごく嫌な予感がする。

なんで幽霊屋敷？
ゴーストハウス

そんな単語が出てくるのはどうしてなんだ？

ヨーザを問い詰めたいが、ヨーザの機嫌の良い笑顔を見たら訊く
に訊けなくなった。

「あれ、案外普通だ……」

そして案内された屋敷は、外観はまともだった。屋敷の上空に灰
色の雲が垂れこめていたりとか、窓ガラスに奇妙な影が映るとか、
そういったこともない。

ヨーザはにこにここと笑みをたたえながら、門前で左を指差した。「この屋敷は、この通り街外れにある上、隣が孤児院なので貴族の皆さんは嫌がって購入されなくてね。しかも噂が噂だろう？ 買いた手がつかなくて困っていたら、スノウリード校長が買って下さったね。なんでも家賃をとって使用人用の下宿にするとか……。ああ、確かに昼間は子ども達が遊んでいて騒がしいが、孤児院の院長様は高潔な方だから心配いらさないぞ」

ヨーザはにこやかに付け足すが、問題はそこではない。

「噂って何だ、噂って……」

「知らないよ」

ひそひそと問ってくるリドに、流衣もひそひそと返す。

三メートルの高さはある、植物を象ったアイアンワークが見事な門の鍵を開けると、ヨーザは中に入るように促す。手入れされているのか、門はきしんだ音一つ立てず静かに開いた。

「この庭は祝福の月ならちよつとしたものなんだが、この通り雪に埋まっている。それで、こちらが母屋になる。ここから真反対にある裏庭には井戸と畑があるから、覚えておいてくれ」

ちよつとした前庭を歩きながらヨーザは言い、鍵束をじゃらじゃら鳴らして母屋の扉を開ける。

「……………！！！」

流衣とリドは、中を見た瞬間、言葉を漏らすことも出来ず凍りついた。

数秒後、流衣より早く解凍したリドはヨーザに詰め寄る。

「ちよ……つと待て、ヨーザさん！ なんすか、これ！ 悪趣味にも程があるだろ！」

「わっ、ゴーストハウスなんだから当然じゃないか！」

肩をがっしり掴まれての問いにのけぞりつつ、ヨーザは反論してくる。

リドが思わず冷静さを欠くのも当然だった。

流衣は呆然と室内を見つめ、呟く。

「真っ黒……」

そう。

灰色の煉瓦造りの床はそのまま、天井や壁に張られた壁紙は真っ黒だった。薄暗いから黒く見えるというレベルでは、勿論無い。

全部真っ黒だ。玄関口に置いてある靴箱ですら黒く塗装されている。

「だから、さつきからゴーストハウスって何なんだよ！」

リドの問いに、ヨーザは目を丸くする。

「え、知らないのか？」

「ああ」

「校長から聞いてない？」

「おう」

「……あんの校長、たばかったなーっ！」

ヨーザは天井に向かって吠えた。

「珍しく善行をするかと思えば、そういうことか！ 説明も何もかも面倒だから、全部私に押し付けたんだな！ あの物ぐさ女！」

ただでさえ薄い髪をかきむしらばかりに悔しがる姿に、リドは身を引きつつなだめる。

「ちよつと、おい、落ち着けよ」

ちらちらとヨーザの頭を気にしながら言う姿に、流衣も息を飲む。このままではヨーザが可哀想だ。なんとというか、完全にストレスが原因で禿げる将来がそこまで迫っている気がする。

「そうですよ。落ち着いて下さい。あの、ええと、ストレスがっ、頭がっ」

慌てる余り失礼なことを口走りかけるが、ヨーザには聞こえなかったようだ。

「ああ、すまない。取り乱してしまった。あの女狐にはよく面倒ばかり押しつけられるせいで……はあああ」

グレース・スノウリッドへの言葉がどんどん酷くなっている。ま

あ、「面倒くさい」で全ての仕事を押し付けてきそうな雰囲気はあったが、そこまで酷いのか。

「それでだな、ゴーストハウスっていうのはだ……」

ヨーザはゴーストハウスにまつわる噂を一つずつかいつまんで教えてくれた。話を聞き終え、流衣は話を要約する。

「つまり、ここに住んでいた魔法使いが変人で、しかも顔を見たことがないからついた名前ってことですか？」

「そうだ。この通り、激烈に悪趣味ではあるが、部屋の中にはおかしな物……はないことはないが、危ないものはない」

きっぱり否定しかけて言葉を濁すヨーザ。

不安をあおるのはやめて欲しいのだが。

『坊ちゃん、この男の言うことは嘘ではありませんよ。屋敷には瘴気の気配は欠片もありませんから』

オルクスがそう言うってくれなかったら、即座に帰ると言っていたかもしれない。

流衣はお化けの類が怖い。何故か？ それは、実際にいると知っているからだ。幸運にも見たことはないが、声や音を聞いたことならある。

「と、とにかく。悪趣味なだけだ！ 害はない！ 住むのをやめるなら、中を見てからにしてくれ！」

ヨーザは折角の住人を逃がすまいと思ったのか、必死に誘ってくる。

「……中を見ようぜ、ルイ。俺、このおっさんが可哀想になってきた」

「うん、そうしよう……」

ぼそりと言うリドに、流衣は頷きを返す。

ここで断ったら、ヨーザへのストレスが更に増えそうな気がした。

*

屋敷は二階建てで、使用人用の部屋や調理場を除けば、全て壁紙と天井は真っ黒だった。

「それで、ここがラスト、奥方の部屋だ」

「……」

流衣達はというと、二階西側の一番奥にある部屋の扉を見つめて黙り込む。ローズピンクに塗られている扉。すでに嫌な予感しかない。

ヨーザは顔を引きつらせる流衣達のことには気付かないふりをして、扉を開けて中に入る。

「暗がり大好きな御主人と違い、奥方はそれは可愛らしいものが好きだった。例えば、ピンクとかフリルとかレースとか花とか……」どこか遠い目をして語るヨーザ。

「特にピンク好きが尋常ではなく、とても痛々し……いや、変わったセンスを発揮していたな。ピンクで統一して少女趣味な感じに内装を整えたり。ほら、天蓋付きベッドだとか、花柄生地椅子だとか」

「待てよ、可愛い好きって、あれは何だよ。おかしいだろ！」

箆笥の上に飾られている牛の頭蓋骨を指差すリド。

ヨーザはハハハと笑う。

「よく見たまえ。角にリボンがついているだろう。可愛いな？」

「どこが可愛いんだ！ ったく、主人だけでなく奥さんのセンスも破滅してんだな」

恐ろしそうに腕をさするリド。

角にリボンをつけていたとして、可愛いようには見えない。所詮は牛の頭蓋骨だ。流衣はこんなゲテモノ夫婦の屋敷で働く使用人が可哀想だと思った。ゾツとする程、悪趣味だ。

流衣達はすぐさま部屋を出る。

「開かずの間に決定だな」

「うん、あまりのセンスに涙出てくるから近づきたくない」

頷き合うリドと流衣に、ヨーザはパアアと表情を輝かせる。

「ここに、住んでくれるのか！」

涙を流さんばかりの態度に、身をきつつ頷く流衣。

「ええ、まあ。確かに悪趣味ですけど、住めないことはないですし……。あ、でも、僕らは仕事が一段落したら出ていきますから」

「それでもいい！ 助かるよ！ 幾ら掃除していても、人の住まない家は荒れるからな！ 管理する手間が省けるだけ恩の字だ！ なにより、私が掃除に来ないで済むのがいい！」

最後に本音を叫ぶヨーザ。

確かに、こんな真つ黒な家、一人で掃除するのは怖いだろう。

リドは不思議そうに疑問を口にする。

「でもよ、ヨーザさん。悪趣味だけど、趣味で塗り固められた屋敷を、なんで前の奴らは家具を放置で出ていったんだ？」

「知らんよ、そんなこと。新天地開拓だー！ なんて叫んでたから、そういうことなんじゃないか？」

気味が悪そうに身を震わせるヨーザ。

どうやら、どこまでも変人だったらしい。

「何をして稼いでいたかは知らんが、魔法の研究者ではあったようだな。家具は放置しているくせに、書斎の本の大部分は持って越していったようだから。普通は家具を売り払って身軽にしてから出ていくものなのに、余程急いでいたんだろう。勿体ないことをする」

信じられないというように呟くヨーザに、流衣もそうだと思つた。売ったお金で引越資金にあてれば出費が減るだろうに、勿体ない。

「まあ、ともかくだ。これが屋敷の鍵だ。これが門、これが母屋、これが裏口。あと、倉庫の鍵もある」

ヨーザは鍵束をリドに渡して一通り説明すると、近くにある店を紹介する。

「内装を変えたいなら、メインストリートにあるアランザ家具店を訪ねるといい。店主は若いが良い仕事をするからな。あとはそうだな、合鍵を作るんなら、時計屋に行け。鍵の複製もしてるから」

そして、言うだけ言うと、これでもう関わらなくて済む！ とばかりにすつきりした顔で、ヨーザは屋敷を出ていった。

流衣達はというと、そんなヨーザを見送るなり、屋敷の門の鍵をかけてからボルド村に向かう。宿に置いてある荷物を取ってくるのだ。

「なかなか曲者だな、あの校長……」

うなるように呟くりド。流衣はいつそ感心している。

「本当にお金好きなんだね。内装費用は自分達でもってって言ったし……。なんとというか、ケチ？」

「これで家賃とられたらたまらなかつたな」

「そうだねえ。とりあえず、リビングだけは内装変えようよ。怖い。あれは怖い」

「賛成。寝起きは使用人部屋を使うことにする」

「いいね、僕もそうする。使用人部屋まで真つ黒じゃなくて良かった……」

互いに話しながら、溜息しか出てこない。

その後、引越し先を聞いてきたナゼルが、「ゴーストハウス！？ いいなあ！ 見たい見たい！」とはしゃいでいたので、やっぱりナゼルの将来のことが不安になった。シフォーネの為に、呪術的な世界にだけは足を踏み出さないで欲しいと思う。

五十一章 ゴーストハウス（後書き）

「蛇足的あとがき」

この話を本編に挟むか悩んで、結局入れました。書きたかったんです。

番外編みたいにしても良かったですけど。

こつこつギャグみたいな話書いてると、心がなごみます。

次回から、学校生活に入る予定です。

五十二章 初めての友達？ 1

助手の仕事は、朝七時半にセトの研究室まで辿り着くところから始まる。

そう、辿り着くのだ。

何といっても、広い敷地内。転移魔法が使えない流衣では、足元が凍っているのもあって競歩で進んでも門から二十分はかかってしまう。

開門と同時に学校に入って、そこからひたすら歩く。歩く。歩く……。

正門から校舎前を通り抜け、校舎の終わりを左に曲がり、倉庫の前を通って、その隣にある研究棟まで行く。セトの研究室は一階の一番左端だから、そこから更に歩く。

「お早うございます！」

入口で息を整えてから、研究室の扉をノックして開ける。セトはすでにデスクに着座して、甘い香りのするお茶を飲んでいた。強面に反し、甘いものが好きなのだろうか。

「ああ、おはよう。ご苦労様。まあ、どうだね一杯」

まるで酒をすすめるみたいに茶の入ったカップを出すセト。

「ありがとうございます」

正直、喉が渴いていたので助かる。

流衣は礼を言ってカップを受け取り、座る場所がないので立ったまま茶を飲む。

広さだけなら十畳はあって一人暮らしも出来そうな研究室だが、物がごった返して足踏み場がない。二つの窓を除く四方にある本棚には本がぎっしり詰め込まれ、そこから飽和したと思われる本が床に乱雑に積まれている。更にその上に何かを書き散らした紙

が散乱し、カオスを築いていた。

(このカップ、大丈夫かな)

急にカップの清潔さが気になって、思わずカップを凝視していると、セトが口を開いた。

「安心したまえ。私は片付けが出来ないだけで、綺麗好きだ。食器の清潔さは保証する」

「うっ、すみません」

「謝らなくていい。ここに来た生徒はみんな微妙な顔をするからなカカと笑うセト。」

しかし、綺麗好きなのに片付けが出来ないというのは、意味が分からない。すでに矛盾が生じている気がするのだが。

「それで仕事だが」

「あ、はいっ」

どこから「それで」が来たのか分からないものの、流衣は返事してセトを見る。セトのいるデスクの上だけは最低限のものしか置いておらず、綺麗だ。きつと不必要なものは床の上に置いているのだろうと思われる。

「これが私の授業の時間割だ。今日、光の曜日は一時間目で、あとは水と木の曜日の二時間目になる。普段は週に三日出勤で構わないが、他の曜日にもたまに手伝って貰うから宜しく頼む」

セトが手渡ししてくるプリントを流衣は受け取り、頷く。

「はい、分かりました」

学校の授業は、一コマ六十分で、午前中に三コマと午後三コマある。昼休みと放課後休みと地の曜日以外はほとんど勉強ばかりだ。食事ですら、ここではマナーの授業と同じらしい。クラブ活動もあるというが、どういうのがあるかは知らない。

また、学校自体には十二歳から十八歳までなら年に金貨二十枚さえ払えば誰でも入れるから、一学年ごとの年齢はバラバラだ。教養科が七年あって、更にその上に進むつもりなら研究科が三年ある。授業は選択式で、魔法を学ぶ気がなくとも武術を学ぶことも可能だ

とか。こんなお高い学校にいて武術を学びに来ている生徒は、たいていが騎士志望者らしく、生徒達の間では魔法使い派と騎士派に派閥が分かれている、らしい。

どちらでも共通しているのは、マナーやダンスなどの社交技術の習得は必修課程というところだ。

「今日はプリントの配布と、課題の回収を頼む。ところで、君は筆記具は持ってきたか？」

「え？」

最低限の貴重品や弁当ならば肩に引っかけている鞆に入っているが、筆記具は持っていない。ノートも筆記用具も王城の客室に置いてあるからだ。

きよとんとする流衣を見て、セトはふむと顎に手を当てる。

「金は？」

「ありますけど？」

「では、行きがけに購買に寄るから、買い揃えなさい」

「はあ」

流衣は首を傾げる。

「あと、これもあげよう」

「？」

更に渡された冊子本を、流衣はきよとんと見下ろす。魔法学？と書かれた教本だ。

「え、あの」

「安心したまえ、プレゼントだ」

「は？ えーと、……ありがとうございます？」

セトの意図が分からなかったが、セトがにっかりと良い笑顔をしたせいで、流衣は反射的に礼を言ってしまった。

*

よく分からないままプリントを抱えて研究室を出て、購買でノー

トやインク壺や羽ペンを買い揃え、やはりよく分からないまま校舎を歩く。

（何だつてセトさんは僕に教本をくれたり筆記具を買えと言ったりしたんだろ）

流衣の仕事は助手という名の雑用であつて、勉強ではないのに。

この学校の制服を着ていない流衣は目立つらしく、生徒達にじろじろと見られるが、流衣はその視線を会釈でかわしてセトを追いかける。

ここの女生徒の制服は、前にアルモニカが着ていた服と同じだ。

白いブラウスと、膝下まであるローズピンクのスカート、黒いタイツと茶色い革靴。そして、その上に肘までの長さである黒いポンチヨを羽織っている。学年を示す数字入りのバッジがポンチヨの留め金についている。男子生徒は、ブラウスがシャツに代わり、首に紺色のタイをしていて、黒いズボンを履いている以外は同じだ。

どの生徒達も気位が高そうだ。背筋が良く、歩き方にも品がある感じ。ドキドキと心臓がうるさい。手があいていたら、手の平に「人」の字を書きまくりたいくらいだ。

『坊ちゃん、大丈夫です。わてがお供しております故！』

オルクスの力強い言葉に、流衣はハツとする。喧嘩っばいやいオルクスの性格をすっかり忘れていた。

「そういえばオルクス。言うの忘れてたけど、喧嘩しちゃ駄目だよ。怒って飛びかかったりしちゃ駄目だからね」

『ですが』

「ですが、でも駄目だよ。僕らの目的忘れたの？ あんまり目立たないようにしなきゃ」

『むう。左様でございますね。余程のことが無ければ、大人しくしております』

渋々と引き下がるオルクスに流衣はほっとするが、流衣は気付いていなかった。オウムを肩に乗せている時点で、嫌でも目立つということに。

やがて一年の教室に辿り着き、セトに続いて扉をくぐった。

*

生徒達はすでに着席していた。

セトはすたすたと教壇まで歩いていくと、出入り口で逡巡している流衣を手招き、教壇の横に立たせた。

「魔法学？の講義を始める前に、彼を紹介しよう。私の助手を務めることになった、ルイ・オリベだ。一応断っておくが、男だぞ。見た通り、外国人だ。言葉は流暢だが、ときどき常識が分からないことがあるようなので、その辺は考慮してやって欲しい」

「よろしく願います」

流衣はどぎまぎしつつ、頭を下げる。顔を上げると、何故か女生徒達の間で黄色い悲鳴が上がる。

(!?)

何事かときよっとするが、同時に男子生徒の冷たい視線に背筋に冷や汗が浮かぶ。なんだかよく分からないが、自己紹介の掴みを失敗したっぽい？ 転校した経験がないので、転入生のように掴みの得方は分からない。

「彼はあまり魔法に詳しくないと言うのでね、私の講義のみ、聴講リッテイキョウして貰うことにした。というわけでルイ、そのプリントを配ったら、一番後ろの空いている席につきなさい」

「はいつ。……つて、え？」

流衣はセトの堅物にしか見えない角ばった顔を凝視する。そんなの初耳だ。

「え？ あの、でもセトさん。僕の仕事は助手……」

「どうせ授業中は待っているだけで暇だろう。時間は有意義に使いたまえ。大丈夫、私の独断だから」

「はあ……」

それは大丈夫ということになるのか？

流衣は首をひねりつつ、とりあえずプリントを配り、余ったプリント一枚を片手に一番後ろの席につく。

教科書をくれた理由が分かってすっきりしたが、それならそれ以前もって教えてくれてもいいのと思った。

テーブルは横に細長く、二人掛けになっている。廊下側の方の席に座っている、流衣より年下に見える少年が、人懐こい笑みを浮かべる。短い金髪は猫っ毛で、赤茶色の目をしていて、肌は褐色だ。

「よろしく、助手サン。オレ、ファリド」エネ」

偶然だと思うが、ファリドという少年も外国人のようだ。言葉がたどたどしい感じだ。

「僕はルイ・オリベです。よろしくお願いします」

小声で丁寧に言うと、ファリドはにこっと笑ってくれた。

これはもしかして、意外に掴みOKだったんじゃないか。流衣は少し期待に胸を膨らませた。

*

授業が終わって、課題を回収してセトの研究室に帰ろうとしたら、何故か女生徒達に詰め寄られてお菓子を押し付けられた。

どうして貰ったのか分からない。

しかも、鈴やベルなどを鳴らしただけで侍女がすっ飛んできて、菓子の包みを持ってきて置いていったのには面食らった。

何が起こったのか分からないまま、呆然としつつ教室を出る。

「な、何だったんだろうね、オルクス。ここの生徒は、新入りにお菓子をくれるものなのかな？」

『さあ。わてには分かりかねます』

オルクスも不思議そうだ。

『まあ、毒入りのようではないですし、おいしく召し上がれば宜しいのでは？』

「う、うん……」

両腕に菓子包みを抱え、セトの後ろを歩く。セトはくつくつと笑っている。

「いや、君のもてっぷりは意外だったな。可愛いとか、可愛い……つ。ぶくくく」

仕舞いには腹を抱えて爆笑し始めた。

「もて……？　可愛い……？」

何のことかさっぱり分からない。

しばらく考えてみて、ああ、と頷く。

「そんなにオルクスって可愛いんですか？　それは良かったです」

「オルクス？」

怪訝な顔をするセト。

「僕の使い魔です。このオウムですよ」

「その鳥は使い魔だったのかね。というか、君、もしや気付いていないのか？」

「何をですか？」

首を傾げる流衣を見て、セトは呆れた顔をする。

「あんなに分かりやすいのだから……」

しかも可哀想なものを見るような目をされ、溜息までつかれる。

「まあいい。今日の授業はどうだったかね？」

「はい、分かりやすく面白かったです。僕、本を読んで独学で呪文を覚えているところだったので、理屈が分かって良かったです」

「では、その理屈について説明してみなさい」

廊下を歩きながらであるが、教師らしく質問してくるセト。

流衣は少し緊張しつつ、授業の内容を思い出しながら言う。呪文構成の文法の復習と、呪文を新しく考案する時の属性の掛け合わせの可否、というのが授業のテーマだった。

「ええと、呪文には、魔法として精霊に発動して貰う為の鍵となる言葉が必要になります。初級の呪文を見れば分かりやすく、例えば、点火の術なら『ファイアー』がそれになりまっつわっ」

説明している途中で、無意識に魔法を使ってしまい、流衣は慌て

る。意識していなかったので爆発まではしなかったが、杖の先端に火の玉が浮かんでいた。

「なんだ、その火はっ」

ぎよつと身を引くセト。流衣は大急ぎで火が消えるように念じた。何とか消える。

「すいません、よく使うせいか無意識に使っちゃいました。あと、僕、魔力の調節が下手なんです」

「そ、そうか。まあいい、続けて」

セトは続きを促す。

あまり大袈裟にとられなくてほつとほつと、話を続ける。

「単語一つで発動するものが初級に多く、中級からは、頭文、対象指定と行動指定の文、発動の鍵の単語、という組み合わせになり、上級に行くにつれ、文章が長くなります」

「それは何故かね？」

授業では理由は言っていなかったが、流衣は考えて、少ししてから答える。

「そうですね、多分、力が強いほど、魔法として形を作るのにイメージを固める必要があるからなんじゃないかと思います」

校舎を出て研究棟への道を歩きつつ、セトがにやりとする。

「なかなか良い答えだが、少し違うな。確かに、魔法は術者が信じること**で**強固となるというのは真実だ。だが、術を引き起こすのはあくまで精霊なのだ。だから、精霊にどうして欲しいのか、それを正確に伝える為に、呪文が長くなってしまふのだよ」

「なるほどー！」

流衣は理由が分かって、大きく頷く。精霊にどう伝えるか考えながら口にする。そう考えると、とても面白く思えた。

「熟練者は、そのイメージを魔力に乗せて伝えることが出来るため、ショート・スベル短縮詠唱や無詠唱でも魔法を使えるがね。だが、……ふむ。今日の講義だけでそこまで理解したのなら、君はなかなか筋が良い。しかも魔法について真面目に考えているのが、君の良いところだな」

セトは満足げに何度も首肯する。そして、研究棟の出入り口になる両開きの扉を開け、中へと入る。流衣も重いガラス扉を腕で押し開け、セトに続く。

セトの褒め言葉に、しかし、流衣は困った顔をしてしまう。何故、そこが良いのか分からないのだ。

「真面目に考えるのは、当たり前だと思うんですが」

セトの足がぴたりと止まる。何かを探るように、じろりと一瞥される。

「君は魔法好きなのか？」

流衣は返事に詰まったものの、正直に首を振る。

「いいえ、どちらかというと、あんまり好きではないです」

「どうしてかね？」

「……単語一つで、誰かに大怪我をさせてしまうかもしれないからです。それが、とても怖いんです。でも、僕は力が無いので、魔法に頼ってしまってます。そこがまた怖いといえますか……」

漠然とある恐怖感。最近ではだんだん使うことに慣れてきているが、慣れきってしまうことが怖い。慣れてしまったら便利な為以後で苦労しそうだし、そもそも、躊躇なくほいほいと使うようになっては、どこかで重大故を引き起こしそうな気がするのだ。

セトはぼんと流衣の頭に手を乗せた。大柄な体躯と同じ、大きな手だ。

「良い答えだ。魔法は怖いものだよ。だが、それを理解しないで、ただの便利な道具だと思っている輩の方が多いのだ。とはいえ、使い方さえ間違わなければ良いのだ。君が一番大事なところが分かっているから、大丈夫だ。恐れを忘れるとは言わない。上手く共存したまえ」

ぼんぼんと二度軽く手を乗せると、セトは再び歩き出す。

やれやれと溜息を零しながら。

「そこを、ナゼルは分かっているからな。だが、こないだの雪だるまの件で、少しは身に沁みたようだ。その点では君に感

謝しているよ」

セトの歩幅は広いので、流衣は小走りについていく。

「ナゼル君と雪だるま作ったのって、やっぱりセトさんなんですか？」

「ああ。まさかゴーレムとして使えるとは思わなかったから、あの子の気が収まるようにと教えてしまったのがいけなかったな。雪で作るゴーレムが一番難しいというのに、全く。才能というのは洒落にならん……」

セトに溜息をつかせる程、ナゼルは将来有望らしい。

「母親を守ろうと背伸びしているせいか、少しばかり屈折しているが、良い子だから仲良くしてやってくれ。ナゼルが余所者になつくなんて珍しいんだ」

「そうなんですか？ そうは見えませんでしたけど」

どちらかといえば、誰とでも仲良くなれそうな子どもに見えたが。「あの歳で、すでに営業スマイルを身に着けているんだぞ。子どもっぽい行動をするのも少数の人間の前だけだ」

そんな話をしているうちに、ようやく研究室まで辿り着いた。

セトはふうと息を吐く。

「よし。では、課題を出席番号で並べて貰おうか。その後は私は課題の採点をしなくてはならんし、自由にしている構わんが……」

「良ければ、ここを片付けるのを手伝っていいですか？」

とりあえず、あまり片付けが得意と叫ばない流衣にも滅茶苦茶だと思っ部屋なので、そう申し出てみた。セトは快諾してくれた。

*

手伝うというより、流衣だけで片付けた。

とはいえ、棚がすでに飽和状態だから、分類して部屋の隅に寄せられる程度しか出来なかった。だが助手用の椅子が置けるスペースが出来ただけ上出来だろう。

研究室には薪ストーブまきが置いてあるので、とても暖かい。ストーブの上ではヤカンが湯気を吐きだしている。

セトは生徒達と同じく食堂で昼食を摂るといので、流衣は研究室に居座って持参した弁当を食べている。許可も貰ってある。

昨日から居住場所になっているゴーストハウスは、悪趣味なものを除けば住み心地は良いと分かった。調理器具も揃っているし、期待通り風呂もあつたのが嬉しかった。しかもお湯の出る魔法道具付きだ。風呂場に黒い壁紙が貼ってなかったのは良かった。そうだとしたら暗過ぎるし、風呂場にある鏡に何か得体の知れないものが映りこみそつで怖すぎる。

とりあえず、昨日は日用品の追加や食材、薪などを買い揃えた。リビングの改装については、資金の都合があるので簡単な見積もりだけアランザ家具店で聞いてきた。部屋の広さや壁紙の質にもよるが、一部屋の壁紙を貼り直すだけで、だいたい銀貨一枚程度だそうだ。近いうちに、正確な見積もりを出しに訪問してくれるそうだ。

ゴーストハウスと聞いた瞬間、店主の営業スマイルが凍りついていたけれど。

「ふおうやって、生徒と仲良くなふおうふあな」

もぐもぐとサンドイッチを頬張りながら呟く流衣を、黒いデスクの上をぴよんぴよんと跳ねるようにして歩き回っていたオルクスは振り返る。

『意外に接点がありませんよね』

流衣はごくんと飲み込み、頷く。

「そうなんだよね。難しいなあ。しかも、雑用レベルが簡単だからすぐに仕事終わっちゃうし……」

『確かに、すぐに慣れましたね』

「うん。出席番号で並べれば良いだけだもん。しかも、名前のアイウエオ順だからね」

きつと、一般言語では別の言葉での順序なのだろうが、女神ツィールカのお陰で自動的に一般言語が日本語に翻訳されているのでア

イウエオにしか見えない。この一般言語というのも、世界共通貨幣であるクリエステル貨幣と同じで、ルマルデー王国圏内で使われている言葉や文字のことみたいだ。ラーザイナ・フィールドで一番の大国で使われているから、一般言語になっっているんだろう。

「その程度なら、元いた世界で日直や係でしてたから分かるよ。でも、プリントってどうやって刷ってるんだろうね。印刷機を見たことないけど、印刷機ってあるの？」

流衣の問いに、オルクスは首を傾げる。

『インサツキが何か分かりませんが……。同じ内容の書かれた用紙を作るのでしたら、記録転写の術を使えば済みますよ？』

「記録転写？」

『水の魔法の一種です。領域外なのでわては使えませんが、確かそんなにレベルの高くない術だったと思います。一枚だけ書類を作り、書類上に水鏡を作りだし、インク部分だけを写しとり、紙に転写するのです。インクと紙が必要な魔法です』

流衣は眉を寄せる。考えてみたが、よく分からなかった。

「ふ、ふうん……。魔法を使った印刷技術ってことなのかな。へえ……」

『この魔法が開発されたのは、ざっと八百年ほど前になります。元々、紙の材料となる草は多く生えていましたから、紙自体は昔から安価で出回っていたのですが、この魔法が開発されるまでは本を手書きで書き写すしかありませんでしたから、本は大変高価でした。写本師という仕事が幅を利かせていた時代ですね』

何やら懐かしそうに語りだすオルクス。流衣はオルクスを見下ろす。

『あの頃は、読み書き出来る人材はなかなかいませんでしたから、例え書き写すにしろ高度テクニクでした。たいていは、神殿が一つの事業として仕事をしていましたね。あの場所程、文字の読み書きを普及させられるに適した場所はありませんからね。しかも神官なら結構な数がいますから』

「うん」

『写本師は、美術としての写本師を残して今ではほとんどいなくなりましたけれど、そういう経緯もあって、神殿は今でも教育の立場を担っているのですよ』

「そんな経緯が……。流石オルクス、物知りだね」

オウム殿は胸を張る。ふわふわの黄緑色の身体が膨れる。

『伊達に長く生きておりませんから。お役に立てて光栄です。歴史はわたの得意とするところ、いつでもお聞き下さい。表から裏まで全てお答えしましょう！』

流衣はぶんぶんと首を振る。

「え、いいよ。黒歴史なんて怖いから知りたくない」

うっかり権力者の痛い所を突くような知識を得てしまったら怖い。左様ですか？ まあ、興味を惹かれましたらいつでもどうぞ』

ちよつと残念そうなオルクス。そんなに政治の裏側を暴露したかったのだろうかと考えていると、気を改めたオルクスが問うてくる。『坊ちゃん、この後はどのような予定なのですか？』

「僕の本当の仕事をクリアする為にも、まず、接点を見つけないきゃね。それに異世界の学校って面白そうだから、校内巡りしたいな。セトさんにも許可を貰おう」

*

「それならば、放課後にアルモニカ嬢に案内して貰ってはどうか？ 思いがけないセトの言葉に、流衣はえっと声を漏らす。

「君は彼女の数少ない友人なんだろう？ うぐっ！」

セトは本棚の一番上に詰まっている本を一冊引き抜いて 雪崩
れてきた本の襲撃に遭ってうめいた。

折角片付けたのに……。

流衣は本が散らばる研究室をがっかりしつつ見つめる。同時に、どうしてセトが片付けが下手なのか、今ので分かった気がした。

「……あまりグレッツセン家の者と平民が仲良くしていると、いらぬやっかみを買うかもしれんが、塔で出来た友人と言っておけば、たいていの貴族も納得するだろう」

少しの間、本の角が直撃した顔を押さえてうずくまっていたセトだが、しばらくすると復活して最もらしく言った。最初から最後までぼつちり見てしまっているの、流衣には何ら威厳があるようには見えなかったが。

「実際、塔で知り合いましたしね……。じゃあ、頼んでみることにします」

流衣の返事に、セトは頷く。

「あと言うのを忘れていたが、君は私の助手なのでね、その身分証があれば図書館の利用が可能だ。貸出も出来る。それから、申請を出せば鍛練場も使える。必要なら利用するといいいい」

思い出したように言うセト。

流衣はマントの左胸辺りに付けている、名前と所属先が彫られた銀製プレートの身分証を見下ろしてから、パツと表情を明るくする。「図書館を使っているんですか？ やった！ ありがとうございます！ す！」

そして礼を言ってから、とりあえず、床に散らばる本を見た。

「放課後まで何か手伝いをしようかと思いますが、先にそれを片付けますね？」

「……う。すまない、頼む」

セトは気まずげに顔を歪め、申し訳なさそうに言った。

とてもしっかりしていて、しかも硬派な印象の人なのに、意外なところで抜けているなあこの人。そういうところがうけて、生徒に人気がありそうな気がする。

流衣は心の内でこっそり思った。

五十二章 初めての友達？ 2

アルモニカはイライラしていた。

三年の教室、左端の前から三番目の席で本を広げて視線を落としたりつつ、カツカツと桜色の爪がテーブルの盤面を叩く。その度に隣の席のホーリー・サリベツティが怯えたような顔をするのだが、あいにく視線は本の文面に釘付けなので気付かない。

（何故じゃ。こんなに努力しておるのに、一向に取っ掛かりが出来ぬ）

セトに大見栄を切った手前、憤然とクラスメイトに話しかけてみるのだが、皆そろって怯えたおびような顔をして、取り繕った笑顔を浮かべ、他愛の無いことを返事して離れていく。

何故だ。

怯えるとか、意味分かん。

クラスメイトを怖がらせる程、話した覚えは一つもない。

（ああ、訳が分からぬ。意味不明じゃーっ）

切れた拍子に握った拳を本に叩きつけると、ホーリーは涙目になって「ひえっ」と悲鳴を上げた。無論、アルモニカは気付かない。

「全く、役に立たぬ本じゃ！」

何が『簡単に作れる、友達の作り方』じゃ！ 実践しても逃げられるばかりではないか！

「きゃーっすいませんすいませんっ、平民のわたくしなんか隣ですみませんっ。だからどうか蛙にしないで下さいい」

金髪を三つ編みにしたホーリーは頭を抱えて小さな悲鳴を上げている。

しかししゃっぱり聞いていないアルモニカは、窓から外へ視線を向ける。ふうと溜息をつく。

それを見たホーリイは、助かったあとばかりに安堵の息をついた。
（お父様の言ってることはおかしい。茶を飲めばそれで友達なんじやなかったのか？ まず、茶の席にすら呼べない場合はどうすればいいのじゃろう……）

黙々と考えていると、担任教師が入って来てホームルームが始まった。簡単な連絡事項を述べ、すぐに終わる。

教師が出ていくと、教室はざわつきに包まれた。

「やあ、グレッセン女史^{じゆし}」
「む？」

相変わらず外を眺めていたアルモニカは、声の方を振り返る。クラス委員長のオード・イザルド・アイングラフだ。短い藍色の髪と薄い灰色の目をした少年。南方に領地を持つ貴族で、アルモニカはいけすかない奴と判定していた。

社交界は女王率いる穏健派と女王の叔父であるエダ公爵率いる過激派に分かれているのだが、貴族の子息が集まるこの学校もまた社交界の縮図であり、魔法使い派と騎士派に分かれている一方で、北と東の領地派閥vs西と南の領地派閥が存在している。今は、エダ侯爵が王座についている為に、西と南の領地派閥が圧倒的優勢だ。三年の教室では、オードが過激派の代表格だった。

が、そのオードですら、アルモニカを前にすれば少々怯えた顔をする。研究ばかりしているせいで生徒の中で浮いているとアルモニカは勘違いしているのだが、実際は、親しくなりすぎると蛙にされるといふ身も蓋もない噂があるせいで皆避けているのだ。噂など歯牙にもかけないアルモニカは、勿論そんな事情を知らない。

「オールドリッジ教諭の新任助手が、君に用があるそうだよ」

ひきつり気味な笑みを浮かべつつ、オードは教室の入り口を示す。
「助手？」

片眉を跳ね上げ、入口を一瞥する。

アルモニカはただ見ただけだったが、きつい顔立ちのせいでクラスメイトには睨んでいるように見えた。だから皆、アルモニカに用

があるなんていう勇氣ある客人の冥福を祈った。

「ちよつ、ちよつと。誰か止めた方が宜しいんではなくて!？」

「わ、わたくしは知りませんわ。あなたが行けば宜しいのでは？」

「嫌ですわよ、そんなの。ここでこそ殿方の出番ですわ!」

「あいにくとあの方に立ち向かう勇氣は持ち合わせておりません。

申し訳ありませんね、レディー」

ひそひそそこそそと互いに役を押し付け合うクラスメイト達。

戸口に立っている外国人の容貌をした少年 服装からして少年

のほずだが少女かもしれない が、地味な割に何故か思わず手を

貸してしまいたくなるような雰囲気をしていたので、女生徒達は揃

って悲鳴を上げた。

「きゃああ、どうしましょう。あんないたいけな小ネズミちゃん、

真つ赤な猫に一撃でのされてしましますわ!」

真つ赤な猫というのは、もちろんアルモニカのことだ。

「いやあ、猫が向かって行きますわ! 誰かお止めしてえ」

頬に手を当てて、小さな声で絶叫している女生徒達。声を張り上

げない辺りは淑女っぽい。

だが、アルモニカと少年が幾つか言葉を交わすだけで済んだので、

皆、一気に胸をなで下ろした。

「きゃああつ、猫に連れて行かれてますわ。やばいですわ、まずい

ですわ」

「ききききつと、蛙にいいっ」

「いやーっ」

かと思えば、荷物を持って助手の少年と歩き出してしまったので、

クラスメイト達は大混乱に叩き落とされたのだった。

*

「猫とネズミと蛙がどうかしたんですかね？」

教室を離れてしばらくし、周りに人がいなくなるやオルクスが不

思議そうに呟いた。アルモニカでも聞こえるようにと声に出して言った言葉に、アルモニカも首を傾げる。

「そういえば微妙に騒がしかったのう。誰かの使い魔が逃げ出したのではないか？」

「猫とネズミと蛙がいつぺんに？」

流衣も首を傾げる。考えてみると笑える光景だ。

「まあどうでもいい。それより、さっきの話じゃが。校内を案内してやってもいいが、交換条件がある」

「え」

まさかそうくるとは思っていなかったので、流衣は軽く衝撃を受けてアルモニカを振り向いた。隣を歩いているアルモニカは、ちらちらと学校を囲む壁を見ている。

「ワシは街に出たことがない故、がくせいがい学生街の方に連れてってくれ。一人じゃ少々不安での……」

言いづらそうにもごもごとアルモニカは言う。

「街に出るのはいいけど、学生街って？」

そんなことで良いならお安い御用だ。案内出来る程詳しくはないが、アルモニカを一人で放り出す方が余程危なっかしいので、流衣がいる方がマシだと思う。

「アカデミアタウンの通称だ。生徒達は主にこっちの名で呼んでい
る」

「へえ、学生の街って意味では分かりやすいね」

「うむ、そうじゃな。それでお主、どこに行きたいんじゃない？」

「一通りぐるつと見て回りたいんだけど……」。

流衣の言葉に、アルモニカは難しそうな顔をする。

「校舎内も巡っていたら今日中では無理じゃぞ？」

「校舎はいいよ。生徒がたくさんいて怖いから。色んな建物あるから、場所の把握をしておかないと迷子になった時に困ると思っさ」

校舎を正門側の道に出た所から右手に見える、高い壁に囲まれた場所を示す。

「例えば、あれって何かな」

「あれは鍛練場じゃ。近くに行ってみよう。……歩くとな面倒じゃから転移で行くぞ」

アルモニカはがしつと流衣の腕を掴むと、呪文を唱える。

「風よ、運び手となりて、我らを道の先へ送り届けよ。トランスポートー！」

「ちよっ」

流衣が何か言う前に、あっさり転移してしまった。

景色の切り替わりにくらりと目眩を覚える。何度転移してもこれだけは慣れない。

「ここが鍛練場じゃ」

流衣の腕から手を離れたアルモニカは、何事も無かったかのように言う。

灰色の分厚い壁に囲まれた鍛練場の入口の扉は黒い鉄柵のようになっていた。その隙間から中を覗くと、ウィングクロス製の鍛練場のように、端の方にカシガ三つ立っていて、あとはただっ広い空間が広がっていた。何人かの生徒が青色の服を着て剣の素振りをして、稽古試合をしている。

「いや、アル。ここまで転移して貰って悪いけど、先に外套取ってきた方が良かったんじゃない？」

転移する前に、流衣はそれを言いたかったのだ。言う暇がなかったけれど。

「安心せい。この学校の制服には熱遮断やちよつとした魔法ならば防ぐことの出来る防護の陣が刺繍されておる。お陰で、ただの制服にしては恐ろしく値が張る代物じゃ」

だから寒くないぞとアルモニカはあっさりと言う。

（さ、流石はお金持ちの学校……。僕は物凄く場違いな気がしてきたぞ）

流衣は内心で怖気づく。二百年続いている学校だから校舎は結構古いけれど、それがますます格式の高さをアピールしているよう

だ。門から見ただけなら、学校というより古城のようである。

「お主とて、なかなか良い代物のマントを羽織っておるではないか。それとこのマントは同じくらいの値じゃよ」

「ああ、それくらいか。へえ……。アルって家がお金持ちなのに、意外に金銭感覚しつかりしてるんだね」

家から出たことがほとんど無い割に、その辺の感覚がしつかりしているので驚きだ。

「クソ爺の所におれば、嫌でも金勘定が出来るようになるわ。あの爺も校長と同じで金好きだからのう。研究の材料費のことでよく喧嘩しておったせいか、身についてしまったんじゃ」

はんと鼻で笑うアルモニカ。様になりすぎていて、思わず拍手しなくなつた。

「あ、危ない！」

その時、誰かの叫ぶ声がした。入口からそつちを見たら、何か銀色のものがくるくと旋回しながらこつちに飛んできて

ガンッ！

扉に当たって弾かれ、地面にぐっさりと突き刺さつた。

二人してそれをぽかんと見つめ、ほぼ同時に距離を取る。今更遅い。

「うっわ、剣!?!」

「何じゃ敵襲か!?!」

狼狽する二人に対し、呑気な声がかかる。

「おう、わりいわりい。勢い余つてぶん投げちまつた」

粗野な言葉で謝ってくる少年は、流衣達の方まで歩いてくると、アルモニカを見てぎよつと身を引いた。

「げっ、グレッセン女史！ すみませんでした、先輩！ だから蛙にはしないでくれ！」

突然、頭を下げてきた少年に、アルモニカと流衣はきよとんとす

る。

「蛙……?」

「アルって誰かを蛙に出来るの? そういう魔法ってあるんだ」

「って出来るか、ド阿呆! ワシは闇魔法使いではないのだぞ!」

「いだが、本で殴らないでよ!」

薄っぺらい教本とはいええ、思い切りはたかれて流衣は頭を押さえつめく。

というか、何。闇属性の魔法には、人を蛙にする魔法があるのか? 疑問に思っていると、カツカと湯気を頭から出しかねない勢いで怒っているアルモニカは、くどくどと流衣に小言を言う。

「第一、呪いとて人間の姿形を変えるものなど存在せぬわ! 変身の術を使えるのは、竜族のみと相場が決まっておろう! 本当にお主は物を知らぬ奴じゃ!」

『あとはわてみたいいな上位の使い魔だけですよ』

オルクスがえっへんと胸を張って付け足す。

「お主もじゃ! ふざけたことを抜かしておると、その口、糸で縫うぞ!」

ぶち切れたアルモニカは、猫を被ることも忘れて怒鳴る。怒鳴られた少年は肩をすくめたが、すぐに笑みを浮かべた。

「あ、なーんだ。やっぱりあの噂ってガセだったんだ。そうっすよね、いかにそれっぽくても、蛙になんて出来ねえよな」

「それっぽいとはどういう意味じゃ!」

それにまた髪を逆立てて怒るアルモニカ。流衣はまあまあと宥める。

「アル、落ち着きなよ。友達作りたいでしょ、笑顔笑顔」

頬に指を押し当てて口角を引き上げてみせると、アルモニカはむうと黙り込み、無理矢理笑った。引きつった笑みだ。

「ぶっ」

思わず吹き出してしまうと、また本で殴られた。痛い。

「お主、ワシをおちよくつとるのか……?」

ひいひい。怒りのオーラが半端ない。

青ざめる流衣だが、少年の物問いたげな視線を感じてそちらを見る。

「お前、セト先生の助手だろ。えーと、名前忘れたけど。今日、クラスに来てた」

「ルイ・オリベです。あのクラスの生徒だったんですね、気付かなくてすみません」

出来るだけ生徒と仲良くしたい流衣である。慌てて謝る。

「いや、それはいいんだが。……グレッセン女史と知り合いなのか？」

「ふふん。ただの知り合いにあらず、友人じゃ！」

誇らしげに胸を張るアルモニカを、流衣はやや呆れて見やる。

「アル、良いの？ 淑女っぽい話し方しなくて……」

「いいんじゃない、もうすでに使っておるから今更じゃろう」

「まあ、君が良いなら良いんだけどさ」

そう答えながら、流衣は少年に向き直る。

「アルとは 塔 で知り合った友達なんです」

「ふーん……。 塔 所属には見えないけどな」

じろじろと見てくる少年は、薄茶の髪と灰色の目をしているやんちゃそうなお坊ちゃんという印象だ。流衣より背が低いし、十二歳かそこらだろうと思う。

「僕は杖連盟には所属してないので、違いますよ。前にヘイゼルさんに新人と勘違いされて料理作らせられたり、ヘイゼルさん家に引きずられてったりして、こうなってますけど」

大急ぎで両手を振って否定すると、少年は面食らった顔になる。

「魔法使いなんだよな？」

「はい」

「無所属？」

「ウイングクロスには属してます」

「……ふうん」

品定めをするようにじろじろと見てくる少年に、笑顔が引きつりかけてきたところで、アルモニカが口を挟む。腰に手を当て、胡乱気に少年を見る。

「そもそもお主はさつきから何なのじゃ。名乗りを求めるのに対し、自らは名乗らず詮索ばかり。最低限の礼儀もわきまえておらぬのか、未熟者めが。一年とて、ワシは容赦はせぬぞ」

確かに容赦ない口ぶりだ。

辛辣な物言いに、流衣は内心で感心する。有言実行で小気味良い。アルモニカに睨まれて、少年はうつと顔をしかめ、急いで口を開く。

「俺はクレオドール・ジャック・レーネス。レヤード侯爵家の家臣で、レーネス伯爵家の跡継ぎだ。呼ぶ時はクレオ様でいーぜ」

何気なく紹介を聞いていて、流衣はぎよつとした。

(デイルの実家の家臣！ あ、でも何か納得)

鍛練場で剣を振るっているのがよく似合っている感じた。顔立ちが良いのだが、どこか野性味溢れる雰囲気だ。口調も粗っぽいが、爽やかな雰囲気ので嫌な感じではない。

「お主は我が校の校訓を忘れたのか？ 『ひとたび門をくぐれば、皆、背筋を正せ。そこに身分の差別はあらず。ただ高め合う同志あり』この格調高い言葉を！」

何か悦に入っているアルモニカ。どうだ素晴らしくうとキラキラした目で問うので、流衣は苦笑を浮かべつつ肯定する。

「そ、そだね。すごい、アルが先輩っぽい」

「抜かせ。ワシは先輩じゃ」

「ええー、先輩。そんな校訓ありましたっけ？」

「クレオ、お主、何をとんちんかんなことを言うておる！ 生徒手帳の第一ページ目に書いてあるじゃろうが！」

さつき知りあったばかりだろうに、旧友みたいに怒鳴りつけているアルモニカに、クレオはムツとするどころかケラケラ笑っている。アルモニカに怒られて笑ってられるなんて、将来大物になりそうだ

よ、君。

「クレオ、いつ戻ってくる気だよ」

「そうですねよ。ロイスの相手ばかりではつまらないです」

「うるせーよ、一言余計だディオ」

「ディオじゃなくてディオ又です！」

鍛練場の奥から、模擬剣もぎけんを手にした少年が二人、文句を言い合いながら歩いて来る。

二人はアルモニカを目にした時点で顔色を変えたが、クレオの取り成しで硬直が溶けた。

「蛙……蛙……」

耐えきれずにアルモニカに背中を向けて流衣が笑いをこらえていと、怒りで顔を真っ赤にしたアルモニカがぶち切れた。

「ええい！ 笑うな、馬鹿者めが！ いいか、あのクソ爺にばらしおつたらお主、明日の朝日を拝めぬと思えっ！」

「ぎゃあ、ごめんなさい！ ハイゼルさんには黙ってるから！ すみませんでした！」

がっしりと襟首を掴まれた上、視線だけで竜りゅうを射殺しそうな殺気のもつた目で睨まれ、流衣はすぐさま白旗を振る。ひいひい怖いっ。

「何やってんだよ、お前ら」

流衣が泡をくっっていると、呆れた声が割り込んだ。

「わーっ、リド！ 助かったーっ！」

どついつわけか茶トラのデブ猫を腕に抱えているリドが、濃緑色の用務員の制服姿で立っていた。

チャンスを生かし、逃げ出す流衣。ささっとニメートルばかり安全圏を確保する。

「姫さんもさ、もうちつと淑女らしくしろよ。神殿の奴らが泣くぜん？」

「其奴が悪いんじゃ。ワシが乙女ということ忘れておるのがいかん」

唇を尖らせて反論するアルモニカ。

「乙女……？」

思わず声を揃えてしまったら、どぎつい視線が飛んできた。流衣は更に一歩退いた。アルモニカは鼻を鳴らし、視線をリドの抱えるデブ猫に据える。

「ふん。しかし、何じゃその不細工な猫は」

「ああ、これ？ 迷子になってたのを探してて、さつき捕まえたんだ。女子寮の寮監に届けに行くところ。そしたらお前らが騒いでるのが聞こえてきたからよ。ほんと喧しいぜ、お前ら。百エナ・ケルテル先からでも聞こえたぞ」

リドはややうんざりした様子である。

だが流衣は気に留めず、猫を見て目をキラキラ輝かせる。一方、肩の上のオルクスはそんな主人の態度を見て、「猫ごときが」と猫を睨んだ。

「猫だ。可愛いなあ。使い魔？ 飼猫？」

「さてな。貴族様の猫だから俺は知らん。あー、ルイ。俺、今日は帰り遅くなるから、アランザ家具店の対応しておいてくれよ」

「ああ、うん。十八時だったっけ？ 分かったよ、任せといて」

「では、失礼しました。お坊ちゃん方」

本当にただ通りかっただけらしい。ついでというように用事を頼むと、リドは流衣達の後ろにいる貴族の子息に一礼してから去る。「かつけー！ なんだあの人。なんなんだ、あの格好良さ！」

リドが立ち去った後、何やら感動しているクレオ少年がいたが、友人たちの反応は冷たい。

「そうですか？ ただの使用人ではないですか」

「そーそー。俺は断然、ヴァン様派だな。あの漆黒の静かなたたずまい。憧れるぜ！」

「何言ってるんですか、ご当主様が一番に決まっていますでしょう！」
ディオヌとロイスはそう言いながら、どこかで聞いた名前を出してもめている。

「家具店がどうかしたのか？」

そんな少年達を尻目に、自分の興味を優先するアルモニカの問題に、猫を見かけて上機嫌になったままで流衣は返事する。

「校長先生が用意してくれた家がゴーストハウスでさ、あのままだと怖いから、一部改装するんだ。何せ、天井も壁も真っ黒なんだよ」「ほう。ゴーストが出るような瘴気まじだらけの家なのか？ 出張で浄化してやるうか」

「ははは。変な人が住んでただけで、そんなんじゃないよ。ああでも、暇な時は遊びにおいでよ。地の曜日ならリドもいると思うし」

「行く！！」

「へ？」

アルモニカならともかく、クレオまで返事をしたので流衣は目を瞬いた。アルモニカがしらっとした目でクレオを見る。

「何故、お主が返事をする。家に招かれたのはワシじゃ！」

アルモニカの方が年上だと思うが、クレオと身長がほとんど変わらないので同級生に見えなくもない。

「へへーんだ、先輩。助手と俺は友達なんだから良いだろ」

「友達！？」

「いつからじゃ！」

「たった今。俺が決めた。決定！」

アルモニカは口をへの字に曲げた。

「何じゃその屁理屈は！ お父様が言っておったぞ、一緒にお茶をしたら友人なんだと！ お茶をしておらぬではないか！」

「ええ、そこ！？」

流衣は思わず突っ込みを入れてしまう。

真剣な顔ですつとぼけたことを言っているアルモニカを、クレオとその友人二人も唾然と見つめた。天然記念物でも見るような目で、クレオはにやりと笑み、指を振る。

「ちつちつち、先輩、そりゃ違っぜ」

「む？ 何がじゃ？」

「友達っていうのはな、自分が友達って決めればそれで友達なんだ」「そういうものなのか!？」

目から鱗が落ちたという様子で話に食い付くアルモニカ。クレオは更ににやつと笑う。

「先輩、友達を作りたいらしいじゃないですか。いいでしょう、このクレオドル・ジャック・レーネス。友人作成の指南役になって差し上げます！」

アルモニカの濃緑色の目が期待に輝く。

「おおつ、真か！ それは是非宜しく頼む！ 何じゃ、良い奴ではないかお主っ！」

「つてわけで、お邪魔するけど良いよな？ 助手さん」

「は……」

いい笑顔で問うてくるクレオを見て、瞬時にそれがアルモニカを丸めこむ策だったと気付く流衣。

（う、うーん。でも、アルに友達みたいなのが出来そうだし、いいのかな……？）

流衣は少し悩んだものの、結局頷いておいた。

まあ、貴族が来たとして、アルモニカがいるのならまずい事態にはならないだろう。……多分。

五十二章 初めての友達？ 2（後書き）

もっとスピーディーに行けたらいいんですが、ゆっくりじゃないと無理そうです。のんびりした気持ちでお付き合ってください。

五十二章 初めての友達？ 3

友達を作る前に、まず蛙かえるに関する誤解を解くべし。

翌朝。友人作成の指南役になったクレオの助言を受け、アルモニカはさっそく実行に移すことにした。

ホームルーム前で僅かに騒がしい教室内で、手っ取り早く隣席から攻めることにする。

「お早うございます、ホーリイさん」

「うええっ！？ おはっお早うございます！？」

隣席で鞆から教材を取り出していたホーリイは、驚いた拍子に鞆の中身を床にぶちまけた。

今までこんな風に親しげに挨拶されたことは無かった。

茶色い目を驚嘆に染め、あたふたと荷物をかき集めてから、席に座り直す。クラスメイト達もまた、違和感を覚えて二人に注目する。緊張をはらんだざわめきで教室内の空気が揺れる。

アルモニカはホーリイの拳動を見て、頭痛がしてくる思いだった。怯えられている原因は、やはりあれだ。

「つかぬことを伺いますけれど、ホーリイさん」

「なっ何でしょう。わたくしに答えられることでしたら何でも聞いて下さい！」

人の好いホーリイは、反射的にそう返す。小さな鼻に乗っている大きな丸眼鏡がずり落ちるのを、慌てて眼鏡の弦を持って支え直す。「わたくし、昨日初めて知ったのですが。なんでもわたくしに蛙にされるといふ妙な噂が立っているそうではないですか、本当ですか？」

外交モードとなって猫を被ったアルモニカは、いかにも育ちの良

いお嬢様という口ぶりで問う。

内心では、そんなへんてこな噂を流した張本人を探し出し、首根っこを引つ掴んで窓から突き落としてやりたいとすら思っていたが、顔や声には億尾も出さない。

アルモニカの質問に、教室中が静まり返った。緊張の度合いが増し、不安と恐れで皆視線を交わし合う。

「うえ、ええと、そのお……」

ホーリイは涙目になる。そうです、と肯定したいけれど、そんなことをしたら自分は蛙になってしまうのではないか？

クラスメイト達の空気とホーリイの態度から真実だと察し、アルモニカは盛大に溜息をつく。

「……はあ、そうですよ。馬鹿ではありませんの？ あなたも、あなた達もです！」

アルモニカは勢いよく立ち上がり、憤然とクラスメイト達を睨みつける。

「そんな魔法、この世に存在するわけがないでしょう！ 変身の術は竜族のみしか使えないなど、常識でしょう！ 全く、下らない！ 魔法学校に通っているはずなのに、そんな変な噂を鵜呑みにするなどと修行が足りていませんわ！」

バン！

アルモニカはテーブルを思い切り叩いた。

アルモニカの目が完全に据わっているのを見て、クラスメイト達はいっせいにビクリとする。蛙云々は抜きにしても十分に迫力があつた。

だが、誰かが安堵のため息をついたのをきっかけに、教室内は明るいざわめきに包まれる。誰も謝ったりはしなかったが、誤解が解けただけで良しとしようとアルモニカは胸中で頷く。

「そ、そうだったんですかあ。アルモニカ様って研究にのめりこんでばっかりだから、それくらい出来てもおかしくないって思ったんです。天才でも出来ないことってあるんですね！」

今までの恐怖から解放されたホーリイは、両手を組んで、それはそれは失礼なことを浮き浮きと言った。

アルモニカの頬が引きつる。

「……喧嘩売ってるんですの？」

「まさか！ そんなわけないじゃないですかあ」

慌てて両手を振るホーリイ。にこにこ嬉しげに微笑むのを、アルモニカは訝しく思う。

「どうして笑ってるんです？」

「え、だって。アルモニカ様がわたくしの名前を覚えて下さったのが嬉しくて。知らないと思ってました」

「知ってるに決まってるでしょう。クラスメイト全員の名前くらい覚えてますわよ」

この発言には、クラス中がどよっとした。

意外だ……。

誰もがそう思った。

「社交の必要な場では当然でしょう？ それに、エアリーゼに住む神官達の名前を覚えるより楽ですわ」

アルモニカは、エアリーゼに住む神官達の名前も全員把握している。入れ替わりがそれなりにある分、エアリーゼの方が大変だ。だが、将来、上に立つ者としてはそれくらいこなすのは当然だと思っている。

「そ、そうなんですか……、神官さんってたくさんいるのに、すぐくいていらつしやるんですね」

「家族の名前ですもの、すぐくなんかありません」

きっぱりと言うアルモニカに、ホーリイは初めて親近感を抱いた。神官達を家族と表現しているのが、平民であるホーリイには好意的に感じられたのだ。ホーリイも、実家である商家の従業員のことを家族のようなものだと思って接しているから。

そこで担任教師が教室に入ってきた為、会話は打ち切られてしまい、それが少し残念だった。

一方で、見事に誤解を解くのに成功したアルモニカは、これで友人作成への道のりは近くなるはずだと思い、上機嫌でこれからの学校生活に期待した。すでに取っ掛かりが出来ていることには、微塵も気付かなかつた。

*

水の曜日。

休日だった火の曜日にリビングの改装を終え、流衣は朝から機嫌が良かった。壁紙の接着剤が乾く三日程はリビングを使用出来ないが、あの真つ黒な部屋が一つ減った意味はとても大きい。もちろん精神的安息の意味で、だ。

今日の講義は二時間目からで、魔法学応用の講義だ。三年生からの選択性だという。今日も聴講するのかと思っていたら、今日は完全にアシスタントだという。教室の前の隅に椅子を置いて待機しておき、必要なら実演の手伝いをする。

「今日の講義は、先週教えた魔法陣の応用だ。簡単な明かりの魔法陣で準備運動をしてから、結界張りを行う」

流衣は椅子に座って講義するセトに視線を据えたまま、おおつと思つ。明かりの魔法陣を作ったことはないが、結界張りなら習得済みだ。

「では、まずは私が実際にしてみよう。まず、紙に円を書く。その中央に魔力入りの魔晶石まじょうせきを置く。あとは明かりの呪文を唱えるだけだ」

セトが紙にペンで円を書き、呪文を唱えると、円のすぐ上に光の玉が浮かんで一瞬で消えた。

「このように、魔法陣とは位置の固定を決定する。そして、魔晶石を置くことで、その魔力を動力として、魔力が切れるまで永続的に魔法を継続することが出来る。魔晶石は、術者の代わりというわけだ」

セトは言い、生徒達が持参している魔晶石をテーブルの上に出させ、流衣には白紙の配布を指示する。

「よし、紙は行き渡ったな？ 魔晶石の魔力の補給については、前々回に指導した通りだ。実践あるのみ、とにかくやってみなさい」セトの言葉とともに、教室のあちこちで生徒達が実演を開始する。前の方の窓際の席に座るアルモニカが見えたが、彼女はつまらなさそうにあっさりクリアした。魔法道具の発明家には目を閉じていても出来るくらいの簡単な作業だと思われる。

流衣も試すようにと紙を渡されて試してみたが、とても簡単な魔法だ。こんなに便利なのに、蝟燭や油を用いたカンテラの方が普及しているのが不思議なくらいである。流衣が安い値段の宿ばかりを選んで泊まっているのがいけないのだろうか。

応用して明かりの魔法道具のカンテラなどを思い浮かべたが、そもそも魔法を使えるのならカンテラなど持たずとも、所持品に魔法をかけた方が手に何も持たずに済んで便利だ。部屋でだってそうで、暗いなら天井に魔法をかけてしまえばいいだけである。

なるほど、簡単な魔法すら学べない一般人には明かりの魔法道具が出回らないわけだ。ということは、出回っている明かりの魔法道具は装飾品としての意味合いが大きいのだろうか？

そんなことを考えながら、明かりを消して、持っている紙を手すさびに回していると、教室の扉が開いた。

黒髪金目の黒い翼を背に生やした少年が気だるげに入室してきて、静かな足取りで教室を横切っていく。そして、後ろの席に座った。

「……………！」

あまりに自然すぎて啞然とした。獣人や亜人は人間の生徒に比べればずっと少ないから目立つというのもあるが、どう見ても見たことのある少年だったので驚いた。驚いたというものじゃない、おつたまげたくらいのレベルだ。

え、他人の空似？ 本物？ それとも悪夢？

口をパクパクさせて少年を見ていたら、セトが少年に注意する。「こら、サイモン・アーツ。一言くらい詫びを言ったらどうだ。堂々と遅刻してきおって」

うわあ、とうとう自分は耳までおかしくなったらしい。

サイモンって聞こえた。

目をこすったり耳を軽く叩いてみたりしてみる流衣。でもなかなか少年の像は消えない。

「……………」

サイモンはちらりとセトを一瞥しただけで、何も返さない。

「出席日数ギリギリしか授業に出ない、学校にいないことの方が多い。真面目に取り組んでいる他の生徒達に申し訳ないとは思わないのかね」

普段から腹にすえかねていたらしく、小言を口にするセトに、サイモンはあつさり返す。

「俺は魔力がほとんど無いから、魔法なんて学んでも無意味。学校も興味ないが、義理の父親が通えと言うから来ている。その保護者にも咎められたことはない。何故申し訳ないと思わなくてはいけない？」

教室中がざわつとする。あいつがこんなに話してるの初めて聞いた。そんな囁き声が聞こえてきた。

鋭い切り返しに言葉をつまらせるセトに、サイモンは駄目押しする。

「それに、あんたより義父の方が教え方が上手い」

あまりにもあまりな一言に、セトの顔が渋面一色になる。

すると、今度は生徒の一人が立ち上がった。

「そこまで言うのなら、退学したらどうだ？ 正直、君みたいな生徒は目ざわりなんだ」

「それは俺の成績がお前より良いからか？ オード・イザルド・アイングラフ伯爵」

少しだけ不思議そうに返すサイモン。オードの顔が怒りでだろうが、赤くなる。

「なんだと、貴様つ。私を愚弄する気か！」

声を荒げるオードに対し、サイモンは冷静そのものだ。

「その言葉の使い方は間違っている。愚弄というのは、相手を見下す言葉だ。俺はお前には興味がないから、それには該当しない」

「……………」

相手の気持ちを逆撫でする見本のような光景だ。

今にもサイモンに殴りかかりそうなオードをクラスメイト達は止める。

「よせ、オード殿」

「あいつにだけは手を出すな。みんな返り討ちにされている噂を知らんのか」

口々に止めるクラスメイト。サイモンはいつもこうなので、敵が多い。だが嫌悪した輩に喧嘩を売られても、雇ったごろつきをけしかけても、皆ことごとく返り討ちだ。生徒はまだいい。ごろつきの中には命を奪われた者もいるらしいと噂になっている。

「喧嘩を売りたいのならいつでも来るといい。闇討ちでも何でも構わない。ただし義父に手を出す気なら、一家皆殺しくらい覚悟しておけ」

とても面倒臭そうに口にされた言葉に、教室内はシーンと静まり返った。

面倒そうな態度に反し、金の目だけは不気味に光っている。それを真正面から直視してしまったオードはごくりと唾を飲み、平静を装って舌打ちする。

「もういい。貴様の相手をしていると虫酸が走る」

そう言つてオードが席に座り直すのを、クラスメイト達はほっと胸を撫で下ろして見る。

血の雨が降る事態になるのかと戦々恐々としていた流衣もまた、ほーっと息を吐いた。

(サイモン君で、あの態度が普通なんだ……)

流衣の弱気な態度が嫌いだから酷いことばかり口にするのかと思っていた。いや、それもあるだろうけど、普段から辛辣なのならそんなに気にしなくていいのかもしれない。ある意味では正直な分、心をえぐる言葉の破壊力は凄まじいけれども。サイモンと比較すれば、アルモニカの暴言が可愛く思えるくらいだ。

「ごほん。サイモンとオード、君達は後で私の研究室に来なさい」
妙な空気になったのをごまかすように咳払いをしてから、セトは切り出す。

「なっ、何故ですかオールドリッジ先生！ そいつはともかく私まで！」

「今は私の授業中だ。教師である私が注意するのは良いとしても、生徒である君が出る幕ではない。感情の制御もこの学校では学ばべき事柄だ。喧嘩をけしかけようとしたのだから、反省しなさい。そしてサイモンは遅刻したことを反省するように」

わなわなと震えつつ、黙って頷くオード。一方、サイモンはやはり興味が無さそうにセトをちらりと見た。

そして、そこでようやく流衣に気付く。

「オールドリッジ教諭、そいつ、何でここにいるんだ？」

「ん？ ああ、彼は私の新任の助手だ。ルイ・オリベという。外国人だが言葉は流暢だ。少々常識が怪しいところがあるらしいから、そこは大目に見てやってくれ」

「ふうん、助手なのか」

ひいひい。気付かれた上に視線が痛い。

流衣は顔面蒼白で引きつった頬を無理矢理動かして笑みを作り、初対面を装って頭を下げる。

「よ、よろしく願います」

ついでに、サイモンの視線がこちらを向いた途端、肩に乗るオルクス of 空気も激烈に悪くなった。イラついているのか、肩に爪が食いこんで痛い。

サイモンは返事はせず、そのままちらりと窓の外を見た。再開した授業はつつがなく進んでいったが、まさかの事態に流衣は内心穏やかではなかった。(と、とりあえず、ナイフが出てこないように気を付けよう) そう固く心に誓い、出来る限りサイモンには近づかないようにする決心を固めた。

*

セトの研究室への道すがら、流衣は首を傾げた。

何故、またもや女生徒達からお菓子を貰ったのだらう。

両腕いっぱい山になっているお菓子に、疑問が付きない。

「ルイ！」

「ん？」

教室から追いかけてきたらしいアルモニカに呼び止められ、流衣は足を止める。

「セト先生の研究室に行くのじゃろ？ 食堂までは同じ道故、ワシも共に行くぞ」

そう言っ隣に並ぶアルモニカ。ウェーブを描いた赤い髪が腰の辺りでぴよこぴよこ揺れる。

「うん」

流衣は返事をして、腕から零れ落ちかけたお菓子の包みを抱え直す。それを見たアルモニカの目に剣呑な光が浮かぶ。

「女子どもに餌付けされおって……」

「不思議だよねえ、何でお菓子くれるんだろ。もしかして、遠回しに僕にもっと太れって言ってるのかな」

幾ら食べてもひよろいままの自身を見下ろす流衣。カップケーキやクッキー程度の焼き菓子では、そこまで太らないと思うのだが。

「小さい子どもに飴をやるのと同じじゃろ。この鈍すぎ小動物めが」

何やらぷりぷりと怒っているアルモニカ。

いや、意味分らないんですけど。

「そこまで小さくないよ、ひどいなあ！ アルだって小さいじゃないかっ」

「ワシは良いんじゃない、女じゃから！」

「背が低いのは僕の民族の特徴なんだから、仕方ないじゃない！ 僕だって、兄さんみたいに背が高くなりたいのにな」

「……なんだお前、兄がいるのか？」

「うん。って、うわあっ！」

右横からの問いに、流衣はお菓子を放り出して逃げに走った。黒い翼を背にした少年が、ひっそりと立っている。

「何用じゃ、サイモン・アーツ。言っておくが、こ奴はワシの友人じゃ。ごろつきどもに相手するように、妙な手出しをするでないぞ！」

廊下の反対側の壁まで逃げた流衣に対し、アルモニカは一步前に出る。

「どうやらサイモンはアルモニカの中でも要注意人物のようで、開口一番に警告した。」

「風の姫はその口ぶりが本性か。爺みたいだな」

「うるさいわ、余計なお世話じゃ！」

キツとサイモンをねめつけるアルモニカ。こうしているとタメみたいに見えるが、アルモニカは流衣やサイモンより年下だ。恐らく、サイモンの方が入学した歳が遅かったのだろう。

「安心しろ、風の姫。そいつとは前にちよっと色々あったただけだ。特に、そのオウムとな」

流衣はオルクスを腕に抱え込んだ。

「言っとくけど、サイモン君！ オルクスに何もしないで……下さい！」

思わず敬語を付け足したのは、サイモンが怖いからだ。長い物には巻かれろって言うじゃないか。ああ、だからそんな冷たい目で見

ないでよ、アル。

「何じゃ、知り合いなのか？ また妙な輩と……」

「学校一の変人の座を射止めた変人に言われたくない」

「うるさいわっ、変人と二度も言いおつて！ 学校で一番危険視されとる輩に言われる筋合いはないわっ！」

売り言葉に買い言葉。騒々しく言い返すアルモ二カ。

すれ違つ生徒達は、恐怖の対象である男子生徒と女生徒の睨みあいにどよつく。まさかの妙な学校一の名を冠している二人に挟まれている流衣はというと、口出しする勇気がないので恐々と見守っている。

「坊ちゃん、それはわたの台詞です故つ。カラス族の子ども、坊ちゃんに迷惑をかけるようでしたら、わたがまた鼻っ柱をへし折りに行きますよ！」

小さな声であるがぎゃんぎゃんわめきたてるオルクスを、サイモンはあつさり流衣の腕から取り上げる。

「ふうん、こうしてるとただのオウムなんだな」

「失敬な！」

ばたばたと翼を振り回すが、首の後ろを掴まれているせいで動けない。それにぶち切れたオルクスは、サイモンの手のすぐ上に火の玉を出す。

「！」

熱さに思わず手を離れたのを見て、流衣はすかさずオルクスを奪い返す。

火の玉はすぐに消えたが、軽く火傷した手をひらりと振るサイモン。不機嫌になることはなく、むしろ愉快げに目を細める。

「だからオルクスに何もしないで下さいってば！ オルクス止めるのも大変なんですよ！」

「きーっ、坊ちゃん、離して下さい！ このクソガキ、ぎったんぎつたんのけちよんけちよんにっ」

「俺じゃなくてオウムを止めるって意味か。ふん」

気に食わなさそうに鼻を鳴らすサイモン。流衣はきよとんとする。「だって、オルクスに敵う人なんて見たことないから。こないだのスノウギガスくらいじゃないかな、オルクスを放り投げたの……」
「ほう。流石はオルクス様。そんなに強いのか」
「感心するアルモニカに、流衣は頷く。」

「制約を解除したら、だけどね」
「オウムのままでも強いですよ！ 勘違いしないで下さい、アルモニカ嬢！」

小声で反論するオルクスであるが、小さなオウムの姿をしているので説得力はない。

「オウム、今度、俺と手合わせしろ。こちらから出向いてやる」
サイモンはオルクスに一方的に要求を突き付ける。

「出向くって……えーと。住んでる所、教えませんよ僕！」
「調べるからいい」

恐怖の宣言をし、その場をあつさり離れていくサイモン。流衣はオルクスを抱えたままリリースする。

「何で気に入られちゃってるんだよ、オルクス……」
『申し訳ありません。わてにも分かりません。あの子どもは戦闘能力に自信を持っているようでしたから、その自信を折ってやれば坊ちゃんに関わる気を失くすだろうと踏んでいましたのに……。逆効果だったんでしょうか』

確かに、オルクスは華麗にサイモンの自信を粉碎していた気がする。何故なんだろう。もしかして、単なる戦闘好きの危ない人なんじゃ……。

想像したら怖くなったので、身震いしつつ、流衣は廊下にはらまいてしまったお菓子をせつせと拾い始める。人から貰った物だ。大事に扱わなくては。

「サイモン君のことはともかく、お菓子貰ったからお礼しに行かなきゃね……。お菓子にお菓子を返していいかなあ」

怖いことからとりあえず目を反らし、お返しについて考え始め

る流衣。そんな流衣を、アルモニカは呆れた目で見た。

「お主、肝がすわっておるのかおらぬのかどっちなんじゃ。大した奴じゃの」

五十二章 初めての友達？ 3（後書き）

こんなクラスメイトいたら怖いですね。……どっちも。
でもアルモニカだったら友達にしたら面白そうかもですね。

五十三章 悩める人達

「明かりの魔法道具が普及してない理由？ そんなん、魔晶石より油代の方が安いからに決まってる」

壁紙の接着剤が乾くまでリビングが使えないので、調理場に置いてあるテーブルで食事すべく、テーブルを濡れ布巾で拭きながらリドはあっさりと答えた。

テーブルは使用人が食事を摂る為にここに置いてあるものだ。この屋敷の元主人は趣味は最悪だが使用人には親切だったようで、使用人部屋はどこも大変使い勝手が良いようになっていた。人は見かけによらないという見本みたいだ。

「え、そんな理由なんだ」
竈でフライパンをかえしながら、流衣が僅かに振り返ってきょとりと黒い目を瞬く。

リドは朝から晩まで用務員として働いていて忙しいが、流衣は休みが多いので楽だからと食事係を買って出てくれた。共同生活に当たり揉め事が起きても困るので、それぞれ役割分担をし、自室の掃除や洗濯は各自がして、リビングや便所や風呂場などの共同スペースだけは交代で掃除することになった。あとの部屋は使わないので放置しておくことにした。ピンクの部屋なんて、そもそも近づきたくもない。

「ルイはひよいひよい作ったりしてっけど、普通は魔晶石なんて聞いたら高価で手が出ないってイメージなんだぜ。俺だって、お前が作ってるの見なきゃ、どんなのが魔晶石か分からなかったしな」

「そんなもんなんだ……」

予想外だったのか、流衣は面食らったように首を傾げている。それでも料理の手は止めないのは流石だ。

本当に、調理に關してだけは器用な男である。

掃除をしようとしてモップの先でバケツの水を引っくり返し、それに慌てるあまり転んで被害を広げていた昨日の流衣を思い出す。あれが嘘みたいだ。

眞実、調理に關することだけは冗談抜きに手際が良く、調理台や調理器具の掃除などはさらりとこなしていた。何でなんだろう。拭く作業にしたつて、台を拭くのを床を拭くのに変えるだけなのに。訳の分からん奴だ。

リドは台拭きを終わると、布巾を洗って干し、手を洗ってからパンを手に取ってナイフで切り分けていく。パンは、今日は昼上がりで帰ってこられたので、(昼上がりが週に二回と休みが一日らしい。雑用だから、イベントが無ければそんなに忙しくない方だとか)、帰りに材料を買い揃えてリドが焼いたものだ。

大麦を使った黒パンだ。小麦粉を使った白パンは高いから、庶民はもっぱら黒パンである。

カザエ村にはパン屋なんてものは存在しないので、村人は皆パンを自作する。木こりの師匠であるポロス爺さんに教えて貰ったので、リドも作れる。

あれだけ料理が上手いのに、流衣はパンを作ったことがないらしい。作り方を教えてやったら目を輝かせていた。なんでも、パンを買うことはするが、流衣の国は「コメ」が主流だから自分で焼いてまで食べる人は滅多にいないらしい。家庭で作る人は「キカイ」を使うとか。

意味の分からない単語があったが、楽しそうだったのでとりあえず頷いておいた。流衣の言う「コメ」というのは、王国南部で作られている「ゼーラ」という穀物のことだと、後から理解した。カザエ村まで逃げてくる途中で一度食べたことがあるが、あんなパサパサしているものを主食にしているなんて変わっている。

「なんだこれ？」

パンを切り分けた頃には食事の支度が済んでいたの、テーブル

につく。部屋の戸棚の上でじっとしていたオルクスが、空いている椅子の背に飛び乗る。流衣は衛生面にうるさく、料理中はオウムであるオルクスが側にいるのを許さないのだ。お陰で、流衣が料理をすると言い出すとオルクスが不機嫌になる。普段がオルクスに甘すぎるから、ちようどいいんじゃないかとリドは思うが。

「なにつて、パスタだけど？」

首を僅かに傾げる流衣。

「パスタっていうのか？ 初めて見たな……」

蛇がのたうつてるみたいでちよつとだけ不気味だ。

「そっいやパスタってここじゃ見たことないね。小麦粉をこねて作るんだけど、手打ちだからちよつと不格好だけどおいしいよ。キノコと野菜と麺を混ぜてハーブで味付けしてみたんだ」

「へえ……」

黄色っぽい細長い食べ物をまじまじと見る。まあ、きつと美味いだろう。流衣の料理は見たことが無いものも多いが、味は美味い。その辺の食堂にも出せそうなくらいだ。しかも見た目が綺麗なものが多い。

リドの料理は、大きく切った野菜を入れたごつた煮だとか、焼いた肉とスープとパンとか、そういうものが多いから、よくもまあ見た目にこだわれるものだと毎度感心する。食べれて美味しければ問題なし、という、大雑把なところがあつたりする。

（しっかしこいつ、前から思ってたけど生まれてくる性別間違えたよな……）

にこにこ穏やかに微笑んでいる流衣を見て、内心で可哀想に思う。

本人は背が低いのを気にしているし、もし女だったら気にしなくて良かっただろうにと思う。たくさん食べれば背が伸びるかもとガツガツ食べる割に全然なのが、同じ男としては同情してしまう。

急に不憫になってきたので、意識を反らし、パスタとやらを食べしてみる。つるつとした感触が不思議で、美味しい。

そう言ったら、とても嬉しそうに微笑んだ。

流衣は一見すると地味だし、普通の少年なのだが、そうやって笑っているのと周りを和ませるところがある。今のところ、くつろいだ表情を見せるのは、自分やデイルやオルクス、それからアルモニカという時くらいか。若干人見知りするらしく、外では微妙に緊張しているし、苦笑や引きつった笑顔が多い気がする。

友人つていうのは良いもんだ。共に行動していても気軽にいられるし、親しみのこもった態度を見ているとこっちも気が安らぐ。

思い返せば、ボロス爺さん以降で初めてだ。こんなに長時間共に行動した他人は。

リドは気ままな性格をしているから一人で行動する方が楽なところがあつて、一匹狼になりがちだ。色々としつこい態度を取らない流衣とは馬が合う。たまーに協調性について注意される時があるが、仕方が無いと思っっているみたいで一言言ったらもう何も言わない。流衣だけではない、デイルもそうだ。あいつも呆れたようにしているだけで、あまり口は挟まない。まあデイルの場合は口下手だから説明出来ないだけなんだろうが。更に付け足すと、オルクスは主人である流衣第一でリドのことなど眼中に無いから何も言わない。たまに喧嘩を売ってくるくらいだ。うん、そう考えてみるとこのメンパーは良い。リドには物凄く気が楽な組み合わせだ。

「リド、用務員の仕事どう？ 順調そう？」

「ああ、まあな」

リドは流衣にそう返し、用務員の仕事の初日のことを思い返した。用務員はすでに二人いた。仕事場に赴いて自己紹介しあつて軽く説明を受けた後、二人にしごきという名の洗礼を受けた。軽くオーバーク並の仕事を次から次へと頼まれて、それを片付けるだけではあるが、敷地内が広いので移動だけで大変だった。

まあそこは意地と若さからの体力で乗り切った。エアリーゼで見習い神官をしていたお陰で雑用には慣れていたし、風の神殿の敷地も魔法学校並に広がったから、走り回るのは苦ではない。働くのも

好きだ。ただ、神殿と違って貴族や金持ちの子息がうるついでいるので、目に付かないように気を付けなくてはいけないのが厄介だった。それにリドは朝に弱いので、早起きなのが辛い。

とはいえ、先輩用務員のジョットは気安い性格をした恰幅な中年の男で付き合いやすそうだったし、何かと嫌味っぽいリセという青年も無視していれば特に問題はない。

偏屈で頑固で扱いづらいので有名ならしい庭師のクルトという老人とも打ち解けた。

職場の人間や食堂の給仕や貴族が連れている侍女や侍従なんかはクルトを苦手に行っているらしく、庭師に関連する仕事を集中的に丸投げされたけれど、リドはクルトには最初から好意的だった。ポロス爺さんの印象が強いせいかもしれない。ポロス爺さんは人は良いが無愛想だったから、クルトが無口で常にしかめ面をしていて愛想が欠片もなくとも（我ながら酷い言いようだ）、リドは全く気にならない。仕事に対する誇りが強いから、そこを傷つけないようにすればいいだけだ。職人を相手にしていると思えばいい。

仕事としては順調だ。間違いない。

リドはうんうんと頷く。

「僕の方は、まだ顔合わせ程度だなあ。まだ取っ掛かりまではいかないや」

何を思い出したのか、憂鬱そうに溜息を吐く流衣。その隣でも、何かを思い出したらしいオルクスが不機嫌そうに黄緑色の身体を膨らませた。小さいフクロウみたいで笑える。

「俺の方もまだだな。建物の修理に、屋根の雪下ろしだろ、それから貴族様の猫探し……。はあ、猫逃がしすぎだったの。一日に一度は探しに行くってどういうことだよ」

やれやれと肩を落とす。

これがまたデブ猫だから重いなのなんの。何で木に登るかな。下りられなくなるのくらい、すぐ分かるだろうに、あのアホ猫め。

胸中で猫を散々にこきおろす。

“ヨハンナ様の猫”らしい。嫌でも名前を覚えた。

「長期戦でいかねえと無理だろ。余所者が馴染むつてのは大変なんだぜ？」

「そうだね、そう思う。でも、被害者が増える前に手掛かり掴まないと……」

僅かに眉を寄せ、じっとテーブルの盤面を見つめる流衣。

「焦っても失敗するだけだ。貴族の巢窟だぜ？ 気を付けないと、平民の俺らの身が危なくなる」

リドはそのことが引つ掛かっていた。魔法学校の敷地内では身分差別をしないことが絶対ルールになっているが、門から出てしまえばアウトなのだ。もし魔力増幅剤まりよくぞつうくさいを回しているのが貴族だった場合、敵視されれば厄介なことになりかねない。貴族は侮辱罪を主張して牢屋に放り込むことだつて容易いのだ。その相手が平民なら尚更だ。

しかも、流衣は故郷に身分制度が無いせい、今一その辺の危険性を理解していないので、こちらとしては冷や汗ものだ。

「それって……、暗殺の危険があるってこと？」

「やろうと思えばそれくらいするだろ。俺達は旅人だから、始末したつて問題無いって思われる可能性がある」

「そんなに危険なんだ……。セトさんの研究の高さがやつと分かった気がする」

神妙な顔でまた考え込む流衣。

二人とも食事の手が止まっていた。

「俺達は竜の巢穴ういふちに飛び込んでるようなもんなんだ。そのところをちゃんと分かつつた方がいい」

「ふふ、校長先生は竜だから、まさにその通りだね」

軽い冗談を口にして、流衣は笑いを零す。が、すぐに真面目な顔に戻った。

「僕はまだセトさんの助手だから身分が保障されてるみたいだけど、リドは使用人としているんだから気を付けてね」

またこいつは、自分より他人のことを心配している。

「俺は上手く立ち回るから平気だよ」

わざと軽い調子で言うが、流衣は少し心配そうにした後、頷いた。そして、溜息を吐く。

「まあ、問題は貴族よりあの人なんだけど……」

「あの人？」

「うーん、嫌な予感がするんだよなあ。はあ」

悪寒でも感じたように身震いをし、深い溜息を零す。

しかし流衣はリドの疑問をこめた視線には答えず、傍らのオルクスに声をかける。

「……頑張ろうね、オルクス」

「お任せ下さい、坊ちゃん！ いざとなったらわてがあくのクソガキをぎったぎたにしてやりますから！」

「流血沙汰はやめようね」

「では殴るのにとどめます！」

オルクスが何か不吉なことを言い放っている。

何があったのか知らないが、流衣は苦笑するばかりで何も言わなかった。

（俺も嫌な予感がしてきたんだが……）

こいつが隠すのだ、碌ろくでもない事情があるに違いない。

リドは眉間に皺を刻んだ。

*

「まずい。まずい。まずすぎる……!!」

同日、夜も更けかかった時刻、アカデミアタウンのある屋敷では、短い銀髪と水色の目をした美しい少女が乗馬服姿で頭を抱えてうろつろと歩き回っていた。

「なんなの、もう。また不埒ふらちだのなんだの言って死ぬとか騒ぎだすんじゃないでしょうね？」

リビングの長椅子に腰かけたりリエが煩わしげな視線を向けると、

呪いで少女になってしまっている実は少年は頷いた。

「それも良いですね。やはり死にたくなくなってきました……」

そう言っただ真面目な顔で、テーブルの上のペーパーナイフを見つめ出すので、リリエは慌てて手紙とペーパーナイフを回収する。

女の身体になってしまっただけからというものの、デイルは事あるごとに自殺未遂騒動を起こしていたのだ。自殺未遂というか、思いつめた顔で抜き身の短剣をじっと見つめているという不気味な行動なのだ。勿論、実行されては困るので短剣は取り上げたし、刃物類は全て回収した。

最初の頃など、手洗いや風呂や着替えのたびに青い顔をしていた。なんでも、自分の身体なのにいかがわしい真似をしているような気がして、騎士失格だから生きていく資格がないとまで思考が傾いてしまっらしい。最近では不本意ながら慣れてきたようで、短剣騒動は無くなっただけだ。

代わりに、女になってから筋力が落ちたと言っただけ、今まで以上に鍛練に身を注いでいる。

「ちょっともう、落ち着きなさいよ。なあに、学校がそんなに嫌なの？ イザベラ嬢と一緒にいられて良いじゃない」

デイルはキツと師匠をねめつける。ちょっと涙目だ。

「良くありません！ ああ、よりによってイザベラ殿にこんな情けない姿を見られるなど……。婚約解消を言い渡されたら師匠のせいですから！ そうしたら一生恨みます！」

「何であたしが恨まれるのよ？ あんたに呪いをかけた魔法使いを恨みなさいよね」

リリエはそう返すが、デイルはその場にしゃがみこんで自己嫌悪に浸っている。

「うつつ、最悪だ。生きてきて最も最悪な事態だ。何故、好いている女性にこんな無様な姿をさらさなくてはいけないのだ……。私がいったい何をしたっていうんだらう。愛と慈悲の女神ツィール力様、これはもしかああなたが授けた試練なのか？」

ぶつぶつと呟きだしたデイルが流石に可哀想になったが、同時に鬱陶しかった。ちよつと性別が変わったくらいでくだくだと……！一年もこのままなのだから落ち込んで当然なのだが、さっぱりした性格をしているリリエはぐずぐずと悩んでいる輩が嫌いだ。イライラと問う。

「それで、何がそんなにまずいわけ？」

「まずいに決まってるでしょう！ ルイがオールドリッジ先生の新任助手になったんです！ 幸い私にも殿下にも気付きませんでした……。ルイがいるということは、どこかにリドもいるはずですよ！ あの飄々としていて実は心配性な輩が、不安の固まりみたいなルイを放置しているわけがない……！」

「あら、あの子が。面白いことになったわね」

リリエはころころと笑う。楽しいことが大好きなのだ。

リリエ達はアカデミアタウンに潜伏していた。ここには女王が懇意にしている貴族の別荘があつたし、木を隠すには森の中ということとで、少年を隠すなら学校だろうと考えた結果だった。まさか身を隠している王弟殿下が学校に通つているとは誰も思うまい。新入生として入った方が目立たない為、デイルとヴィンスは一年に在席している。デイルがいるのは勿論護衛の為だ。

それに、リリエはスノウリード校長とは顔見知りでもあつた。彼女はシャノン公爵家に恩を売るのも悪くないと、慈悲で入学を認めてくれた上、ヴィンスもデイルも身体が弱いということにして寮ではなく自宅からの通学を認めてくれた。生徒は寮に入るのが原則であつたから、かなり融通をきかせてくれたことになる。

事が片付いたら多額の寄付金を宜しくね。にっこり笑顔で言っていたが、事態が好転すれば金など幾らでも払うだろう。ヴィンスが「最悪だ。リドにこの姿を見られたら、奴は絶対に笑うに決まってる。うっ……想像するだけで屈辱だ！」

さつきからうめいているのはそのせいらしい。

「ルイに見られるのはいいの？」

「彼が笑うわけないでしょう！ ああ、ルイが女と間違われるのを嫌がるのがよく分かった。これは確かに屈辱だ」

「間違われるっていうか、女じゃない」

「私は男なんです！」

盛大に反論するデイル。

「また言い争っているのですか？」

扉が開き、白っぽい金髪と青紫色の少年　ヴィンセント・クロ
デイクス・シャノンが現れた。薄茶の地味な服装で纏めているが、
ヴィンスが着ている為に安っぽい品ですら高級品のように見えた。

「殿下！」

デイルはさつとその場に片膝をつく。リリエもまた膝をついた。
それにヴィンスは微笑を浮かべる。

「楽にして下さい。今、ここでは私達は家族という設定なのですから、その態度はおかしいでしょう？」

「はっ、申し訳ありません。条件反射で動いてしまいました。では失礼させて頂きます」

デイルは堅苦しく言って、立ち上がる。リリエもすつと立ち上がった。

「殿下、どうかされたのですか？」

「いえ……、一人でいるとどうしようもないことばかり考えてしまいますので、あなた方と話したかったのです。もしや師弟の団だんらんのお邪魔でしたか？」

申し訳なさそうに小首を傾げるヴィンスを、リリエはどうしようもなく抱きしめたい衝動に駆られた。

なんていじらしい王子様！　いえ、元王子様！

そんな可愛らしいことを言われて断る臣下がいますでしょうか。

「いいえ！　むしろ助かりましたわ。この子ったらいいじいじくじいじくじ煩わしくって……」

「……酷いです、師匠」

うらめしげな声が横でしたが、無視だ、無視。

「ささ、こちらへどうぞ。お茶を運ばせますわ」

リリエは上機嫌に微笑んで、呼び鈴を鳴らして侍女を呼び、茶の用意を言いつける。

そしてヴィンスを長椅子に案内し、自分も対岸に座り直す。侍女はすぐに茶を運んできて、茶菓子もローテーブルに置くと一礼して退室していった。

ヴィンスはデイルが悩んでいる話を聞き、くすりと笑った。

「そんなに心配せずとも、言わなければ分かりませんよ。ダイナ嬢」
「殿下……面白がっておられますね？」

リリエの隣に座ったデイルはじとつとヴィンスを半眼で見やる。学校でのデイルの名は「ダイナ」へと変わっていた。正式にはダイナ・エディアルド・サーデイ男爵だ。ヴィンスの方は、ヴィル・オースティン・ヘルマン子爵である。ヘルマン家もサーデイ家も実在しているが、小さな家柄な上に辺境領の貴族なのであまり名は知られていない。リリエを介して許可もとつてあるから、万が一の時は誤魔化しが効くようになっていた。

デイルの問いには答えず、ふふつと小さく微笑んで、ヴィンスは更に口を開く。

「それにしても、彼が助手として現れた時は驚きました。授業後のこともです。彼は女性にとてももてるのですね」

「まあ、そうなんですの？ 意外ですわ」

「ええ。菓子の包みをたくさん渡されて、可愛らしいと囁かれておりましたよ」

「……それは、もてることになるんでしょうか？」

胡乱な顔をするリリエ。まあ、確かにあの頼りない感じは母性をくすぐられるところはあったが……。菓子を渡されるなど、完全に子ども扱いではないか。

「あと三年もすれば、真実になりますよ。彼はとても善い人間です。人間性はとても出来ていると思いますから、優良物件なのではないでしょうか。少々臆病なところがありますが、慎重なのは良いこと

です」

にっこりと微笑むヴィンス。

彼はおっとりとしているが、観察眼にとっても優れていた。前に共に旅をしたことで、流衣達三人の人となりをしつかり把握済みだ。

「リドだつてそうです。友人が苦痛にしていることで笑うような方ではないと思いますよ?」

やんわりと取り成され、デイルは頬を赤くする。ちょっとでも疑ったことを、内心でリドに謝る。

「まあ、少し面白がるかもしれないかもしれませんけれど?」

くすつと付け足された言葉に、またデイルはじつとりとヴィンスを見る。

「やはり面白がつてませんか?」

「まさか。他人事だから楽しいだなんて思ってませんよ? それに女装させられた時に逃げたことを遠回しに責めているわけでもありません」

「……あの時は申し訳ありませんでした」

どうやら移動劇団に紛れる際に女装させられたことを根に持っていたらしい。デイルは即座に謝った。

「ええっ、殿下つてば女装されたんですか? 見たかったです。御可愛らしかったのでしょうね」

リリエが手を組んでうつとりと言う。

「頼まれてもしませんからね。似合うなどと言われても嬉しくありません」

「あら、勿体ない。このまま禁断の扉を開かれても構いませんよ?」

「……………。絶対に開きませんから安心して下さい」

ヴィンスは若干目元を引きつらせた。リリエが冗談に見えて実は真面目に言っていることに気付いたからだ。

「まあともかく、出来るだけばねないように気を付けましょう。慣れても、味方に引き込めれば良いだけです。カイゼル伯爵がいるのです、彼はこちら側につくと思いますよ」

「そうですね……。とはいえ、ルイが元気そうで良かったです。一体どれくらいで回復したのでしょうか。私がエアリーゼを出した時はまだ昏睡状態でしたから……」

「そういえば、前に会った時より痩せていたように思いますね。大怪我をしたと聞いていますが、怪我の具合はどうなんでしょう」

「怪我の方はグレッツェン卿が治して下さいましたから、大丈夫ですよ。左手の焼き印だけです、治らなかつたのは……」

「相変わらず、ネルソフはやることがえげつない……。しかし彼は生きているし、ネルソフのアジトの一つを大破させたのですから、大した人です。あんなに無害そうなのに、意外にやるのが大きいですね。やはり大人しそうな方を怒らせると怖いというのは本当なのですわね」

しみじみと頷くヴィンスに、デイルは苦笑いをする。

「いやあ、私はリドの方が恐ろしかったですよ。一度睨まれてみると分かります。影の塔を出た後は特に機嫌が悪くて……。奴があまりに怒るので、私は怒る気がそがれてしまいました」

あの時期を思い出して、デイルは溜息を零す。リドが怒ると風の精霊が同調して風が巻き起こるので、とても分かりやすかった。その度、頭を冷やすと言って外に出ていくリドを見ていてひどくやるせない気持ちになったのを思い出す。自分は友人一人慰める言葉を持たないのだと、無力さに苛まれたものだ。

「まあまあ二人とも、陰気臭い話はそこまでにして、お茶を楽しみましょう?」

リリエは笑顔で話に割って入る。

二人とも根が真面目だから、場が暗くなりがちだ。

「そうですね」

「ええ」

リリエの取り成しに、二人は表情を改め、茶を楽しむ姿勢に切り替えた。

五十四章 八つ当たりと再会 1

木の曜日。

今日のセトの講義は「魔法学？ 研究」という題目で、主にセトの研究している部分についての講義だ。物質召喚を含めた召喚魔法や、転移魔法についてである。二年生以上の選択科目で、ほとんどが年下でちらちらと年上の生徒が見られる教室だった。セトは初日みたいに教科書をくれて、聴講するようにと流衣に言いつけた。

授業を受けた後くらいに、ふと気付いた。セトの助手だから身分差別の弊害にあっていないけれど、完全に差別されている、と。そう、完全に格下に見られているのだ。

あれ、友達作るの無理じゃないか？

友達とは、同等の位置に立って初めてそう呼べるのだから、格下や年下扱いでは友達にはなれないと思うのだ。

流衣はへこんだが、繋がりさえ出来ればいいのだからと気持ちを切り替えた。

心の中で涙を流しつつ、その日は平穩に過ぎていったが、放課後にとうとう厄介事に出くわした。アカデミアタウンのメインストリートを、ゴーストハウスへ向けて歩いていた時だ。

(なんで僕が絡まれてるんだろ……)

流衣はやりきれない気分で、内心で溜息を吐く。

こないだ、セトの授業中にサイモンを目の敵にしていたオードという少年貴族が、手下っぽい少年二人を連れて立ちはだかっている。そして、流衣を敵意をたっぷりこめた薄灰色の目で、静かに睨んでいた。少年二人も怖い顔をしている。

これを厄介事と呼ばずしてどうする。

「助手、貴様サイモンと親しいらしいな」

「いやあ、別に親しくは……」

首と手を振って否定する。親しくはない。むしろ暴言を言われたり脅しをかけられたりしている仲だ。仲というのも妙だが。

「あいつがわざわざ話しかけた生徒は、助手、貴様くらいだ」

「いえ、僕は生徒じゃないですよ……？」

「元から知り合いか？」

……聞いてないですよ。はい。

廊下で一悶着起きてから、あちこちで恨みを買っていきそうなサイモンのことに巻き込まれそうな気はしていた。サイモンが冗談みたいに強いのに対し、流衣はいかにも簡単に一捻り出来そうな気弱な人間だ。サイモンに恨みがある場合、その知り合いがそんなだったら絶対にそつちを狙って憂さ晴らしをするに決まってる。

『このガキ、煩わしいですね』

そして、サイモンのことでイライラしがちなオルクスがぼそりと呟く。不穏な声が流衣の頭の中に響き、一瞬、びくっと肩を揺らす。怖いので、どすの効いた声で呟くのはやめて欲しい。

「オード様が質問されてるんだ、とつとと答える、平民」

背後の手下つばい少年の促しに、ううつと身を縮める流衣。険のこもった目付きが怖い。

内心、逃げたくてたまらなかったが、ここで逃げるのはあからさまに不審だし、もしかするとリドが気を付けるように言ってた“不敬罪”というのになるかもしれない。

「元から知り合いというか、えーと、十日くらい前に旅先でちょっと……。あ、僕はセトさんに会いたくて旅してたので」

「貴様の事情に興味はない。余計なことを話すな」

「……………」

なんとなく、そう言われそうな気はしたが、そこまでばつさり切らなくても。説明を丁寧につけ足してしまうのは、流衣の性さがのよう

なものである。例え相手が苦手な人間だろうと、つい親切心が働いてしまうというか。

「だから知り合いですけど親しくはないですよ！ 嫌われてる自信あります！」

流衣は右の拳を握りしめ、力説する。

「弱い奴嫌いつて言っていましたし、ム力つくから殺そうかなって脅迫されたこともありますし！ ねえ、嫌われてるでしょう！」

どうだとばかりに言い放つと、オード達三人は哀れなものを見る目で流衣を見た。

「貴様……」

「？」

「……いや」

が、それは数秒のことで、すぐに冷たい顔に戻るオード。

「貴様が嫌われてようが実際どうでもいい」

「……え？」

「つまり、あいつの知り合いとだけ分かればいいのだ。サイモンに、あいつが関わると、関わった人間に災いが起きると示せればそれでいい」

流衣はきよとんとする。

なんだかとても嫌な流れな気がする。

というわけで、内心冷や汗をかきつつ、にっこり笑う。聞かなかったことにして逃げよう。

「ああ、すみません。そういうえば僕、これから約束がありました。人を待たせているので、先に失礼しますね」

この場合での「人」を「先生」に置き換えて言うと、たいてい虐めっ子は諦める。直後に教師と会う人間に怪我を負わせては、いらぬ勘繰りを受ける可能性があるし、流衣はとても気弱だからすぐに暴露すると思っらしいのだ。

ぺこりと礼をし、笑顔を張りつけたまま踵を返す。そのまま逃亡する気で走りだそうとしたが、そうは問屋が卸さなかった。右肩を

がっしり掴まれて足が止まる。

(ひっ)

振り返りたくなかったが、恐る恐る振り返る。

オードの手下らしき少年達のうちの一人、十五歳くらいにしてはがっしりした体格の少年と目が合う。流衣がへらりと無理に笑うと、少年も笑った。にやりと強気に。

次の瞬間、少年が右の拳を思い切り振りかぶった。

殴られる！

流衣はとっさにその場にしゃがんだ。空気を切る音がして頭上を拳が通過する。

雪の積もった地面についた流衣の左手、その甲にある焼き印の痕が視線をかすめた。瞬間、ネルソフの影飼いのことを思い出す。あれとは違うけれど、同じ暴力の気配を感じてぞくつとする。

頭の中が真っ白になり、怖さと混乱でとっさに杖を振り回して少年の足をすくい上げるように払ってしまった。

思わぬ反撃に路面に転がる少年。

どさりという鈍い音にハッとした時には、三人の雰囲気は劣悪なものになっていた。

「野郎、平民のくせに……っ」

もう一人の手下らしき少年のうなるような声に、流衣は立ち上がって脱兎の勢いで逃げだす。

ここにおいても流衣には良いことはない。

怖い。怖い。怖い。

またあんな風になるのは嫌だ。

体が傷つくのは勿論だが、それ以上に、心をへし折られるあの感覚は、もう二度と御免だ。

無我夢中で適当な路地に飛びこんで走る。前にも似たようなことがあった気がしたけれど、すぐに意識から掻き消えた。さつき流衣に転がされた方の少年が、「逃げるな！」と怒鳴りながら追いかけてくるのに気付いたので。

逃げるなど言われて逃げるのをやめるわけがない。追いつかれたが最後、サイモンに関わった者として見せしめにされるんだろうと予想が簡単につく。好きで関わったわけではないのに。嫌な予感の中だ。こういう勘は当たらなくていい。

「！！！」

オルクスが何か呼びかけているが、ひどく混乱しているせいで理解出来ない。

アカデミアタウンの町は広いが、民家の多い区画を抜けたら貴族の別荘が林立する区画になる。逃げ回るには民家の多い雑多な路地を縦横無尽に駆け回ればいいが、別荘の区画はいけない。敷地面積が広いので、路地に飛びこむ前に距離を縮められてしまう。

が、あいにくと流衣はそんなに冷静な状態でもなかったから、運悪く別荘区画に飛びこんでしまった。

まずいと思った時には、後方から飛んできた水の塊が背中に直撃し、勢いに押されて左側の塀にぶつかって転んだ。

カラン

杖が石畳の地面に転がって高い音をたてる。

「やっと止まったか……げほっ……ね、鼠みたいに逃げ足は、速い奴……っ」

ぜえぜえげほげほ言いながら、少年は膝に手をついて肩で息をしている。貴族だし、普段はそんなに走らないのかもしれない。

緊張感に欠ける光景だったが、追っかけられている方としては“鬼”がそこにいるわけで。流衣は壁を背にして彫像みたいに凍りついて、少年の一挙手一投足を凝視する。

「なんだって全くサイモンなんて悪魔野郎と知り合いなんだか知らねえが、オード様に目えつけられたのが運の尽きだな。助手」

どうにかこうにか息を整えた少年は、強面の顔に笑みを浮かべる。ああ、殴られるんだろうな。それは嫌だ。痛いし。

流衣は虐めっ子みたいな人間から逃げるのだけは得意なのだが、それでも逃げ切れない時は数発殴られるのは覚悟しなくてはいいけな

い。そういう輩はたいてい憂さ晴らしをしたいだけだから。

だんだん諦めの境地に傾いていく。

殴る気満々らしい少年は、右手の拳を左手の平に押し当てて拳を固める動作をしている。

が、少年は足を止めた。

流衣の肩から飛び立ったオルクスが、牽制するように流衣の前に立ったのだ。

「なんだあ、このオウム。守護騎士のつもりか？」

『うるさいですよ、クソガキ！ わての雷撃をくらうが……』

「うごうっ！」

オルクスの台詞が終わる前に、空から降ってきた白い固まりが少年の頭を直撃し、少年はその場に倒れた。

「いてえ。な、なんだ……っ」

流衣もオルクスもきよとんと目を瞬く。

真つ白い鱗(うろこ)を持った体長七十センチ程の小さな竜が、憤然と少年の後ろ頭を地面に押し付けていた。

「ピギヤ！ ギャピ！」

「いでで、いでで、やめっ」

これでもか！ この野郎！ とでも言わんばかりに、前足や後ろ脚でげしげしと少年を踏みつける。それなりに重量があるのか、身動き出来ない少年はじたじたと悲鳴に近い声を上げて暴れている。

そこへ、路地の奥から新たな人間が現れる。

「ノエル！ 何をしている、よせ！」

「ギユピイツ」

「やめなさいって言うてるだろう！ やーめーろー！」

少年の頭にしがみついて離れない白い竜を、現れた少女が竜の両脇を両手で掴んで力ずくで引っ張って引きはがす。

竜はじたじたと少女の手の中で暴れ、よろよろと身を起こした少年に向けて、パカッと口を開ける。

ゴオオオ！

口から深紅の炎が吐き出された。

「ひっ……！ うわ……わ……。うわああああ！！！」

怪我はしなかったが、顔ギリギリで炎を吐かれた少年は凍りつき、這いずるようにして竜から距離を取ると、悲鳴を上げて元来た道を逃げ帰っていった。

「こら！ お前という奴は、一般人になんて真似をしているのだ！ そんなことでは将来立派な騎士にはなれないぞ！」

短い銀髪に水色の目をした涼しげな容貌をした十代後半くらいの少女は、竜の頭に拳骨を振り下ろし、くどくどと説教をする。

竜は耳と尻尾をだらんと下げ、目に見えてしょんぼりする。

「ピギヤア……」

竜に騎士も何もないだろう。だが、そこで突っ込む者はいなかった。

流衣は唾然としていたし、オルクスは白い竜をまじまじと観察していた。

「……む。君、大丈夫か？ その様子だと、さっきの悪そうな者に追われていたのだな。ということはノエル、君は手柄を立てたことになる。前言撤回、よくやった！」

「ピギヤア！」

鉄拳を加えた頭を少女が申し訳なさそうに撫でると、褒められて機嫌を直した竜は元気良く返事をした。

流衣は少女をまじまじと見つめる。銀髪、水色の目、真っ白い肌に左目の下の泣きぼくろ、そして乗馬服を身に纏った凛々しい容姿。胸があることと襟元を飾るダークレッドのリボンを付けて女らしさがあること以外は、記憶にある友人の姿にとても似ていた。キリリとした空気もまた。

「……あの、君、デイル……」

「へ」

少女は流衣を見て驚いた顔をし、そのまま顔を引きつらせる。

「……の、親戚の方ですか？」

「……………は？」

流衣の問いに、少女はぽかんとする。

「え？」

問い返す少女に、流衣は顔を赤らめて慌てて首を振る。

「あ、すいません！ 友達にあんまり似てるから。竜を連れてて、しかも名前もノエルで一緒だから驚いてしまつて」

「照れ隠しに立ち上がる。さっき水を被つたせいで、髪や服からぼたぼたと水の雫が落ちたが気にしない。」

「すごいですね。他人の空似って本当にあるんだなつて思いました」

「あ……………いや……………ははははは」

何故か視線をあちこち彷徨わせ、最後には困つたように引きつり笑いをする少女。

「違います、坊ちゃん。“彼”で合ってます」

「……………え？」

声に出してはつきりと言うオルクスを、流衣はじつと見下ろす。

「何言つてるの、オルクス。どう見ても女の子じゃない」

「わては嘘をつけません。つまりこれが真実。そのの娘は、ディルクラウド・レシム・カイゼル本人です。ノエルも同じく」

「……………ディ、ル？」

流衣はぎこちなくディルの名を呼び、少女を見ながら首を傾げる。少女は思い切り目を反らした。

「え？ 本当にディルなの？」

「……………」

沈黙が降りた。

流衣は困りきつて、どうやら本人らしきディルそっくりな少女を見て、そういうことかと合点する。それなら、ディルも気まずがるう。やがて、流衣は気持ちを奮いたたせ、必死に言い募る。

「あの、えと、僕はその、気にしないよ！ うん！ ……その、ディルに女装の趣味があるなんてこと。しゅ、趣味ってほら、人それ

ぞれだし！ 個性って大事だよね！！」

力いっぱい言い切った後、そろりと反応を伺うと、何やらフリーズしている少女がいた。腕に抱えられた竜は首を傾げて少女を見上げている。

「？」

奇妙な沈黙に包まれた場に流衣は戸惑った。

……あれ？

おかしいと思った時、少女はにっこりと微笑んだ。が、その微笑みに反し、周囲に冷気が立ちこめたような錯覚を覚える。

「……ルイ。ちょっとついて来い。心ゆくまで語り合おうではないか」

その背後に般若が見えた気がするのには、気のせいだと信じたい。

五十四章 八つ当たりと再会 2

デイルが滞在しているという屋敷に連れてこられるや、ずぶ濡れだからと着替えるように言われ、きよとんとしていたうちに侍従の青年に案内されて別室で着替えることになった。ついでに風呂に入るようにも言われた。着替えやあまつさえ風呂まで手伝おうとする侍従の申し出を必死に断り、一人でこなしたのは言うまでもない。着替えは何となく分かるが、風呂の手伝いつて何だ。何を手伝うんだ。貴族って意味不明だ。

とりあえず、生成り色きなのシャツと紺色の上着、黒いズボンを貸してもらったので、それを着ている。更に、革紐をブローチで留めたみたいな飾りを首から提げている。こういうの何て言うんだっけ。よく古風で落ち着いた西洋被れのお爺さんがつけていたりする……。流衣の通うアザミ中学でも、老齡の教師がワンポイントで暗い色合いの天然石で飾った首飾りをしていた。ここではタイをしたりこういう首飾りをするのが貴族では普通みたいだ。流衣は貴族ではないと断ったが、客人だから、だそうである。

着替えた流衣を見て、侍従の青年はなんだかとっても満足そうに頷いていた。なんなんだ。

「デイル様、お客様をお連れしました」

案内された部屋の前で侍従が部屋をノックして言うと、中から返事がして部屋に通される。

黄色と緑の壁紙、高い天井、飾り棚の上の花を生けた花瓶や絵、広い室内の真ん中に置かれた長椅子とテーブル。スペースの無駄遣いじゃないかと思うくらい使い方をした貴族らしい部屋だ。居間だろうか、それとも客室？

長椅子は、二人掛けのものが二つと、一人掛けが二つあり、二人

掛けのものにそれぞれ対面するようにリリエとディルが座っていた。
「久しぶり。あら、なかなか見違えたじゃないの」

振り返ったりリリエは好意的な笑みを浮かべて挨拶した後、軽く目を見開いた。

「そうですね？　こんな質の良さそうな服、僕にはハードルが高いと思うんですけど……」

ちよつと落ち着かなくて、無意識に首飾りを手で引っ張ってしまった。

「いえいえ、そんなことはありませんよ、お客様。とてもお似合いです」

「あら、エイクが褒めるなんて珍しいじゃない。まあ似合ってるのは確かね。そのままだったら貴族でもいけるわよ」

リリエが片目をパチンとつぶる。

侍従の青年の名はエイクというらしい。柔らかかそうな茶色い短髪と濃い茶色の目をした、長身の好青年だ。中性的な顔立ちで、佇まいは静か。何をしても動作にそつがない。

「そいつ、私の部下なのよ。今はカモフラージュで侍従してるけど、下位とはいえ誇りある部類の方の貴族だからなかなか評価に厳しいのよねえ。私もときどき手を焼いてるわ」

「将軍がすっかりして下されば何も言いません。あ、そういえば未処理の書類が……」

「ああと！　もう下がっていいわよ」

ひらひらつと慌てて手を振るリリエ。侍従は少しだけ威圧をこめて笑う。

「はい。後でお持ち致します」

そして一礼し、退室していった。ちつと舌打ちするリリエ。

……うわあ。すごいものを見てしまった。

流衣は僅かにリリエから視線を反らした。

「流石、エイク副団長は師匠の扱いを心得てますね」

「ああ？　扱って何よ、あんた」

「すみません！」

ぎろりとリリエに睨まれ、ディルがすかさず謝る。

流衣は目を瞬く。

「え？ 副団長ですか？」

今の人が、近衛騎士団の副団長……？？

リリエはけらけらと手を振る。

「だいじょーぶよー。あいつ、私とは幼馴染だから。貧乏貴族だから、平民とも親しいってわけ。いいから、そんなところで突っ立つてないでここに来て座りなさい」

「あ、はい」

流衣はあいている一人掛けの椅子に座る。肩に乗っているオルクスは、椅子の背もたれの上に移動した。

「団長と副団長がここにいていいんですか……？」

ふと気になって問う。

リリエは頷く。

「いいわよお。だって、女王陛下のいない王城にいたって仕方ないし、帰ったら女王派筆頭の私は見せしめに処刑されちゃうでしょうし。殿下を連れて逃亡生活中なのよ」

あんまり軽く言うので反応に困るが、それは大変なことではないのだろうか。

複雑な顔で目を白黒させていると、リリエはにこりと笑う。

「大丈夫。ロザリーは生きてるし、いつか王城に戻れるわ。宰相閣下を殺されて、ロザリーが黙って耐えているわけがないからね」

「ロザリー？」

「女王陛下のことよ。ロザリーと私は親友なの。あの子ったら、小さい頃はしょっちゅうお城を抜け出して城下町をうろついてたからそれで仲良くなってるね。不思議な人でしょう？」

笑顔で語るリリエの伝手の方が不思議だが、流衣は素直に頷く。

そういう親友ってなんだかいいなあ。

「事情はだいたい分かりましたけど、それとディルが女装してるの

はどんな関係が……？」

気になって仕方が無い。

さっき女装と言ったらディルが無言で怒っていたが、理由を聞いていないのだ。

ちらちらとディルを見ながらの問いに、リリエが腹を抱えて笑い出した。ディルのこめかみに薄らと青筋が浮かぶ。恐ろしい冷気を纏いながら、ディルは事情を語り出した。

「……………」と、いうわけだ！ 断じて私は女装趣味の変態ではない！どぎつぱりと否定するディル。その前でリリエが爆笑し続けていなければ、かなり緊張感のある場だったに違いない。

流衣は唾然とする。

「本当に女の子になっちゃったの？ ええと、それは……………ええと、それが、頑張ってる」

それしか言えない。

あまりの不憫さに泣けてきた。思わず目を反らして涙ぐんでしま

う。
流衣自身、女の子と間違われることに嫌気がさしているから気持ちにはよく分かる。それでも実際に女の子になってしまったなんて恐ろしすぎる。様々なことを想像して不憫で仕方がない。

「ああ、頑張るとも」

引きつり笑いを返すディル。

「……………」でも。無事で良かったよ。行方不明って聞いてたから心配してたんだ」

反らしていた視線を戻して流衣が言うと、ディルは苦笑する。

「何を言う、こちらの方が心配したぞ。君は死にかけてずっと寝たままだったのだからな。起きる前に出てきてしまったから、ずっと気がかりだったんだ。目が覚めて、本当に良かった」

「……………」ありがとう」

本気で心配してくれたみたいだ。そんな友達を持って嬉しい。流衣ははにかみ笑いを浮かべる。

「いつくらいに目が覚めたの？」

リリエの問いに、流衣は首を傾げる。指折り数えてみる。

「うーん、まだ一ヶ月も経ってないと思います」

「ええっ!? まだそれだけしか経っていないの? もっと体を大切にしなければ駄目じゃない!」

リリエにぴしゃりと怒られた。肩をすくめる。

「だ、大丈夫ですよ……。ちゃんと療養して、リハビリもしましたし。色々あつて、神殿都市からはすぐに出てきてしまったんですが、他の町に滞在してましたから」

「それをよくリドが許したな」

驚いた様子のデイルに、流衣は苦笑を返す。

「あ、あははは」

手紙を置いて出て行った上に、リドがアルモニカとともに追いかけてきて思い切り説教されたのは記憶に真新しい。自分から言うのはやめておこう。

流衣のごまかし笑いを怪訝な表情でデイルが見てくるが、流衣はふと思いついてリドのことを話した。勿論、家族のことだ。

途端にデイルとリリエの顔が強張る。

「え……………」

空気がぎしつと音を立てたようだ。

「ちょ、待て。あの輩が、死んだはずのリディクス・グレッセン様!?!」

「嘘お、大事件じゃないのっそれ!」

驚愕に叩き落とされている二人の前で、流衣はにこにここと微笑む。「家族が見つかったって、ほんと良かったよね。二年は自由にしているらしくってさ、また一緒に旅してるんだ。アルも一緒だよ」

「え、待ちなさい。アルってまさか、アルモニカ・グレッセン様のことじゃないでしょうね……………」

恐る恐る問うてくるリリエに、流衣は頷く。

「そうですよ。あ、知り合いですか？」

リリエは頭を抱える。

「いやあああ、なんなの、この子！ 死んだはずの次期当主と、グレッセン家の珠玉の姫と知り合いなんて！ てゆか何、話聞いているとグレッセン家と家族纏めて親交あるってこと！？ しかも、ここにレヤード侯爵家のディルもいるし、なんなのよ！」

そこを突っ込むと、眼前に近衛騎士団長もいることになるが、リリエは気付いていないようだ。

リリエの驚愕ぶりには驚くが、首を振って否定する。

「違いますよ、知り合いじゃなくて友達です。リドとは親友ですし」

「余計に悪いわよ！」

ぐわつと嘔みつかれ、椅子に座ったまま流衣は身を引く。怖い。

「そう言われても、別にリドやディルやアルが偉いから友達になつたわけじゃないですし……。というかあの、それ言うと、リリエさんは女王様と親友じゃないですか」

「それも、そうね」

リリエは目を丸くした後、深く納得した。それからけらけら笑いだす。

「人生つて不思議なものよね。友人なんて自分で選ぶものじゃないものね。気が付いたら出来てるものだし。ああ、そっか。そうよねえ」

とりあえずリリエが笑っているのでほつと息を吐く。

「ディル、僕ら、今、街外れのゴーストハウスっていう噂のあるお屋敷に住んでるんだ。校長先生が貸してくれて。仕事終わったら出るけど、暇な時にでも遊びにおいでよ」

「ああ、そうしよう。この姿でリドに会いたくなかったが、諦めるか……」

流衣の言葉にディルは溜息混じりに言い、そして問う。

「ところで仕事というのは助手の仕事のことか？」

「あ、それ話すの忘れてた」
流衣ははたと思い出し、今度は自分が働くことになった経緯を話し始めた。

*

「魔力増幅剤、か。そんなものが出回っているのか」
流衣は頷く。

「デイルは信用出来るから教えたけど、他には漏らさないようにしてね。そんな怪しい物を持ちかけてくる人がいたら気を付けて。断つてくれていいから、それがどんな人かだけ教えて欲しい」

デイルは大仰に頷く。

「分かった。むしろ注意しておこう。何か分かれば報告する」

「ありがとう、助かるよ。でも無茶はしないでね」

「こちらの台詞だ、それは。今日も悪童に追いかけられていただろう、君の方が心配だ」

流衣は眉尻を下げる。

すぐ後ろ、背もたれにとまったオルクスが異様にどす黒い気配を出し、ギチギチと嘴くちばしを鳴らした。

うわああ、イライラしてるーっ。

分かりやすく困る。

「坊ちゃん、追われるはめになったのは、サイモンとかいう、クソガキのせいです！」

急に口をきいたオウムに、リリエが驚いた顔をする。

え？ 亜人だったの？ と問うのには答えず、流衣は苦笑する。

「うん、まあ、色々あって知り合いになったんだけど、むしろ嫌われてるはずで。気に入られたのはオルクスの方だよ」

「迷惑な話です！」

憤然とするオルクス。

デイルは訝しげな顔をする。

「サイモンといえば、あの悪名高いサイモン・アーツか？　なるほど。だが、何をしたのだ？」

「ちよつと自信を根こそぎ折って差し上げただけです！」

「…………… 八八八」

空笑いを浮かべる流衣。遠い目をして窓から外を見る。

「なんか、戦闘好きだったみたいで、今度手合わせにくるって宣言してたよ。怖いから会いたくないんだけどなあ。すぐにナイフをチラつかせて脅してくるし……………」

「だ、大丈夫か？　ルイ」

デイルが目の前で手をひらひらさせる。ほつそりした綺麗な手だ。ほんとに女の子になったのだなあと再確認する。

「大丈夫だよ。学校にいる間は、だけど。なんとか逃げ回るよ」

流衣がへらりと笑った時だった。部屋の扉が控え目にノックされ、訪問者の存在を告げる。

デイルが了承の声を上げると、魔法学校の制服姿の少女がしずしずと入ってきた。豪華な金髪を後ろで編み込んでお団子に纏め、白いリボンで留めており、目は紅茶みたいな深紅色をしている。お嬢様を絵にしたらこうなる見本のような、優しそうで綺麗な女の子だ。流衣と同じ年頃のように見える。

「ご機嫌よう、デイル様、リリエノーラ様。今、宜しいですか？」

「ご機嫌よう、イザベラちゃん。私、お邪魔？」

「いいえ、リリエノーラ様。一緒にお話を聞いて下されば嬉しいですわ」

おっとりとした口調で品良く笑うイザベラという少女は、流衣に目を留めて、あら、と目を瞬く。

「お客様がいらっしやっているのなら、今日のご遠慮しますわ」

「いや、イザベラ殿、大丈夫だ。彼は前に話した親友のルイ・オリベで、オールドリッジ教諭の新任助手になったのだ。偶然会ったから、歓談していたのだよ。あなたには是非会って欲しいと思っていた。良かったら紹介させてくれないか」

「まあ……勿論ですわ」

イザベラはほんのりと頬を赤らめる。色白の肌をしているから、朱が差すと分かりやすい。

流衣はデイルとイザベラを見比べながら、なんだか嫌な予感がした。こういうほんのりと甘い空気は、ごくごく最近に体験した気がする。

デイルは席を立ち、イザベラの元まで行くと紹介する。

「ルイ、彼女はイザベラ・フォルン・カイゼル男爵令嬢だ。私の婚約者だ、宜しく」

「イザベラ・フォルン・カイゼルと申します。魔法学校の五年生ですわ。デイル様のお友達に会えるなんて光栄です」

微笑んで、スカート裾を持ち上げて貴婦人の礼をするイザベラに、流衣は一気に緊張した。周りにいる女性が、どうも強い人ばかりなので、こういう女性らしい淑やかな少女に免疫がないのだ。

「ぼ、僕はルイ・オリベです。こっちは使い魔で友達のオルクス。よろしくお願いします！」

慌てて立ちあがってがばっと頭を下げると、イザベラは目を丸くして、鞆から取り出した扇子を広げて口元を隠し、こころごとく笑いを零す。

すごい。本物の貴婦人ってこういうのかなのか。

前にアルモニカがこういう笑い方をしていた時は不気味で仕方なかったが、こうやって見ると上品である。

デイルは少女の姿ではあるが、男っぽいタイプの少女にしか見えないので、デイルがイザベラをエスコートして席まで案内する様はとても絵になっていた。

「さて、デイル様」

席に着いたイザベラはにこりと笑って話を切り出す。皮製の鞆をドンとテーブルに置いた。

「今日のお薬はこれです！」

瓶入りの薬を取り出すイザベラ。どことなくその目が据わってい

るようには見えなくもない。さっきまでの優しそうな雰囲気はどこに行っただらう。

「ええと、今回の中身は……?」

顔を引きたらせてその薬を凝視するディル。その向こう側ではリエがにやにやしている。

「ウシネズミのシツポと二十日草はじかみとシルヴェラント産の塩を混ぜた解毒剤ですわ! ささ、ぐいっとお飲み下さいませ!」

ずずいと黒々とした液体の入った瓶を突き出すイザベラ。目が本マ気だ。

「ディル、どこが悪いの?」

流衣の問いに、ディルは首を振る。

「いや。呪いで女になってから、戻れないかと色んな方法を試しているのだ。イザベラ殿がそれはもう熱心に探して下さいな」

イザベラは大きく頷く。

「ディル様を男に戻さなくては、わたくし達、結婚出来ないではありませんの! 第一、わたくしがお慕いしているのは女のディル様ではなく、男のディル様です。例え修行修行と普段わたくしを放置なされている方だろうと、結婚してしまえばこちらのものだと思っていたのに……」

ぶつぶつと本音を漏らしまくっているイザベラ。小さな拳を握りしめて、苛立ちでブルブル震えている。

「イザベラ殿……」

ディルは感動したようにイザベラを見つめたが、そこへイザベラが薬瓶を突きつけた為に、ひくりと頬を引きつらせる。イザベラは真顔で機械的に言う。

「飲んで下さい」

「いや、あのだな。魔物の死体には毒があるのだ、何故それが解毒剤に……」

「飲んで下さい」

「ハイ」

デイルは観念した様子で瓶を受け取る。それをじいーっと見つめるイザベラ。

「くっ、男は度胸だ！」

そう叫ぶや、デイルは一思いに瓶の中身を煽あおった。久しぶりに会ったが、相変わらず男らしい。

流衣はバクバクと緊張で騒がしい胸を押さえつつ、デイルの様子を見る。し、死んでしまったりしないよね？

「……………まずい」

ぼそりと呟くや、デイルは青い顔のまま卒倒する。

「きゃーっ、デイル様！ ああ、また失敗！ もおおお、どうしたら戻るんですのおお！」

倒れたデイルの襟首を掴んでガンガン揺さぶるお嬢様。

青い顔が土気色につ。やばい。やばいって、死んじやうってデイル。

「ちよっ、イザベラさん！ 死んじやいますから、放してあげて下さいっ！」

流衣が慌てて止めに入ったのは言うまでもない。

オルクスが聖法せいほうの術二・解毒を使ってくれなかったらどうなっていたことか。

デイルが食中毒で死なないようにする為にも、呪いを解く方法を探さなくてはいけなさそうだ。

五十四章 八つ当たりと再会 2 (後書き)

詳しく書きすぎた気がしなくてもないですが、投稿しておきます。

最後の薬の原材料のウシネズミ。さりげなく第一部八章ネタを引っ張ってます。分かりにくい。

「これはまた、複雑に絡まりあつてますねえ。どうやったら呪いがこつも絡まつたり、途切れたりするんですか？」

ある意味、奇跡ですよ。

これが、デイルをまじまじと観察して言ったオルクスの言葉だった。

デイルが額に手を当ててうなだれる。

「剣で切ってしまったのだ」

「ああ、なるほど。魔法の強制解除の影響ですか。防護の加護付きの武器でも、呪いだけは切れませんものね。無理に切つて暴発したわけですか……」

その返答に、ああなるほどと頷く。

小さなオウムがこくこくと頷きながら言う様は可愛らしい。膝に乗ったオウムを見下ろす少女姿のデイル。絵になるけれど、デイルが真面目くさつた顔をしているのでなんだか滑稽だ。

その横、一人掛けの長椅子では、言葉を流暢に話すオウムを見て、イザベラが不審そうにじろじろとオルクスを見ている。ちらりとリリエを見て、「亜人ですか？」と問い、リリエが「そうじゃないの」と答えている。

「宜しいですか、デイル。呪いというのは、呪いの言葉そのものを投げつける行為なのです。文字のように見えるものは、ただ記号ではないのですよ」

教え諭すオルクス。

「負の感情を魔力によって文字にする、精神力を削ぐ危険な行為ですが、その分、行使対象へのダメージも大きくなるのです。あなたが切ったのは、魔法というよりは怨念のような感情そのものです」

「怨念……怖いなあ……」

流衣はうめく。そうなると、流衣がかけられた死の呪いとやらは、その中でも最大級の怨念だったわけだ。

するとオルクスが流衣の元に戻ってきて、流衣の座る一人掛けの長椅子の肘かけにちよこんと止まる。左から、じつと流衣の左手の甲を見つめる。流衣もそれを見た。アルモニカの父であるデューク・グレッセンが聖法で治療してくれたらしいのに治らなかった、死の呪いの焼き印の痕。普段はその存在を忘れていたが、ときどき目にとまると記憶をよみがえらせる。まさしく呪いだ。

流衣はさりげなく左手を右手で覆う。

「どうかした、オルクス」

「坊ちゃん。わてでもその傷を治せなかったのは、それが魔力で灯した火により、負の感情を人体に刻み込んだものだからです。文字の意味はこうです。苦痛を伴う衰弱死。身代りのお守りを持っていて、そして坊ちゃんが強い魔力の持ち主で良かったと心から思います」

「お守り？」

何の話だろう。流衣が首を傾げると、オルクスはややへこんだ様子で言う。

「前にフラム氏に頂いたお守りです。ビーズ細工の」

「あー……あれかあ」

言われてみれば、あの時、手に持ったままだったはずだ。

「それと僕の魔力が何か関係あるの？」

不思議に思っただけで訊いてみる。

「力の強い人間が持つお守りなどは、持たせられた意味を強めることがあります。たまたま身代りの守りを持っていたので、身代りに作用したわけです」

「ああ、なるほど。じゃあ今度フラムさんにお礼しにいかなきゃね」

「そうですね……」

ずうずうん。

影を背負っているオウム殿。

まだ気にしていたのか。流衣は苦笑し、ひよいと両手でオルクスを包んで持ち上げる。

「オルクス、まだ気にしてるの？ 意外に気にしいだね。僕は全然気にしてないのに、君が気にするのはおかしいよ」

「ですが、さっきあのクソガキに追われていた時、気にされてたじゃないですかっ」

うっ。何も誰か他にいる時に言うことないじゃないか。

ディルやリリエがハツとしたようにこちらを見ているのに気付いて、冷水を浴びせられたような気分になる。

流衣は慌てて笑顔を取り繕う。

「そりゃあ虐めっ子は気にするよ。殴られるのは誰だって嫌じゃないか」

「ですが……」

「オルクス」

流衣は諦めて短く名前を呼ぶ。言いかけたオルクスが口を閉ざす。

「その話はもうやめて。あまり思い出したくないんだ」

ハツと無言で見上げてくるオルクスに困ったけれど、流衣は静かに笑う。最大級の感謝をこめて。

「気にしてくれてありがとう。オルクスは優しいね。君が使い魔で、本当に良かった」

「坊ちゃん……」

啞然と見上げてくるオルクス。

「え、使い魔ですか？」

静まり返った場に、場違いな声が落ちた。

皆、思わずその声の主を見る。

イザベラがはっと顔を赤らめる。おろおろと視線をうつつかせながら謝る。

「あ、あら。ごめんなさい、つい……」

いや、正直助かった。

流衣はにこつと笑って頷く。

「そうですね。オルクスは僕の使い魔をしてくれてるんです。かなり上位なので、僕には勿体ないくらいですけど」

イザベラはほっとしたように肩を落とし、やんわりと問う。

「まあ、上位とはどれくらいですか？」

「三番目です」

これにはオルクスが答える。

「へ？」

「は？」

イザベラとリリエが目を丸くする。

「わては、第三の魔物オルクスと申します。ツイール力様にお仕えしているのですが、今は訳あって坊ちゃんの使用魔をさせて頂いているのです」

さらりと言うと、何事も無かったように話を戻す。

「ああ、それで話の続きですがね、デイル。結論から言えば、あなたの呪いを解くのはわてでも無理です。文字がごちゃごちゃ絡まりすぎです。どうして女性に変わったのかも謎な支離滅裂な文章になっていますよ。これは、強い解呪をもつ祝福でもない……」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！」

当然のように話を進めるオルクスに、リリエが突っ込む。

「はい、なんですか。リリエノーラ嬢」

「なんですか、じゃないわよ！ 三番目って何よ、三番目って！

託宣たくせんの巫女の使い魔ですら七番目なのよ！」

バン！ とテーブルを叩くリリエを見て、オルクスは小首を傾げる。

「ああ、あの人型もとれない小僧がどうかしましたか？」

「こ、小僧って……っ」

ひくりと頬を引きつらせるリリエ。

事情を知るデイルは苦い顔をしている。

じつと疑問を込めてリリエが見てくるので、流衣も仕方なく事情

を暴露する。まあデイルの師匠と、デイルが紹介したがるような婚約者の少女だ、信用には値するだろう。

信じられないとは思いますが、と前置きして暴露すると、部屋に沈黙が落ちた。そして、今度こそリリエは頭を抱えた。

「ええ　　っ、異世界人！？　しかも、勇者召喚に巻き込まれて、いらぬおまけだからって放り出されたって。ええ、なにそれ可哀想！」

「わ、わたくし、涙で前が見えせんわ
イザベラは涙ぐんで呟く。

「あ、でも、一応繋がりがあつたらしくて。勇者の川瀬達也さんて、僕の兄さんが家庭教師をした時の教え子だったらしいんです」

「何？」

ぎよっとこちらを見るデイルに、知らずに会っていて、その後手紙を貰ったと言うと衝撃を受けたようだ。デイルも知らずに会っていたことになるからだ。

「あなた、本当に不憫ねえ。逆境に負けずに頑張るのよ」

すっかり同情的になったリリエが、流衣の手をぎゅっと握りしめて真剣にエールを送ってくるのに、流衣はあははと乾いた笑いを零すしかない。こういう反応、久しぶりだ。口ではつきりと不憫という当たりがリリエらしい。

対照的にイザベラは何やらキラキラした目でこっちを見ている。

「あの、不謹慎だとは思いますが、わたくしは異世界の方に会えて嬉しいですわ。流石はデイル様、お友達もただ者ではないのですね。類は友を呼ぶといえますもの、きっとデイル様は、将来、大物になりましたよ」

「……そ、それはどうも。イザベラ殿」

何やら複雑そうに頬をかくデイル。

それからやおらイザベラは深紅の瞳を期待で閃かせる。

「ルイ様、異世界の知識に呪いを解くものはありませんの！？　もしかしたら鍵になるやもしれませんわ！」

本当に執念の人だ。身を乗り出すように問うイザベラに感心しつつ、流衣はへらりと笑う。

「あの、様なんで大層な言葉つけなくていいですよ？ 呪いを解く……ですか。うーん、魔法を解くってことですよ。うーん……」
「思いもしない着眼点だ。」

流衣は腕を組んで考え込む。呪いだとかに詳しくはないが、ふと童話を思い出す。魔法を解くといえば。

「あ」

だが、しかし口に出すのをためらう。思い出したのが『眠りの森の美女』や『白雪姫』だっただけに。

「まあ、何かご存知ですよ！ 教えて下さいまし！」
「ここぞとばかりに語気を強めるイザベラ。」

流衣は顔を赤くする。

「え、えと……ですね。僕の世界の童話によくあるんですが、魔法の眠りについたお姫様を助ける為の方法がですね」

ええー、これ言っているのかな。

「はい、何ですか」

流衣は膝をじっと見つめ、赤い顔のまま蚊の鳴くような声で言う。

「……です」

「はい？」

怪訝な顔をするイザベラ。流衣は覚悟を決め、思い切って言う。

「お姫様を愛する王子様が、お姫様にキスするんです！」

室内がシーンと静まり返った。

（だ、だから言いたくなかったんだよ！）

流衣は全身が沸騰せんばかりに熱くなった。恥ずかしさのあまり、両手をごしごし顔に押し付ける。どこか穴があつたら今すぐ隠れたい。

「まあ……。口づけで魔法が解けるなんて、斬新ですわね」

イザベラは感心したように呟く。声には恥ずかしがる調子はなく、

単に思わぬ知見にうなっているような感じだ。

斬新という感想こそ、斬新だと思ったが。

流衣は膝を熱心に睨んでいたが、衣擦れの音がしてイザベラが立ち上がったような音がした。

「……え？ イザベラ殿？」

何やら狼狽したデイルの声がした。

「ちょ、待っ……」

また部屋がシーンと静まり返った。

（ん？）

何だろつと顔を上げると、イザベラがデイルの側から身を離れたところだった。眉を寄せてじつとデイルを観察し、見られている方のデイルは耳まで赤くなっている。対岸を見ればリリエが楽しげに笑っていた。

イザベラはしばらく観察して何も変化がないのを見ると、ぐつと拳を握る。

「……どうやらわたくしの愛は呪いを解くには足りないようです。

デイル様！ 絶対に愛の執念で元に戻してみせますわ！ さっそく次のお薬を探さなくては。今日はこれで失礼いたしますわね！」

決意も新たに憤然と宣言すると、皮の鞆を手にして気概たつぷりに部屋を出て行った。

（え？）

流衣はイザベラの出た行った扉を見て、それから赤くなったまま固まっているデイルとにやにやしているリリエを見る。

「まさか……今……」

もしかしなくてもイザベラはすぐに実行に移したようだ。

流衣まで顔を赤くして呟くと、リリエがばちんと片目をつむる。

それはもう、心の底から楽しげに。

「ルイ、あなたって良い仕事するじゃない！ 面白いもの見れたわ
くほほほほほ」

リリエの高笑いが不気味だ。

口元に手を当てて硬直していたデイルは、フリーズが解けると、やはり赤い顔のまま顔を右手で覆う。

「ルイ……」

「な、なに。なんか……ごめん？」

「いや………ありがとう」

ぼそりと礼を言うデイル。

呪いは解けなかったが、どうやら結果オーライっぽい。

『坊ちゃん、グツジョブです！』

流衣にしか聞こえない声で、オルクスも楽しげに囁はさしたてた。

*

「へー、ほんとに女になつてんだな」

流衣からデイルの話聞いた翌日、学校敷地内でデイルにそっくりな少女を見かけて声をかけたら当たりだった。

ぎくりとした顔で振り返ったデイルは、リドを見て渋面を作る。

他の女生徒が皆制服姿なのに反し、デイルは運動着である乗馬服姿だ。

「本当に用務員をしているのだな……」

苦々しげに呟いた後、更に言う。

「グレッセン家の人間がそんなことをしているなど、本来は卒倒ものだぞ？」

リドはからからと笑い飛ばす。

「その話も聞いたか。安心しろって、それは二年後の話で、今はただのリドだ」

ちょうどゴミを収集してゴミ焼き場に捨てに行く所だったので、布の袋にはゴミが詰まっている。魔法道具などは危険物処理なので、別に収集されているから、ここにあるのは普通のゴミだ。

「人生、何が起こるか分からないもんだよなあ。誘拐されて盗賊に売り飛ばされて、その後逃げて住んでたところで異世界人に会って、

一緒に旅してたら故郷を見つけるんだから

笑って言うと、ディルは真面目に頷いた。

「そうだな。私もこうして女になっている」

リドは吹き出して笑ってしまふ。それからふと思いついて言う。

「あの小うるさい姫さんが俺の妹なんだから、驚きだよな」

「だが、兄として見ればそっくりだぞ」

「どこが？」

「どこもかしこもだ」

「そうかあ？」

リドは頬を手で撫でる。そんなに似ているだろうか……。

「ま、いや。地の曜日にも遊びに来いよ。ゴーストハウスに住んでっからよ。よっと」

一休みで置いていたゴミ入りの袋を肩に担ぎ直す。

「じゃーな！」

すたすたと歩いて行くリドの背に、ディルのおかしそうな笑いが聞こえる。

「ルイと全く同じことを言うな」

リドは僅かにディルを振り返る。

「そりゃ言うさ。お前、俺らの仲間だろ！」

リドはにっと笑う。

そう言った拍子のディルの間抜け面が面白かった。

しかし、女になるなんてことが御伽話以外にあるんだな。自分じゃなくて良かったと、ディルには悪いが思ってしまった。そうしてふと、自分が女だったらアルモニカとそっくりなのだろうかと思像してみる。

……うわ、微妙。

五十四章 八つ当たりと再会 3 (後書き)

急に目次のところのあらすじを一部変更したのは、この場面の為です(笑)

デイルがあんまり可哀想だから、ちょっとサービスしてみた。脇役の癖につて、石投げないでね!

五十五章 学生街巡りと植物育成

地の曜日。昼に近い午前、流衣は魔法学校の正門前にオルクスとともにぼつんと立っていた。

「おはよう。すまぬの、待たせたか？」

やがてアルモニカが侍女のサーシャと共に正門前に現れた。どちらも私服姿である。アルモニカは小さな鞆を肩に提げていて、サーシャは長い杖を手にしている。杖は金属の柄に植物の紋様が刻まれた綺麗な造りで、トップに金平糖みたいな赤い石がはまっていた。サーシャはひつつめにした灰色の髪と丸眼鏡の奥のモスグリーンの目が落ち着いた雰囲気を見せていて、魔法使いというよりも賢者のように見える。

「そんなに待つてないよ。大丈夫、前に友達を半日待つてたことあるし、少し待つくらいは全然平気」

「妙な所で気の長い流衣がにっこり笑つて言うと、アルモニカは呆れた顔をする。」

「そんなに待たせる輩もどうかと思うが、待つ方もどうかと思うぞ」「暗くなる頃には帰るから大丈夫だよ」

「そういう問題か……？」

アルモニカは怪訝そうに首をひねる。

『坊ちゃんはその律義さ、わては素晴らしいと思います！』
オルクスがキラキラした目で褒め言葉を口にする。流衣はあははと笑ってオルクスに礼を言った。律義というより、何も考えていないだけなのだが、まあせっかく褒めてくれているのだから言わないでおこう。

「ところで、本当に徒歩でいいの？」

学生街を案内すると約束していたので、こうして迎えに来たが、

お嬢様だから馬車を使うものではないのだろうか。確認する流衣に、アルモニカは頷く。

「お主は馬車を使わぬのだろうか？ それに、折角自由にしているのだから、ワシは自分であちこち見て回りたい」

「それならいいんだけど」

と言いつつ、流衣は確認をするように、ちらりとサーシャを見る。我関せずというようにアルモニカの斜め後ろに静かに立っていたサーシャは、流衣を見て僅かに微笑んだ。

「私は護衛です。ただの空気と思って下さい。お二人の邪魔なんて致しませんのでご安心を」

「はあ……」

「何言つとるんじゃ、サーシャ」

やたらと“二人”を強調するサーシャに、流衣とアルモニカは揃って首を傾げる。しかしサーシャはにこにここと笑っただけだ。

アルモニカは不気味そうにサーシャを見つつ、流衣を促す。

「よく分からぬが、行くとしよう」

「行きたい場所あったら教えて。まあ、僕もそんなに詳しくないから、メインストリートくらいしか案内出来ないけど」

「それで十分じゃ」

それからふと思いついて流衣は言う。

「あと、アル。三時くらいにクレオ君が家に遊びに来るらしいから、街を見たらアルも家に来る？」

途端にしかめ面になるアルモニカ。

「あ奴、本気じゃったのか。勿論、行くぞ。貴族に圧力かけられたら、お主らではどうも出来まい」

面倒そうに鼻白んでいるが、アルモニカのその言葉はとても頼もしい。確かに、流衣にはどうにも出来ない。今は平民であるリドでもそうだ。

「……ち、何というお邪魔虫」

何故か忌々しげな顔をしたサーシャがぼそりと呟き、流衣とアル

モニカはびくりとしてサーシャを振り返る。

「……………え？」

サーシャは何でも無いと口元に手を当ててほほほと笑う。

「……………？」

なんなんだろう、さつき感じた悪寒は。

流衣とアルモニカは気もそぞろに顔を見合わせる。しかし原因は分からなかった。

「書店と魔法道具屋は絶対に行きたいぞ」

アルモニカは気を取り直したように、希望を口にする。濃緑色の目が好奇心に輝く。

楽しそうな様子を見ると、流衣も気分が明るくなってきた。友達と店巡りなんて随分久しぶりだ。

「じゃあそこは絶対に行こう。あと、屋台巡りもしようよ。この街、おいしい焼鳥屋があるんだよ。学校帰りに見つけたんだ」

「ヤキトリヤ？ 何か分からぬが、面白そうじゃ！」

世間知らず丸出しの発言をしつつ、アルモニカも声を張り上げる。

『坊ちゃん、わて、花売りがいたら花を買って欲しいです！』

オルクスまで珍しく希望を口にして浮き浮きしている。

流衣達はどこに行こうかと話し合いながら、アカデミアタウンに繰り出した。

リドも来れば良かったのにと少し残念に思うが、リドはゴーストハウスにいる。ここしばらく早起きが続いていたので、休みくらい遅くまで寝たいとのことだった。今頃、のんびり起きだしていることだろう。

「ほお、これが魔法道具屋か」

アカデミアタウンにある魔法道具屋のうちの一軒、魔法道具屋ホーネットに入るなり、アルモニカは感心気味に目を輝かせた。

他にも五軒はあるのだが、流衣は迷わずここを選んだ。他の所は

貴族向けなのか外観がキラキラしすぎて近寄りにくく、庶民向けらしい普通の外装の店にしたわけだ。大型の銀行並みの大理石造りの店とか、扉の上にクジヤクのような鳥が彫り込まれた透かし細工の飾りが多様された店なんて入りたくない。高級ブランド店みたいな店は大の苦手だ。こういう所が流衣は根っからの庶民である。

「いらつしやいませ。何かお探ですか？」

青色のバンダナを頭に巻いた、金髪と垂れ目がちの青目をした二十代半ば程の青年が客を一瞥するなり声をかけてきた。無精髭とい着崩している衣服といい、全体的に空気が緩い。というか面倒臭そう。

流衣はちらりとアルモニカを見る。

「アル、何か探してるの？」

「特には無いが、面白い物があつたら買おうかの」

「だ、そうなので。あ、そうだ。これの買い取りお願いしたいんですが、いいですか？」

流衣は店内を物色しているアルモニカを置いて、自分の用事を済ませることにした。そろそろ懐が寂しくなってきたので、いつものように魔昌石まじやうせきによる資金調達だ。前に買っていた空の昌石に魔力を詰めた魔昌石を鞆から取り出すと、店主は目を光らせた。

一個売ればしばらくは生活出来ると思うので、とりあえず一個だけ売るつもりだ。

青い光を放つ魔昌石を手に取ってまじまじと見つめ、店主はやおら頷いた。

「これは上等な魔昌石ですね。銀貨四枚で買い取りましょう。宜しいですか？」

「はい」

流衣は了承し、代金を受け取って財布に仕舞う。

その後は、店内の品を見ることにした。

まず目についたのは薬品関係だった。傷薬や消毒用の塗り薬、腹痛に効く薬、他にも解毒剤や手荒れに効くハンドクリームが詰まっ

た小さな木箱がある。薬草の混ぜた薬用石鹸もあった。流衣が前にフラムの店で買ったような、物体強度と耐火の魔法のかけられたリュックや鞆、果ては魔法関係の書物も置いてある。杖や魔法効果の施された武器や、明かりの魔法道具、カイロと同じような暖をとる機能を持つ携帯用の手の平サイズの小さなクッションに、大型の物だと暖房器具まである。一部は雑貨に近いが、どれも薬学や魔法道具を作る知識が無ければ作れない物ばかりだ。

「あれ、種も置いてるんだ」

地面に置かれた木箱に種入りの袋があるのに気付いて呟くと、いつの間にかカウンターについていた店主が椅子に座ったまま首をもたげた。

「それは普通の植物の種じゃないんですよ。水と魔力を注いで育てる薬草です。人魚の涙草マイמיד・ドロップとルビィカズラという花ですね。自生しているものは魔力の溜まり場があるとされている山の奥にしか育ちませんから、人の手で育てているわけです」

「へえ……」

流衣はまじまじと種の袋を見つめる。

「そう言えば兄貴の奴、薬草学やくそうがくに凝っておったな。ルイ、お主、前みたいに植物の生長促進の術で育ててみたらどうじゃ？ お主ならちよちよいのちよいじゃろ」

アルモニカも種の袋を見て首を傾げ、更に付け足す。

「人魚の涙草は咳止めせきの薬で、ルビィカズラは熱冷ましになる。なかなか役立つ薬草だぞ」

「アルがそう言うのなら試してみようかなあ」

薬草が出来たらリドも喜びそうだ。

流衣は種を買うことに決めた。

他にも、魔力の入っていない空の昌石を二つと、薬用石鹸一つを買い、占めて銀貨一枚と銅貨四十五枚になった。紙袋に入れて貰った品物を、鞆に入れる。

アルモニカは携帯カイロが面白かったみたいで、それを買って

た。仕組みを解明すると熱論していた。まるで玩具を分解して喜ぶ子どもみたいである。

初めて自分で金の受け渡しをする買い物をしたとアルモニカは機嫌が良い。前は外出禁止を守っていたし、闇魔法使いから逃げた時は流衣が支払いをしていたのだから、そう言われてみれば確かに初めてだ。

「ありがとうございます」

なんとも気の抜ける店主の間延びした声を背後に聞きながら、メインストリートに戻る。昼時でお腹が空いていたので屋台で買い食いし、また店を冷やかして回った。

ゴーストハウスに戻ると、荷物をリビングに置いてから早速庭に向かった。

雪が積もっているので、裏庭にある木製の倉庫からスコップを取ってきて雪をどかし、そこに種を埋める。

「今の時期で生えるのか？」

疑い顔のリドに、流衣は首を傾げる。

「さあ。でも前は蔓つるが生えたよ」

「影の塔に木を生やしておったんじゃから、平気じゃろ」

アルモニカが言うと、リドはそれもそうかと納得した様子を見せた。

種を埋めた場所の前にしゃがみこんでいる流衣の後ろに立ち、手を覗きこんでいるリドとアルモニカの後ろでは、やはり興味深げに見つめるサーシャの姿がある。皆、興味津津だった。

「坊ちゃん、大丈夫ですよ。どんとやっちゃって下さい」

事情を知らされているサーシャの前なので声に出して言うオルクスの言葉を受け、流衣は踏ん切りがついた。

「じゃあいくよ」

右手で杖を持ち、左手を地面につける。

そして魔力を左手から地面に注ぐ。種が育つことをイメージしながら、流衣は呪文を唱える。

「グロウ！」

すると、種を埋めた地面一帯が光り始め、地中から芽が出てきて瞬く間に生長し、青い雫の形をした一枚の葉をつけた草と、茎と葉が赤い蔦の先に白い四枚の花弁がついた花を咲かせた草が生えた。

「おおーっ」

「面白いの、もう一回見たいぞ！」

「私も見たいです！」

リドが感嘆の声を漏らしてパチパチと拍手をし、アルモニカとサ―シヤは口を揃える。

「ルビイカズラですね！ おいしそう……」

目を輝かせるオルクスには出来たてのルビイカツラの花を摘んであげる。オルクスは感激したように礼を言い、むしゃむしゃと花を食べだした。街で花売りから買った花を食べていたのだが、好物だったみたいで別腹っぽい。

薬草を摘んでしまい、また種を撒いて術を使った。

「すごいすごい！」

手を叩いて喜んでいたアルモニカだが、ふと不思議そうな表情になった。

「そういえばお主、前に何も無い地面から植物を生やしていたのじやから、種がなくても生やすことが出来るのではないか？」

流衣はきよとんと目を瞬き、首を傾げる。

「……確かに？」

そう呟いた瞬間、アルモニカにどーんと背中を叩かれる。流衣は衝撃でむせる。

「なれば、試してみよ！」

「わ、分かったから叩かないで……」

へによりと眉を下げ、流衣は弱々しく主張しつつ、再度チャレンジする。今度は種無しだ。

同じ植物が生えるところを想像してみたら、やっぱりよきによきと生えてきて、あつという間に育った。そのまま生長しきって種にならないのは、地の精霊が気を利かしてくれているのだろうか。流衣は考える。何も無い場所から植物を生やすことが出来るのなら、流衣がよく知っている野菜も育てられやしないかと。

思い切って、雪の積もった地面一帯で試してみる。

「うわー……」

自分自身、目の前の光景にどん引きだ。

白い雪で覆われた地面の上に、季節感総無視でさまざまな野菜が実をつけている。

カボチャ、ジャガイモ、なすび、トマト、きゅうり、玉ねぎ、などなど。流衣が知っている有名どころばかりが、これでもかと身をひしめきあって生えているのだ。どこの農園だというような有り様だ。

「やり過ぎた……かな。ははは……」

乾いた笑いを零しつつ、なんだか地の精霊に申し訳なくなっている。下らないことで酷使しているような気分だ。

「なんか、ごめん、精霊さん……」

「気に病まなくて大丈夫ですよ、坊ちゃん。精霊は坊ちゃんの注ぐ魔力を糧に植物を生やしているのです。プラマイ0……いいえ、もしかすると精霊にはプラスかもしれない。魔力は精霊にとっては栄養みたいなものです、地の精霊に好かれるということつまり、地の精霊にとつて好みの魔力を有しているということなんですよ」

「だつたらいいんだけど」

オルクスの言葉で心が軽くなる。

「じゃあ、俺もそうなるのか？」

リドが何気なく問うと、オルクスは首を振る。

「それもあります、あなたの場合は血の盟約が大きいですね。初代が風の精霊と子々孫々血を繋いで共にあると契約したのです。人間で精霊の声を聞ける者は稀ですから、精霊としても話せる者が欲

しかつたのでしょう」

オルクスと言葉を肯定するように、リドの周囲で風がヒュウと音を立てて吹いた。

「グレッセン家のように周囲に認知されていないだけで、血の盟約を交わしている者は世界を探せばいるやもしれませんよ。わては把握してませんがね」

「もしいるんなら、会ってみたいもんだな」

面白そうに口元を引き上げるリド。

確かにいるのなら話が合つて楽しいに違いない。流衣もこくこくと頷いていたが、アルモニカに服の左腕の部分を引っ張られ、そちらを見る。

「のうのう、これはなんじゃ？ お主の故郷の植物か？ 実のように見えるが」

「うん、僕の故郷の有名どころの野菜だね」

好奇心で輝く緑色の目を向けてくるアルモニカに、流衣は答える。「これがカボチャで、これがジャガイモ。あつちがなすびで、トマトでしょ、きゅうりでしょ……」

ジャガイモは根元を手で掘り起こし、茎を引っ張って抜いてみせる。ああ、小学生の時に、体験で育てる授業を受けて良かった。

「おおつ、芋じゃな！ ワシが知っている野菜に似ているのもあるが、どれも旨そうじゃの」

「魔法で生やしたのだから、味は分からないけど。どうかな」

トマトをその場でもいで、袖で軽く拭いて食べてみる。甘酸っぱい味が口に広がる。普通にトマトだ。

「うわ、なんだこれ美味しい！」

「初めて食す味じゃ！」

真似して食べてみたアルモニカやリドはまたもや歓声を上げる。

「今日の夕飯はこれで作るうかな。久しぶりに食べるから楽しみだな」

今から浮き浮きしてきた。

「クレオ君が来る前に収穫しちゃおう。三人は家に入って……」

「手伝う！」

「手伝うぞ！」

「手伝います！」

見事に声が揃った三人に目を丸くし、流衣はおかしくなって吹き出した。とても楽しそうで何よりだ。こちらとしても手伝ってくれるなら大助かりである。

「お前ら、何でついてくるんだよ」

クレオは馬車に同乗してきた幼馴染であり家臣仲間である友人二人をじろつと見た。

銀髪と金目をしたキラキラしい見た目の線の細い少年、ディオ又は素知らぬ顔をし、銀縁の眼鏡を指先でついと持ち上げる。

「ゴーストハウスと聞いて、行かないわけがないでしょう」

「いやいや、何を当然みたいに言ってるんだ、ディオ」

「だから、私の名前はディオ又だと言ってるでしょう！ほんつと頭悪いですね。ロイス、あなた、一度頭の中を洗ってきてはいかがです？」

「さらりと失礼なこと言うんじゃないよ！」

ディオ又の失礼な言葉に、ロイスという黒髪と藍色の目をした真面目そうな少年が言い返す。口調は粗野だが、無骨な印象のある少年だ。ロイスはクレオやディオ又より一歳年上である。親が仲が良いので、どうせ学校に通わせるなら同年代にと示し合わせた結果、こうして同級生をしていたりする。

クレオ達三人も親と同じで仲が良く、たいてい三人で行動することが多いが、ディオ又とロイスの二人は口喧嘩していることが多く、クレオはそれを止める役回りになることが多かった。なんだか仲が良さそうでときどき疎外感を覚えるけれど、本人達は心の底から愚痴の言い合いをしているので、別に仲が良いつもりはないらしい。変な奴らだ。

「俺もロイスに賛成。ゴーストハウスの何が面白いんだ？」

クレオの問いに、ディオ又はキラリと眼鏡を光らせる。

「幽霊がいたらお話ししたいじゃないですか」

何を言ってるんだという口ぶりで、おかしなことを堂々とのたまうディオヌ。クレオとロイスは顔を見合わせ、無言で肩を落とす。

三人の中で一番常識人に見えるディオヌだが、月刊『ラーザイナ怪異集』の購読をしているくらい怪談が大好きだったりする。そんな胡散臭い雑誌を編集する書店があるのも不思議だが、購読者がいて売れているのも不思議である。

「助手は幽霊なんかいないって言ってたけどな」

「探してみる価値はあります！」

「……そうかよ」

ああ、駄目だ。これは何を言っても無理そうだ。

じゃあロイスは何でついてきたのかと目で問うと、ロイスはにっこりと笑みを浮かべた。

「俺はお前らのお目付け役な」

「……そりゃどうも」

そんなに信用無いのか、俺達。

*

「こんにちは、いらっしやい……？」

馬車から降りてきたクレオを出迎えたが、その後が続いて降りてきた少年二人を見て、流衣は言葉を疑問形にしてしまった。

「あー悪い。こっちの二人もついてきたんだけど、邪魔していいか」
クレオはそう問うたが、邪魔してもいいのが当然みたいな口ぶりだった。特に問題はないので、頷く。

「ええと、構いませんよ。ああ、でも食器が足りるかな……」

引っ越してきたばかりだからそんなに食器類が充実しているわけではない。せいぜい、来ると分かっていたアルモニカとクレオの分を買い足してあるくらいだ。

「お構いなく。ゴーストハウスを見させて頂ければそれで十分です」
なんだかとても楽しそうなディオヌに、流衣は曖昧な笑みを浮か

べる。

「はあ、それならいいですけど」

そう言つて、門前で立つていても仕方が無いので、とりあえず屋敷に三人を通した。

玄関に入るなり、ディオオが歓声を上げ、屋敷内を見てきているかと問うので、使用人部屋以外はどうぞと言つたら、喜び勇んで駆け行つた。

「……………」

ディオオの様子奇妙で、ついクレオをじつと見てしまうと、クレオの代わりにロイスが答える。

「あいつ、怪談好きなんだ」

「そ、そうなんですか……。ここ、お化けいませんけどね？」

「いなくても、十分に奇天烈だから楽しいんじゃないかと思う」

クレオが付け足し、流衣はますます困惑する。

こんな破天荒な屋敷のどこが面白いんだろう。謎だ。よく分からない少年だなあと、遠くに見えるディオオの背に流衣は視線を投げる。件の少年は浮き浮きと楽しげに廊下を見回しては、メモを取っている。準備の良いことで。

「まあ、趣味は人それぞれですよね……………」

そう括り、クレオ達二人を暖炉のあるリビングへと案内する。リビングに入ると、台所からアルモニカがびよこんと顔を出した。

「ルイ、茶瀘こしはどこじゃ？　せつかくじゃからワシが茶を淹いれてやろう！」

台所から顔を出したアルモニカに客達は条件反射のように硬直し、流衣は言葉の内容に青ざめた。アルモニカの淹れる茶は究極に不味いのだ。客を放置し、慌てて台所にすつ飛んでいく。

「いいよ、アル！　僕が淹れるから、アルは座つてて！」

「むう、せつかくのワシの好意を……………」

「お願いします。ほんとお願ひしますから座つてて下さいっ」

「……………むー」

必死に頼むと、アルモニカは膨れ面をしつつリビングのソファに座った。流衣は額に浮かんだ汗を拭う。なんとかミッション成功だ。

「あ、好きに座って下さい。お茶出しますから」

流衣が硬直して立ったままの客二人に声をかけると、客達は息を吹き返し、いそいそとアルモニカの前の三人は座れる広さのソファに座る。アルモニカの座るソファのすぐ斜め後ろには、サーシャが静かに立っている。いかにも従者然とした立ち居振る舞いだ。

客が帰った後にでも、サーシャにも茶菓子を下さねばなあと頭の片隅で考えつつ、茶菓子と茶を携えて戻って来ると、アルモニカはクレオと話していた。

「じゃあ先輩、友達出来たんすか。それは良かったです」

「うむ。隣の席のホーリイという娘でな、なかなか話が合うぞ」

流衣は盆をテーブルに置き、シフォンケーキと茶を三人の前に並べる。ディオヌには後から出すにしても、流衣とリドの食器を使えばどうにか茶を出せるくらいは出来たので良かった。

それにしても、と流衣は考える。クレオとアルモニカの会話を拾うに、アルモニカに友達が出来たらしい。それも女の子の友達だ。良かった。親友の実の妹だし、なにより二歳年下だから妹のようにも思えるアルモニカだ。ちょっとぴり心配していたのでこちらも嬉しい。

「おおつ、これは美味しいな。甘い」

シフォンケーキを食べたアルモニカが頬を綻ばせるので、流衣もつられて僅かに笑みを浮かべた。

「ありがとう。おいしく出来てるなら良かったよ」

「え。これ、店で買ったんじゃないかってお前が作ったのか？」

クレオが目丸くして問うので、流衣は頷く。

「はい。僕の故郷のお菓子なんです」

「素晴らしい土地だな。こんな美味しい菓子があるなんて」

ロイスが褒め言葉を口にし、しばらく四人は故郷の話に花を咲か

せた。クレオとロイスはルマルディー王国東部のレヤード侯爵領にある自領のことを語り、アルモニカはエアリーゼと王都の塔について話している。流石もどんな土地か訊かれるのに少し答える程度は話したが、三人が喋るのが好きみたいなので専ら聞き役に徹していた。

（そもそも、クレオ君で何で家に遊びに来るって言ってたんだっけ……？）

目的を見失って内心首をひねる。それでも話を聞いていると、やがて三十分程経った頃にディオオが戻ってきた。

「すごかったです。こんなに素晴らしいホラーハウスが存在するだなんて！ 記録もばっちり取りました！」

目をキラキラと輝かせ、やや興奮気味に言いながら、手に持った冊子を身体の前に突き出して見せびらかせる。

「家主殿、ありがとうございます。幽霊がないのは残念でしたが、それよりもずっと有益でした！」

「は、はあ……」

熱烈に礼を言われても、流石は何もしていないので曖昧に苦笑するだけだ。

ていうか、何が有益なの？ あちこち黒い家のどこが？ 幽霊いなくて残念だなんて初めて言われたし、そもそも流石は家主ではない。感謝をするなら、元の持ち主の変人魔法使いに言うべきだ。

「家主は校長ですよ。僕らは仕事中だけ家を貸して貰ってるだけです」

どこから突っ込めばいいかわからなかったので、とりあえず無難なところだけ指摘すると、ディオオは何度も首肯してうなづいた。

「流石は校長先生。良い趣味をしていらっしやる」

「……………」

なんて返事をすればいいやら。思わず助けを求めてクレオを見ると、さっと目を反らされた。彼も面倒そうだ。ひどい。

「なあ、助手。それよりあの使用人はどこにいるんだ？」

心持そわそわしながら問うてくるクレオ。
話題が変わったことに内心で安堵しつつ、流衣は僅かに首を傾げる。

「多分、薪割りまきわしてるんじゃないかと思えます。あ、ディオ又さんでしたっけ、今、お茶淹れますね」

「それはありがたい。興奮しすぎて喉が渴きました」

「……そ、そうですか」

爽やかな笑顔でそんなことを言われても困る。流衣は目を泳がせながら相槌を返し、席を立てて台所に向かう。茶と菓子を携えて戻ると、ちょうどリドがリビングに入ってくる所だった。

「歓談中、失礼します」

薪を小脇に抱えたリドは、一言断ってからリビングに踏み入る。

クレオの表情が僅かに輝いたが、それには気付かず、すたすたと暖炉に向かつていく。そして幾つかの薪を火にくべ、残りを暖炉横の壁に重ねて置く。

あまり貴族の相手をしたくないらしいリドは、最初から関わる気はなさそうだったが、暖房のことは気にかけていたようだ。

「使用人、お前、名は何だ？」

足早に出て行くこうとするリドを呼び止め、クレオが問う。

流衣は茶菓子をテーブルに並べ、盆を持ってちらりと振り返る。

「リドです。それが何か？」

俺の名前なんて聞いてどうするんだと言いたげな問い返しで、リドはあっさり言う。爽やかそうなのは健在だが、どこか違和感がある。余所行きの顔と態度というか。

「リドっていうのか。お前、強そうだよな。修練の為に、少し手合わせしないか？」

クレオの楽しげな問いに、一瞬、リドの眉が僅かに寄った。そこそこ長い付き合いのある流衣だからまだ分かるが、ほぼ初対面の客達は気付かない程度の小さな変化だ。きっとリドのことだから面倒だと思っただけに違いない。

(うわあ、流石デイルのお家の家臣さん。デイルに似て熱血なのかな……)

修行修行と暑苦しく笑っていたデイルを思い出し、流衣は内心苦笑する。子が親に似るみたいに、部下が主人に似ることもあるんだろっか。

「申し訳ありませんが、お客様。俺は強くないですよ。それにまだ仕事がありますので、これで失礼しま……」

そう言いかけて、リドは眉を寄せてふと玄関の方を見た。

「失礼、客のようです」

一言断つて、すたすたとリビングを出て玄関の方に向かっていく。

「え？ お客さん？」

流衣はきょとんとする。他に客がいる予定はないのだが……。

この町の知り合いといえば、あとは校長夫妻かセト、他にはナゼルやシフオーネ、移動劇団スカイフローラの面々くらいであり、滞在の場所を知るのはその中でも校長夫妻とセトとナゼルくらいだ。

「はあ、よく気付いたな。チャイムも鳴っておらぬというに」

やや呆れ気味に呟くアルモニカに、流衣は何でも無いという態度で返す。

「リドは耳が良いから、それでじゃないかなあ」

そして台所に盆を置いて、またリビングに戻ると、リドがやや警戒した顔で現れた。

「ルイ、あいつらお前の知り合いか？　なんかやばそうなんだけど」

「あいつら？」

「いいから、ちょっとこっち来い！」

なんだなんだ？　リドがここまで警戒した相手が今までいただろっか。

流衣は心持不安になりつつ、促されるまま玄関に向かい、戸口からそつと門の方を見た。

ボタン！

見えたものに、思わず扉を閉めた。

「……僕、何も見てないよ」

「ああ？」

「ミテナイミテナイ。ねえ、オルクス」

「そうですね、坊ちゃん！」

黒い服着た黒い羽を持った少年と、赤と青の目をした少年の従者っぽい青年がいたなんて、そんなまさか。白昼夢っていうか、悪夢もいいところだ。

とりあえず見なかったことにして扉にくるりと背を向けた瞬間、リンゴーンとチャイムの音が玄関口に響き渡った。

ぎよつと扉を振り返る。

「えー!? 幻か白昼夢じゃないの!？」

「……何言ってるんだ、おめえ」

思わず流衣が絶望半分に零した言葉に、リドが胡乱な顔をする。正気を疑うような目でこつちを見ているが、気にしてられる心境ではない。

リンゴーン

またチャイムが鳴った。

扉を開けるのを躊躇していると、リドがややじれったそうに言う。「お前が出ないんだったら俺が出るぞ? 客待たせるのはまずいだろ」

「ぎゃーっ、駄目だってリド! ここは居留守! 居留守を使うべきでっ」

「はあ?」

慌ててびたつと扉に張り付いて止める。リドは更に変な顔になった。

リンゴーン

三回目のチャイムが鳴り、しばし沈黙が降りる。

よし、諦めて帰ったかなっ!

内心安堵した瞬間、扉の向こうから声がした。

「……無視なんていい度胸だな」

「!?!」

ぎよつとする。なんか借金取りみたいで怖っ!

「君、悪いこと言わないから居留守はやめといた方がいいよ。リーダー怒らせたら扉壊されるから」

「……………」

サイモンの部下であるラズリードの声がして、まるで肯定するような沈黙が落ちる。

流衣の顔からさっと血の気が引いた。借り物の家を壊されるのは困る。頭を抱えつつ、諦めてそーっと扉を開ける。

「……………はい、何の御用ですか」

僅かに開けた扉の隙間から、機嫌の悪そうなサイモンが真っ先に見えて、流衣は逃亡したくなった。怖い怖い。

「お前に用はない。そのオウムだ」

「ハハハ、ですよね……………」

引きつり笑いを浮かべつつ、ちらりと左肩に乗っているオルクスを見る。

「ふふふふ、前に言っていた手合わせとやらですね。いいでしょう。ただし、一度だけです! それでもう二度とわて達の前に現れるんじゃないですよ!」

オルクスは憤然と羽をばたつかせ、キンキンする声で怒鳴る。

サイモンはじつとオルクスを見て、あっさり言う。

「いや、それは無理だ」

「なんですって!」

ふざけるなど目を吊り上げるオルクスに、サイモンは何を当然なことをと平然に返す。

「そいつがオールドリッジ教諭の助手なんだから嫌でも会うだろうが……………」

「言われてみれば確かに」

流衣はぼんと手を叩く。

場に間抜けな沈黙が下りたが、オルクスはめげずに言う。

「とにかく！ 手合わせはこれつきりです！ ここに訪ねてくるんじゃないですよ！」

「……後半は了承した」

「前半も了承しなさい！ クソガキ！」

切れたオルクスが暴言を吐くが、サイモンは涼しげに無視した。

流衣は疲労感を覚えて溜息を吐く。

「……分かりました。少し待ってて下さい。オルクス、無茶しちや駄目だよ」

「はい。無茶せずにあのクソガキをぶっ飛ばします」

「……………」

もういいや。なんか考えるのが面倒臭くなってきた。

流衣は口を出すのを諦め、怪訝そうにサイモンとオルクスを見比べているリドに言う。

「問題無しみたいだから、大丈夫だよ」

「……そうは見えないけどな」

リドもまた物凄く面倒臭そうに眉を寄せている。

やっぱり後で 悪魔の瞳イビルズアイの幹部って話しておくべきだろうか。

個人的にあまり話題にすくなかったのだが……。黙ってたせいでまた説教されるかもしれないと考え、流衣はますます気鬱してきた。

五十六章 手合わせ 2

「では、始め！」

冬空の下、ゴーストハウスの前庭にラズリードの声が高らかに響き渡った。

同時に翻る黄緑色と黒の衣。

初撃はサイモンの投げた三本のスローイングナイフだ。銀の軌跡が宙に走るが、オルクスは難なくナイフをかわした。ストトと軽い音をたて、雪の積もる地面にナイフが突き刺さる。

そこへ右手に逆手でナイフを構えたサイモンがオルクスへと肉薄する。サイモンが右手を左へと大きく振る。しかしその瞬間には、オルクスはサイモンの左肩に右手をついて宙でひらりと逆立ちをしていた。

軽業師のような動きにサイモンは眉を寄せ、地に着地したオルクスはそのまま身を沈めてサイモンに足払いをかけた。

「！」

サイモンの身体が傾ぐ。

そのまま転ぶかに見えたが、倒れかけながら体勢を立て直したサイモンは、バク転の要領で後ろに跳んでオルクスから間合いをとった。

そして、面白そうに唇をなめ、重心を落としてナイフを構え直し、再びオルクスに攻撃をしかけていく。

「……すごいな、リーダー。本気出してるのに、完全に遊ばれてる」
手合わせという名の決闘の審判役を務めているラズリード、サイモンの部下である 悪魔の瞳 の下っ端である青年は呆れたように

眩く。それに対し、ひらひらと黄緑色と黒が躍るのを見ながら、流衣はにこつと笑う。

「そりゃそうですね、オルクスですもん」

「うむうむ」

流衣の右隣でアルモニカが真面目くさった顔で同意すると、更に右隣にいるクレオが怪訝な顔をする。

「何でその一言で片付く？」

「だってオルクスなんですもん」

「うむ」

「……………」

ごく当然と返す流衣とアルモニカの返事に、クレオは沈黙する。突っ込む気を失くしたようだ。

サイモンがオルクスに傷一つつけられたらサイモンの勝ち。

制限時間は三十分。

そういうルールで始まった“手合わせ”だった。

初めは客達には内緒にしようと思ったが、アルモニカが外の騒動に気付いた時点で目論見は外れ、今に至っている。

魔法学校一の問題児の決闘を一目拝もうと、貴族三人組も外に出てきてしまった。

娯楽の少ないこの世界、皆、本当に決闘見物が好きらしい。そう聞いてはいたし、喧嘩があるとすぐに野次馬が群がるのを見ていたこともあったが、ためらいなく見物に行く様子を見ると感心してしまう。まあ、見るだけだったら流衣もこっそり見てしまう気もするので、咎める気はしないけれど。

ガン！

サイモンの蹴りがオルクスにヒットした。腕を眼前でクロスさせ

て衝撃を殺したオルクスだが、軽く後ろに吹き飛ばす。

(ど、どれだけの威力がああ蹴りに……！？)

流衣の身に戦慄が走る。

前はサイモンが油断していただけで、実際は本当に強いようだ。

多分、あの蹴りを流衣がくらったら骨折を覚悟しなくてはいいと思う。未恐ろしい少年である。

「ほう、なかなかやりますね。その年齢でこれは、ちょっと問題有りな氣もしますが……」

後ろに下がって間合いをとり、しげしげと呟くオルクス。

流衣も激しく同意だ。

サイモンは手の中でナイフをくるくると回しながら、ちらとオルクスを見る。

「カラス族は戦闘を身に着けて育つ一族だ。俺も例外じゃない」

「数の少ない亜人は大変ですねえ。カラス族といえば、北部に居を構える少数派ですし」

「……………」

「しかも亜人は身体能力に特化している反面、魔力の少ない者が多いですものね。余計に大変でしょう」

「…………… やけに詳しいな」

ぽつりと呟くサイモン。金の目に猜疑が浮かぶが、オルクスは悠々と返すだけだ。

「知識なら豊富なもので。魔法を使うなら、獣人が一番で、その次が人間ということも知っています。とはいえ、発展と応用に特化しているのが人間なので、人間の方が魔法使いは多いですけど」

流衣はアルモニカを見る。

「そうなんだ？ 初めて聞いたな」

「ワシもじゃ。獣人は兵士職につく者が多いからの」

アルモニカ言葉に、オルクスは頷く。

「その通りです、アルモニカ嬢。獣人は魔法など使わなくても十分に暮らしていけるのです。そのことこそが、種の優位性を示してい

ます」

丁寧に教えるオルクスに対し、アルモニカは悪寒でも感じたようにぶるると身震いする。

「そのアルモニカ嬢というのをやめて頂けぬか。気色悪い」

「……………」

オルクスは無言でうなだれた。

前にも言われて落ち込んでいたのだから、そう呼ばなきゃいいのに。

「種の優位性なんかどうでもいい。勝った奴が生き残る。そうだから？」

ぎらりと金の目を光らせるサイモン。

それに痺れたように部下のラズリードが思わずというように叫ぶ。

「リーダー、かつこいいっす！」

サイモンはうざったそうにラズリードを冷ややかに睨む。

「黙れ、ラズリー。殺すぞ」

「スミマセン！」

即座にラズリードは謝った。頭を勢いよく下げる動作付きだ。

オルクスとサイモンは再度向き直ると、再び勢いよく地を蹴った。

*

「お前ら、ちよつとそこ座れ」

リドの低い声が前庭に不気味に響いた。

手合わせはドロで終わった。というのも、前庭が無事では済まなかったのに切れたリドが乱入したからだ。

オルクスのかかと落としが地面にささって大穴をあけ、サイモンがオルクスを蹴り飛ばした衝撃で塀が一部壊れた。

何故それで二人して傷一つなくピンピンしているのか流衣には不思議でたまらない。

ともかく、そういうわけで切れたリドの風で吹き飛ばされた二人

は、雪の積もる地面に座ったまま、啞然とリドを見上げた。

「おい、聞こえなかつたのか？　そこに、正、座、だ」

こめかみに青筋を浮かべ、噛んで含めるようにことさらゆっくりと言ひ、リドは自身の横の地面を指差す。

「正座なんかするか」

「そうですよ」

口を揃える二人。

ブツンと何かが切れる音が聞こえた気がした瞬間、リドの周囲を風がビュオオと甲高い音をたてて渦巻き始めた。怒りに呼応して風の精霊が風を起こしているらしい。

「てめえら、借り物の家の庭を滅茶苦茶にしゃがって。当然、てめえらが修理するんだよな？」

ゴーストハウスにもし幽霊がいるなら、その幽霊すら裸足で逃げだすこと請け合いなりドの迫力に、オルクスだけでなくサイモンまで気をのまれたように黙り込む。

「な？」

返事を促すリド。

前庭破壊の首謀者二人は無意識に頷いていた。

「よし。終わるまで帰れないと思え。オルクス、てめえは終わるまで家に入れないからな」

しっかりと念押しすると、まだ風をヒュウヒュウ吹かせながら、リドは屋敷内に戻っていった。

流衣はアルモニカとぶるぶる震える。

「こ、こここ怖あーっ」

「鬼じゃ。本物の鬼を見たぞ！」

そんな二人の横では、貴族三人組まで怒りに当てられて硬直して

いる。

「お嬢様、本当、説教されないようにお気を付け下さいませね」

顔色の悪いサーシャの言葉に、アルモニカだけでなく流衣もぶつぶんと頷いてしまったのは言うまでもない。

五十六章 手合わせ 2 (後書き)

思ったより短くなってしまった。

あと、章タイトルを「手合わせ」に変更しました。
第九幕はここで終了です。

幕間 9

「……サイモン」

後始末を部下に押し付け、単身、魔法学校に帰ったサイモンは、男子寮の裏にある池の近くを通りがかった時、名を呼ばれた。無言で振り返ると、池の周り、ちょうど木陰になっていて寮からは見えない位置に少女が一人立っている。

サイモンより一つ年上の少女は、緩くウェーブをえがいた腰まである薄桃色の髪に小さな薔薇の飾りがついた銀製のカチューシャをしていて、それが空気の薄い彼女の控え目そうな見た目によく似合っていた。まあそんなことはサイモンにはどうでもいいのだが。伏し目がちな橙色の目は、サイモンの足元を見つめる始末。見るからに気が弱そうだ。

こういう部類の人間がサイモンは嫌いだったが、教祖に学校で見かけたら宜しくと頼まれている手前、無下には出来ない。

そう、この少女もまた、サイモンと同じく魔王信仰を掲げる 悪魔の瞳 のメンバーの一人だ。

「シエリカ、何か用」

そっけなく問うと、シエリカはこくと小さく頷く。

「使い魔で、見てた。あの噂の子と、随分親しいみたい。……なんか、変」

「何が言いたい」

「……別に。足元すくわれるんじゃないかって心配してる、だけ」
ぽそぽそと呟くように言うシエリカを見ていてイライラしてきたが、なんとか堪える。

この女は、没落貴族で、借金のかたに親に娼館に売られかけて、そこを教祖に助けられた。教祖が実家に援助し、学費まで出してい

るのだ。だから親や貴族社会に失望していて、助けてくれた教祖を妄信している。サイモンから見れば目障りな小物だが、教祖の為になる人材だから邪魔扱いは出来ない。

「ふん、俺がとちるわけがないだろ。余計な心配をするな、お前の仕事に俺は絡まない。この辺りに潜んでるネルソフの炙り出しが今の任務だからな」

シエリカはちらとサイモンを見た。

「ネルソフ、いるの」

断定のような疑問。

「まだ分からねえが、教祖様が言うんだから間違いない。何が狙いか見極め次第、こっちで潰しとく」

「……そう。教祖様の言葉なら信憑性が高い。分かった」

サイモンの言葉は何も説得力を持たないらしい。またイラッとしたが、耐える。

「お前こそ、何かへましてないだろうな」

ふるふると首を振るシエリカ。

「問題無い。貴族達に混迷を。教祖様のお考え通りに」

何かの相言葉のようにシエリカは呟く。

「次の週末は白の文学祭。私には都合が良い」

サイモンはシエリカに背を向ける。

「そうか、何も問題ないならいい」

が、数歩歩いた所で振り返る。

「だが、失敗した時は覚悟しろ。証拠もろとも俺が始末してやる」

「大丈夫」

シエリカの表情が初めて動いた。僅かに笑みのようなものを浮かべる。

「教祖様に不利なら、私は自分から消える」

神を仰ぐような盲目的な言葉に、サイモンは悪寒を覚えた。

この女の何が気に入らないのか、初めて気付く。

こいつには個という感情が欠けているのだ。

頭の中で要注意人物に入れておく。こういう奴は、一歩間違えれば教祖に災いを運ぶだろう。そうなりそうならば、こちらで始末しよう。

「ああ、そう。そうしてくれたらこっちも楽だ」

そう返し、あとは振り向かず、その場を去る。

シェリカの温度のない視線が追いかけてくるような気がし、自然と足を速めていた。

幕間9（後書き）

味方にも容赦ないサイモン君です。

人物関係がごちゃごちゃしてて非常に書きにくい……。でも学校なのに人が少ないのもどうだろうと思うから、出しているよ。

五十七章 情報収集 1 (前書き)

第十幕 あらすじ

助手として働きだして二週間目。未だ事件の手掛かりを掴めない中、情報収集と日々を送る流衣。そんな折、新たな犠牲者が現れて……。

魔法学校で助手として働き始めて二週間目の光の曜日、先週と同じく助手の仕事と聴講を終え、セトの研究室に向かっていたら、やや慌ただしげな足音が後ろから追いかけてきた。

「助手サン！」

足を止めて振り返ると、流衣を呼びとめた少年は少し表情を明るくした。

彼は、流衣が魔法学？を聴講している時の隣席であるファリド「エネという外国人だ。」

耳飾りや首飾り、指輪とあちこちにつけたじやらじやらとしたアケセサリーと猫っ毛の金髪が、褐色の肌に映えて派手そうだが、やや垂れ目がちな赤茶の目や低めな鼻のせいか大人しそうな性格に見える。いや、物静かで真面目そう、と言い変えておこう。同年代くらいな気がするが、ひよろつとした痩せ型なのに身長があるから判断出来ない。流衣より頭半分は大きい。

「何か用ですか？ ファリド「エネ……さん」

「君」か「さん」か悩み、もし貴族だったら面倒なので「さん」付けで呼ぶ。

「ファリドでいいヨ」

ファリドは左腕に抱えた本を、櫛の杖を手にした右手で支え直しながら言う。声も落ち着いたトーンだ。

「ね、もし時間あったら、昼食後、昼休みに中庭に来る、ない？ スコシ話したい」

「来る、ない？」っていうのはつまり、「来ない？」なんだろうなあ。流衣は心の中で訂正を入れつつ、特に問題もないので頷く。「いいですけど、中庭って傘のついたテーブルが並んでる所ですよ

ね？ 僕が使っていていいんでしょうか」

「問題ない。オレも平民、でも、使ってる」

やや片言の言葉で、ファリドは薄らと笑みを浮かべた。表情が読み取りにくいのが、笑っているのだと思う。

「じゃあ、昼食後に、また。この学校、留学生と話す人、少ない。助かる」

ファリドは片手を軽く上げると、食堂のある方へと足早に去って行った。

流衣はその背を見送りつつ、一人ごちる。

「留学生だったのか。学生の間でも格差あるのかな、オルクス」

『あの言い分ではそのようですね。隣席になった坊ちゃんと友人になりたいのでは？』

言葉の通じない土地に勉強に来たのに、その学校で親しい人がいないのなら、貧相な助手少年でも話し相手に選んだとしてもおかしくはないのかもしれない。

お弁当を食べ、簡単な雑用をしてから約束の場所に行くと、ファリドと似たような見た目の色をした二十代程の青年侍従が茶の席をセッティングしていた。

侍従はモレクというらしく、使用人としてついて来たファリドの年上の友人で、ファリドと同じくルマルディー王国の風土を学びに来たらしい。

それで、テーブルについた流衣が二人はどここの国の人なのかと問うたら、大袈裟に驚かれた。

「え？ 見て分かる、ない？ シルヴェラント国だよ」

「そうなんですか」

「アナタは、どこ出身？」

「名前のない小さな島国です」

流衣は堂々と嘘をついた。あとはいつものように、魔法の実験ト

ラブルで飛ばされた話をする。面倒事に巻き込まれない為とはいえ、だんだん慣れてきた気がするが、やはり嘘についていることで良心は痛む。

「だから、セト先生の、助手？」

「ファリドは驚いた顔をしたが、すぐに納得した様子を見せた。」「そうです」

ストロベリージャム入りの黄葉茶を飲みつつ、流衣は頷く。食後にちょうどいい、ほんのりと甘いお茶だ。

「ところで、どうして僕と話したかったんですか？」

流衣の問いに、ファリドはやや眉を寄せた。

「その話し方、分かる。この国の親しい人達は、もう少し、“ください”……？ “柔らかく”？ “簡単に”？ ええと、話す」

「くだけで話す？」

「そう、それ」

思わず指摘すると、ファリドはうんうんと頷いた。

「シルヴェラントの人、隣人を友として大事にする。席が隣りでも同じ。もし良いなら、くだいて話す、いい」

「くだけで話す、ですよ。うーん、まあいいですけど」

「それ、くだけで話す、ない」

「分かったよ」

重ねて指摘され、流衣は折れた。望み通り“くだけで話す”と、ファリドは満足げに頷いた。

「故郷では、黒い目は、災いを弾く色といわれてる。隣人が黒目で、オレは運が良い」

「はあ……」

よく分からないが、シルヴェラント人は迷信深いのだろうか。

「まさかそれで話したかったか？」

「それもある。でも、さっきのが大きい。それに、ここの貴族は冷たい。シルヴェラントには王はいるけれど、貴族はいない。どうしても冷たくされるか分からない。でも、アナタは平民だから、気が楽」

「じゃあ、王様以外はみんな平民なの？」

「ファリドは頷き、睡蓮の絵が描かれた白磁のカップを傾けた。

「平民というより、民で、部族。シルヴェラントは砂漠ばかりで、四つの部族がいて、それぞれオアシスを、面倒見る……いや、管理する。王様はその中の一番大きなオアシスにある神殿にいて、皆のために祈って下さっている。争いが起きたら仲裁するのも王様の仕事。この国みたいに、血族でつながってる王様、違う」

「流衣が首を傾げると、ファリドは更に続けた。

「王様は、四つの部族から順番に出る。補佐も一つの部族で占めることはしない。あと、王様はトカゲ族の獣人が選ばれるのがしきたり」

「流衣はだんだん訳が分からなくなってきた。

「ええーと、つまり、トカゲ族が偉い？」

「違う」

「え、違うのか。」

「トカゲは故郷では聖なる神の使いなんだ。だから、神に祈るには一番ふさわしい」

「ああ、なるほど」

「つまり、貴賤のない土地だが、王様はトカゲ族で、政治をしようとより司祭のような位置の人らしい。」

「偉いのは、武器を持って勇敢に戦う人。だけど、それと同じくらい魔法使いは尊敬される。だから、オレみたいな国費留学生は、この国に魔法の英知を授かりに来る」

「え、何で？」

「シルヴェラント人は魔法を使えない人が多い。だから魔法の知識がない。この国は、魔法に長けた人が多いから、学ぶのに最適」

「そうなのか。外国のことまで詳しくないので、目から鱗が落ちる話ばかりだ。」

「助手サン、もし良ければ、隣りの席のよしみで手助けしてくれないか。言葉が変なら、正す、嬉しい」

「それくらいなら構わないよ。じゃあ早速。それを言うなら、“正してくれると嬉しい”だよ」

「分かった。正してくれる、嬉しい。いい？」

真面目に頷いて微妙に間違っただけで、流衣は思わず吹き出した。

ところどころ言葉遣いがおかしいが、大部分は話せているのだから、少し指摘すればすぐに上達しそうだ。きっとかなり頭が良いのだろう。

「正してくれる“と”嬉しい、ね。あと、僕のこと流衣でいいよ。助手さん”じゃなくて”

ファリドは指摘された文を何度か口の中で呟き、やがて納得すると、次からそう呼ぶと答えた。

「ルイ、さつそくあちこちで取っ掛かりが出来ているようだ。実に頼もしい限りだ」

机に本を積み重ねながら、セトが機嫌良く声をかけてきた。

セトの研究室でプリント整理や床の本整理をしていた流衣が振り向くと、セトが書類を右手で持ち上げながら言う。

「中庭で茶会をしていたら。見かけたぞ。一年のレヤード家臣三人組といい、留学生といい、果ては悪童サイモンとも知り合うなんて流石だな」

誰のことを指しているかは何となく分かるが、サイモンという下りには否定しておく。

「サイモン君は、ここに来る前から知り合いなだけです。親しいわけじゃないです、そんな恐ろしい……！ クレオ君達はたまたまで、ファリド君は隣の席ですよ」

「私の見解では、サイモンが怪しいと思うのだがね。まあ、生徒が例の薬を流通させるなら、だが」

「そうですね……？ サイモン君なら、気に食わない相手に薬なん

て使わずに、自分でどうにかしそうな気がしますけど……」

有言即実行なだけに、正体を見せずに暗躍する事件の犯人とサイモンでは性質が違う気がした。とはいえ、否定は出来ない。何故ならサイモンは 悪魔の瞳 の幹部だからだ。教祖が言っていたように世間を騒がせることが目的なら、騒ぎにならず隠蔽されているとはいえ、ほとんど成功しているといえる。

「ふむ。一理あるな」

セトは顎に手を当て、短く息を吐いた。

「それに、サイモン君絡みで、オードという貴族に目をつけられちゃって……。散々です。出来ることなら関わりたくないです」

切実に言うが、セトの返事はにべもない。

「君は助手なのだから、関わりたくないなら自分で立ち回りなさい。教師と違って、その辺の自由はきく」

「……ですよ」

「まあ君の気持ちは分からなくはない。生徒には公平に接するようになっている私でも、彼は苦手だ。この学校で起きるトラブルの中心には、八割の確率で彼がいるからね……。彼は平民だが、自分より弱い者をけなした目で見るからな。平民を下に見る貴族が、平民に侮辱されたと衝突が起きるわけだよ、全く。面倒だよ本当に！」

大きく嘆息するセトを見ながら、流衣は単純な疑問を覚えた。

「それだけ問題を起こしているのに、退学にならないんですか？」

「ああ。学校内では口喧嘩で済んでいるからね。敷地外のことには学校側はいちいち関与しない。生徒同士のことなら口も出すが、貴族が雇ってけしかけたごろつきと、それを撃退しての騒動まで面倒をみる気はない。あの怠惰な校長が、重い腰を上げて対処する程ではないってわけさ」

セトは頭が痛そうにこめかみに親指を押し当てる。あの校長が……と憎々しげにうなりだす。ゴーストハウスの管理者であるヨーザみたいな反応だ。セトも苦勞しているのだろうか。

「ああ、そつだ。ルイ、少し雑用を頼まれてくれないか」

「いいですよ、何ですか？」

「うむ。この本を図書館に返却してきて欲しいのだ。ついでに図書館も見せてくるといい」

そう言つて、セトはずっしりした分厚い本を三冊、流衣に手渡した。受け取つた表紙に手が滑つて危うく足元に落としかけ、流衣はしゃがみこんで足に落とすのを回避する。そして抱え直すと、立ち上がった。少し持っているだけなのに手首が痛い。重すぎだろう。

「そういう重い荷物を持つ時は、浮遊の術だよ。中級の魔法だ。そういえばまだ教えていなかったな。明後日の講義はこれでもいいか」「じゃ、行つて決めます！」

ぶつぶつ呟いて次の講義の授業内容について検討を始めるセトに一声かけ、流衣は研究室を後にした。これを持ったまま考えが終わるのを待つているのは無理だ。

『坊ちゃん、今回はわてが魔法をかけて差し上げますよ』

そして人気の無い廊下に出るや、オルクスが浮遊の術を使つてくれたので楽になった。事情を知らない者の前ではただのオウムみたいに大人しいオルクスだ。大人しくするという約束を守ってくれていて嬉しい。

「ありがとう、オルクス。さあ運ばなきゃ」

宙に浮かんでいる本に左手を添えて運びながら、流衣は足を踏み出した。

図書館で本を返却した足で、そのまま図書館内を見学することにした。いい本があつたら貸りて行こう。

「広いな……」

正方形の形をした吹き抜けの図書館では、重厚な石造りの中央の床に、屋根のスタンドグラスで飾られた採光窓から零れた柔らかい光が落ちてゐる。光が落ちる所にだけ観葉植物が置かれ、影になる周囲に明かりの魔法道具が置かれた一人掛けの閲覧席が並び、四方

には本棚が林立していた。二階から四階まで、壁には本棚が埋め込まれ、その前にはテラスのような廊下が張り巡らされている。上の階に行く階段はがっしりした檜材で、焦げ茶色で統一されているインテリアの為に落ち着いた空気を作りだしていた。

「魔法学校なのに、魔法のエレベーターってないんだね……」

階段なのにちよつとがっかりした。四角い板があつて、そこに乗つたら魔法陣が光つて、それで二階まで行けるなんていうファンタジーな展開にはならないらしい。

『エレベーターって何ですか？』

オルクスが小首を傾げる。そもその問題のようだ。

流衣は知らないならいいやと小声で返した。

まだ授業中なので、館内には生徒はほとんど見かけない。いるのは白いマントを着た年上の生徒が数人程度。閲覧席に本の塔を築いて、紙に書きとめたり、頭を抱えて考え込んだりしている。教養科の上に三年ある研究科の生徒だろう。

（えーと、転移や召喚の魔法書は……と）

本棚をぐるりと見回す。魔法書や歴史書、植物や鉱物などの博物誌、物語などの分野に分かれているようだ。

司書の説明だと、助手の閲覧可能区画は二階までとのことだった。魔法書は二階だから、階段を上つてそちらに向かう。

転移魔法はセトが開発した魔法だからか、そんなに冊数はないが、召喚魔法は結構な蔵書があつた。比較的新しそうな基礎を纏めた本を一冊引き抜いて目を通す。

（ふーん、アルが前に言つてた召喚魔法の基礎になる物質転移って、昔は召喚魔法に区別されてたのか）

物の移動自体は昔から魔法が存在していたらしいが、人間や動物を移動させる魔法はなかつた。生きているもの相手だと、魔法が作用しないか、移動の負荷に耐えかねて内側から爆発するらしい。

流衣は顔をしかめた。どうか試した人間がいませんように。

物質転移は、目印から目印へ物を移動させる魔法で、その際に光

に溶けるような状態を見せるので、恐らく魔力で一度分解したものを再構築して呼び出しているのだらうというのが研究者の考えだ。

では今の転移魔法はどういものかというところ、風系統と記憶読み取りと伝達の術を組み合わせたもので、記憶にある映像を風の精霊に魔法で伝達し、それによって風の精霊が該当の場所まで送り届けるという、いわば精霊の補助により成り立つ魔法らしい。記憶があいまいだと妙な場所に転移される欠点があり、たいていの者は目印を用意してそこを思い浮かべるようだ。だからか、「風運びの術」と呼ぶ者もいるらしい。

（だから、一度自分の目で見た土地じゃないと転移出来ないのかな……）

理屈はなんとなく理解した。

（じゃあ、転移魔法で地球に帰ろうと思ったら、地球の場所を想像して、そこまで風の精霊に運んでもらうってこと？　そもそも地球に精霊っているの？）

先行きが不安になってきた。

アルモニカが作っていた、遠距離転移を補助する魔法陣は、魔力の補充と目印なんだろうとは思うが……。セトが神の園に残る召喚魔法陣を利用して、遠距離転移に組み込めないか研究しているというのがよく分からない。

今度は召喚関係の本を見る。概略を黙々と読む。

（ええと、召喚は、使い魔を呼ぶ魔法のこと、か。じゃあ勇者召喚は？）

勇者召喚について書かれた項目を見つけ、そこを見る。

（神様が勇者を召喚するのは、勇者を召喚する為のある条件があったて、それに見合った者を呼び寄せる形になっているのだらう、か。推測か。そうだよな、神様のしていることが理解できる人間がいるとは思えないし……）

だって神様だよ。人知を越えた存在だよ。あっさり分かるような単純なことをするだらうか。

(じゃあ何でレシアンテ様は僕に神の園を辿れなんて……)

召喚した対象しか帰せないってツイールカという女神は言った。だからおまけの自分は帰れないわけだ。

だが、それから分かるのは、条件指定があるとして、それで返還も出来るということだ。

(うー……ん?)

勇者の召喚をした土地である神の園を辿れということは、そこにある魔法陣が関係してくるのだろう。

(つまり、魔法陣は召喚と返還のどっちも使えるものってこと?)

地球から来た勇者が使ってた魔法陣を見つけて、それを使えば、似たような方法で帰れる……かも)

違う場所なら無意味そうな気がする。ただの勘だが。

流衣は溜息とともに本を閉じる。

(どっちにしる、セトさんの研究の閲覧は必要かな。それに召喚と転移の魔法の知識もないと帰れなさそうだ)

結局は、そこだ。

流衣は転移と召喚の基礎が書かれた本の中で、分かりやすそうな物を選ぶと、貸りるべく階段を下り始めた。

(それと、過去に召喚された勇者の記録も……あればいいけど)

貸出のカウンターに向かう前に、一階の歴史書コーナーにも立ち寄ることにした。

記録に残ってる分で、勇者が召喚されたのは十回。今回、川瀬達也が召喚されたことで十一回になる。その一回分は除いた十回のうち、ルマルデー王国建国後が四回だ。

魔王の出現の地はラーザイナ・フィールドのどこと決まっているわけではないが、何故かルマルデー王国の北部に多いようだ。

そして、魔王は小鳥や大木が意思を持ったものがほとんどで、人の姿をしていたという記録は三百年前に出現した一度だけだ。驚い

たことに両親のいる人間がたまたま魔王になったとか。どういう理由で魔王として宿るのかは不明だが、ラーザイナ・フィールドという世界に満ちた負の要素が形を成してあらわれるというのが定説らしい。

(えーと……伝説が書いてあるな)

流衣は歴史書に視線を落とす。

神殿が管理している託宣の言葉を綴った聖典の記録では、初めのうちは神達が地上に光臨し、魔王を浄化していた。しかし一度、強い力を持つ魔王が生まれて激戦となり、その影響で大地が荒廃してしまった。激しい戦いに疲れた神達は、休む為に天界にすることが多くなり、地上に光臨する回数が減っていった。

光臨する代わりに、神の声を聞くにふさわしい純真なる巫女を選び、託宣を与え、神達が浄化する代理として勇者を呼び出し、聖具を与えた。

(記録がなくても召喚された勇者がいるって分かるのは、聖具が代々伝えられている為か。始まりの勇者は異界の住人だと伝えられている、ね。異界って地球なのかな。他の世界かなあ。地球だったら、この人も可哀想だな。でも、もしその人が古代人だったらびっくりしたるうなあ)

ただし、始まりの勇者は召喚されたのではなく迷いこんできた異邦人だったらしいが。

神様と勇者と魔王の歴史はここまでにして、勇者が現れた土地について探す。封印の形式こそ、大昔から聖地としてあった場所に六大神殿が建っているだけで変わらないが、託宣の巫女が坐するカザニフで勇者召喚が行われるようになったのは、ルマルディー王国建国後かららしい。それより前は、と。流衣は、まるで聖地のように輝かしく記された土地の名のうち、異界から召喚された勇者の現れた土地を選んで読む。

（青の山脈の中の洞窟と、今のセナエ王国があるブロウサ森林地帯の遺跡と、今のルマルディー王国南西部の、海岸洞窟？）

流衣は三回程繰り返して読み、急に不憫になった。

（か、可哀想！ 急に呼び出されて、最初に見るのが洞窟！）
だが、笑えない。

流衣もこちらの世界に来た時は、視界が変わったと思って気付いたら、洞窟内にある遺跡にいたのだから。なるほど、黄昏の遺跡のような場所か。黄昏の遺跡は、召喚に使われた聖地である「神の園」ではなく、単なる聖地「神の庭」だそうだが。単なるというのも奇妙だけだ。

洞窟や遺跡なので、詳しい地名までは分からないが、そこまで行けば何か手掛かりがあるのかもしれない。

（あ、頭痛くなってきた……）

セトはこんな厄介な場所に残る魔法陣を研究しているのか。あのがつしりとした体軀は魔法陣探しの旅でもして身につけたのかもしれない。どこか肝が据わっているし、実はかなりの強者つわものだったりして。

（セトさんの研究で、何か分かればいいんだけどなあ）

これで駄目なら、神の園巡りだ。考えるだけでへこんでくる。

それには先に、魔力増幅剤についての情報集めからしなくては。

五十七章 情報収集 1（後書き）

あまりにも続きを書けなくてへこんでました。

説明多い上に分かりにくくてすんません。

あと章題がいいの思い付かなかったので、もしかしたら後で変更するかもしれません。

図書館からセトの研究室に戻ると、帰宅の許可が出たので、流衣は借りた本二冊を詰め込んだ鞆と杖を持ち、授業が終わって廊下に出てきた生徒達で騒がしい校舎を正門に向けて歩いていった。

「おーい、助手！」

大声で呼ばれて自分だろうか顔を見ると、廊下の奥の方にクレオが立っていた。ロイスやディオヌも一緒だ。

(今日は呼び止められる日だなあ……)

自分に何か用なんだろうか。流衣は疑問を覚えながら、クレオのいる方に歩いていく。

「どうかしましたか？ 課題の提出でしたらセトさんの研究室までお願いしますね」

今日は、セトが一年生に講義していたから、一年であるクレオが呼びとめた理由はそれだろうと思って口にしてみたが、クレオはやや膨れ顔で首を振った。

「ちげーよ！ なんだよ、まるで俺が課題提出遅れの常習犯みたいにつ」

ディオヌは澄ました顔でクレオに言う。

「何とぼけてるんですか、常習犯が」

「そうだぞ、クレオ。嘘はいけない」

訳知り顔でロイスが諭すと、クレオは幼馴染の二人をじろつと睨みつける。

「そこは庇うところだ！ 友達がいのねえ奴らだな」

流衣は三人の顔を見比べてから、おずおずと切り出す。

「ええと、違うんらしいんですけど。セトさんでしたら研究室にいますよ」

「ちげーよ、先生じゃなくて、お前に用なの、助手」

「僕ですか？」

流衣は目を瞬いた。

「魔法を教えてくれって言われても困るんですが……」

「いい加減、課題から離れる！」

しつこいと怒られ、流衣は肩をすくめる。何で急に怒るんだろう。

「す、すみません！」

びくつとして一步下がると、ディオヌとロイスがしらけた目をクレオに向けた。

「最低ですね。平民相手にむきになって。まるで弱い者虐めしてるみたいじゃないですか。私達まで仲間と思われては迷惑です、離れてくれませんか」

「そうだぞ、クレオ。下の者にこそ手を差し出す。これがレヤード候の教えだろう、ほんと最低だな。あっち行けよ」

「お前らな……!!」

クレオの眉が寄る。

こういう時だけ仲良くなりやがって。そううなってから、苦々しく一言謝る。

「あー、悪かったな。これから“壁の外”に行くつもりなんだ。知ってるか？ 白の文学祭で公演する劇団が滞在しているんだそうだぜ。どういふのか見に行くんだ」

「ボルド村に？ 今からですか？」

そういえば一週間近く移動劇団の面々には会っていないなと考えつつ、平日は正門の開門時間は16時から18時までの二時間だけなのに、行って戻る時間があるんだろうかと考える。まあ劇団をちら見する程度なら間に合うか……？

「そ。暇ならお前も来いよ」

いい笑顔で遊びの誘いをしてくるクレオ。流衣はぽかんと見返しつつ、脳内で呟く。

（あれ？ もしかして意外に友達だと思ってくれてるのかな。ただ

の助手か、アルのおまけくらい扱いだと思つてたけど……)

その疑問はすぐに解消された。ロイスの一言で。

「使用人を連れていくと面倒なんだよ。でも間に入る人間がいないと、俺達だけだと平民つてすぐに怯えるからな」

なるほど、緩衝材かんしゅうざいが……。

納得したが、あまり嬉しくはない。だがこの後が暇なのも事実だ。元々嘘が得意ではない流衣は上手い断り方を思い付かず、仕方なく頷いた。

「構いませんけど、僕じゃ護衛代わりにもなりませんよ?」

一応、念の為に言つと、三人は口を揃えた。

「期待してないから気にするな」

「期待してないから大丈夫です」

「元々期待してねえよ」

三者三様、表現は異なれど言っていることは、期待していない、これに尽きた。

いや、分かっているが、そんな力いっぱい肯定しなくても……。がつくりする流衣に、オルクスが追い討ちをかける。

『わてがおりますから、大丈夫ですよ』

とても誇らしげに言い切られ、流衣はアハハと苦笑しつつ「ありがとう」と口にする。オルクスにも戦力に見られていないのは明らかだ。戦力に数えられても困るけれど……。

「これから外に行くのか?」

背後からの問いかけに、うなだれていた流衣は驚いて背筋を正した。後ろに誰かいたのに気付かなくてびっくりした。

「え?」

振り返ると、乗馬服姿の美少女　いや、今は呪いで女の子になっているデイルがいた。腰に細身の長剣を提げ、乗馬服の上に黒いポンチョのようなマントを羽織っている。凛々しくて格好良い。今は女子なのに。

学校で会ったのは初めてだ。

「デイ……」

ついディルと口走りかけた時、ディルの後ろからディルの婚約者であるイザベラが顔を出した。

「「ディナ様」、ですわ。うふふ」

口元に綺麗な桜色の人差し指を当てて、内緒話をするみたいに魅惑的に微笑む。可愛らしい笑みに流衣は顔を赤くし、思わず数歩後ろに下がった。

「……イザベラ嬢!」「」

クレオ達は急に居住まいを正す。

「ご機嫌麗しゅうございます、イザベラ嬢」

ディオヌが右手の平を左胸に当て、やんわりと礼をする。他の二人も同じようにした。イザベラもスカートの裾をつまんで可愛らしく貴婦人の礼を返す。

「ご機嫌よう。ふふ、三人とも、今日も一緒なのですわ。仲が宜しくて羨ましいですわ」

「い、いえ。そんな……たまたまですよ。ははは」

何故かロイスが照れて後ろ頭をがしがしかいている。

「何照れてんだよ、お前」

そんなロイスの脇腹を、クレオが左肘で小突く。うるさいと小声で言って睨むロイス。

「ディナ嬢、どうかしたのですか?」

長めの前髪をした茶色い髪の少年が横合いから現れ、ディルに問う。

「ヴィル様、いえ、彼を見かけたので声をかけたのです」

「彼?」

そう言って、少年は首を傾げる。流衣と同年代くらいの小柄な少年だ。

「ルイ、この方はヴィル・オースティン・ヘルマン子爵様だ」

「オールドリッジ先生の助手さんですね、どうぞよろしく」

にこっと柔らかい笑みを浮かべる少年。

なんだかその穏やかな態度といい、声といい、どこかで会ったような気がする。

流衣はまじまじとヴィルを見ていて、ふと前髪の隙間からアメジストのような青紫色の目が見えた瞬間、誰か分かって口をぱくぱくさせた。

「……………！」

思わずヴィルを、いや、茶髪の鬘を被っているヴィンスを指差し、デイルの顔とヴィンスの顔を交互に見比べる。

「……………！！！」

流衣は無言のまま目でデイルに訴える。なんで王弟殿下がここにいるの。というか何してるの変装なんかして。っていうかデイルはともかく何で名前が違うのさ。

「な、な、何で…………？」

「む？ こないだ話しただろう？」

「聞いてないよ！」

思わず必死に言い募ってしまう。

「僕が聞いたのは君と君の先生の事情だよっ！」

「そうかそうか！ それは私が悪かった。すっかり話すのを忘れていたようだ」

豪快に笑っているデイルの横で、流衣はすっかり狼狽気味だが、件の少年はくすくすと楽しげに笑いを零している。

「あなたが気付かなかったのなら、僥倖です。また今度、ゆっくりお話ししましょう。それから、前みたいな話し方で結構ですからね」

「そ、そう…………？ じゃあ、また今度」

優しい笑みにつられ、へらりと笑い返す。

二人の様子を見たイザベラもふんわりと微笑み、思い出したように、鈴の鳴るような可愛らしい声で問いかけてくる。

「それで、先程のお話ですが。これから外へ？」

「はい！ 劇団をこっそり見に行こうかと」

ぴんと背筋を伸ばしたクレオの言葉に、イザベラは両手を合わせ

て目をキラキラさせる。

「まあ、こつそりだなんて素敵ですわね」

その仕草に、クレオ達三人はのぼせあがったみたいに顔を赤くする。

(もしかして、この三人のアイドル的位置の人のかな)

あんまり分かりやすいので、流衣は不思議に思った。確かにイザベラは砂糖菓子みたいにふわふわした可愛らしい少女だが、流衣から見ると皆外国人なので、どの人達も人形みたいに綺麗に見えるからクレオ達程ではない。むしろ、イザベラみたいな人が微笑んだりすると、神聖な存在に見えて近付いたらいけないような気がするのだ。お陰で無意識に距離をあけてしまう。

「君達だけで行くのか？」

デイルの問いに、流衣は判断出来ないのでちらりとクレオを見る。視線の意味に気付いたクレオは頷く。

「ええ。門前までは馬車を使うつもりですが」

クレオは首を僅かに傾げ、慇懃にデイルに問う。

「ところで、もし宜しければあなた様のお名前を伺いたいのですが。我が領主一家の姫様にそっくりですし、もしや縁がおりなんではないか？」

その問いには、イザベラがやんわりと答える。

「ええ。先代の奥方様の妹の旦那様の姉上様のお嬢様ですわ。遠縁でいらっしやるそうよ。ディナ・エディアルド・サーデイ男爵令嬢とおっしゃるの」

「……？ 奥方様の妹の旦那様の……ええと、それはもうすでに他人では？」

「そうですね、ミリアナ様にそっくりでしょう？」

ミリアナというのはデイルの姉だ。どうやらデイルの容姿は姉にそっくりらしい。

「一応、血は細く繋がってらっしやるのだとは思いますが」

やや無理がありそうな話を強行突破で押し進めるイザベラ。しか

し彼女がやんわりと微笑んで言うと、全てが真実である気がしてくる。

クレオ達もそう思ったようで、やや不思議そうにしつつも頷き返した。

「面白い偶然もあるのですね」

ロイスの眩きに、デイルは「ははは」と笑いを零す。目が若干泳いでいるのといい、いつばれるかと冷や汗ものみだ。

「と、ところでルイ。町の外に出るにあたり、リドは一緒なのか？」
デイルの問いに、流衣はあははと手を振る。

「まさか。リドは仕事だよ。それに僕ら、いつも一緒にいるってわけじゃないし。幾ら親友でも、ね」

「ふむ、そうか……」

何やら顎に手を当てて考え込んだデイルは、一つ頷くと切り出す。
「では、私も同行しよう」

流衣はきよとんとデイルを見上げる。哀しいかな、女の子でもデイルの方が背が高いのだ。

「デイ……ええと、ダイナもそんなに劇団を見たいの？ 来てるの、移動劇団スカイフローラなんだけど」

デイルは呆れたような顔になる。

「こないだみたいなことになっては困るだろう？」

「あー……、でも大丈夫だよ。今度は上手くするから。まだ完全に体力が戻ってないだけで」

「却下だ」

きっぱり切り捨てられて目を白黒させる。

「ちょ……」

「友人の心配くらいさせてくれ。では、半刻後に学生街の門前で。先にヴィル様をお送りしてくる」

ヴィンスは小さく笑い、問う。

「私も外とやらに行くのに同行したいと言っても、駄目と言いますね」

「当然です」

これにもきつぱりとデイルは返し、イザベラに綺麗な礼をとる。

「では、イザベラ嬢。私はこれで。ご機嫌よう」

「ご機嫌よう。また明日」

ヴィンスを促し、颯爽と踵を返すデイル。そんなデイルとヴィンスへにつこりと微笑んで、イザベラは優雅に手を振る。

ぽかんと見送りつつ、流衣は無意識に呟く。

「相変わらず男らしいなあ……」

「それ、女性に言っちゃ駄目だろ。……分かるけど」

なんだか微妙な顔をしたクレオが突っ込んだが、それを言ったらデイルがまた怒りそうだと内心で思う流衣だった。

ボルド村に着くと、村の中心にある広場で知り合いの姿を見つけた。

「おい、ナゼル君、ランス、サジエ！」

知り合いを見つけた嬉しさから、流衣は声をかけながら広場に駆けっていく。

地面に座り込んで何か話していた三人は、顔を上げ、おっというように微かに破顔した。

「久しぶり、お兄さん！」

ナゼルがびよこんと立ち上がったて手袋をはめた片手を上げる。

「ほんと久しぶりだな。少しは劇団に顔出せつつつたる！」

ランスが早速憎まれ口を叩く。

「ごめんごめん、仕事と引っ越して忙しくてさ。……うぎゃー！」

三人の元に辿り着く前に、雪の積もった地面で足を滑らせて転ぶそれを目撃した三人は痛そうに顔をしかめ、呆れた様子でこっちにやって来た。

「ほんとドジだなお前。頼りなさすぎだろ。まじで俺らより年上？」

「ランス、失礼だよ」

馬鹿にしながらも腕を引っ張って立たせてくれるランスと、そのランスの肩を軽く小突くサジエ。

「うぐぐ。ありがとう」

流衣は礼を言いつつ、服についた雪を手で払う。

「おじさんの助手ってそんなに大変なの？」

ナゼルのなにげない問いに、流衣は首を傾げる。

「そこまで大変じゃないよ。雑用だからね。でも敷地内が広くって、一生懸命慣れているところ」

「ふーん」

質問してきた割りに、気の無い返事を返すナゼル。

「ナゼル君、ランス達と友達になっただね」

三人を見回して言うと、ナゼルは照れたように頷いた。

「うん、この二人はとっても楽しいよ。ネイトと四人でよく遊ぶんだ」

「ネイト？」

「僕の友達。今日は風邪引いて寝こんでる」

「そっかあ」

もしかして、ナゼルに『平凡な顔だけど性格の良い人は厄介』っていうようなことを教えてたという父親を持つ友達だろうか。

「助手、雑談してないで行くぞ」

クレオが声をかけてきたので、流衣は三人を紹介する。

「あ、すみません。あの、この二人が劇団の子ですよ。ランスとサジエです。で、こっちのナゼル君は、セトさんの隣人さんで、ええとお弟子さんになるのかな？」

「弟子って何？」

ナゼルがきよとんとするので、流衣は簡単に教える。

「ええと、一人の師匠について、そこで学ぶ人のこと。ナゼル君でセトさんに魔法を教えてもらってるんでしょ？ だから弟子かなって」

「駄目だよ、師匠じゃ。おじさんは、僕の将来のお父さん候補その一なんだから！」

ナゼルの言葉に、流衣は目を丸くし、クレオ達三人は啞然とした。

「オールドリッジ先生は結婚される予定があるのか？」

「デイルがさらりと問うと、ナゼルはぶんぶん首を振る。

「違いますけど、お父さんになつてくれないかと思つて狙ってるんです。僕、お父さんがいないから、憧れてて……。母さんみたいに頼りない人には、おじさんくらいいっしょかりしてる人がちょうどいいと思うんですよね！」

両手の拳を握りしめ、熱をこめて主張するナゼル。

「うわあ、シフォーネさん可哀想……。あんまりな言いようだ。」

「えーと、その一つてことはその二もいるの？ 前に来てたあの貴族の人とか？」

流衣の問いに、ナゼルはむっとする。

「あんな害虫に、お父さんになつて欲しいわけないだろ！ あいつなら、あのスノウギガス騒動以来来てないよ。ざまあみろって感じにこつと笑ったナゼルの笑みがあまりに黒くて、流衣は背筋が冷たくなった。

流衣はナゼルの肩をがしつと掴んで、必死に言う。

「ナゼル君！ お願いだから、呪術的な方向にだけは進まないでね！ お母さんが泣いちゃうよ！」

「嫌だなあ、お兄さんてば。閻属性の魔法なんて勉強したくもないよ。それに、害虫退治はゴーホー的にするから平気！」

「あああ、そういう意味じゃなくてね……。！」
思わず頭を抱えてしまう。

この子、ほんとに十歳？ どれだけ大人びた思考してるんだよ！
泡をくっっている流衣をスルーし、ナゼルは貴族達の方を見て、頭を下げた。

「貴族様方、挨拶が遅れて申し訳ありません。この村に何の御用でしょうか？ 宿泊でしたら、手前の店が宿屋ですので、ご案内出来ますが……」

小さな少年が丁寧な言葉遣いで言うと、微笑ましい。しかしそれに対しどう思う様子もなく、クレオは自然に片手を上げる。

「いや、ここに滞在している劇団がどんなものか見に来ただけだ。気にしなくていい」

この言葉にランスとサジエが顔を見合わせた。
頭を低くしつつ、サジエが慇懃いんきんに問う。

「では、俺達の出番になりますね。劇団にいかような御用でしょう？」

「そんな畏まらなくていい。こつそり見に來ただけだから、騒がなくていいんだ。案内しろとも言わないから、放っておいてくれ」

「左様ですか。ですが、そういうわけにもいきません。劇の練習中ですので、見られては困ります。あなた方の心を楽しませる為に來たのに、どういふものか分かつたのでは面白くないでしょう?」

「なんだか慣れているような言い草でサジエが言つと、ディオオスが感心したように頷いた。

「確かに彼の言う通りですね。何が公演されるか分からないからこそ当日が楽しみといえる」

その通りだと思つたのか、クレオもやや不満げながら頷く。

「そーだな。せつかくここまで來たけど、楽しみ潰すなんて面白くないし」

からからと笑うロイス。

「ディオオンもたまには良いこと言うなあ」

「ディオオです!」

「うん、分かつてるよ。ディオオン、だろ」

「!?!」

ディオオが恐ろしい形相でロイスを睨むが、ロイスはどこ吹く風といった体で相手にしない。

「セト先生の情報手に入れたし、來て良かったなあ。結婚したらからかつてやるうつと」

「やめとけてってロイス。課題を山みたいに積まれたらどうするんだ。ただでさえ、予習してないと課題を増やす先生なのに……!」

「課題を提出しなくて課題が増えるクレオドル君に言われましてもねえ……」

「うるせえな、ディオオ。俺はお前らみたいに要領良くねえの!」

「あなたの場合、要領ではなく頭が悪いのです」

「なんだと! このやる!」

切れたクレオの拳が飛ぶが、ディオオはあっさり避ける。

「おやおや、短気ですねえ。訓練でしたらお受けしますが、喧嘩は

勘弁ですよ。反省文三十枚なんて冗談じゃない」

「安心しろ。これは喧嘩じゃない。訓練だ！」

「あははは、当たりませんよ」

蹴り技が繰り出されるが、それもひらりとかわすディオヌ。

クレオとディオヌのじゃれあいをロイスが呆れたように見る。

「おい、その辺にしとけ。雪積もってるんだから危ないぞ」

そつという問題だろうか。

流衣は胡乱な目をロイスに向けてしまう。

「うむ。なかなか良い筋をしているな」

そして、なんだかとても満足そつに、自分の領地の家臣達を見て首肯しているディル。どこかうずうずしているのは、いつもみたいに修行病が出ているせいなのだろうか。

というか、誰か止めようよ。

*

「そついや、これって何なの？」

クレオ達は放置して、流衣はナゼル達がしゃがみこんでいた地面を指差した。魔法陣が書かれている。木の棒で書いたみたいだ。

ナゼルがちょこんとしゃがみこみ、楽しげに魔法陣を木の枝の先で示す。

「こないだ雪だるまを作つてて思ったんだ。ああいう風に雪から人形になる魔法があれば、雪かきの面倒が減るかなって。それで試しに陣を作つてみたんだ」

「へえ……」

流衣から見ると、六芒星の中に円や五芒星や文字が書かれていてよく分からない。子どもの落書きみたいにも見える。

『素晴らしい！　なんて美しい式でしょう！　まるで歯車が噛み合うかのような精巧性！　本当にこの子どもは才能がありますね！』

左肩に乗っているオルクスは魔法陣を見て何やら感動した様子だ。ごめん、僕には分からない。

流衣が苦笑していると、オルクスは親切に教えてくれた。

『周りの雪をとりこんで、像を成す魔法陣みたいですよ』

へえ、だから雪だるまか。

「式は合ってると思うんだけど、発動しなくってさあ。どこが悪いんだろう」

ナゼルが首を傾げ、陣を見て、ああでもないこうでもないと言いだす。

『坊ちゃん、あそこの文字が間違ってます。綴りが……』

「ああ、これ？ ナゼル君、オルクスがその綴り間違ってるって」
流衣が魔法陣に書きこまれた文字を示すと、ナゼルはパツと表情を明るくした。

「あ、本当だ！ よし、これなら上手くいくはず！ 皆、離れてて！」

「うん、分かった」

「やっちまえナゼル！」

サジエとランスがさつと距離を取る。流衣達も魔法陣から離れた。白き雪の欠片集め、ここに像を成せ！ スノウ・フィギュア！
ナゼルの声とともに、魔法陣が青く輝き、周囲の雪を吸いこみ始めた。

みるみるうちに広場の雪のかさが消えていく。

「うわあ、すごい！」

「壮観だな」

流衣とディルが咳く後ろで、喧嘩していたクレオとディオヌも大人しくなってナゼルを見る。

しばらくすると雪はほとんどなくなり、茶色い地面が顔を出した。そして、魔法陣から青い光が立ち昇る。

次の瞬間、高さにして二メートル程の巨大な人の姿をした雪だるまが現れた。それも手足付き。顔はのっぺらぼうだが、おもむろに

口のような穴が出来、両腕を上げてうなった。

「グオオオオオ！」

居合わせた面々は、一瞬、何が起きたか分からなくて雪だるまを凝視した。

「……“雪像”ではなく、“スノウギガス”だな。あれは」
デイルが落ち着き払って呟く。

「そんな落ち着いて評価してる場合!？」
思わず突っ込みを入れてしまったが、突っ込んでいる場合でもない。流衣は原因のナゼルを問い質す。

「ナゼル君、なんでスノウギガスになってるの！ また怨念こめちゃったの!？」

「怨念つてそんなわけないでしょ！ お兄さんひどいよ！ こんなの作っちゃって、どうしよう！ またおじさんに説教される！」
頭を抱えて天を仰ぐナゼル。

皆がわめこうが騒ごうが、スノウギガスには関係ない。目にとまった獲物 ナゼルを踏みつぶそうと足を持ち上げる。

「こつちだ、少年！」

「わ！」

デイルが素早く動き、ナゼルの後ろ襟を引っ掴んで後方に退却する。

ずうんと地を揺らし、スノウギガスの足がさつきまでナゼルがいた位置にのめりこむ。

「何で？ 何で？ スノウギガスって、降り始めの雪から生まれる魔物なのに。この前のといい、納得いかない！」

小さくても研究者なのか、理屈が不明だと騒ぎたてるナゼル。

「少年、理屈はいいから、あれを戻す方法があるなら教える」

「僕の名前は少年じゃなくてナゼルだよ、お姉さん！」

「……教える」

お姉さんと言った瞬間、デイルが冷やかな気配を纏った。よく見れば、ナゼルの後ろ襟を掴んでいる手に青筋が浮かんでいる。どれだけ力こめてるんだ。怖い。

「え、何で怒ったの？ あと、戻し方なんか知らないよ！ 動かない雪像になるはずだったんだから、戻す必要ないでしょ！」

「確かに。では、あれを倒せば問題無しだ」

腹立ち紛れにナゼルを後ろに放り捨て、デイルは腰に提げた細身の長剣を抜いた。

わあと声を上げて地面に放り出されるナゼルをわたわたと受け止め、流衣も一緒になって地面に転びつつ、デイルに向けて叫ぶ。

「デイル……じゃなかった、ディナ！ スノウギガスは凍らせるといいよ！」

「それは良い考えだ」

薄い笑みを唇に乗せ、デイルは冷たい水色の目でスノウギガスを見据える。冷たい風が短い銀髪と黒いマントを揺らして通り過ぎる光を弾く白刃も、周囲の雪も、デイルのもつ玲瓏とした空気によく似合い、溶け込んでいた。いや、自然の方が飾りみたいだ。

デイルは剣先をスノウギガスに向け、呪文を唱える。

「水よ、舞い踊れ！ ウォータ・ラッタ！」

剣先にふわりと巻きつくようにして現れた水の塊を、剣を一閃して勢いよく飛ばす。

「グオオ！」

頭から水を被ったスノウギガスは一瞬よろめき、すぐに標的をデイルに移して飛びかかって来た。

猿のような動きで一瞬にして距離を詰め、デイルめがけて合わせた両手を頭上から振り下ろす。

「おっと！」

ハンマーのような一撃をかわし、後ろに跳んで間合いを取る。

流衣はナゼルを連れて慌てて後ろに下がりつつ、オルクスに頼む。

「オルクス、援護お願い！」

「了解しました！」

すぐさま肩から飛び立ち、オルクスはデイルの近く、宙空で羽ばたく。羽を思い切り振るようになった瞬間、バチリと何かが宙で弾ける音がした。

スノウギガスの周りに、まるで縄のように光の線が走り、スノウギガスの動きが止まる。

「水よ、かの者に凍れる鉄鎚を！ フリーズ！」

そこを狙って再びデイルが呪文を唱えると、先程水を被った場所からパキパキと音が聞こえ始め、スノウギガスの全身に侵攻していき、やがて氷の彫像が出来た。

抜き身の剣を手にしたまま駆けていき、デイルは横薙ぎに剣で斬り払った。斜めに切れ目の入ったスノウギガスの彫像は、半分から切れ、そのまま地面にぶつかって砕け散る。

「ファイア・エンド
火の終着点」

最後にデイルは人差し指をスノウギガスの凍った像に向けた。ボツと深紅の炎がたち、一瞬にして氷像は水へと変わる。

「よし、これで終わりだ。オルクス、手助け感謝する」

傍らで羽ばたくオルクスにもすっかり礼を言い、デイルは抜き身の剣を鞘に戻す。カチンと涼しげな音がした。

「怪我人はいないか？」

デイルはくるりと振り返る。騎士らしく、周囲の怪我人にも気を遣っている。言葉は端的だが、分かりやすい。

「いないよ。さっすが、デイル……ナ！ 強いね！」

危ない、危うくデイルと言いかけた。

「当然だ。修行を積んでいるからな。これはいい訓練になった。一緒に来て正解だったよ」

常に自分を高めることを忘れない姿勢は格好良い。今は女子だが、男前な女剣士といった感じだろうか。男らしすぎて女らしく見えな
いのは流石だ。

「すごいですね、デイル嬢！」

「ああ、貴婦人でこんなに腕の立つ方には初めて会いました！ 男前すぎて惚れそうつす。もちろん剣の腕に！」

ロイスが目を輝かせ、クレオが興奮気味に言う。

貴婦人と言った瞬間、デイルの眉間に皺が寄ったが、その後には付け足された「男前」という単語によって即座に機嫌が戻った。

「同じ学年のよしみです、良かったら今度手合わせ願えますか！」

ここでデートの申し込みでもすれば気障な貴族男性の出来あがりだが、クレオはやや斜め三十度くらいの方向性に物事を考えるのか、女性相手に手合わせを申し込みに行った。

デイルもデイルで満更でもなさそうだ。ふっと口端を上げて笑う。

「いいとも。ちょうどいいから腕前を見よう」

クレオ達三人は、将来、デイルの兄の家臣になるせいか、デイルの目が光った。密かに査定する気らしい。

「ありがとうございます！」

左胸に握った拳を当てる軍人じみた敬礼をして、礼を言うクレオ。悪くはないが、何かの間違っていている気がしてならない。

流衣は奇妙な劇でも見ている気分で、そんなデイル達を見守った。

「君達、そこで何をしている？」

急に声をかけられてそちらを見ると、訝しげな顔をしたセトが歩いて来る所だった。鞆を手に行っていることといい、学校帰りらしい。

「やけに雪がないし、それにこの魔法陣は……。周囲の雪を集めて雪像にする陣か。……ナゼル？」

セトを認めた途端、そろーっとその場から逃げだそうとしていたナゼルは、名を呼ばれてぎくりと立ち止まった。

一瞥で魔法陣の式を読み解いたセト。流石は権威ある魔法使いだ。教師の名は伊達ではない。

「どうやら実験していたようだが、結果はどうなったのだ？」

「え、えーと……」

目を泳がせるナゼル。怯えた様子で流衣の後ろに逃げ込んだ。

「ふむ、では第三者に聞こう。そうだな、クレオドール、君に訊こうか。正直に教えてくれたら、今度課題を忘れた時に免除しよう」

「はい。雪像にはなりましたが、スノウギガスになって暴れ出したので、こちらのお嬢様が退治して下さいました！」

素直にあつさり白状するクレオ。

ナゼルがシヨックを受けたようにクレオを見、セトの笑みが迫力を増したことにひるんだ。

「ナゼル、前にスノウギガスが暴れたのはいつだったかな？ 答えなさい」

「は、はい、おじさん。一週間前です！」

「そうだな。そしてその時に約束したことは何だったか覚えているか？」

「おじさんがいない時は魔法の実験をしない、……です」

尻すぼみな声で答えるナゼル。そんな怯えるナゼルにつられて流衣の心にも恐怖が浮かんできた。あの、怖いですセトさん。眼鏡の奥の目が笑ってません。口元だけです笑ってるの。あと妙に猫撫で声なのやめて下さい、かなり怖いです。ついでに、僕を間に挟むのやめて下さい！

セトが短く息を吸う。

ナゼルは元より、流衣やクレオ達までもつられて緊張した。

「この馬鹿者！ 一歩間違えば大怪我だ。君はそんなに家族に心配をかけたいのかね」

「ごめんなさいっ。雪かきの手間が省けたら、母さんの仕事が減って楽になると思ったんだ……」

しょんぼりと謝るナゼル。思いがけない理由だったせいか、セトは言葉に詰まり、はあと大きく溜息をついた。

「母親思いなのは良い事だが、約束はちゃんと守りなさい。君がい

い加減な大人になったら、君の母親が悲しむ」

「う……ごめんなさい」

「反省しているようだが、とりあえずシフォーネさんの所に行こう。きつちり叱られてこい」

「……はぁーい」

母親と聞いて首をすくめ、ややあつて渋々頷くナゼル。

「またな、ナゼル」

「明日は昼過ぎに来るよ！」

しよぼくれるナゼルに、ランスとサジエが声をかけ、ナゼルは軽く手を振ってから諦めた様子で宿屋に戻っていった。

「……なるほど。確かに先生が父親になったら良い感じだな」

デイルがとても得心がいった様子で言う。

「そうだねえ。ナゼル君の暴走止められそうだもんねえ」

流衣ものほほんと呟く。

まあそこはセト次第なので何とも言えないけれど。

*

アカデミアタウンの入口に入った所で、デイルやクレオ達と別れた。

「ナゼル君、上手くいくといいよね」

しんしんと雪が降る中、雪の積もりだした石畳の路面を慎重に踏んでゴーストハウスへの帰路に着きながら、流衣は肩に乗るオルクスにしみじみと話しかけた。息を吐くと空気が白く染まる。手袋をはめた手をすり合わせるようにしていると、オルクスがややずれた返答をくれた。

『そうでございますね。あの魔法、上手くいくといいですね』

「そつちじゃなくて、ほら、お父さん候補の方」

『ああ、あちらですか。あのセトという男、子ども好きなようですし、家庭を築けばいいですよ。あの子どもの父親になるかはとも

かくとして」

「そうだよー。そーいやオルクスって奥さんいないって言ったし、結婚しないの？」

流衣の単純な疑問に、オルクスは「ぶげふ」と盛大に変なくしゃみをした。通行人が奇異の視線を向けてくるくらい変なくしゃみだった。

「わ、わわわてのような魔物に、人間のような結婚なんていう概念は存在しません！ まあ、確かに、いい番がいれば考えないことも……。って、何言わせるんですか！」

珍しく動揺しているオルクスを、流衣はにやにやしつつ見る。

「えー、じゃあどんな人ならいいの？ 人っていうか、オウム？

魔物？ よく分かんないけど」

「わてより強い方なんていいですね！」

「……え」

流衣は言葉を止めた。

第三の魔物であるオルクスより上って、第一か第二の魔物ってことになる。候補、少なすぎじゃない？ そもそも、好みを訊いたのに、自分より強い人がいってどういう返事。

魔物の美的感覚は人間と違うんだなあと流衣は不思議に思った。

「わてより坊ちゃんはどういう方が好きなんですか？」

「ええっ」

急に話題を変えられ、流衣も僅かに動揺した。少し照れつつ、首をひねる。

「うーん、そうだな。一緒にいて楽しい人かなあ。一緒にいて怖い人はあんまり……」

「……ええ、と。まあ確かに、一緒にいて怖い人を好きになるのは難しいですしね。では見た目などはどうです？」

流衣は更に首を傾げた。

「さあ」

「さあ……」

「恋愛つて意味で人を好きになつたことがないから、分かんないな。そのうち分かるんじゃない？」

のんびりと返せば、少し残念そうにオルクスは首を振った。

『左様ですか。思春期真つただ中ですし、それも遠くないのでは？』

「そうだといいねえ」

とりあえず、元の世界に戻つてからだろう。そういうのは。今は帰る方法探しに必死過ぎて、そういうのまで目を向ける余裕がない。第一、この人は外国人で人形みたいにしが見えないから、ときめきめいたドキドキより、うわあ目があっちゃったよどうしよう！というドキドキの方が強いのだ。どこまでも臆病な気質である。

(……………?)

ちやうど交差点に差し掛かり、流衣は左を選ぼうとして、ふとすれ違う人に目がとまった。

黒い髪、金色の目をした青年だ。漆黒の衣服に身を包み、手にした金属製の杖についた飾りの鈴が、歩く度にチリンと揺れる。

雪降る静かな光景がよく似合う、静かな空気を纏った青年。

通行人は他にもいるのに、どうしてか目をひいた。

すれ違いざま、背筋がぞくりとして、流衣は思わず足を止める。

(なんだろ……………)

通り過ぎていく青年の後姿を見て、どこかおかしな点があるか探してみたけれど特に見当たらない。首を振り、帰路に戻る。

『どうかしましたか？』

オルクスの怪訝な声が脳裏に響く。

流衣は首を振る。

「うっん、なんでもない」

流石に口にするのははばかられた。

まるで幽霊みたいな人だ、……………なんて。

五十七章 情報収集 3 (後書き)

蛇足。

相変わらず流衣はどこかずれている。

久しぶりの更新。一部は書いていたけれども。

なんか何書いても気に食わない現象続いてて、やっと落ち着きま
した。のんびり行きます。

「麗しの姫君、どちらへ行かれる？」

「呪われた姫君、ここは人の来る所ではない」

「出口はあちらだ」

「帰りなさい」

「今すぐに」

口々に元来た道を示す妖精達に、フードを深く被った姫君は首を振る。呪いで老婆に変えられた哀れな姫君は、しわがれた声で、しかし決然と言うのである。

「私は帰りません、親切な小さき方々。この先にあるという、青の泉を見つげ出すまでは」

白の文学祭当日。

魔法学校の敷地内にあるホールで、移動劇団スカイフロアの演ずる『青の泉』を、流衣も一番後ろの一番左端の席で観劇していた。流衣のよく知る日本の体育館のように、ホールの一番前は一段高くなっている。その他は広いホールとなっていて、そこに椅子を並べている。学年ごとに座る範囲は決まっているが、席は好きに選べる。なんと二階席まである手の入りようである。

このホールは、観劇や音楽の観賞会に使われる他は、ダンスの練習場でもあり、学内パーティーを開く場所であったりと、多目的に使用される場所だ。もちろん、貴族が多いのもあって金がかかっており、煌びやかである。

そんな場所の一番後ろの一番端っこにいたので、劇は豆粒程度にしか見えない。だが、台詞や遠目からの雰囲気、流衣も流衣なり

に楽しんでいた。観劇の許可をくれたセト先生さまさまだ。

近現代の劇に慣れている流衣には少し物足りないけれど、それでも面白いとは思った。効果音や音楽までつけるのは、流石に小規模劇団では無理だろうから仕方がない。むしろ、そのような技が使えず、台詞や小道具だけでこれだけ面白いのだからすごいと思う。

劇は、『ルマルデー建国記』からの引用で、呪われた姫君が呪いを解く為に旅をする物語だ。青の泉という、呪いを解く祝福をもつ泉を訪ねる。なんとか呪いを解いた姫君は帰国するが、そこですでに五年が経過しており、愛する王子様は王となり、別の姫君を王妃に迎えていた。その上、呪いを嫌悪した父王にはすでに死んだことにされていて、悲嘆にくれた姫君は、旅を支えてくれた魔法使いと共に再び旅に出て、最終的には魔法使いと結ばれる。幸せはすぐ側にあるのだと知り、愛と慈悲の女神ツィールカに感謝を捧げて、終わる。

どこかで一度は聞いたことがあるような、そんな内容だ。

午前と午後の二回に分けての公演を、その日、流衣はしっかりと楽しんだ。

「面白かったねえ、オルクス」

観劇の後の高揚感にひたりながら、流衣が穏やかに声をかけると、オルクスは返事を返す。

『そうでございませぬえ、坊ちゃん。なんとという素晴らしい愛の物語！ ツィールカ様もさぞお喜びになられることでしょう』

かのオウム殿は、別方面の感激にむせび泣いていた。

滂沱の涙を流しているオウムを、すれ違った生徒が見て、ひそひそとささやきだす。「あのオウム、泣いておりますわ」「鳥って泣くのですねえ」「やつぱりあの助手、変わっているわね」などと耳が拾う。どうして流衣が変わっていると言われるのか不思議だ。

『“この世は愛よ。愛で全てが解決出来るの。そして、慈悲の心を

忘れてはならない。全てを慈しみ、全てを愛する。これぞ至上の救いの手。”そう、女神様はよくおっしゃっております。懐かしいです』

「は、博愛主義なんだね、女神様って……」
神様だし、博愛してくれないと皆困るけどさ。

あの女神様がそんなことを言うのかと、少し怪訝に思う流衣だ。面倒臭そうにしていたことしか記憶にないので。

むしろ慈愛という運命と生命の女神レシアンテの方がそれっぽい雰囲気だったのだが……。

「助手、待つにゃ」

正門を通り過ぎようとしたら、ふいに大門脇の控室から、二足歩行をする大きな黒い猫に呼び止められた。守衛であり門番でもあるニケだ。

「はい？」

足を止めると、ニケはぼてぼてと黒い毛で覆われた足を踏みしめて流衣の方に来る。小声で耳打ちした。

「校長が呼びびにゃ。いますぐ向かうにゃ」

「へ？ 校長先生が……？」

「いつたい、なんだろう。」

流衣は不思議に思ったが、急げ急げとニケが急かすので、よく分からぬままに追い立てられて小走りに走りだした。

「失礼します。校長先生、僕に何か御用ですか？」

久しぶりに訪ねた校長室には、スノウリード夫妻とセトがいた。相変わらず長椅子でだらけているグレースは憂鬱顔で、立ったままトーリドと話していたセトはひどく真剣な顔をしている。

緊迫した空気に無意識に背を正す。

「ああ、来たわね。こっちにいらっしやい」

「はい」

扉を閉め、招かれるままグレースのいる方に歩み寄る。

セトが流衣の方を見た。やや青ざめた顔には疲労がにじんでいる。

「……また犠牲者が出た」

セトがひどく沈痛な声を出して紡いだ言葉に、流衣は目を瞬く。

唐突な切り出しに、無言でセトの暗い灰色の目を見つめ返す。

犠牲者。

その言葉が意味するのは、つまり、魔力増幅剤による副作用を発症したという意味だろう。

「今度は、君も知っている生徒だ」

「え？」

思わぬ言葉に胸が騒いだ。

「……誰です？」

まさか、知っている生徒って。

アルモニカが真つ先に浮かび、それはないだろうと消去し、では他に誰がと考え、クレオやロイスやディオ又が浮かんだ。

「留学生の、ファリド＝エネよ」

玲瓏な声が、真実を告げる。

流衣がグレースに視線を向けると、グレースはこめかみに綺麗な指先を押し当てていた。

「もう、さいっあく。あたしの足元で、よくも好き勝手してくれるわ。しかも尻尾を出しやしない！ 忌々しいったら！」

むきーっと髪をぐしゃぐしゃ掻き回して悪態をつくグレース。

トードはグレースをちらりと見てから、流衣を見た。

「それで、あなたの方で進展があったのかお聞きしたくて呼んだのです。オールドリッジ教諭は進展はないと」

「僕の方も、全然です。馴染むのにやっとで……。リドやアルにも聞いてみますね」

罪悪感を覚え、うつむき加減に言う。

「すみません、全然役に立たなくて……」

「そんなにへこまなくていいのよ。あたし達で全然なのに、ぼつと出のあなたにあっさり解決されたらこっちがへこむわ」

グレースがぞんざいに宥めてくる。

「……ありがとうございます」

それでも落ち込んだ。

ファリドとは、今度から会話の練習に付き合うという約束をしていたのに。週一しか会わないとはいえ、隣の席だし、一緒に話したりしたのだ。留学生だし、もしかしたら意味も分からず事件に巻き込まれてしまったのかもしれない。

考え出すとキリがなかった。

「確認は済んだわ。ここまで来てくれてありがとう。今日はもういいから帰って休みなさい」

「はい。……失礼します」

グレースやトーリドとセトに会釈をし、流衣は退室した。

これはえらいことになってきた。

とりあえず、帰ってリドに話そう。今日は地の曜日で休みだから、ゴーストハウスにいて言っていたから。

五十八章 新たな犠牲者 1 (後書き)

少なめですが、更新しないよりマシかと思うので上げておきます。

「あれ、リド!?」

校長室を出て、ホール横を通り過ぎた時、出入り口にリドがいるのを見て、驚いてそっちに駆け寄る。

「今日はゴーストハウスにいるって言ってなかったっけ?」

「夕方からホールの後片付けって言わなかったか?」

逆に不思議そうに問い返された。

濃緑色の用務員の服装で、他の用務員と椅子を運び出している。

「聞いてなかったけど。……これ、どこに運ぶの?」

全校生徒が座るだけの椅子をどこから持って来たんだろう。不思議に思つての問いに、両肩に二つ椅子を器用に乘せて歩きながらリドは答える。

「食堂だよ。いつもはあそこに置いてる椅子なんだ。なんだ、手伝つてくれるんなら手伝つてくれていいぜ?」

遠回しに手伝えと言っているようだ。

用務員や侍女や侍従が手分けして運んでいる。大変そうだ。流衣はこの後は暇だから手伝おう。そうしたら早く仕事の件を話し合える。

「オーケー。手伝うよ」

「よろしく」

流衣は身を翻し、ホールに入って片隅に鞆と杖を置くと、他の人達に混ざって椅子を運ぶ手伝いをする。花柄の布張りをされた、背もたれ付きの椅子だ。しかもオーク材でそれなりに重量がある。非力な流衣がリドのようにして運べるわけもなく、一つを両手で抱えて運ぶ。

「あ、オルクス。僕、こっちの手伝いしてるから、その間にアルに

さっきのこと訊いてきてもらっていい？」

『了解いたしました』

オルクスは一つ返事で飛び立っていった。

そして、流衣が三往復目に差し掛かった所で戻って来て、あちらも進展無しだと教えてくれた。

（進展無しかあ。まあ、アルも友達作りから始めてたし、そんなものかな）

あとはリドくらいか。

いや、念の為、デイルにも変わったことはなかったか訊きに行くべきかもしれない。

『坊ちゃん、わてもお手伝いしますね！』

食堂に三脚目を運び終え、再びホールに戻った流衣に、オルクスが明るく言う。

「え？」

手伝い？

流衣がきよんとした時、オルクスは宙でホバリングしたまま、浮遊の術を使った。椅子が十脚、ふわりと宙に浮かび上がり、縦一列に綺麗に並ぶ。それを引き連れ、オルクスは出口から食堂へと向かって行った。

「おおー」

思わず拍手してしまうと、オルクスが出ていったのと反対にホールに入って来たリドが呆れた顔をした。

「お前が一番驚いてどうする」

「いや、驚くでしょ」

流衣はそう返しつつ、また一脚持って運んでいく。

（浮遊の術って便利だなあ。僕も覚えた方が良さそう）
ものすごく必要性を感じる。

オルクスのお陰でもものすごく仕事が早く終わったと、用務員さん

を始め侍従や侍女さん達にまで感謝されてしまった。

何故か流衣に声をかけてくるので、オルクスに言っておいて下さいと言ったら、変な顔をされた。使い魔の功績は主人の功績でしよう？ とすごく不思議そうに言われた。確かにオルクスの立場は流衣の使い魔だが、流衣自身は使い魔扱いをしていないので、変な感じだ。でも、一応丁寧にどういたしましてと返しておいた。あまり不審がられたくない。

それに礼を言われてオルクスが上機嫌だからそれでいいや。

「俺の方も進展無しだな。せいぜい見かけても、上級貴族が下級貴族を虐めてる現場とか、告白現場とか、そんなのかな。ああ、あと、悪戯してるのも見かけた。ちゃんと上にちくつといたぜ」

帰り際に寄ったアカデミアタウン内にある雪の雫亭という大衆食堂で、肉料理を口に運びながら、リドはにやりと笑った。

「なかなか濃い生活してたんだね……」

流衣は啞然とする。

飄々と雑事をこなしているようだから、何も問題は起きていないのだと思っていた。

「まーな。全部、出くわす前に避けてたから何ともねえよ。貴族のことには関わりたくねえし」

まあそうだろう。厄介事のおいがぶんぶんする。

「でもよ、ここまで手掛かり出ないってのも不思議なもんだよな。せめてこう、被害者に共通点とかあればいいんだが」

食堂の端っこの席だから、小声で話していれば、他の客の話声や食器の音などで話は聞こえない。

普通に食事をして会話をしているようにしながら、実際は事件の話し合いをしていた。

ビーフシチューをスプーンですくい、濃厚な味に少し重かったかなあとやや後悔しながら、流衣は考える。

そういえば、被害者については詳しく教えてくれない。貴族絡みだから仕方がないのだろうけれど、でも、魔力増幅剤なんても

のを望むのだから、きつと。

「魔力が低いのを気にしてる人ってことだろうけど……。でも、流通させてる人が学校内にいない場合は、どうなるか分からないよね」
「学校内で受け渡ししてるとは限らないってことか。それだとなかなか尻尾を掴めないのも頷ける……」

リドも首を僅かに傾げる。

なにか腑に落ちない様子で、眉間に指先を当てて、天井を睨んで唸りだす。

「なんか、気に食わねえな。四人目は、シルヴェラントから来た留学生ねえ」

「魔法を使える人が故郷に少ないから、学びに来てるって言ったよ。遠い所から来たのにこんなことになるなんて、可哀想だよね……」

……

「でもそいつ、友達いねえんだろ？」

「友達がいないかは知らないけど、貴族からは冷たくされるって言うってたね」

ますます気に入らなそうに眉を寄せるリド。

「おかしくねえか？」

「へ？」

何が？ 流衣は目を点にする。リドの言いたいことがさっぱり分からない。

「だってよお、そいつ、言葉が不自由で、知り合いも少なくて、どこから例のやつのお話を仕入れるんだよ。案外、普通に町で売ったり、もしくは形がそれっぽくないとかだったりしてな」

流衣は根本的な問題に初めて気付く。

薬だとかサプリメントだと聞いていたから、形を勝手に丸薬で想像していたが、そういえば実際の形を知らないのだ。

「あれってどういう見た目してるの？ 水？ 丸薬？ 粉？」

「俺が調べた分だと、黒い色をした丸薬だったな。潰す分にはいいけど、水に溶くのはいけないらしい」

「え、いつ調べたのさ」

「それでも俺、薬草学に興味があるんでね。俺が図書館に入るのは無理だから、本屋をうろついたりしてたんだ。そこで見つけた本にたまたま載ってただけだ」

見習い神官生活以来、リドはすっかり読書家になっている。

たまにリビングで本を広げて書き物をしていたが、自由にしていけれど勉強はちゃんとしなさいということで、グレッセン家からウィングクロス郵便ポートに送られてくる課題を片付けているだけだと思っていた。歴史ならオルクス、数学なら流衣が助言出来るので、たまに手伝っていたのだ。

「僕なんて召喚魔法と転移魔法の文献とか、歴史書とかばかり見てたのに……。なんかごめん」

二歳しか変わらないのに、ほんと大人だなあ。

すっかりへこんでしまう。

「お前にとつちや、それが必要なんだから仕方ねえだろ。ここに来るのが第一目標だったんだから、悪いことじゃない。それにちゃんと伝手も作れてる。落ち込む要素はねえ。俺はこういうのが向いてるだけで、つまりは向き不向きってわけだな」

あっけらかんと諭された。

うぐぐ。なんか、こうして話していると、リドはグレッセン卿に似ていると思う。相手を不快にさせずに納得させる話し方とか。

やや短気なところは、それはもうアルモニカとそっくりで、この兄妹は両親のどこからその短気を拾ってきたのか常々不思議ではあるが。言ったら怒りそうだから言わないけど。

「ありがとう、リド。あ、そうだ！」

流衣は良いアイデアを思いついた。

もしどこか店で手に入れたのだとしたら、あの人ならファリドの行動を知っているかもしれない。

「モレクさんに話を聞いてみるよ」

「モレク？」

「ファリド君付きの侍従さんだよ。故郷から一緒に来たって言うけど、ファリド君のよく行く場所とか、ここ最近の話を聞けるかもしれない」

「そりゃいい。そっちは任せる。俺は仕事が無い時にでも、町中見回ってみるよ」

そうして、リドはにっと口端を上げて付け足す。

「ほら見る、お前のやってることも無駄じゃねえんだよ」

「う、ほんとだ。ありがとう……」

リドは神官向きだ。頼れそうな兄貴分な見た目だし、実際に頼りになる。きつと実家の後を継いだら、良い相談役として信頼されそうだ。

そんな親友の足を引っ張るわけにもいかない。流衣も流衣なりに頑張ろう。

流衣は決意も新たに、明日の予定を頭の中で練るのだった。

五十八章 新たな犠牲者 2 (後書き)

またちょっと少なめですが、キリが良いので上げておきます。

翌日の光の曜日。助手の仕事と雑用を終えると、流衣はファリドの侍従であるモレクを探した。

主人が授業を受けている時だけ侍女や侍従が控えている待機室に顔を出すが、モレクはおらず、代わりにそこにいた侍従にモレクの自室を教えて貰ったので、そちらを訪ねていく。

貴族の子息子女が過ごす寮だ。たいてい、主人の隣部屋が侍女や侍従の自室となるらしい。女子寮には女性、男子寮には男性しか入れない為、そういう点を考慮して侍女や侍従を選んでいるらしい。考慮が難しく、異性の従者を連れてくる場合は、その従者は隣の宿舎にいるとか。

突然訪ねてきた流衣にモレクは驚いたようだったが、ファリドの話だろうとすぐに検討がついたようだった。訪問客が来るような部屋ではないかと前置きをし、モレクは部屋に入れてくれた。

そう前置きするのも最もで、寝台と箆笥とハンガー掛け、洗面用の盥などを置く台があるくらいの、簡素な部屋だった。宿の一人部屋くらいだろうか。落ち着いた色合いの緑色の壁紙があるお陰で部屋が明るく見えるなあという程度。

「ファリド君は隣に？」

「いや、あいつは医務室にいる。……私室だから、丁寧語じゃなくていいよな？」

一応、確認を取るモレク。褐色の肌を飾るような短い金髪は色鮮やかで、青色の目は青空みたいだ。空の下にいるのが似合いそうだ。二十代くらいの、ファリドよりも快活そうな印象のモレクは、印象通り、あまり貴族の学校の空気に馴染めないらしい。

「全然構いませんよ。僕の方もそっちの方が気が楽です。というか、

聞きたいことがあるだけなので、気にしなくていいですよ」

流衣がやや笑みを浮かべて困ったように言ったのだが、モレクは一脚しかない椅子を流衣にすすめ、客に茶を出さないのは礼儀に反すると、一度部屋を出て行った。すぐに戻ってきたその手には、茶器の乗った盆を抱えている。木製のコップを流衣に渡し、自分もコップを手にし、盆は箆笥の上に置く。

モレク自身は窓際の壁にもたれて立ち、思い出したように話を再開した。

「で、ファリドだが。さつきも言ったように医務室にいる。本来なら実家に連れて帰るべきなんだろうが、故郷までは四力月ちよつとかかるから、そういうわけにもいかない。でも、俺はこの生活に不慣れで看病をしきらないんでな。魔法についてもさっぱりだし、正直助かる」

「ああ、じゃあ、魔力増幅剤の話は聞いてるんですね？」

「校長先生から直々にな。内密にってことだったから、むしろ君が知ってる方が疑問だ」

「その流通源を探る為に助手をしているので。これも秘密でお願いしますね」

知っているのならと、あっさり暴露する。怪しまれて嘘をつかれでは困るのだ。

「間諜かんちやうってやつか？ 見えねえなあ。とんだ伏兵がいたもんだ」

「はは……。ていうか、モレクさんは言葉が上手なんですな」

あんまり流暢なので、あの片言のファリドの侍従をしているのが不思議である。

「ああ。言葉つてのは、喋る分だけ慣れるもんさ。俺は使用人だから他の使用人とも気軽に話すしな。ファリドは話し相手がいねえから、自然と言語理解が遅くなる。でも俺は書く方はさっぱりだから、ファリドにはかなわねえよ」

やれやれと嘆息するモレク。茶を一口飲み、続ける。

「あいつは故郷じゃ、学問にかけちゃ天才だって言われてた。いつ

つも本読んでもよ様な本の虫だよ。勉強したいってこんな北の果てまで来たつてのに、結果がこれなんてなあ」

あんまりだよなあ。

モレクは溜息混じりに嘆く。

「何を聞きたいんだか知らねえが、あいつは薬に頼るような奴じゃない。努力家だからな」

やや険を含んだ声に、流衣は緊張する。

「いえ、魔力増幅剤を飲んだことを突っ込みに来たわけじゃなくてですね。ええと。不思議なんです」

「不思議？」

流衣はこくこくと頷く。

「ファリド君は、あの通り、片言ですし。それに友人も少ないようでした。魔力増幅剤を手に入れるにしたつて、どこから手に入れたのか不思議です。人から貰ったのか、買ったのか。買ったにしろ、そういうものと知らないで買った可能性の方が高い気がして」

うう。緊張しているせいで喉がかわく。

茶を一口飲んでから、勢い込んで続ける。

「だから、あの、すみません。あまり言いたくはないでしょうけど、教えて欲しいんです。ファリド君が最近行った場所とか、会った人とか」

ファリドを責める気がないと分かつて安堵したのか、モレクの空気が少し和らいだ。

「なるほどね。それなら、あいつの為に協力すべきなんだろう。」

「……んー、ここ一週間でいいの？」

「はい。ええと、魔力増幅剤つて、飲んでから半日くらいで効果が出るそうなんです。だから、昨日も含んでお願いします」

「分かった。……そうだな」

モレクは眉間に皺を寄せ、斜め下の空間を睨みつけるようにしている。思い出を引っくり返しているのだろう。

「この一週間、あいつは学校の敷地内から出てないな。授業以外は、

鍛練場で魔法の訓練をしてるか、図書館に入り浸りだった。会った人間も、君と茶を飲んだ以外は、文法の先生であるマリエイスって人の所に質問に行つたくらいじゃないか？」

「文法の先生ですか……」

流衣は知らない先生だ。名前の感じでは男女の区別がつかない。どっちだろう。

その人に会いに行くかと思考を巡らした時、モレクがハッと顔を上げた。

「あ。そうだ。あいつ、そういえば一昨日の晩、人に会つて言つてたな」

「え？ 一昨日ですか？」

「そう。手紙貰ったとかで、告白じゃないかって、えらい浮かれてたからよ。ついてこなくていいって言われたんで、忘れてた」

モレクは自分に腹が立ったかのように、乱暴に髪をかきむしる。

「文学祭の間は、校舎に人が少ないだろ？ そこを狙つて、相手を呼びだして告白する生徒は結構多いらしいんだよ」

「へえ、そうなんですか……」

どこの学校も、似たようなものらしい。祭りやイベントごとで告白が多いのも。

「あれだ。なんで気付かなかったんだ。あいつ、菓子もらつて食つてたんだよ。あいつが自分から手に入れたんじゃないきゃ、あれしかない」

モレクはそう言うと、善は急げとばかりに部屋を出て、隣の部屋に行く。流衣も、コップを椅子に置いてから後を追う。部屋に入る真似はせず、戸口から様子を伺う。

「昼飯前だから半分にしとけて言つたから、まだ残ってるはずだ。えーと、どこに置いてるかな。うーん、あいつのことだから、大事な物は引き出しの仕切り、に見せかけた仕切りの一番奥だな。おっ、あつたあつた。手紙もあるな」

「……………」

「ファリド君、君、友達にばれればだよ。隠してる意味がないよ。しかも、モレクは容赦なく引き出しの鍵まで壊している。というか、遠慮なく引き出しを引っ張ったのか、引き出し自体を壊したと
いいいい。」

「あ、俺が壊したの秘密な」

「……秘密にしてもばれると思いますが」

「天変地異のせいにしておく」

「……………」

「なんというか。なんというか……！」

「真面目そうなファリドの友達が、ここまで態度が軽いのが不思議だ。」

「ほら、これ持ってけよ。何か分かるかもしれない。分からなくても、あいつは薬に頼ったりしない。だから理由があるはずだ」

「モレクは流衣の手に手紙と紙袋を渡し、自信たっぷりに言った。中を見ると、カップケーキのように見えた。」

「よろしく頼むぜ、諜報部ちやうほうぶさん」

「流衣は紙袋を大事に持つと、モレクに頭を下げる。」

「はい。頑張つて調べます。お茶、ご馳走様でした」

「モレクはひらひらと右手を振る。」

「ま、あいつが気付いたら、また話してやってくれよ」

「はい。それじゃ」

「流衣はもう一度会釈をすると、寮を出るべく歩き出した。」

「次の行き先はセトの研究室だ。」

「外れだな」

「……そうですか」

「菓子を分解し、魔力増幅剤の成分があるか調べたセトは、首を振った。流衣はがっくりする。」

「あの薬は、水に溶いたら効果が消える。だから、もし菓子里に混ぜ

るんなら、形が残ってるはずだ。粉にしているかもしれないから、念の為に魔力反応薬をかけてみたが、反応無しだな」

セトの判定理由は簡潔で分かりやすかった。

「残り半分に入っていたかもしれないし、一週間より前に手に入れて、昨日飲んだのかもしれない。分からんな」

「そう、ですか……」

「だが、なかなかいい線をついていると言える。その呼び出した相手が誰か分かればもっといいんだが」

ファリドの貰った手紙には、送り主の名は書いていない。けれど文字の感じから、女の子のような気がする。丸っこくて綺麗な文字だ。便箋も花の香り付きだ。

まあ、丸っこくて綺麗な文字を書く、花の香り付き便箋を使う男がもしかしたらいるかもしれないので何とも言えないのだが。

あれ？ でも……。

流衣は訝しく思う。

ファリドが告白かもしれないと思っていたのなら、相手が女子であるのを知っていたことになる。もしかして手渡しで貰ったんだろうか。モレクが貰ったようだと客観的に言うのだから、侍従が待機室にいる間とすると、渡すとしたら授業の後とか？

「一年生で、ファリド君に告白しそうな女の子って知ってますか？」

「……流石に知るわけがないだろう」

無然と返すセト。

「それにファリドはたいてい一人でいたからな」

「……そうですか」

むう。なかなか難題だ。

告白かあ。

うーん、告白。なんか引つかかるな。

流衣はこめかみに手を当てて、考え込む。なんだろう、この、かゆい場所に手が届かないみたいなのどかしさは。

『俺の方も進展無しだな。せいぜい見かけても、上級貴族が下級貴族を虐めてる現場とか、告白現場とか、そんなかな。ああ、あと、悪戯してるのも見かけた。ちゃんと上にちくつといたぜ』

にやりとした笑みとともに、思い出す。

「あ！」

急に大声を出した流衣を、セトは驚いた様子で見る。

「な、なんだ。どうした」

そしてくいつと眼鏡のブリッジを指先で押し上げる。

「何か分かったのか？」

「いいえ分かりません！」

流衣はきっぱり言うのと、面食らっているセトを尻目に椅子を立ち上がる。

「でも、確認してきます！」

そして、一方的に宣言し、研究室を出て行った。

あの面白がるような台詞を口にしていた、もう一人の諜報員に確認を取る為に。

*

「告白現場について聞きたい？」　なに、お前、そんなの興味あんの？」

一応、男だったんだな！。

失礼なことを言うリドをちょっと眉を吊り上げてにらむ流衣。

「僕は男だよ！」

焼却炉でゴミを焼きながら、リドはあははと笑う。

「分かってるって。でも、お前がそんな話を聞いてくるなんて珍しいな。なんだ、好きな奴でも出来たのか？　ちよつとおにーさんに話してみなさい。大丈夫、口は堅いから」

「もーっ、僕のことじゃないってば！」

なにやら悪ノリしてくるリド。話が進まないの、流衣がじたばたと手を振って抗議すると、リドは笑った。

「そんな慌てなくても、姫さんには黙っててやるって」

「だから違うってば。……ていうか、なんでそこでアルが出てくるのが不思議なんだけど」

「……面白い奴だなー」

やれやれというように肩をすくめるリド。

なんで流衣の反応が期待外れだと言わんばかりなのが気になる。しかもなんで上から目線なのさ。

「リド、真面目にしなさい。坊ちゃんが、困ってらっしゃる、ですよー！」

見かねてオルクスが嘴を突っ込む。

「坊ちゃんが聞きたいのは、ファリド＝エネという、少年のことです」

「ははあ」

リドは腕を組んでにやりとした。

「つまりは、友達に頼まれて偵察ってことだな。よしよし」

「違うよ！　ファリド君は昨日の、例の人だよ。一昨日、女の子に呼び出されたりしてなかったかが知りたいんだ」

「なんだ、そつちかよ。なら最初からそう言え」

だからどうして流衣が悪いみたいな流れになってるんだろう。

リドはゴミ箱の中の紙クズを焼却炉に放り込みながら、考えるように斜め上を見る。

「うーん、一昨日か。一昨日、告白現場には三つ出くわしたな。例の奴の特徴は？」

「金髪と赤茶の目をした、褐色の肌のシルヴェラント人だよ」

「あ、ああ。あいつか。見たぜ」

「ほんと！」

流衣は身を乗り出した。

「シルヴェラント人ってことだったら、だぞ？ 女の方に手紙を貰ってたな。寮の裏手でさ。ちょうど通ろうとしてたもんだから邪魔だったのを覚えてる。でも、告白にしちゃあすぐにいなくなっただと」

リドは顎に手をやる。

「他の奴だと贈り物と一緒にとか、花束と一緒にとか、そういうのばっかだから、意外だったんだよ。で、妙に見つめ合ってるか、片方が申し訳なさそうに謝ってるとかー」

「その他はいいからっ」

「……お前、結構言うな」

その他で斬り捨てたよ。リドが恐ろしげに流衣を見る。

「その女の子、どんな子だった？」

「外套がいたうのフードを被ってたから、顔は分からねえな。でも小柄だったぜ。男の方より細そうだったな。男も十分ひよろかったが。身長は、うーん、お前くらいじゃね？」

リドのなにげない一言が、流衣の胸をえぐった。
うっ。

小柄な女の子と同じくらいの身長って……。

「あつ、わり。お前と同じくらい小柄で、背が低いつて言おうとしたんだ」

「……もつとひどいですよ、リド」

オルクスが、リドにじっとりと責めるような物言いで突っ込む。

流衣はズキズキと痛みをうったえる胸を押さえつつ、ややへこみ気味に問う。

「他には？」

「さあ。そんなじろじろと見ねえからな。貴族の告白現場を邪魔したなんて思われたら、厄介だろうが。俺は物影に隠れて、そいつら

がいなくなるのを待ってただけだし」

「……そうかあ」

がっくりと肩を落とす。

これでは手掛かりなんて無いも同然だ。

分かったのは、告白相手が女の子で、この学校の生徒っていうだけだ。

「で？ 俺の話は役に立ったのか？」

流衣はこくりと頷く。

「そうだね。分からないことが分かったって点では助かったかな」

「そうかい。まあそう落ち込むな。この件はなかなか難しいと思うからよ」

「……うん」

とりあえず気を取り直し、流衣はリドに礼を言う。

「ありがとう。仕事中にごめん」

「いいっていいって。ゴミを燃やしてるだけだしな！」
からつと歯を見せてリドは笑う。

それからふと片眉を上げる。

「そうだ。お前、今日はボルド村に行くのか？」

「え？ 行く予定はないけど……。何かあったっけ？」

流衣は首をひねった。特に用事はないはずだが。

「劇団は明日発つんだろ？ お前、世話になったんなら、今日のうちに見送りしてやれよ。行くんなら俺も行く。前に世話になったし」

「ああ、ほんとだね。忘れてた。じゃあそうする」

「今日は四時上がりだから、正門前にでもいてくれ」

「分かった。じゃあそれまでには行くよ」

流衣は頷くと、また走りだした。セトの研究室にまた戻らねば。報告は大事だし、また研究室の片付けをしなくてはならないのだ。

(お薬、お薬……)

その日も、イザベラは呪いのせいで性別転換してしまった愛しい婚約者を元に戻す為、図書館で調べ物に励んでいた。

(解毒……。いえ、違いますわ。これは解熱ですわ……)

分厚い本を細い指先で捲りながら、文字を追いかけていく。

ふう。花びらのような可愛らしい唇から小さな溜息が零れる。

(困りましたわ。このままでは図書館の蔵書が尽きてしまいます) 王都の王立図書館に比べれば蔵書量は劣るが、それでもスノウリード魔法学校の図書館には多くの蔵書がある。校長が竜族である為に、長年に渡って蓄積された書物だ。だが、その中で解毒の薬についてとなると、量はぐっと少なくなる。

それでもイザベラは少し楽しんでました。

婚約者であるデイルはいつも修行と言ってはイザベラを放置しているのだ。世話を焼きたくても近くにいないので、こうして手伝えることを喜んでました。だが、男に戻ってくれないと困る。イザベラはデイルと“お友達”になる気はないのだから。

未来に夢を馳せつつ、再び調べる手を進めると、ふいに紙面に影が落ちた。

顔を上げると、小柄な女生徒が立っている。

「先輩、ですよ？ よくこちらにいらっしやいますが、お薬のことで何かお困りなのですか？」

後輩だろうか。小さくて可愛い少女だ。銀のカチューシャが物静かな雰囲気によく似合っている。

「そうなのです。解毒剤を探しているのですが、もし良い方法をご存知でしたら教えて頂けません？」

知らない生徒だったが、あまりに頻繁にイザベラを見かけるので、気になったのだろうと深く考えずに調べたことを書きつけた紙を見せる。調べた薬名とアカデミアタウン内の薬屋を書き連ねたものだ。調べた場所には横棒を引いている。紙にはすでに全てに線が引かれていた。

それにイザベラとイザベラ仕えの使用人だけでは限界だったものがある。この学校にはルマルディー王国内のあちこちから生徒が集まっているから、もしかしたら情報があるかもしれない。

「どんな御病気で困りなのか存じませんが、この町にはもう一軒、薬屋がありますよ?」

書きつけを一瞥すると、少女は控えめにそう言った。

*

夕暮れ時、流衣達はボルド村までやって来ていた。

偶然にも廊下でディルに出くわしたので、ディルも誘った。久しぶりに息抜きをしたかったらしく、迷わずついてきた。素で話しても平気な流衣とオルクスとリドという組み合わせに、ついてきたかったらしい。

「わーい、ありがとう。ルー兄！ それにリドお兄ちゃんに、誰か分からないけどお姉ちゃんも!」

差し入れにと途中で購入したパンの詰まった袋を受け取り、ジェシカがはしゃいだ声を上げた。しかし重かったらしくよるめいたので、横にいたランスが無言で袋を取り上げた。なんだかんだでランスは面倒見が良いと思う。

「劇、面白かったよ」

流衣が笑顔で感想を述べると、ディルもそれに賛同した。

「私もとても楽しませて貰った。姫君は可哀想な方だったが、最終的に幸せになれたので安堵したよ」

「そうそう。お姫様役のルディーさんも、とっても綺麗だったし」
流衣が更に付け足すと、ルディーは顔をほころばせた。

「上手なんだから、ルイったら!」

「ごほっ」

ばこつと背中を思い切りはたかれてむせる。ルディーは薄紫の髪と淡い青色の目をした、儂げな空気漂う綺麗な女の子だが、見た目に反して怪力の持ち主なのだ。

褒められて照れているルディーは、頬に手を当て、きゃあきゃあ言いながら身をよじる。流衣のことはすでに眼中に無い。

「そんな本当のこと言われても困っちゃうわあ。綺麗なの知ってるしい〜」

「ルディー姉、きもい」

顔を引きつらせたランスがぼそりと呟いた瞬間、キツと眉を吊り上げたルディーはランスに鉄拳をお見舞いする。

「女性にきもい言わない!」

「うがっ」

頭を押さえて悶絶しているランス。

サジエがふふつと笑う。

「進歩しないよね、ランスって」

「くう、うるせえ……!」

遊びに来ていたらしいナゼルも、サジエに同意する。

「そうだよ。例え思っでなくても褒めておけばいいのに」

「なんですつてえ、ナゼル君?」

甘やかな声で、けれどトーンは低くルディーが問うた瞬間、ナゼ
ルは謝る。

「ごめんなさい! ルディーさんが綺麗じゃないって意味じゃない
ですっ! すごく綺麗です!」

「あらあら、良い子ね〜」

途端に笑顔になり、ルディーはよしよしとナゼルの頭を撫でた。

その様子を見て皆で笑う。

ナゼルが青い顔をしてふるふる震えているのが、少し滑稽だ。

「そういえば、あの劇のタイトルって『青の泉』だったよね？ なんかどこかで聞いたことある気がするんだけど……。なんだったかなあ」

流衣はどうにも気になつてたまらない。

本で読んだにしては、どこかで聞いたような、いや、実際にそれを見た感じなのだ。

しきりに首を傾げていると、ナゼルが呆れた視線を向けてきた。

「何言ってるの、お兄さんてば。僕と一緒に行ったでしょ」

「へ？」

「聖なる青の泉。その黄色山の中腹にある、魔法を解く効果がある泉だよ。もー、忘れちゃったのお？」

ナゼルが呆れたつぷりにそう訊いた瞬間、ディルががっしりとナゼルの肩を掴んだ。

「少年！ その話は本当か！？」

「へ？ え？ なに！？」

目を白黒させるナゼルに、ディルは畳みかける。

「だから、魔法を解く効果があるというのは本当かと聞いている！ あまりに鬼気迫る様子に、ナゼルは青い顔をしている。

「う、うん……。言い伝えだけど。あそこの山は聖地だし、強い祝福があるんじゃないかって……」

長老さんが言ってた……。

やや上ずった声で返すナゼル。

ディルはそのままの姿勢で、低く笑いだした。

「ふ、ふふふふ」

「なになに、なんなの怖いようっ」

肩を掴まれているせいで逃げられないナゼルは、涙目になってい

る。

異様な様に、流衣達も怖くて遠巻きに見る形になっていた。

「……案内しろ、少年」

「え？」

「そこに連れて行け。今すぐだ。今からだ。さあ、行くぞ！」

「ちょ、ちょっと待って。怖いよーっ。お兄さん助けて！」

とつとつ恐怖に耐えられなくなったナゼルが流衣に飛びついてきた。

「お、おおお落ちついてよ、ディナ」

流衣がどもりつつ言うのだが、完全に目がすわっているディルには通用しなかった。

「行くぞ」

につこり。

異様な迫力のある笑みを綺麗な顔に浮かべる。

「……ハ、ハイッ」

頷くしかなかった。

そして、流衣の右腕を掴んで黄色山の方に歩きだすディル。その流衣の左腕にはナゼルがひつついたままだ。更にその後ろに、リドが面白そうな顔をして続く。

「い、行つてらっしゃい」

顔を引きつらせたルディーがそつと手を振り、他の劇団員達もまた、遠巻きにそれを見送った。

関わるのはやめておこう。

心が一致した瞬間だった。

*

「ここが青の泉……！　なんと美しい！」

青に輝く泉に出た所で、デイルは胸を打たれたように声を張り上げた。

「そ、そうだね……。ごほっげほっ、ううっ」

「どんな体力してるの……」

体力は人一倍あるデイルだ。例え女子になってもそこは変わらないようで、デイルに引きずられてきた流衣とナゼルは、化け物じみたスピードで山を登ったせいで息も切れ切れである。

（修行馬鹿だけじゃない。体力馬鹿だ……）

デイルへの考えを少し改めた。

一方、後ろからついてきていたリドも平然としている。

訂正。もしかしたら流衣に体力がないだけで、これが普通なのかもしれない。……そんな馬鹿な。

いったいこの二人の基礎体力はどうなってるんだと怪訝に思う流衣。

デイルはひとしきり感動すると、さっと泉の縁に膝をついて、手で泉の水をすくって飲んだ。

そのシーンだけ切り取ると、とても絵になる光景である。

「ど、どう……?」

流衣は恐る恐る問う。

何か変化があるかとデイルを観察する。

「ねえねえ、お姉さんはいったいどうしたの?」

ナゼルが服の袖を引っ張って訊いてくる。巻き込まれたナゼルには、何故そこまで鬼気迫っていたのか分からないのだ。

「ああ、ええと。デイルはディナじゃなくてデイルってこと」

「……は?」

流衣の説明に、逆にナゼルは眉を寄せた。意味が分からないと言いたげだ。

「も、戻らない……!」

デイルはがくつと泉の縁に座り込んだ。今にもキノコが生え出しそうな暗い空気を発散し始める。

流衣は何と言って励ましたらいいか、焦り、困ってちらりとリドを見る。リドは僅かに首を傾げた後、任せるとでも言うように、親指を立てた。

？

なんだ？

流衣がきよんとした時、リドはデイルの背後にすたすたと近寄った。

「飲んで駄目なら、これならどうだ！」

「はっ？ ……「ふっ！」」

リドは容赦なくデイルを泉へ蹴り落とした。

「ぎゃーっ！ リド、何してんのお！？」

流衣は青くなって叫ぶ。

仮にも姿は女の子なのに、何て真似を！

バツシャンと水飛沫を上げ、頭から泉に突っ込んだデイルは、そのまま沈んでいく。

「何って。お前がやれって合図したんだろ？」

不思議そうにリドが問うので、流衣は声を上げて否定する。

「どう励ましたらいいかっていうアイコンタクトだよ！ うわああ、デイルーっ！」

大急ぎで杖や小さい鞆を地面に放り、靴を脱ぎ捨てマントも放ると、流衣は泉に飛び込んだ。その直前に、オルクスが慌てた様子で空に舞い上がる。

デイルは泳げないんだよ、カナヅチだから！

それを証拠に、浮き上がってくる気配が無い。

潜って、ガボガボと口から気泡を吐いているデイルの腕を掴んで浮上する。澄んだ青い泉は、見た目よりずっと深いみたいだ。

「はああ、でい、デイル！ しっかりしてー！」

ぐたーっとしているデイルの腕を肩に回し、とりあえず顔が水に

浸からないようにして揺する。流衣の小柄な体格では、地面まで引きずり上げるのは至難の技だ。

「もう、リド！ デイルは泳げないのにつー！」

「あ、そうだったな。わりいわりい」

「悪いで済んだら、警察はいらないんだよっ！」

珍しく流衣が怒ると、リドはややひるんだ。

「わ、悪かったって。怒るなよ。ほら、手え貸せ」

リドがデイルの右手を掴んだ瞬間、デイルは顔を上げた。にやりと悪魔じみた笑みを浮かべている。

「……！」

リドが嫌な予感に頬を引きつらせた瞬間、デイルは逆にリドの手を掴んで泉に引きずりこんだ。

「おっわ！」

バシャーン！

思い切り泉に落ちるリド。

「はっ、貴様も沈め！」

デイルは思い切り言い捨てると、泉の縁にしがみつき、自力で地面に上がった。

「すまん、ルイ。面倒をかけた。手を貸せ。ああ、リド、お

前もつと水浴びしてきていいぞ」

「てーめーえーっ！」

完全になぶ濡れになったリドは、泉の中で怒りに震えている。

デイルの手を借りて地面に上がった流衣は、やれやれと息を吐く。リドが悪いのだが、デイルもデイルで大人げないというか。

まあ、デイルが溺れなかっただけいいか。

「これでもくらえ！」

「ぶはっ！」

切れたリドが泉の中から風を使って、思い切りデイルに水をかけた。顔面攻撃をくらい、衝撃とともに後ろに倒れ、そのまま反転して迎撃態勢をとるデイル。口元には笑みが浮かんでいる。が、目は

笑っていない。

「……貴様、泉の水ごと凍らせてやるうか」

「ふん！ やれるもんならやってみる！」

売り言葉に買い言葉。

地面に這いあがったリドが、袖をまくる。

睨みあう二人。

「ちよつとあー、本気で喧嘩しないでよあー」

流衣はおどおどと声をかける。

『全く、子どもですなえ』

流衣の側に降り立ったオルクスが呆れたように呟く。

『というか、そろそろ気付いた方がいい気もしますが』

「え？」

言われてみれば、ディルの姿が男の姿に変わっている。

流衣はぱああと表情を明るくする。

「ディル！ リド！」

「「なんだ、ルイ。邪魔するな！」」

サラウンドで怒られた。

ひえつと首をすくめつつ、それでも言いつのる。

「そ、そうじゃなくて！ 戻ってる！ 戻ってるって！」

ディルは無言で自身を見下ろし、盛り上がったいた胸がぺたんと平たくなっているのに気付いて、しかも服の袖が足りていないことだとか、前をとめているボタンが、体格が合わないせいで幾つか飛んでいるのに気付く。

「戻ったー！」

ディルは歓喜の声を上げて叫ぶ。

そして、素晴らしい笑顔でリドに言った。

「貴様のお陰だ、感謝する。だから、氷漬けでいいな？」

「てめえ、それが感謝する相手に言うことか！」

激昂したリドの怒鳴り声が周囲に響いた。

五十九章 青の泉 2

「馬鹿でしょ、あんた達」

ずぶ濡れで帰って来た上に、派手に喧嘩をして、顔に切り傷や腫れをこしらえてきた弟子とその友人を見るなり、リリエはばっさり切り捨てた。馬鹿を見る目そのものである。

「……………」

「……………」

「あ、はは……………」

何も返せず黙りこむリドとデイルの横で、流衣は場をごまかすように笑う。流衣でも否定出来ないことだったので。

あの後、本格的に喧嘩に移行してしまったのだが、見習いとはいえ騎士の少年と元木こりで腕力も体力もある少年の喧嘩を、ひ弱な流衣が止められるはずもなく、あわあわおろおろしているうちに、こんなことになったわけだ。見かねたオルクスが二人に雷を落とすてくれなかったら、（文字通り、落雷の術である）、結果はもっと酷かったかもしれない。

ゴーストハウスよりデイルの滞在先の屋敷の方が近いということ、真冬にずぶ濡れになった三人は屋敷まで来たわけだ。そして、玄関先でタオルを借りて雫を拭いているところである。

ちなみにナゼルはどうしたのかと言えば、村の自宅に帰っている秘密を知ったナゼルのデイルはきっちり脅して口外しないことを約束させた。「約束するから、その魔法の解析させて」とナゼルが目をキラキラさせていたが、魔法は解けた後で痕跡がないのですぐに残念そうな顔になっていた。

「でも、良かったじゃない、デイル。男に戻れて！ あたしも、あ

んたがうじうじくよくよしくなるかと思うと嬉しいわあ」

リリエはからからと笑う。

「師匠……。なんだか複雑ですが、ありがとうございます」

溜息混じりであるが、それでも礼は口にするディル。結構、迷惑をかけた自覚はあるのだ。

「エイクー、こいつらまとめて風呂場に放り込んでおいて。あと、適当に着替え用意してあげて」

近衛騎士団副団長であり、今は侍従に身をやつしているエイクはすつと礼をする。

「畏まりました。さあ、あなた方、こちらへどうぞ」

案内してくれるエイクの後に続き、流衣達も歩きだした。

前回に引き続き、お世話になってすみません……。

風呂を借りて着替えた後、茶でも飲んでいけとリリエが言うので、客間でテーブルを囲んで談笑していたら、ノックの音が響いた。

どうぞとリリエが応じると、扉が開き、頬を上気させたイザベラが袋を手を持って入って来た。

「ご機嫌よう！ ディル様、ディル様！ 新しいお薬を手に入れましてよっ！ ……あら？」

勢い込んで、パタパタと靴音を鳴らして部屋に入って来たイザベラは、違和感に気付いてきよとんとした。

「や、やあ。イザベラ殿」

紙袋を見て頬を引きつらせつつ、ディルは軽く右手を上げる。

「……………」

無言で白い騎士服に身を包んだディルを上から下まで見つめ、首を傾げるイザベラ。

つかつかとディルに近付くと、紙袋をテーブルに置き、とりあえずというようにディルの胸に手を当てた。そこに膨らみがないのを

確認すると、訝しげにディルを見上げるイザベラ。ディルは照れたように、やや頬を赤くする。

「……わたくしの目がおかしいわけではなく？」

「ああ、さっき戻れたのだ」

「まあ……！」

両手を合わせ、ぱああと花が咲くような笑顔を浮かべる。

「おめでとうございます！ 苦節、やや一年！ 戻れて宜しかったですわ、ディル様っ！」

感極まったイザベラが大胆にもディルに抱きつく。

「えっ、わっ、ちよっイザベラ殿!？」

顔を赤くしてうるたえまくるディルに構わず、きゃあきゃあ騒いでいるイザベラ。

「ルイ、誰あの美人。ディルのこれか？」

そつと流衣に問い、右手の小指を立てて振るリド。

「？ 何それ」

流衣は意味が分からず、きよとんと指を見る。まさか「指きり」ではないだろう。

「女つて意味。恋人ともいうな。ちなみに男は親指な。間違っても男の恋人を探る時に使うなよ」

「え、っ、使わないよ。ていうか、普通に訊くよ」

流衣はそういう話に免疫がないのでやや顔を赤らめたものの、軽く咳払いを言う。

「彼女はイザベラさん。ディルの婚約者さんだよ。ディルを元に戻す為に、色んな薬を調べてくれてたんだって。こないだその薬を飲んだディルがぶっ倒れてた……」

「へ、へえ……」

見かけによらずどぎついな。リドがぼそりと呟く。

やがて目つきがだんだん遠いものになっていく。

「……で、俺達はいつまでこのいちやつきぶりを見てなきやいけな
いんだ？」

「さあ……。でも放つといてあげようよ。イザベラさん、苦勞して
たんだから」

流衣はというと、イザベラの苦勞を思っで感激している。少し涙
目だ。

「ツィールカ様の祝福がここにも、素敵なことですね」

オルクスもまた感激した様子で、声に出して呟いた。

「あとは、領地に連れ戻して式を挙げるだけですわ！ デイル様、
わたくし、いつでもお嫁に行く準備は出来ておりますよ！」

「お、落ちついて下さい、イザベラ殿！ 流石に結婚はまだ早いで
すから……！」

「まあ、そんなことをおっしゃって。いつになったら迎えに来て頂
けるんですの！？」

「せめて私が一人前の騎士になるまではお待ち下さい……！ あな
たのお父上ともお話済みですから」

「父と！？ あの方のおっしゃることなんて信用出来ませんわ！」

だんだんデイルの顔色が赤から青に変わっていつている。

何だか雲行きが怪しい方向に流れつつある。

「それに、申し訳ありません。こうして元に戻ったのです。私は王
都に行かねばなりません……」

「……………！」

イザベラが息を飲む。

流衣やリドもまたハツとして、デイルを見た。横でにやにやして
いたりリエからも表情が消える。

部屋に重苦しい沈黙が降りる。その帳を落とした張本人は、なんでもないことのように話しかける。

「ヴァン兄上が王都行きになったのはご存知でしょう？ 本来なら人質という役割は末子である私の役割。あのようななりではありませんが、あなたと過ごせた日々はとても楽しかったです」

イザベラは花弁のような唇をきゅつと引き結ぶ。だが、唐突に告げられた別れに、深紅の目からはらはらと涙が零れた。

「わ、わたくしは、そんなことの為に、あなたを元に戻したかったのではありませんわ……！」

デイルは困ったように眉尻を下げ、そつと指先でイザベラの目元を拭う。

「承知しております。それに私が男に戻りたかったのも真実。でないとあなたをお嫁に出来ませんからね」

まるで茶化すかのように優しく微笑むデイル。イザベラを見つめる水色の目には確かな慈愛が浮かんでいる。

イザベラはぼろぼろと涙を零しながら、首を振る。

「嫌……！ 嫌ですわ！ あなただつてご存知でしょう。王の蛮行を。王都にいる子息の末路を……！ 女王派の何人が命を絶たれたとお思いです！ 女王派筆頭であるリリエノーラ様の弟子であるあなたが無事で済むはずが……！」

デイルは右手を上げてイザベラの言葉を遮る。

「でも、私は行かなくては。レヤード侯爵領の領民の為に、兄を失うわけにはいかないのです。それに、家族としても兄を見捨てることは出来ません。今まで役割を代わっていて下さったのです。…

…もう十分です」

「嫌です。嫌です」

首を振るイザベラをそつと抱きしめると、デイルは身を離す。

「ありがとうございます、イザベラ殿」

「嫌……！」

床に座り込んで、顔を手で覆って泣きだすイザベラを、辛そうに

眉を寄せて見つめ、けれどデイルは決然と顔を上げてリリエを見る。

「どうしても行くのね？」

その顔に覚悟を見てとったリリエは、静かに弟子に問う。

「ええ。今までありがとうございました。大丈夫です、私だってそう簡単に殺されてやる気はありません」

そしてデイルは流衣とオルクスとリドを見た。

「三人とも、ありがとう。もし王都に来ることがあれば、我が屋敷に来てくれ。君達と過ごした旅は楽しかった。ルイ、帰れることを祈っている。リド、どうか家族は大事にな。いい友人を持てたこと、深く感謝する」

「あ……」

流衣は口を開けただけで、何も言葉が出てこない。

まさかこうなるなんて思わなかった。

元に戻れたことを喜んでいただけだったのだ。

胸の奥が熱くて、言葉が喉の奥に引っかかり嗚咽に変わる。目蓋も熱く、頬を熱い。もしかしたら泣いているのかもしれない。

デイルはきつとずっと覚悟が決まっていたのに、全然気づかなかった。何が友人だ。

「ふざけんなよ、てめえ！」

リドが低い声でうなった。

流衣はびくりとする。

地を這うような、低い声だ。静かな怒りをはらんでいる。

「今生の別れみてえに言いやがって！ 王都に行つて、もし死んでやがったら、俺がもういつペン殺してやる！」

デイルはふつと口元を上げた。デイル自身も緊張していたらしい、少し肩を落とす。

「死んでいたら殺せんだろう。おかしな奴だ」

流衣が何も言えないでそれを見ていると、オルクスがふわりとデイルの肩に降り立った。

「敵地に向かうあなたに、はなむけを差し上げます。これであなた

は悪意から守られる。…… ツィールカ様の愛と慈悲の心があなたに降り注ぎますように」

祈りの言葉とともに、淡い光がデイルを包み込んだ。デイルは目をみはを睜る。

「礼はいりません。こうでもしないと、我が主人がひどく悲しみますからね。」

流衣の元へと舞い戻ったオルクスの言葉に、デイルは苦笑する。

「だが、礼は言わせてくれ。ありがとう。少しは気持ちが軽くなる。そして、デイルは柔らかく微笑んだ。

「さよならだ。 また会おう」

短く言うと、白い騎士服を翻し、デイルは颯爽と客室を出て行った。

パタン

扉の閉まる音が隔絶を告げる。

皆、無言だった。

「……………つく……………つく……………」

胸に重石が乗ったような空気の中、イザベラだけが押し殺した声で泣いている。リリエはそんなイザベラの横に膝をつくと、やんわりとイザベラを抱きしめる。

「……………ごめんなさい。あなたを辛い目に遭わせて」

「……………いいえ……………いいえ……………」

「ごめんなさいとイザベラは謝る。

「リリエノール様は悪くないのです……………。……………ですが、どうしても恨んでしまうのです。ごめんなさい……………」

好きな人を想って泣きながら、好きな人の師匠に謝る。

どうしていいのかわからないのだろう。

呪いが解けた喜びと、別れがいつぺんにやって来て。呪いが解ければ、何もかも上手くいくような、そんな気がしていたから余計に。

「いいのよ、それで。私も、私がつらめしいわ……」
悔しげに唇を噛み、リリエはそれでもイザベラをぎゅっと抱き締める。

(こんな、こんなのって……)

流衣もまた、ぐつと歯を食いしばって足元を睨みつけた。

こんな、不安と心配にさいなまれる別れなんて初めてだ。

苦しい。

何も出来ない。

でも何かしたい。

だが、ここで流衣とデイルの道は別れたのだと、頭の奥で分かっていた。

流衣には流衣の行くべき道が、デイルにはデイルの行くべき道が。だから祈ることしか出来ない。

どうか、無事で。

祈る。

真面目で肩苦しい、口下手な友人の進む道の先が、光に満ち溢れていることを。

六十章 影

「ふふ……。取り乱してしまつて申し訳ありませんでしたわ。貴族の子女たるもの、あれくらいで動じるようではまだまだですわね」
しばらく泣いていて、落ち着きを取り戻したイザベラは、まだ涙の残る目につこりと微笑んだ。

「わたくし、デイル様がいつでも迎えに来て下されるように、精進いたしますわ。夫の留守を守るのは妻の役目ですものね……。！」

「その意気よ、イザベラちゃん！」

強がりだと分かっていたが、その健気さに心を打たれたリリエが更にぎゅうとイザベラを抱きしめる。

（強い人だなあ……）

流衣の心にはぼっかりとした穴があいてしまっていて、やるせない気分なのに。自分もそうありたいと、やや眩しいものを見るようにしてイザベラを見てしまう。デイルとイザベラが結婚したら、いい夫婦になりそうだ。

「これも不要になってしまいましたわね……」

イザベラはリリエから離れてすっと立ち上がると、テーブルに置いていた紙袋を取り上げる。少し残念そうに。

「せっかく薬屋を教えて頂きましたけれど……。どうしましょう
処分に困っているイザベラに、リドはひょいと近寄る。

「解毒剤って言ったか？ どんな物か見せて貰っていいですか？」

「ええ……。あら、そういうえはあなたはどなたかしら？」

イザベラは小首を傾げる。

リリエもまた立ち上がり、イザベラにリドを紹介する。

「リドよ。デイルと一緒に旅してた人のうちの一人の」

「ああ、飄々としている割に心配性だという、あのリド様ですね！」

イザベラが楽しそうに暴露した言葉に、リドは「は？」と変な顔をした。

「様”はいらないですが、ていうか、え？ あいつ、そんな風に言ってたんですか？」

「ええ。あとは、大人ぶっている割に、オウムと喧嘩するなど子どもみたいな奴だ、とも」

「……あいつ、追いかけてって殴るか」

じつと窓を見つめて拳を握りしめるリド。その拳に青筋が浮かんでいるのを見ると、結構イラツときているらしい。

「本当のことじゃないの。ねえ、ルイ？」

「えー！？」

リリエさん、そこで僕に振りますか！？

流衣はぎよつと目を剥く。

「……ええと。まあ、ちよつと短気な気もしないでもないような。

うわわわ、ごめん！」

琥珀の目にじろりと睨まれ、流衣は慌てて自分の口を手で塞いだ。ふんと鼻を鳴らし、リドは紙袋に視線を戻す。

「俺、薬草学に興味があるんで、ちよつと気になるんですよ。どういふ薬なんです？」

話を戻すと、イザベラは首を傾げる。

「分かりませんわ」

「……え？」

袋を開けて、小瓶を引つ張り出しながら、リドは目を瞬く。まさか買ってきた本人がどういふ薬か知らないとは思わなかったのだ。

「図書館で薬について調べていましたら、通りがかった生徒が薬屋を紹介して下さったのです。そこに行くと、占い師の館ような、雰囲気薄暗いお店に男の方がいて、ただこつおっしやっただの。“あんたが何を求めているのか分かってる。これだろう？ 代金は金貨一枚だ”……と」

「……は？」

「不思議な方でしょう？ きつと占いがお上手なんですわ」

「……………いやいや待って待て。ちょっと待て」

「やんわりと微笑むイザベラの空気に流されかけるが、それはどう考えても妙だろう。リドは慌てて口を挟む。

「あんだ、そんな所に一人で行ったのか？」

「いいえ。淑女たるもの、連れはいるものですわ。侍女も一緒です」「そ、そうか。それは良かった」

無鉄砲なお嬢様でなくて良かったとリドは安堵し、ふと小瓶の中身を見て固まる。小さな黒い丸薬が五つ入っている。

「イザベラさん、これ、俺が貰っていいですか？」

「え？ ええ……………もう必要ありませんし、構いませんけれど。どうかされたんですか？」

「分かったら報告します。あと、その店はどこに？」

「イザベラは簡単に場所を説明した。貴族の屋敷と店の多い地区との境目にあるようだ。」

「分かりました。じゃあ、もうその店には二度と行かないように！」「ええ……………？」

目をまん丸にしているイザベラを放置し、リドは流衣に声をかける。

「ルイ、俺の勘がなんかやばいって告げてる」

「僕の勘だっけそうだよ」

「幾らなんでもやばいって気付く。」

「とりあえずセトさんとこに行くぞ！」

「分かった。急にすみません、もう出ますね。今度、こないだ借りた服と一緒に服を返しにきますから！」

「やや慌てて部屋の扉に向かうリドの後を追う流衣。」

「ちよつと、どうしたのよ。急に」

「すみません……………！ 失礼します！」

「リリエが声をかけるが、流衣は一言謝っただけで部屋を出て行った。」

これはもしかすると、もしかして……！
思いもよらない所からもたらされた物に、流衣は気がはやる。
ディルのことでまだ胸がしくしく痛んでいるが、今は色々と悩む
より、他のことに集中していたかった。
とりあえず目の前のことを見つめていれば、痛みも忘れられる。
セトの家を目指し、ひたすら足を動かすのだった。

*

「当たり前だ」

イザベラが持っていた「解毒剤」を調べ、セトが出した結論はこ
うだった。

「やっぱり」

「……うん」

リドと流衣は顔を見合わせて頷く。

「よし。今から校長に話をつけてくる。その場所に行つて、お
さえるしかない」

セトは立ち上がると、待っているようにとだけ言つて、転移魔法
で姿を消した。

しばらく経つてから戻ってきたセトは、にやりと笑つた。

「安心しろ。あとはスノウリード夫妻が片付けてくれるそうだ」

校長が重い腰を上げた。天変地異の前触れかな？

からかうように笑つたセトは、働くグレースを見れて嬉しそうだ
つた。

スノウリード夫妻が件の薬屋に襲撃を仕掛け、まんまと店員を捕
まえた。

店員を尋問し、店内を調べたところ、魔力増幅剤の入った薬瓶や、

調査の材料が見つかった。この薬屋こそが魔力増幅剤の流通源であるというのは決定的だった。

「でも、おかしいわ」

翌日。校長室に集まったセトやリドや流衣に、グレースはしかつめらしい顔でうなつた。ソファアの背にもたれているので、緊張感に欠ける光景だが、グレースは真面目な顔をしていた。柳眉をしかめ、人差指を立てる。

「絶対に足りないものがある。それは手引きする人間よ」

「あの方、結局、口を割りませんでしたからね」

トーリドが溜息混じりに言う。

薬屋の店主は、今は王国警備隊の牢にいるらしい。

「俺は作るだけだ。そしてここに来る奴に売る。そういう役割なんだ」と、おっしゃってましたし、本当に知らないみたいでした」「それにおかしいと言えば」

更にグレースは付け足す。

「イザベラ嬢の言ってたこともおかしいわ。場所を教えてくれた子はどんな子だったの？ って訊いたら、そういえばどんな顔だったか思い出せませんわ、だもんねえ。多分、女の子だったと思う、って始末よ？ もっとこう、覚えててもいいもんだけど」

嫌んなっちゃうわあ。

大仰に溜息を吐くグレース。

(……どんな人だったか覚えてない、か)

流衣は既視感を覚え、胸の奥がもやもやする。そんなことを言っていた人に、前にも会ったことがある。だいぶ前のことになるけれど……。

「でも、ま、薬を作ってる人は捕まえたし、これ以上、事件が広がることはないでしょう！ セト、ルイ、リド、お疲れ様。ルイは事件クリアでしょ？ セトはちゃんと報酬を払いなさいね」

セトは物凄く嫌そうに顔をしかめた。

「校長に支払いのことを言われるのは、とても癪に障りますね」

「なによ。ちゃんとリドには給料出すわよ。ルイの分の報酬は決まってたけど、リドの分は決まっていなかったし。ただ働きさせる気はないわ。お金も時間も大事なんだから」

グレースはぶつぶつ文句を言いながら、机の引き出しから金を取り出し、リドに渡す。

「生身で悪いけど、これでいいでしょ」

「え、こんなにいいんですか!？」

リドが目を丸くしている。それもそのはずで、二週間の仕事だったのに金貨一枚も貰ったせいだ。金貨一枚は銀貨十枚に相当し、銀貨三枚もあれば、平民ならば食費だけの計算で一ヶ月は余裕に過ごせるのだ。切りつめれば生活するのに問題ない額である。

「そうよ。うちでは用務員には一月金貨二枚を支払ってるわ。だからそれでいいの」

「ここら辺じゃかなりの好待遇なのよ。雑用に修理に、イベントの手伝いっていう風に、意外に重労働だから。」

「ところで校長。私以外の教師での謀報員は誰だったんです？」

セトの問いに、グレースはソファーにもたれた姿勢のまま小首を傾げ、嫣然と微笑む。口元に指先を押し当てる。

「内緒よ。敵をだますには味方から。手駒を明かす気はないわ」

「楽しげに片目をつぶるグレースを、セトはじと目で見る。」

「そうですか。ちなみに私もその駒の一つなんですか？」

「あら、知らなかったの？」

「知ってますよ！不愉快にも！」

マイペースに問うグレースに、セトは怒鳴る。わざと訊いたのに、いけしゃあしゃあと返されたせいだ。

のれんに腕押し。嫌味が全く効いていない。

「誰でもいいから、アルモニカ・グレッセンにもちゃんと伝達しておいてね。問題解決って。あとは生徒が目を覚ました後の事後処理

ねえ。早く起きてくれないかしらあ」

グレースはやれやれと呟く。

「あの、ちゃんと起きるんですか？」

ファリドのこともある。流衣が恐々と尋ねると、グレースは頷いた。

「ええ。時間はかかるけれどね。あれは、魔力増幅剤で無理に魔力を増やしたことで、魔力が暴走して生命力が引き出されるせいよ。体内での魔力の暴走が静まれば、自然と目が覚めるわ。長くても半年くらいじゃない？」

「そんなに……？」

「人によるわ。魔力耐性があれば早く起きるし……。あとは魔力に対して鈍感だとかね。例の留学生なんて、すぐに起きるんじゃない？ シルヴェラント人の魔力への感応能力の低さは、ほんと凄まじいもの」

「感応能力……？ ですか？」

流衣は首を傾げる。耳馴染みのない言葉だ。
するとトーリドが横から補足してくれた。

「魔力を感じ取る能力、ということですよ。これが出来ないと、魔法を使うのはなかなか難しいのですよ。シルヴェラント人やセナエ王国国民は、その辺の感覚が異様に鈍いんです。不思議と。代わりに精霊信仰が根強くて、こっちで言う 精霊の子 が多いんですが」

「へえ……」
無意識に、風の 精霊の子 であるリドを見てしまう。リドは肩をすくめた。

「なるほど。俺が魔法が性に合わないのは、それでか」

「感応能力が低いだけで、魔法自体は使えますよ。面倒がらずに精進しなさい。 精霊の子 ときたら、何も勉強しなくても術を使えるせいで魔法を学ぶのを面倒がるんですから」

「合わないんです」

リドはしぶとく言い張った。

トーリドはやはりというように息を吐く。

二人の話を聞いていたセトは、話が区切れたようだとみると、グレースに話しかける。

「事後処理はそちらに任せますよ。それより校長、もうしばらくルイを助手に据えておきますので、よろしくお願いします。報酬を支払う以前に、基礎学力が足りていないので、これからみっちり教え込むことにします」

「……エ？」

さつくり嫌なことを宣言された。

流衣は、ぎぎぎと首を巡らしてセトを見る。

「分かったわ。じゃあ辞める時は身分証を返してね。あと、家も使つていいわよ。一部改装してくれたお礼に、家賃は引き続きタダでいいわ」

「もし良ければ、俺もいていいですか？」

「いいわよー。人が住んでる方が家は状態が良くなるし。ルイのことで目途がつくまで、この町にいるんでしょ？ なんなら用務員を続行してもいいわよ。あなたよく働くから」

「それなら続行で。暇なのは性に合わないんです」

「いいことだわ」

グレースはうんうんと感心げに頷いた。怠惰なグレースに言われると、なんだか複雑な気分になる台詞だ。

「じゃあ、しばらく続行ね。辞める時には言っただようだい。」

さ、もう帰ってくれる？ 仕事したいし、眠いのよ」

「眠いのが本音なんでしょうが」

セトは低く突っ込みつつ、溜息を吐いて会釈する。

しかしグレースは何も言わないで、ふふんと鼻で笑った。

「仕方ないですね、それでは失礼しますよ」

「失礼します」

「お邪魔しました」

流衣とリドもそれぞれ挨拶をしてから校長室を後にした。

話しかけられた相手が、何も覚えていない。思い出そうとしても、特徴が思い浮かばない。

このきな臭い感じ、前にも出くわしたことがある。

催眠術か、記憶を消したのか。そんなことを呟いていたフラムを思い出す。旅に出て初めて着いた町・ドーリスで魔法道具屋を開いていたフラム。そのフラムと協力して、闇物やみものの普及を止めたことがあった。

あれは結局、魔王を信仰する組織 悪魔の瞳イヘルズアイ に原因があった。

瘴気しょうき入りの品をあちこちにばら撒き、ラーザイナ・フィールドにじわじわと混乱を広げている組織。

「サイモン君」

寮の真裏。敷地内にある池の棧橋に座って水面を見つめているサイモンを見つけ、流衣は声をかけた。

やや強張った、けれど厳しさを含んだ声で呼びかけられ、サイモンは振り返る。意外そうに眉を片方上げている。

「お前か。……何の用だ？」

金色の双眸そうまうが、冷たく光る。

「坊ちゃん、わざわざこんな真似をせずとも……」

サイモンに直接聞きたいことがあると言っただけから、オルクスにはこんな風に会いに行く必要はないと諭されているのだが、流衣は分かっただけで聞き流した。それでもどうしても直接確認したかったのだ。

心臓はバクバク鳴っているし、極寒の中だというのに、緊張のせいで汗すら出てきている。

流衣は意を決して、問う。

「……魔力増幅剤って知ってますか？」

遠回しに訊いてもはぐらかされるだろうから、ストレートに問う。無言のまま、サイモンは僅かに眉を寄せる。

「知らないな」

そう答えると、興味が失せたように、また水面に視線を戻す。

寒いのが苦手な割に、サイモンは外に多い気がする。

スル・ヴェリの町でもそうだった。

「そっか。僕の勘違いだったみたいです。変なこと訊いてすみませ
ん」

どうやら本当に知らないらしい。知っていたら、だからどうしたと返しそう。サイモンは恐ろしく短気だが、嘘を言うことはしないように思うのだ。

悪魔の瞳は無関係なのだろうか。それにしても、特徴が似ている気がするが……。

あまり話しかけても怒られるだけだと思い、とっとと退散しようかと思つた流衣に、サイモンが問いを返す。

「……何故、俺に訊く？」

サイモンはこちらを向くことはなく、背中しか見えなかった。もしや気に障つたかと、自分の末路を案じつつ返す。

「ちよつと、ごたごたしてたんですが、それが君達の組織と関係ありそうな気がしただけです。違ふんならいいです」

「もしそうだったら、お前は どうしていた？」

「うーん。……たぶん、手を引いて下さいつて頼みに来たんだと思います」

ふんと鼻で笑い、サイモンは立ち上がる。流衣と向き直ると、忌々しいものを見るように目を細めた。気付けば、いつ取り出したのかナイフの先が流衣の首元に突き付けられていた。

「……何その答え。甘すぎて反吐へんが出る」

サイモンが向けてくる殺気に、冷や汗が背に浮かぶ。けれど、目を反らしたらもっと怖いことになりそうで、流衣は青ざめながらも

サイモンを見つめ返す。

「ほんと、お前みたいな奴は嫌いだね。……殺してやりたいくらいだ」

サイモンは右手を広げた。ナイフが滑り落ちて、棧橋の板に突き刺さる。その右手がそのまま流衣の首を掴んだ。

「……………」

ああ、まずったなあ。

その瞬間、流衣が思ったのはそれだけだった。サイモンに会うのだからそれなりに覚悟はしていたが……。

首の痛さと息苦しさと顔をしかめるが、すぐに手は退いた。同時に殺気も消え、気配すら掻き消える。

「俺達のことには首を突っ込むな。疑うのは好きにすればいい。だが、関わる気ならこちらにも考えがある。お前みたいな小物一人を潰すくらい、簡単なことだと知れ」

流衣の横をすり抜けざまに低く脅しを呟くと、サイモンは足音も無く寮の方へと去っていった。

「ごほっ」

流衣は首に手を当てて咳をして、緊張が抜けてその場にしゃがみこむ。遅れて足が震えてきた。

「こ、怖かった……………」

殺されるかと思った。

『ですから、行くべきでないと言っただけです。……大丈夫ですか？』
足元に飛び降りたオルクスが、くりくりとした黒目で流衣を見上げた。心配そうに小首を傾げる様は、可愛らしいオウムそのものだ。それを見ていたら、気分が落ち着いた。ほっと息を吐き、頷く。

「うん、大丈夫。でも、違かったなあ。そんな気がしたんだけどなあ」

『だからって真っ向から確認に行くなど、愚か者の所業です』

「でも気になったから。異様に痕跡を残さないのかさ……。似てるでしょ？ ドーリスの町の行商人のこと」

オルクスは首を傾げる。

『似ているといえは似ていますが、あちらの方が巧妙でしょう。そして余程効果的です』

「うん、まあ、あちこちの町に闇物が広まってたし、そうなんだろうけど……」

そのまま棧橋に座り込んで、空を見上げて溜息を零す。

「結局、手引きしてる人は分からず仕舞いかあ。なんかすつきりしないね」

『綺麗に纏まる事件など、そうそうないですよ。それより、危険事は避けて通るべきです。また呪われでもしたらどうするんですか』

流衣はうつとうめく。

「ごめんって。もうしないよ」

『あまり信用なりません。坊ちゃんは普段は臆病でいらっしやるのに、腹が決まると例え行き先が危険地帯でも突っ込んで行かれますからね……』

「やだなあ。そんなことしないよ。怖いじゃん。何となく、そうした方がいい方を選んでるだけだよ」

『……やはり信用出来そうにないですね』

じつとりとにらんでから、オルクスはひらりと流衣の肩に舞い戻る。

どうしたのかと肩を見た流衣は、さくさくと雪を踏みしめる音に気付いてそちらに顔を向ける。

アルモニカが小走りに走ってくる所だった。その後ろにはリドの姿もある。

「お主、大丈夫じゃったか？ 寮から見えて何事かと思ったぞ」

どうやらサイモンとの遣り取りを見られていたらしい。

せっかく、セトに先に帰ってもらい、リドにはアルモニカへの伝言を任せ、こっそりサイモンに接触したのだが。

池の前の道には木が植えてあるが、寮からは離れているし、上の階からなら見えただろう。

「平気だよ。アルはリドから話聞いた？」

「うむ。寮を出たところで会ったから、解決したとだけ」

軽く息を切らしつつ、アルモニカは答える。

悠々とした足取りで追いついたリドはアルモニカのやや後ろで立ち止まると、サイモンの去った方をちらりと見た。

「あいつと何話してたんだ？ 俺をアルモニカの方に行かせてまでよ」

口調は軽いが、答えないのを許さないような、確固とした問いかけだ。

流衣は苦笑したものの、問いに答える。

「悪魔の瞳 と関係あるか確認しただけだよ」

「…… 悪魔の瞳 ？ なんて、そこであいつが出てくる？」

流衣ははたと目を瞬く。そういえば、話そうと思っていたのに結局忘れていたことを思い出した。

「サイモン君、その幹部だよ」

「なにい！？」

「何じゃとお！？」

兄妹で声が重なった。

「お前、なんだそれ。初耳だぞ！」

「ワシだって初めて聞いたわ！」

二人そろって詰め寄られ、流衣は焦る。

「ごごごめんって、すっかり話すの忘れてて」

ひーっ。怒られる。これは確実に説教コースだ。

目を泳がせながら、ぼそぼそと小さな声で、エアリーゼを出た後にあつた話をする。

「はあああ！？ アジトに連れてかれて、教祖に会って、仲間に誘

われて断つただあ!？」

「ちよつ、ちよつと声大きいって!」

リドがすつとんきような声を上げるので、流衣は慌てて口を挟んだ。リドはほとほと呆れた様子で天を仰いでいる。

「駄目だ。やっぱりおめえ、放っておくと野垂れ死ぬわ。カザ工村を出た時から一つも進歩してねえのってどうなの」

しかも何か失礼なこと言ってる。

「で、でも、ちゃんと断つたよ……?」

「当たり前じゃろうが!」

アルモニカがばつさり切り捨てた。

リドとアルモニカ、両者とも雰囲気が厳しい。というか目が据わってる。怖い怖い怖いってだから!

「あ、あー! そうだ。僕、セトさんに、帰りに研究室に寄るように言われてたんだつた! もう行くね!」

三十六計逃げるにしかず。

脱兎の勢いで逃げだした流衣の背に、アルモニカは怒鳴る。

「こら、待てルイ! もう我慢ならん! エアリーゼを出て行った時といい、お主は全く……!」

「ごめんってばーっ! っていうか、僕のせいじゃないよ。不可抗力なんだってばっ」

「心構えが足りておらぬのじゃ、お主は!」

「相手が誰でも喧嘩売るアルに言われたくないよっ!」

「なにをーっ!」

ますます憤激して追いかけてくるアルモニカ。

これはますます捕まるとやばい。とりあえず本が飛んできそう。

「諦めてアルモニカに説教されとけ、ルイ」

後ろからリドの笑い声が飛んでくる。どうやらリドの説教はないみたいだ。代わりにアルモニカの説教が待っている。

なんで兄妹揃って説教してくるんだらう。

リドは兄貴分みたいな感じだからまだ分かるとして、年下である

アルモニカに説教される理由がよく分からない。

流衣は必死に走って逃げながら、内心、疑問でいっぱいだった。

結局、捕まって説教されました。

曰く、知らない人についていってはいけません、とのこと。

年下に幼児扱いされたことで、流衣はその後しばらくへこむ羽目になった。

* * * *

寒いのは嫌いだ、外にいるのは好きだ。

室内でぬくぬくしていると、感覚が鈍る。寒くても外に出て、感覚を研ぎ澄ませるのがサイモンの日課だった。

そこを流衣に邪魔された上に、不愉快な問答をしたせいで、サイモンはイラついていたが、お陰であいつがとちったことを知った。とはいえ、ぎりぎり及第点だ。

寮へと歩きながら、空を見上げる。

寮の屋根に、鳩が一羽とまっていて、サイモンをじっと見つめていた。

「聞いてたんだろ。手を引け。ぎりぎりしくじってねえから、今回は見逃してやる」

鳩は低い声で言うサイモンを見つめ、ややあつて飛び立った。

分かった、という意味だろう。

確かにサイモンは魔力増幅剤については知らなかったが、流衣の質問がシェリカに関係することだろうことは勘付いていた。

学校を拠点とし、魔王信者として、混乱をばらまくのがシェリカの役割だ。

あんな間抜けな奴に尻尾を掴まれかけるなど、爪が甘い。

サイモンは鳩が飛んでいった空を見上げて舌打ちする。

自身の仕事が上手くはかどらないのもあり、苛立ちが助長されて

いく。

(闇魔法使いども、どこに潜んでやがる……)

教祖の先見くわんみは正しい。

確かに奴らはこの町にいる。

けれど痕跡を僅かに残すだけで、姿を見せない。

まるで、幽霊か何かのように。

影から引きずりだして、叩き潰してやる。

見えない敵を消す。サイモンは胸を黒く塗りつぶす思いを抱えながら、ただそれだけ考える。

教祖の敵は全て潰す。

それが真つ暗な地獄からすくいあげてくれた教祖への、サイモンのりの恩返しだ。

隠れているネルソフを捉とらえられない以上、まだこの学校に留まる必要がある。ぬるま湯に浸かるような学校での日々は、サイモンの性に合わない。

スルーヴェリの町の裏を取り仕切り、犯罪者を捨ったり潰したりしている方がまだ有意義だ。

物騒なことを考えながら、サイモンはその場を立ち去る。また情報を集めに行く必要があった。

* * * * *

後日談として、ファリドが倒れた白の文学祭から三日目に当たる水の曜日、想定よりずっと早くファリドが目覚めたことで、話を聞くことが出来た。

ファリドは魔力増幅剤を自分から買いに行く真似はしておらず、女生徒から貰った品が原因らしいという話だった。そして、やはりファリドはその女生徒について覚えておらず、女の子だったけれどどんな子か分からないと言う始末だった。倒れたせいで記憶が曖昧になっている部分もありそうだ。

そして更にその三日後。

昏睡状態にあった被害者三人のうちの一人が目を覚ましたとの知らせを受け、話を聞きに行ったところ、その女生徒は自分で薬を買ったものの、単に腕の良い占い師を紹介してもらったのでそこに行き、占い師から「自分に自信が持てる薬」を買っただけだと返したという。何ともうさんくさい話であるが、その生徒は、普段から魔力の低さに悩んでいて、自分に自信が持てずにいたので、怪しいと思いつつも飲んでみてしまったらしい。ちなみに紹介してくれた生徒とは知り合いではなく、やはり容姿を思い出せなかったそうだ。

残り二人は昏睡のままだが、似たような状況だったろうと予測がついた。

何故なら、被害者は皆、魔力が低いことを悩んでいた生徒ばかりであったので。その悩みにつけこまれたのだからこの見方が強い。

ファリドの場合は特に悩んでいなかったらしいが、ファリドが魔力が低いのは周りの生徒の間では有名だったので、そこについて、そう見せかけようとしたのかという見方もある。

以上が、グレースから後で聞いた報告だった。

どちらにせよ、薬を広めて何のメリットがあるのか、不可解な事件だった。それでも、気付いた時にはすでに手遅れになっていそうな、なんとも不気味な気配が漂っている。

それ以来、魔力増幅剤の流通はびたりとなくなった。

手引きした者は、引き際をきちんと心得ているようだ。

音もなく姿もなく、ただ気配だけは確かにある。まるで影のような輩であるとは、グレースの言である。

六十章 影（後書き）

第十幕、完結です。

シリアスとみせかけた感じのエセ事件物でした。我ながら、これが事件物かと聞かれるとうさんくさい香りしかしない気がします（笑）
そして、まだ学校編は続きますよー。

もしかしたらあの話どこだったかなあとという方がいらっしやるかもなので、簡単にご案内。

- ・ 悪魔の瞳 が初めて出てきた事件 第一幕 九章
- ・ デイルが人質云々の話 第二幕 四十三章

この辺を見れば、ああ、なるほどと思い出されるかもです。

伏線を回収しながら、別の伏線をばら撒いて話を進めているので、毎度伏線回収に必死です。とりあえず一段落ついて良かったです。

ここまで読んで下さった読者様に感謝です（＾＾）
いや、まだ続きますが。

ときどき書いていますが、おまけ召喚は四部構成ですので……。長いですが、お付き合い頂ければ幸いです。では。

幕間10

「ノエル、私は王都に行く」

屋敷を出る前に、荷物を取りに行った自室で、ディルはノエルと向き合っていた。

「ギユピ？」

寝台で丸くなっていた白い鱗と水色の目をした小型竜ミニドラゴンは、小首を傾げて親だと認識しているディルを見上げた。

ここ一年で体長七十ケルテルほどまで成長したノエルは、これで大人の姿だ。

ディルがどこに行くにもついて来たがるので、見た目は成長してもまだ子供のように見える。

幼い子どものようなノエルの、純粋な眼差しに胸が痛むが、告げなくてはいけない。

「君はここに残れ」

その瞬間、ぶんぶんとノエルは頭を振った。

「ギヤピ！ ピギヤピギヤギヤピッ！」

嫌だと言っているのはなんとなく分かる。

「駄目だ。王都は危険だ。それに、私の使い魔が竜だと現王派げんおうはにはれると、ますます目をつけられてしまうのだ。ここに残り、師匠とともにいる。嫌ならば、リドカルイに引き取ってもらえるように手紙を書く」

「ピギヤア〜……」

連れていく気はない。きっぱりとしたディルの態度に、同行出来る余地が全くないことを悟り、ノエルは水色の目をうるうるさせた。泣き落としのような、人間じみた感覚ではない。実際に、別れを思っ泣きそうになっているだけだ。魔物だけあって、人間のよう

な駆け引きをノエルはしない。いつも真っ向から向かってくる。それしか訴える手段を知らないというように。

「ノエル……」

デイルとて寂しくないわけではないし、出来るものなら連れていつてやりたい。

しかし、さつきノエルに言ったように、竜が使い魔だとばれるのは厄介なのだ。竜が人の使い魔になることは滅多にない。それこそ流れ星が空から落ちて人に命中するくらいの奇跡的なものだ。デイルは運が良かったただけだ。……いや、幼竜幼竜の孵化ふかに立ち会って、その為に親と思われたことで、周囲の魔物に狙われる羽目になったとしたら、それはとんでもない不運だったのかもしれないが。オルクスが近くにいたからこそ、幸運と思えるだけである。

デイルはノエルの頭を軽く撫でてやる。

しょんぼりとうつぶさくノエルに良心が痛む。

「すまないな。君が人間だったら、まだ連れていけたんだが……」

「ピギヤ!?!」

ノエルががばつと頭を上げた。

本当!?! というように、目をキラキラさせる。

「む?」

デイルは首を傾げる。

今の眩きのどこに喜ぶ要素があるのだろう。

そう思っていると、ノエルは寝台から床に下り、そこで四足よっめしを踏ん張った。羽根はピンと外に突き出し、尾もまた真っ直ぐに伸びている。

「なんだ? どうし……」

いったい何をしようというのか。

動揺するデイルの前で、ノエルの体が一瞬光輝く。

「!」

眩しさに目を閉じ、次に目を開けると、そこには七歳くらいの小さな男の子が立っていた。白い髪と水色の目をした、見目麗しい子

どもだ。白い上下の衣服は法衣に似ていて、腰紐は淡い青色をしている。大きな目玉はくりくりとしていて可愛らしいのだが、どこかやんちゃそうな印象も受ける。

小さな子どもはデイルを見上げ、にこっと笑った。

「ノエル、デイル、護る！」

デイルは驚いて一歩後ろによるめいた。

「ま、まさか。君は、ノエルか？」

驚いた。

驚いたなんてものではない。

塔のレッドや、女王陛下の盟友であるカルティエ・ブラックナーのような者を見ているから、竜が人の姿を取れることを知っていたが、余程賢い竜でなければ人型をとるのは不可能だとも聞いていた。

それを、ノエルはやってのけた。

「ノエル、今、人間。一緒、行ける」

期待を含んだ眼差しに、更に衝撃を受ける。

つまりは、ノエルはデイルの言葉を受け、人間ならば一緒に行けるからと変化したことになる。

デイルを守りたいという使い魔の言葉に胸をつかれる。なんていう主人思いな竜。忠誠心。

これこそまさに騎士の鑑^{かがみ}……！！

じーんと感動に浸るデイル。

自分もこんな風になりたいと羨望が湧きおこる。

これで連れて行かないなんて言えない。期待に応えるしか選択肢はない。

「分かった。ノエル。君のその心に免じて、共に行こう。そして、共に騎士の道を目指すのだ、戦友よ！」

「ノエル、騎士、なる！ がんばる！」

室内に、明るい声が二つ、響いた。

その日、騎士見習いの少年とその使い魔が一人、アカデミアタウンを旅立った。

白い騎士服を纏った姿は、曇天の空から降る白い雪の中へ、溶け込むように消えていく。

やがて、道に残った二つの足跡を、風と雪とが綺麗にかき消していった。

六十一章 使い魔対決 1 (前書き)

十一幕、簡単あらずじ

セトの元で、魔法の基礎を詰め込むのに忙しい流衣。ごたごたした日々が続く中、ある日、勇者である達也から手紙が届く。それは、盗まれた聖具に関することで……。

「さて、ルイ」

「は、はいっ」

セトが眼鏡のブリッジをくいを持ち上げ、これからが本題だといふように声の調子を強めたので、流衣は背筋を伸ばして返事をした。セトのデスクに積まれた本やプリントの束、その上に手を置くセトの動作を、出来ることなら見たくなかった。嫌な予感しかしない。サイモンに会った後、研究室に立ち寄るように言われていたのでやって来たのだが、これは、もしかして、もしかすると。

「そうだ、君の懸念通り、君への課題だ！」

「うわー、やっぱりいーっ！」

流衣は頭を抱えた。

「っていつかセトさん、心を読まないで下さい。」

まあ、課題を嫌がる生徒の顔など、教師として見慣れているのだろう。

「君は基礎が抜けている！ 私の研究を最低限でも理解するには、これを全てこなす必要がある。大丈夫、これを勉強すればいいだけだ」

力強く言い切るセト。

そして、ブックタワーをずいと流衣の方へと盤面上で滑らせた。

「え！？ これ、持って帰らなきゃいけないんですか！？」

「ああ、まずはそこからか。よし、分かった。面倒だ。浮遊の術をここで教えよう」

「ええ!？」

面倒だからって、新しい術を教えようだなんて。

びっくりしていると、セトは眉間に指先を押し当て、溜息をついた。

「本当なら、少しずつ持って帰れと言いたいんだが……」

ちらりと疲れたように本棚を見るセト。

流衣もそちらを見て、愕然とした。

こないだ片付けたばかりの本棚から、本が雪崩れ落ちているではないか。これでは知識の宝箱ではなく、場所をとるだけの単なる紙の山だ。

「必要なテキストを引つ張りだしていたら、また部屋が荒れてしまつてな。なんとか纏めたが、これをここに置いてみる。恐らく、どこに何が置いてあるか分からなくなる」

「自分で言わないで下さいよ……」

そんなにきつぱり断言されてもなあ。なんだかなあ。

本当に片付け下手なんだなあ、この人。流衣は呆れをたつぷりに込めた目でセトを見た。流衣の為にしてくれたいえ、これを片付けるのは助手である流衣だ。

「セトさん、つかぬことを伺いますが……。まさか研究してまとめた資料の位置が分からないから、基礎を詰めて時間稼ぎしよう、とかじゃないですよね……?」

「そんな訳ないだろう。ただ、ちょっと、そうだ。書き散らしたレポートを、あつちこつちに置いてあるから、番号が揃ってないだけだ。個人研究の部屋自体は決まっているから、そこにあるのは分かっている」

「……………そうですか」

それを位置を把握していないというと思った流衣だが、今更なので、諦め混じりに返した。基礎知識を入れ、その後に閲覧させて貰う時に整理すればいいだけだ。

こうして、流衣の助手の仕事と勉強詰めの日が始まった。

静謐の第二の月半ば　大陸歴でいう十二月の半ば。セトの助手、というより助手兼弟子になって一ヶ月が過ぎた頃、流衣はすっかり助手の仕事と勉強の両立に慣れていた。

とはいっても、なかなか減らない課題の山は健在で、ひいひい言っている。

しかし、理数系が好きなこともあって、そんなに苦勞はしていない。

何故、魔法に理数系が関係するのかというと、呪文ではなく魔法陣を扱うのに関係するのだ。魔法陣はチョークで描くだけの簡易なものから、インクに特殊な材料を混ぜたものや、魔力の媒介に使う材料を使用するものまでさまざまで、その材料の分量を量るのに、理科系統の知識が必要になり、かつ、数学を使用するわけだ。図形の大きさの比なども、それで出す。

ラーザイナ・フィールドでは日本のような暗算が存在しておらず、ややこしい計算を紙に数字をずらりと書き並べるだけで、あっさり計算して答えを導き出す流衣に、セトは随分驚いたらしかった。難しいことではないので乞われるままに教えると、これは画期的だと大喜びされた。

それが授業中、一番後ろで聴講している時のことだったので、流衣は後悔してうつむいていた。流衣を良く思っていない貴族の男子生徒から、ものすごい目で睨まれたので。隣の席のファリドは、新しい知識に興奮していて気付いていなかったようだが。

前みたいに町中を追い回されたりはしていないが　貴族を見つけた時点で物影に隠れるようになった為だ　代わりに校内で些細な嫌がらせを受けている。オードという名の貴族少年が中心だ。

サイモンと知人というだけで目をつけられていたが、最近は、どうやらセトの弟子のような格好に収まっていること自体が気に入ら

ないらしく、すれ違いざまに「平民の癖に」とか「生意気」とか悪態を囁かれたりするくらいには嫌われている。些細な嫌がらせも、外を歩いていたら窓からコップ一杯の水が降って来るとか、少量の砂が降って来るといった、怪我をするほどではないが地味に困るタイプのもので、こういう嫌がらせはドラマの中だけではなく実際にあるのかと流衣は感心混じりに驚いていたりする。出来るだけ窓の下を歩かないようにしたり、怒ったオルクスが気を張って、結界でガードするようになったので、被害はなくなった。それが相手にはますます目ざわりらしい。

(早く研究見せてもらって、出て行こ……)

被害はなくても、小さな嫌がらせが連日続けばうんざりしてくる。流衣は授業で集めた課題プリントの束を抱えてセトの研究室を指して廊下を歩きながら、内心でげっそりと溜息を零す。

今のところ、リドやアルモニカには気付かれていないので、隠し通すつもりだ。リドはともかく、アルモニカにばれたら、とんでもない騒ぎに発展しそうな気がする。アルモニカは口が悪くてすぐに暴力に走りがちなお嬢様だが、正義感が人一倍どころか三倍くらい強いし、身分があるせいで物怖じする必要もないから、がんがん責め立てるだろう。正論と説教の嵐で相手を追いつめそうな気がして怖い。

正論を口にするのは良いことだと思っけれど、必ずしも正しいとは流衣は思っていない。正論で遣りこめると、逆に相手を怒らせることが多い。凶星をさされて怒り、反論する余地がなければ心に積もった怒りを発散させる術がなく、多大な恨みを買っそうだ。何事もほどほどが肝要というやつだ。

「うわ!？」

廊下で起きた急な突風に、腕に抱えていたプリントの半分ほどがバサバサと音を立てて、窓の外へ飛んでいった。

嘩然と窓を見て、風が吹いてきた方を見ると、オードの手下っぽい少年がにやっとならって笑っていた。

さっきの風はこの少年の仕業らしい。

内心で溜息を吐く。

そう来るとは思わなかった。

どうやら窓を開けて待ちかまえていたらしい。準備のいいことだ。静謐せいひつの季節のど真ん中、つまり真冬の今は、雪の降る寒冷地であるこの辺りでは、窓を閉め切らないと窓の蝶つがいが凍りついて閉まらなくなるのだ。だから普段は窓は閉められている。

外に飛ばされたプリントを回収しなくてはとうんざり気味に考えた時、オルクスが肩から飛び立った。

『わてにお任せ下さい』

「オルクス？」

びっくりして、小さなオウムの後姿を目で追う。

少しすると、上手く風を操ったのか、飛ばされた全てのプリントを集めて浮遊の術で引っ張ってきたオルクスが窓から廊下に舞い戻った。

目を丸くする流衣の腕の中に、プリントがふわっとおさまる。

「ありがとう」

流石オルクスだ。

感心しきりで、流衣はにこつとオルクスに笑いかける。

『どういたしまして。これくらい、お安い御用です。鳥の魔物であるわてには、つかめない風はありませんので』

火と風と光の魔法領域を持つオルクスには、ささやかな仕事らしい。

さらりと言って、再び流衣の左肩におさまった。

「よいしょ……っつと」

流衣は左腕でプリントを抱えた格好で、窓が閉まらなくなる前にと、窓を閉める。少し凍りかけていたみたいで重かったが、なんとか閉まった。鍵をかけたところで満足し、廊下を向き直ったところで、嫌がらせを仕掛けてきた少年に睨まれているのに気付く。

「いい気になりおつて。チビの癖に！」

あつさりいなされたのが腹が立ったようだ。突然の罵倒に、流衣は一步後ろに下がる。

(チビは関係なくない?)

が、内心では密かに言い返していたりするが。口に出せないのはいつものことだ。

少年は、サイモンを目の敵にしている貴族のオードという少年が出歩いている時、たいていオードの側にいる。前に殴りかかってきた方とは別のもう一人だ。一年生で、オードからファルと呼ばれていた気がする。流衣より年下なのだが、流衣よりもちょっと背が高い。細めの体格をしているのでまだいいけれど、ほんと、この国の人は成長が良すぎると思う。

茶色い髪と目をした落ち着いた感じの見た目なのに、今は喧嘩っ早い少年といった雰囲気だ。少年はキツと流衣を睨みつけて声を張り上げた。

「私と決闘しろ!」

びしつと突き付けられた指先を、あんどりと見つめ、流衣は即座に頭を下げた。

「無理です! ごめんなさい!」

青ざめてちよつと涙目になる。

(決闘!? 無理。無理無理無理)

あんまり潔い降伏宣言に、ファル少年は口をつぐんだが、すぐに気を取り直して軽蔑した目を向けてくる。

「腰抜けめ、なんだその返事は! せめてもう少しねばれ!」

彼の言うことも最もだ。

通りすがっていた他の生徒達も、思わずというように頷いている。

「腰抜けでいいです！ 僕、ほんと弱いんで。武芸なんてからきしだし、魔法もセトさんのお陰でだいぶマシになってるだけで実技はそんなでもないですし、そもそも、友達いなくなったら生きてこころまですり着いてる自信ありませんし！ オルクスがいなくなったら、うつかり死んでると思うんです！ だからすみません！」

決闘なんてしてたまるか、混乱しつつも口からは言い訳が溢れだす。

あまりにも情けない言葉の羅列に、喧嘩を売った当人も啞然としている。

しばらく黙りこんで考え込んだファルは、ややあつて口を開く。

「だったらこうだ。その使い魔と、私の使い魔で決闘だ！ それなら貴様が腰抜けでも平気だろう。それともなにか、貴様の使い魔も腰抜けか？」

完全に見下した言葉だ。

自分のことはともかく、オルクスのことを酷く言われるのは許せない。流衣はむっとして、僅かに眉を吊り上げた。

「オルクスは僕なんかよりよっぽど優秀なんですよ！ 酷いこと言わないで下さいっ」

ファルはにやりと笑う。

「では、決定だな。今日の放課後、鍛練場まで来い！」

「ええええ！？」

そう言うと、ファルは黒いポンチョを翻して去って行った。仰天する流衣を放置して。

「え、ええ、ええー？ ……もしかして、僕、決闘を受けちゃったの……かな？」

ぼかんと立ちつくす流衣。

廊下を通り過ぎる生徒達が、なにやら可哀想なものを見る視線で

流衣を見ながら通り過ぎていく。

『よろしいですよ、坊ちゃん！ 坊ちゃんを馬鹿にする、馬鹿な子どもには、わてがたつぷり灸きゅうを据えて差し上げますので！ 血が騒ぎますね〜』

しかし、決闘することになったオルクスがとても楽しそうなので、まあいいかと思う流衣だった。

六十一章 使い魔対決 1 (後書き)

蛇足的コメント

分量少なめですが、あんまりにも更新してないので、更新しないよりマシかと少し上げました。

ほぼ書き下ろしです。
のんびり続きます。

六十一章 使い魔対決 2

人、人、人。

どこもかしこも人だらけだった。

放課後、時間指定がなかった為に、適当に四時半頃に鍛練場にや
つて来た流衣は、鍛練場の校舎側にある階段 観客席を見て、更
には視線が集中して、蛇に睨まれた蛙のように凍りついた。

(……場所間違ったかな)

つうとこめかみを汗がつつたう。流衣は人見知りしがちなのだ。少
人数ならまだしも、観客席いっぱいの見知らぬ人の前に極度の緊張
を覚え、同時に間違いを恥ずかしく思っただけで踵を返す。

「どこに行く！」

走りだす前に、背中に声がかかった。びくりと足を止め、振り返
ると、鍛練場の真ん中、がたいの良い男性教師の横に、ファルの姿
がある。

「なっ、何か催し物あるんですね？ お邪魔みたいなんで失礼し
ますっ」

若干、どもりつつもそう言うと、ファルが思い切り蔑んだ顔をし
た。

「その催し物の主役は、私と貴様だ。逃げるのは許さない」

「……………」

主役が、流衣とファル！？ ということは、つまり、決闘場所は
ここで合っていることになる。

「な、なんでこんなに人が……？」

「決闘の告知をしたら、集まったただけだ。なんだ、観客の数に怖気づいたか？」

ふふんと笑うファル。流衣は大きく肯定する。

「はい！ 無理です、駄目です。もう帰りたいです！」

「だから、少しはねばれと言っている！」

半泣きで訴えると、ファルがぶち切れた。

「ほんとに腰抜けだな、貴様！」

肩を怒らせ、頭から湯気でも出そうな勢いでファルは怒る。

（なんなんだよ、もう。デイルじゃないんだから、熱血はもういいよー）

穏やかそうな外見と違い、どうにも頭に血が昇りやすい少年である。

「腰抜けでいいですよ……」

流衣は視線に耐えかね、マントのフードを目深に被って身を縮める。

途端に観客席の方から、女生徒の黄色い悲鳴が上がったのに、びくつと肩を揺らす。なにあれ可愛いとか聞こえる気がするが、そんなに叫ぶ程可愛いものがこの辺にいたのだろうか。

「？」

思わず、対象物を探して鍛練場を見回すが、ここにいるのは流衣とファルとごつい教師だけなので、可愛いらしきものは見当たらない。

きっと小鳥でも飛んでいたんだろう。

そう心から信じる流衣は、まさか自分が貴族の女生徒の間で、屋敷に一人は使用人で欲しい可愛い生き物認定されているとは知らない。

「貴様……」

なにやら苦虫を噛み潰したみたいに口元を引き締め、睨んでくるファル。

今の数秒の間に、何か怒らせることをした覚えが無い流衣は、おどおどと視線を返す。

「あ、あの。帰りたいので、早く始めませんか？」

本当は決闘なんてしたくないのだが、こんな大事になっては逃げられそうにもない。早々に諦めた流衣は、早く始めて早く終わる方を選んだ。

「いいだろう」

ファルは鷹揚に頷いて　とても偉そうだ　ちらりと男性教師を見る。

「ザカライア先生、宜しくお願ひします」

「了解した。では、始めようか。今回の決闘は使い魔同士ということで、フィールド指定をした。この四角い線の中で互いに一匹ずつ使い魔同士で戦ってもらおう。フィールドから出る、強制返還、使者の負け認定のどれかにより、勝敗を決する」

刈りこんだ黒髪と、濃い青の目をした、四角い顔立ちのザカライアは、見た目の雄々しさそのままの野太い声で、そう説明した。いかにも体育会系っぽい。魔法使いだろうか？　それにしても体格が良すぎる。武人と言われた方が納得だ。

「決闘前に、使い魔であるかの確認を行う。ファル・シルキス・エツティンド、使い魔を召喚しろ」

ザカライアの言葉に頷き、ファルは使い魔を召喚する。呪文を唱えると、地面に円形の光の陣が出来、浮かび上がるように一頭の馬が現れた。栗毛の優美な馬だ。

「では、使い魔確認の作業に移る。それぞれ、使い魔をこちらに。この粉をかけて、光れば使い魔だ」

ザカライアめがけてオルクスが流衣の肩を飛び立ち、ザカライアの右手首にとまる。ザカライアが粉をかけると、パツと鮮烈な光を放って、粉は花火の残り火みたいにキラキラと空気に溶けて消える。ファルの馬も同様の現象を起こした。

「よし、問題ないな」

流衣はじつとザカライアの顔を見る。

「む？ セトの助手、何か質問か？」

「はい。どうして確認するんです？」

不思議だと思つて問うと、ザカライアは苦笑する。

「滅多とないが、時折、亜人を使い魔扱いしている者がいたりする。使い魔同士の決闘で、魔法のエキスパートと使い魔の戦いになつては平等性に欠ける為、使い魔を用いる決闘前には確認作業をする作法になっているのだ」

「へえ、そんなことつてあるんですか……」

流衣は顎に手を当てる。

オルクスを亜人と呼んで誤魔化している場合と逆なのか。

「亜人を使い魔扱いすることは、この国の法律では犯罪に該当する。まあ、大概の国では犯罪になる」

「教えて下さつてありがとうございます」

流衣は神妙な顔で頭を下げる。

ザカライアはやや目をみはり、相好を崩して、流衣の肩を思い切り叩く。

「うっ」

剛腕で叩かれた流衣は、思い切り弾かれて、危うく顔面から地面に転びかけた。杖をついてぎりぎり踏みとどまる。

「教えるくらい、全然構わんぞ！ 生徒を教え導くのは教師の役目！ あ、お前は助手だが、子どもだから構わんな！」

がはははと体全体を揺らして笑うザカライア。見た目そのままで豪快だ。

「はは、ありがとうございます……」

流衣は左肩を右手でさすりつつ、情けない顔で礼を言う。めっちゃくちゃ痛いです。

「では、確認も終えたし、始めようか。使役者はそれぞれ、枠の外へ。ファルはあちら、助手はあっちに立ちなさい。使い魔は枠の中にいること」

流衣はこくつと頷き、オルクスに声をかける。

「オルクス、ごめん、よろしくね。無茶しないで、ほどほどで……。ここが学校で、人がたくさんいるってこと、忘れちゃ駄目だよ？」心配はするが、オルクスが怪我することはないだろう。むしろ、大がかりな魔法を使い、周りに被害を出しそうな懸念が強い。

「お任せ下さい、坊ちゃん！ あのガキの使い魔、けちゃんけちゃんにして差し上げます！」

「……うん。分かってないっぽいね」

流衣は苦笑する。

もういいや。危なそうだったら、結界を張るくらいはするつもりだ。この一ヶ月で、流衣は結界魔法だけは妙に上達したのである。あまり広範囲に張ったことはないが、壁の結界ならマスター済みだ。対して、攻撃魔法はレパトリーが増えただけで上達はしていない。どうも、流衣の身を守る念が強い性格と合うのか、防御の魔法ばかり上達したのである。逃げと防御なら自信がある。

これを口にしたら、ファルはまた「腰抜け」と言う気がするが…

…。

「じゃあ、気を付けて」

「お気遣いありがとうございます！ 頑張りますよ！」

俄然張り切って、流衣の肩を飛び立つと、ひゅーと風を切って飛び、流衣が立つ方に近い枠内の地面に降り立った。

鍛練場内は除雪済みで、茶色い地面が覗いている。

流衣はてくてくと枠の外を伝うようにして、指定された場所に行き、立つ。ファルも同じように位置についた。

枠の外、ちょうど中央の位置にザカライアが立つ。

「両者、位置についたな？ では」

そして、手を上へと振り上げ、

「決闘、開始！」

勢いよく下へ振り下ろし、決闘の開始を告げた。

地面にちょこんと立ったまま、オルクスは馬の姿をした使い魔を見上げた。黒光りするオルクスの獲物を見る目を見て、馬は怯えたように、一步退く。

ブルルル！？

悲鳴のようななきを上げる馬。

どうやら、馬の姿の使い魔には、オルクスが高位であることが分かるらしい。完全に腰が引けている。

「何をしている、イツシュ！ そのオウムを踏みつぶせ！」
ブルル！？

使役者であるファルの叱咤に、イツシュという名の使い魔は動揺したが、覚悟を決めたのか、はたまた主人の命令に従わなくてはならないからか、オルクスに突進を仕掛けた。

それを見て、ふわりと宙に飛び上がるオルクス。

空から滑空し、身をくるりとひねってイツシュの横っ面に蹴りを入れる。

ブヒャ！？

間拔けな声を上げ、イツシュは面白いほど弾き飛ばされた。

小さなオウムの繰り出した強烈な蹴りに、観客席にいる生徒達は息を呑んだ。そのうちの数名は、目を疑ったのか、眼をこしこし手でこすっている。

地面に巨体を倒したイツシュだが、まだ棒の中だ。よろりと起き上がると、自棄になっっているみたいに、鼻息も荒く、地面を前足の蹄で叩く。

ポコポコポコポコ！

地面から岩が生えながらオルクスの方へ突き進んでいく。それをひらりと宙に逃れて避けるオルクス。しかし、オルクスの真下についた岩から蔦が勢いよく生え、宙にいるオルクスを捉えた。

鳶で埋め尽くされてオルクスの姿が見えなくなる。

(オルクス！)

ハツと息を飲んだ流衣の目の前では、ファルがにやりと笑みを零す。しかしその笑みはすぐに強張った。

鳶が音も無く燃え始め、深紅の炎にそっくり飲み込まれる。ボロボロと黒い灰が落ちていくと、平然としたオルクスが宙に浮かんでいた。

オルクスはつまらないとでも言いたげに、一度、大きく羽ばたく。空から光が落ちてきて、地面に生えた岩の柱に次々に飛来していく。ドオンという雷の命中する音が幾つもこだまし、音がやむと、そこには黒焦げになった岩だったものが残っただけだった。岩は全て砂礫と化していた。

「うわあ……ほどほどでって言ったのに……」

やはり聞いてなかったか。

心配したのも束の間、すっかり呆れている流衣だ。

オルクスの魔法の威力に、イツシュはますます怯えたように退く。体がぶるぶる震えている。

うるうるとした黒い目で、じいっと主人であるファルを見つめるが、ファルは激昂して怒鳴りつける。

「ええい！ 情けない！ それでも私の使い魔か！ 少しやられたくらいでなんだ、もっと頑張らんか、馬鹿者！」

ファルの叱咤激励を受け、イツシュはぶんぶん頭を振って恐怖を追い散らし、再びオルクスと対峙する。

そこへ、空を飛んで、イツシュへの距離を一気に詰めるオルクス。かかと落としのような動作で、足をイツシュの頭に振り落とす。

ものすごい勢いでイツシュの頭がぐりと下がる。そこへ続けて、左脇腹に回し蹴りを叩きこむオルクス。今度はさつき飛ばされた方と反対側へ飛んでいくイツシュ。

(よ、容赦ない……！ 怖っ、怖いよオルクス。馬さん可哀想……) どおと地面に突っ込むイツシュを見て、反射的に痛そうに顔をし

かめる流衣。

イッシュはよろよろしながらも、まだ立ち上がるうとしたが、がくりと前足を下り、そのまま地面に崩れ落ちた。

その足元の地面に光の円陣が浮かび、地面に溶けるように姿が消えていく。

「使い魔の強制返還につき、勝者、セトの助手！」

ザカライアの声が、鍛練場いっぱいに響き渡る。

「そんな……」

ファルは負けたことが信じられないのか、呆然と立ち尽くす。

一拍遅れ、鍛練場の観客席からもものすごい拍手と感嘆の音が響いてきた。

『坊ちゃん、わて、やりましたよ！』

上機嫌なオルクスがまつすぐに流衣の元にやって来たので、流衣は左手を伸ばした。その手首に、オルクスが舞い降りる。

「お疲れ様。ありがとう、オルクス。かつこよかったよ」

少しやりすぎだと思ったけど。

そういう本音は心に仕舞い、とりあえず褒める流衣。手首にとまつたまま、オルクスは誇らしげに黄緑色の羽毛に包まれた体を膨らませる。

「オウムの姿でも、格闘に強かったんだね」

『はい。ですが、この姿の時は、魔法の方が効率がいいのです。今回、ああいう風にしないと手加減出来ませんでしたので、そうしただけです』

「て、手加減してたんだ……」

つくづく規格外だ、オルクスは。流衣は冷や汗混じりに呟く。

「両者、前へ！」

ザカライアの言葉に、流衣はハツとし、促されるまま梓内の中央に歩み寄る。

ザカライアはにっと笑い、流衣とファルの顔を見て、右手を出すように言う。

「右の拳を互いに突き合わせ、健闘を称えよ」

「……………いい決闘だった」

「……………ありがとうございます」

心中複雑ながら、互いに拳を突き合わせ、流衣はぺこっと頭を下げる。

ファルはむすつと口を引き結んでいるが、決闘前のような馬鹿にした目はしていない。代わりに疑心が浮かんでいる。

「貴様、いったい何者だ？」

予想外の問いに、流衣はきよとんとし、首を傾げる。

「助手ですよ。あとはただの旅人？　ですかね？」

こういう答えでいいんだろうか。疑問形で答える。

「ふん。そういうことにしておいてやる」

「どうも……………」

負けたのに偉そうな少年である。まあ態度を変えられても気持ち悪いので、困らないけれど。

「あの、さっきの馬さん、大丈夫なんですか？　消えちゃいましたけど……………」

「強制返還で元いる世界に戻っただけだ。そういえば、貴様の使い魔、いつも顕現けんげんしているが、還さないのか？」

「還す？」

オルクスはいつも傍にいたので、流衣は何の事がよく分からなかった。

『使い魔は、長時間人間界にいと弱ってしまうのですよ。契約し、用事のある時だけ人間が呼び出すんです。ま、わてくらいにもなると、影響はありませんから平気です』

「あ、そうなの？」

流衣は肩に乗るオウム殿を見る。

『わては坊ちゃんのお傍にいたいのです!』

「ありがとうございます……」

そういえば、風呂の時以外は四六時中べったりだ。まあ、小さなオウムだから側にいることは気にならないけど。

「オルクスが言うには、還らなくても平気だし、僕の側にいたいんだそうです。ほんと過保護で困っちゃいます」

あははと後ろ頭をかく。

その返事には、ファルも、ザカライアも驚いた顔になる。

「もしや、還ったことがないのか?」

ザカライアの問いに、流衣は頷く。

「はい。知人に譲って頂いて以来、僕の肩が定位置です」

流衣の言葉に、また観客席から黄色い悲鳴が上がる。なにごとかとそつちを見ると、うらやましいといった言葉が聞こえてきた。

うらやましい?

「オルクス、褒められてるよ。良かったね」

『今のは、わてのことではないと思うのですが……』

「え〜? この辺に可愛いものなんて、君くらいしか見当たらないけどなあ」

『……! お褒めの言葉、ありがとうございます!』

すごい勢いでバサバサ羽ばたきだすオルクス。感動を行動で示したようだ。

しかし、他に何かいたのだろうか。

またきよるきよると周りを見ながら、結局見つけれなくて、ファルに視線を戻すと、苦虫をかみつぶした顔をしていた。

「腹が立つほどの鈍感ぶりだな」

「はい……?」

いわれのない苦言に、流衣は首を傾げる。

何を言ってるのか、意味がさっぱり分からないのだが。

「もういい。貴様の程度は知れた。私が負けたのだ、望みを言え」

「望み……?」

何の話だ。

流衣が目を白黒させていると、ザカライアが助け舟を出す。

「うちの学内ルールだ。決闘をし、勝った方は、負けた方に一つ望みを口に出来る。生命、身体の自由、金以外のことでなら、という条件がつくが、その望みは、学校に通っている間は絶対に守らなければならぬ。破れば罰則が下る。何かあるのなら、言つといい」「そうだったんですか? ええ? えーと……」

流衣は少し迷った末、きつぱりと告げる。

「あなたからだけの分でもいいので、細々した悪戯はやめて下さい」

「私のだけでいいのか? 頼めと言つのかと思つたが……」

「僕が決闘したのは、あなたなので。他の方のことまでは言いませんよ」

「ふん、分かつた。その望み、叶えよう。“私は”貴様に“悪戯”しない」

流衣はほっとする。一人分の嫌がらせが減れば、少し助かる。

「よろしく願います。あの、では、そろそろ帰つていいでしょうか?」

もうそろそろ人の視線にさらされるのは限界だ。

流衣の問いに、ファルが頷き、場はお開きとなった。

鍛練場を出ると、追いかけてきたらしいクレオに呼び止められた。

「助手、待てよ!」

「?」

何事かとそちらを見ると、クレオの後ろにはディオヌとロイスもいた。皆、一様に怪訝な顔をしている。

「お前、どんな手品使いやがった。そのオウム、亜人のくせに!

卑怯だぞ!」

「へ?」

きよとんと目を瞬くも、襟首を掴まれて首が絞まる。僅かにうめいた時、

「あつっ！」

クレオが叫んで手を放した。

流衣は後ろに二歩ほどよろめく。

そして顔を上げると、オルクスが流衣の眼前で羽ばたいている。

どうやら火の魔法を使っただけらしい。

「坊ちゃんに手を上げるのは許しませんっ。このクソガキ！ だいたい、わてを亜人呼ばわりとは、本当に失礼ですね！」

きつい声で言い、クレオをねめつけるオウム殿。

「な……なに？」

訳が分からないというように、クレオはオルクスを見つめる。

「ディオオもまた眉をひそめ、したり顔で呟く。

「なるほど。亜人がそう思い込んでいるんですね。記憶喪失のころを洗脳でもされましたか？」

眼鏡の奥の金の双眸が冷たく光る。

「何を訳の分からないことを言ってるんですか。洗脳？ ふん、本の読みすぎではないですか？ それともアホなんですか？」

対するオルクスの返事も冷たい。

気のせいか、オルクスとディオオの間に冷たい風が吹き抜けた気がして、流衣は戦々恐々とする。ただし、何か口を挟める空気でもなく、大人しく黙っている。

「洗脳だなんて、ふふっ、あの イビルスアイ 悪魔の瞳 の教祖ではあるまいし、わてはそんな術は使いませんし、使われることもありません」

「使い魔だと言い張る気ですか？ 人の姿をこちらは見ています。

それも三人も。それにあなたは言葉を話している」

ディオオは負けじと言い張る。

「言葉を話して何が悪いのデス？ あなただっただけ話しているでしょう。だいたい、人型もとれないような小童どもと一纏めにされては迷惑デス」

棘をたつぷり含んだオルクスの言葉に、空気がぎすぎすしていく。クレオ達三人は、すっかり剣呑な目になっている。

「ちよつと、オルクス。なんでそう喧嘩売るの。穏便にいこうよ……」

困り切って流衣が後ろからなだめるが、オルクスはキツと流衣を振り返る。

「何おつしやるんです、坊ちゃん！ わては我慢しつぱなしなんですよ！ まったく、この箱庭の中の子どもといたら、失礼だし、遠慮を知らないし、クソガキばつかじゃないですか！ まあ、アルモニカ嬢やデイルはマシでしたが……。リドなんてクソガキもいいところじゃないですか」

はつと鼻で笑うオルクス。

「ほんと、なんでリドとそんなに仲悪いのさ。あんなに頼りになる兄貴分なのに……」

「合わないんデス！」

「……………」

うん、まあ、それしかないだろうけどさ。

沈黙する流衣。はあと溜息を零す。これは直らないのだろう、きつと。

「とにかく！ わては生まれ落ちてより、誇り高き使い魔です！ 正体が亜人などと、下劣な考えを抱くのはやめることですな！ さあ、行きましよう坊ちゃん。クソガキの相手なんてするだけ時間の無駄です」

盛大な捨て台詞を吐くオルクスに、更にディオヌの追及が飛ぶ。

「あなたが使い魔だというのでしたら、位階を教えてくださいようか！ 答えられないのなら、使い魔とは言えません」

流衣の方を向いたオルクスの顔が、忌々しげに歪んだ、ように見えた。不機嫌になったことはよく分かる。

「しつこい方ですね……。坊ちゃん、教えて宜しいですか？」

騒ぎになるからと亜人のふりをするように頼んでいたのは流衣だ。

だから、流衣を主人と誤っているオルクスが流衣に問うのは自然なことである。

場が治まらなくて困るのは、オルクスだけでなく流衣もなので、流衣は仕方なく小さく息を吐く。と同時に、騒ぎになることを覚悟した。

「分かったよ、オルクス」

「許可がありましたので、教えましょう。三番目です」

「……………はい？」

ディオ又は耳を疑った様子で聞き返す。

「第三の魔物オルクスです。これで満足ですね？ さあ、行きましよう、坊ちゃん。外にずつとしては風邪を引いてしまいますよ」

用事は済んだとばかりに流衣の肩に戻って先に行くよう促すオルクス。流衣は小さく苦笑しつつ、便乗する。

「それでは、失礼しますね」

軽く会釈して立ち去ろうとしたが、ディオ又は慌てて呼び止められた。

「ちょっとお待ちなさい！ なんです、三番目とは！ 嘘をつくにしろ、もつとマシな嘘を……………」

「わては使い魔ですから、嘘はつけませんヨ。それから、このことをあちこちに言いふらしたら、わてが制裁に行きますから。頭上注意です」

しっかりと脅しを付け加えるオルクスに、流衣は苦笑しか出てこない。

決闘中の落雷を思い出したのか、ディオ又はの顔が青ざめる。

「オルクスがすみません！ 失礼します」

流衣はもう一度彼らに会釈すると、居たたまれなくてその場から逃げだした。

（ほんとすみません。でも僕には止めるのは荷が重いんですっ）

心の中で言い訳しつつ、セトの研究室を目指して走る。今日の分の課題の指定を受けなくてはいけないのだ。

まだ転移魔法は基礎しか習っていないので、流衣自身では転移出来ない。逃げる時には便利そうだから、早めに習得したいところだった。

六十一章 使い魔対決 2 (後書き)

今度は分量多めです。

とにかくよく逃げるのが流衣です。

この回は、オルクスの正体を知らないために起こりそうなドタバタを書いてみた感じです。

六十二章 異変 1 (前書き)

六十二章は流血表現があります。ご注意ください。

六十二章 異変 1

折部へ

久しぶりだな。こちらの年で一年ぶりくらいになるか。

俺はまだ元の世界に戻れていない。聖具集めの旅は終えたが、盗まれた聖具の在り処がまだ分からないんだ。

折部、瀕死の重傷ながら生き延びて良かった。あのままだったら、怜治さんに合わせる顔がなかったところだ。

一年も昏睡していたとは知らなかった。今、アカデミアタウンから割と近い町にいるんだ。見舞いがたら、会いに行くよ。と思ったが、まだいるだろうか？

今まで僻地にいたもんで、今頃になって手紙に気付いたんだ。もしまだいるようなら、早めに返信が欲しい。

それから、また頼みがあるんだが。

アークという人物を探している。聖具を盗み出した神官で、幼馴染の女。エマイユっていう奴が血眼で探していて、あいつには盗むような甲斐性は皆無だからおかしいと言って譲らなくて、俺達の旅にひつついてきて鬱陶しくてたまらない。正直、聖具さえ戻ってくれば、俺は盗人なんかかどうでもいいんだけどな。

だから、早いとこ、そいつを見つけて出して、聖具を取り返したいんだ。ついでにエマイユも追い払いたい。俺、女嫌い入っててさ、苦痛なんだよ。頼む、協力してくれ。

アークは、光の神殿フェルノアを出た後、どうやらネルソフに近付いたらしいんだが、そこから足跡が掴めない。

ネルソフのせいで重傷を負った折部に頼むのはどうかと思うんだが、もし見かけたりしたら、それだけ教えて欲しい。頼むから、深追いはしないでくれよ。

人相書きを一緒に入れておくな』

届いた手紙を無言で読んでいた流衣は、一番後ろの紙を見た。インクで書かれた、洋画タッチの人相書きだ。とてもよく書けている。恐らく、例のアークなる人物の知人が描いたのではないかと思われる。

平凡ながらやや整った顔をしていて、眠そうにも見える垂れ目がちな目が印象的だ。髪は金色で、目も金色、182センチ程度と背は高く、温和そうな印象、と横に書き込まれている。

とりあえず、今のところ会ったことはなさそうだ。

「川瀬先輩、女嫌いなんだ……」

流衣は手紙を見下ろして、ぼつりと呟く。

『俺、女嫌い入っててさ、苦痛なんだよ。頼む、協力してくれ』

という文面だけ、やけに力が入っているのか、インクがところどころ滲んでいる。

「ほんとに嫌いなんだなあ……」

心の底から悲鳴を上げているみたいで、気の毒になった。

無口でクールな印象で、しっかりしてそうな人だったが、そんな弱点があったとは。

「何さつきからブツブツ言ってたんだ、お前」

リビングのソファで手紙を読んでいたのも、向かいのソファで読書していたリドが本から顔を上げて、怪訝な顔をしている。

「勇者さんて、女嫌いなんだって」

「……………はあ？」

面食らった様子で、リドは琥珀色の目を瞬かせた。

手紙を貰った翌日にはウィングクロスで手紙を出した。

アカデミアタウンに来てからは、銀行を使うくらいでしかウィングクロスには行かないので、早めに気付いて良かった。

見舞いだからといって、わざわざ来てくれなくてもいいので、一応、その旨を書いておいたけれど、なんとなく来そうな気がする。

一応、魔法学校で働いていることと、ゴーストハウスのことを書いておいたから、もし来てもすれ違いにはならないはずだ。

(人探し、かあ……)

聖具泥棒を探しているらしいが、見知らぬ人間を一人探すのがどれくらい大変なのか見当もつかない。とにかく途方も無く大変だといっただけは分かる。手掛かりを見つけるの自体がすでに大変そう

だ。
流衣の出来ることといえば、似顔絵の人物を見かけたら教える程度だが、今日から地道に周りの人間を観察してみようと思う。

そしてウィングクロスに行った足でそのまま出勤したセトの研究室にて、流衣はセトの話に大いに面喰らう羽目になった。

「はい……？」

「聞こえなかったのか？ 課外授業の手伝いをして欲しいと……」

「そこではなくてっ」

流衣ややや強い口調で、のんびりと説明を繰り返そうとするセトの言葉を遮る。

「無理ですよっ。魔物がいる森で、スタンプラリーに来る生徒達の受付係なんてっ。しかも一人で待機なんて、怖いから嫌です！」

無理という主張が、最後には嫌になった。

出来るだけ助手の仕事はするつもりだが、出来ることと出来ないことはあるのだ。魔物は無理だ。怖すぎる。

珍しくきつぱりと嫌だと発言する流衣に、セトはダークグレイの目を驚きに染めたが、すぐに笑い飛ばした。

「大丈夫だ。魔物はあるが、教練用に手を入れられている森だ。境界を張り、低級の魔物しか入れていない。レベルに分けて区画分け

はされているが、君なら平気だろう」

「無理です。無理無理無理」

ぶんぶんと首を振る流衣。セトは少しばかりむっと眉を寄せる。

「君程の強い魔力と、これまでに教えた攻撃魔法があれば平気だと教師の私が言っているのだぞ。少しは自信を持ちなさい」

「その自信がこれっぽっちもないんですっ」

セトが苛立っているのに気付いて少しひるんだが、それでも流衣はめげずに食い下がる。

対するセトも譲らない。

「そんなに怖いなら、結界を張って閉じこもっていればいいだろう。そもそも、決闘の話ではその使い魔は優秀らしいではないか。とにかく平気だ」

「森の中に一人ぼっちなんて怖すぎますっ」

「……………。全く、君は……………。気が弱くて臆病だな」

呆れたような口調で、わざと挑発するようなことをセトが言ったが、流衣は怒りもしないでむしろ肯定した。

「はい、僕もそう思います」

「……………」

堂々と肯定する助手を前に、セトは口を閉ざした。

（噂は事実だったのか…………）

使い魔対決の時、怖いから嫌だとファルに即答で負けを認めたと臆病者とそしられてもすぐさま肯定して逃げに走っていたらしい流衣の話。負けた方が悔しがつて流した噂かと思っていたが、事実だったとは…………。

ルマルディー王国では、男子の間では「男らしく勇敢であれ」とか、「負けが分かかっていても、喧嘩を売られたら買うもの」という考えが暗黙の了解のように広まっているところがあり、臆病者という言葉は相手を蔑む一番悪い言葉と考えられている。だから、たい

ていは「臆病者め」とそしられれば、怒って反論してくるものだ。それがこの目の前の小さな少年はどうだ。怒るところか反論すらしない。

外国人だからか？

しかし、どこの国でも、臆病者呼ばわりは腹立たしいものではないのだろうか。

セトはしかし、諦めた。これ以上、不毛な言い合いをして時間を浪費したくない。

「……分かった。つまり、一人でなければいいんだろう？ 君の友人も一緒でいい。とにかく、人手が足りないから手伝いは必要なんだ」

流衣はばあつと表情を明るくする。

「ありがとうございます！ 我儘言っつてすみません！」

そしてぺこつと頭を下げる。

ちよつとばかり面倒だが、そういう素直なところは微笑ましく見える。

セトは仕方ないなあと、無愛想な顔に僅かに笑みを浮かべる。この助手少年に、だいぶ絆されてきているらしい。弟子だと思えば可愛いものだ。

「では私も我儘を言おうかな。こないだ作ってきた菓子をまた作ってくれないかね」

「シフォンケーキですか？ お安い御用ですよ」

流衣はきよとんと目を瞬いて、にこつと笑って頷いた。

「そんな経緯かよ。お前な、友達を売るなよ。それも菓子一個つて、安すぎだろ」

流衣とセトの取引を聞き、巻き込まれたリドは溜息混じりに文句を言った。

「ごめん！ この埋め合わせは勿論するから！ 一人で森の中なん

て嫌だつたんだよつ。怖いだろ、魔物とか魔物とか魔物とかつ！」

青ざめた顔で拳を握って流衣が力説すると、リドは肩を落とす。

「魔物しかねえじゃん。つか、この教練用の森で低級の魔物しかないってんなら、言葉交わしの森程度だろ。何を怖がるんだ？」

「何って、僕はウシネズミ一匹でも怖いんだよ!？」

「怖がりすぎだ、アホ」

「いたつ」

リドは容赦なく流衣の額をピンと指で弾いた。うめいて額を押さえる流衣。

「……はあ、つたく」

顔を手で覆い、思い切り溜息を吐くリド。怖がりだ怖がりだと思っていたが、そこまでとは思わなかった。

地の曜日にある課外授業を手伝って欲しいと言われ、休みだったので了承したはいいが、そんな事情があるのなら断っておけば良かった。そうすれば少しは魔物の相手にも慣れるだろう。

「ここまで来ちまったし、もういい。埋め合わせは、一週間の料理当番な」

「そんなのでいいの？ 僕が楽しいだけだけど？」

不思議そうな流衣に、リドは半眼で付け足す。

「家事三日分って言いたいとこだけど、ルイに任せると逆に気になるし、時間ばつかかかると。お前、掃除のたんびにバケツ引っくり返して大騒ぎじゃねえか」

「……………う。確かに」

至極もつともだと思ひ、流衣は真面目に頷いた。

全学年、合同課外授業の為、生徒達が整列している後ろの端の方での遣り取りに、たまたま聞いていた貴族の生徒達は、生ぬるい気分になった。ほんと頼りないな、あの助手。そう思った生徒が大半である。

その後、校長が気だるげに台の上に立ち、魔法や武器の使用練習を兼ねた実地訓練の旨を伝えた。一班六人で、七学年から学年がば

らばらで混ざる形になること、人数があぶれて同学年が増えることもあるが了承すること、協力しあってポイントを通すること、危ないと思つたら魔法道具で知らせること、昼食は自分達で摂ること、その際、調味料と道具以外の材料は現地調達のこと、などを伝え、それぞれクジ引きが始まった。

(面白いことをするんだなあ……)

貴族なんて、そうそう自分達で戦うこともないだろうに、実地訓練をするのか。中には王国警備隊や近衛騎士団で働く者もいるだろうから、その辺も考慮しているのかもしれない。

クジ引きが後半に近付くと、スタンプリアのポイントに配置する教師が移動を始めたので、流衣達も移動した。七つあるエリアのうち、第三エリアが流衣の担当だ。第三エリアと第四エリアの境に待機してはいけない。

目印になつている大木の下に着くと、待機する為の準備を始める。野宿と同じで、焚火を起すところからだ。雪が積もっているので、待機場所だけ火の魔法で雪を溶かし、そこに持ってきた薪で焚火を作る。流衣も生徒達と同じく食料は現地調達しなくてはいけないが、茶葉の持ちこみは許可されているので、さっそくヤカンで湯を沸かす。どうせしばらくは生徒は来ないだろう。

湯が沸くのを待つ間、リストを挟んだボードを取り出し、羽ペンやインク壺も取り出す。この寒さのせいでインクが凍らないように、火の側に置いておく。

リドのことを巻きこんだ手前、準備などは流衣一人です。これくらいは手慣れてきているのですぐに出来た。

『坊ちゃん、ここにスノウベリイがありますよ。ついてますね!』

地面に敷物を敷き、火に当たっていると、周りを飛んで様子見してきたオルクスが戻って来て、浮かれた声で言った。

「スノウベリイ?」

『はい。雪の中で実る野苺です。ほら、こちらの茂みの裏に……』

言われるまま、茂みを覗きこむと、赤色の小さな粒をつけた野苺

があった。

『甘くておいしいんですよっ』

目を輝かせるオルクスに、食べたらいじやないかと言って、たくさんあるうちの幾つかを摘んでハンカチに包み、待機場所に戻る。オルクスは一つ嘴でつまんで待機場所に飛んでくると、幸せそうにスノウベリイを頬張りだした。

「リド、スノウベリイだって。おやつに食べようよ」

「スノウベリイ？ 初めて聞くな。美味そう」

「あまつ。すごい甘いね、これ」

「野苺じゃ珍しいな。ああいうのは酸っぱいから、たいていはジャムにするんだが」

広げたハンカチからスノウベリイを摘まんで食べながら、流衣とリドが感想を言い合っている、オルクスがふふんと胸を反らした。「砂糖がいらないくらいに甘いので、砂糖代わりに使うこともあるのですよ。紅茶に入れたり、焼き菓子に練りこんだり」

「へえ、そうなの？」

「なんで鳥のおめえがそんなこと知ってたんだ？」

感心する流衣と、いぶかしげな顔をするリド。

「鳥ではなくて使い魔デス！ まつこと失礼なガキですね！」

オルクスはしっかりと文句を言ってから、気を取り直して言う。

「人間界の様子を見ていた時にたまたま知っただけですよ。天界では実を食べるししませんでしたので、面白かったです」

天界にも生えているというのが流衣には面白い。

ひとしきり感心して頷くと、ふと結界を張り忘れていたのを思い出して杖を構える。

「壁」

一言唱えると、一瞬、流衣達のいる周辺を囲むように半円状に光が展開して消えた。

中級の結界魔法である、壁だ。初級である盾よりは展開が難しい。こちらも盾と同じで、流す魔力の量を増やせば大き

くなるし、強度を増すには強くなると信じる意思が必要になる。他にも、色々な条件を付けることも出来るが、その分、呪文が長くなっていく。条件が付けば付く程、大きさが大きくなる程、難易度が上がり、中級から上級へと移行していくことになる。

「短縮詠唱^{カッタ・スベル}で結界を展開なされるとは。成長あそばされて、このオルクス、感激に胸が熱いです！」

なんかオルクスの目から涙が決壊している。

「大袈裟だなあ。僕はたまたま結界魔法と相性が良かったただだよ。やや身を引きつつ、流衣は苦笑する。

無詠唱で魔法を仕える程には熟練していないが、短縮詠唱で魔法を仕えるのは魔法が上達した証だ。結界は良いのだが、攻撃魔法は、短縮詠唱だと力加減の調節が更に難しくなるので、自然と普通の詠唱をしている。

セトからの課題で雷の魔法の初級の短縮詠唱にチャレンジしたところ、手加減しそくなって鍛練場に大穴をあけてしまったので、もうしないと決めたのだ。慌てて地の魔法で岩を出し、目に見えないが周りにいるだろう地の精霊に必死に声をかけて穴を埋めてもらった。オルクスのアドバイスに従い、地面に魔力を注いだら土が増えたのはつくづく奇妙な光景だった。

「相性が良かろうと、俺から見ても成長してるさ。素直に受けとけば？」

沸いた湯を茶葉入りのポットに注ぎ、しれっと茶を飲みながらリドが横から言う。

「そうかなあ。……ありがとう、オルクス」

流衣が声をかけると、オルクスはますます号泣しだした。

ええ、悪化しちゃったよ……。

対処に困ったので、とりあえず茶を飲むことにした。

「やっぱ俺、いらないんじゃない？」

リドが呟くのに、流衣はぶんぶん首を振る。

「すごいいるよ！ いてくれるだけでいいんだ。心のもちようって

やつだよ。お願いだから置いて帰るなんて言わないで！」

後半は泣きが入っている。

拝み倒す流衣にぎよつと身を引いたものの、リドも頼られては悪い気はしない。照れたように頬をかきながら言う。

「しゃあねえなあ、いてやるよ。だからマジ泣きすんなよ、鬱陶しい」

「ごめん。置いてかれるの想像しただけで泣けてきちゃって……」

「ほんとどうしたんだ？ お前、ろくに動けもしねえくせに一人で出た猛者のくせして。一人旅してたんだから今更だろ？」

やや呆れたような声。

流衣はごしごしと袖で目元を拭う。急に心細くなってしまったのだ。

「ほとんどオルクスの転移魔法だから、歩いてないよ。アカデミアタウンまでは、劇団に同行させてもらったし……」

あの時は良かったのだ。まだ覚悟があったから。今は一人ではないせいか、一人で森の中にいるのは怖いと思うのだ。

きつと、雪が音を吸って、耳が痛いほど静かになるのもいけないと思う。そうだ。冬だから物寂しく思うのだ、きつと。

そうして一人になることを考えると、ディルを思い出す。ノエルを連れてとはいえ、一人で敵地に向かったディルの心境はどんなものだったのだろう。

「一人旅っていえばさ、ディル、どうしてるかなあ」

思わず口から呟きが零れた。息を吐いたら、白く染まる。

「元気に修行してんじゃね？ 鍛練鍛練って庭を駆け回ってそう」
リドが能天気な呟き返す。

想像したら笑えた。

「寒い外にいることで心身を鍛えるのだ、とか？」

くすつと笑いを零して流衣が言うと、リドも笑った。

「すっげえ言いそうだな！ ははは！」

「連絡先くらい教えてもらえば良かったな。手紙くらいくれたらいい

いのに……」

流衣の恨みごとに、リドは後ろ頭をかく。

「あいつが手紙書く柄か？　つか、俺、連絡先くらい知ってるぞ？　ウイングクロスのアドレスだけだが」

「ええ！？　なんでリドは知ってるのに、僕は知らないの！？　ていうか、連絡来た！？」

「俺に教えときゃ伝わるとでも思ってるんじゃないか？　あと俺にも連絡はねえよ」

「……そっかあ。連絡なしか」

がつくりした時、リドがふいに顔を第三エリアの奥に向ける。

「お、第一陣のご到着だ。ルイ、しゃんとしろよ」

「うん！」

流衣は背筋を伸ばして返事をし、すくつと立ち上がった。

十組目が過ぎた頃、アルモニカのいる班がやって来た。

「ルイ！　リド！」

知り合いを見つけた嬉しさからか、班を抜けて駆けてくるアルモニカ。それを、上級生らしき剣を携えた女生徒が微笑まじげに見ている。

アルモニカがだいぶ流衣達に近付いた時、草むらからそれが飛び出した。白に赤いまだらをした蛇だ。

班員がハツとして杖を構えるが、距離的に間に合わない。

しかし、蛇は宙で音もなく寸断され、血と肉片になって地面に落ちた。

ぎよつと固まるアルモニカの横を、リドが通り抜ける。

「ああん？　なんだあ、マダラヘビじゃねえか。こんな雑魚魔物があんなに跳ぶのなんて初めて見たぞ」

どうやらリドが風で魔物を細切れにしたらしい。

流衣も固まってしまったが、事態を飲み込むとほつと安堵の息を

吐く。

「そ、そうなのか……？ さっきからそういうのばかりが襲ってきたのじゃが……」

動揺しているのか、お嬢様言葉ではなく素で話しているアルモニカ。

「そういえば、先程からグレッセン女史めがけて跳んできてますわね。グレッセン女史、蛇に好かれるものでもお持ちですか？」

七年生を示すバッジをつけた、剣を携えた茶色い髪の少女は、不思議そうに問う。

「そんなもの、持った覚えはありません」

僅かに眉を寄せ、アルモニカは答える。

「わたくし、蛇のような生き物、大嫌いですが」

どうやら立ち直ったらしい。お嬢様言葉だ。

いつもの爺言葉に慣れている流衣達には、お嬢様の皮を被った別人のようで気持ち悪いけれど、他の人にはこれが普通なんだろう。

「あれ？ アル、髪に何かついてるよ」

「え？ どこです？」

「取っていい？」

「ええ」

腰に流している赤色の長い髪に、黒い記号みたいなゴミがくっついている。変な形のゴミだ。何をしたらこんなのが付くんだろう。

許可を得たのでゴミに手を伸ばしたところで、オルクスが突然叫んだ。

『坊ちゃん！ それに触れてはいけません！』

「へ？」

びっくりして肩をすくめたが、その時にはすでにゴミを右手が掴んでいた。

パリン！

何かが割れる高音が辺りに響き、右手の中でゴミが弾けた。遅れて灼熱の痛みが右手の平に走る。

何が起きたか分からず、呆然と右手を広げると、右手にずたずたの切り傷が幾つも走っていた。血で右手が真っ赤に染まっている。

「え？」

啞然とするのも束の間、オルクスがすぐさま右腕に飛び移り、聖法を使う。

『我が力、糧とし、癒しの光、ここに顕あひわれよ』

淡い光が右手に灯り、光が消えると傷が消えていた。

「……えと。なんだったの？」

事態が飲み込めないで、とりあえず顔を上げると、アルモニカの顔から血の気が引いていた。

「あ、ああ……。どうして、また……。っ」

ぺたつと地面に座り込み、口元を手で覆って震えだす。

塔 襲撃事件のことを思い出したのかもしれない。流衣は言葉を失って、助けを求めるように周りを見た。

アルモニカの班員達は所在無げにこちらを伺っている。よく分からない事態に困惑しているらしい。

「ルイ、何が起きたんだ？」

厳しい表情をしたリドの問いに、流衣は気圧されて言い淀む。

「何って……アルの髪についてたゴミを掴んだら、それが破裂したんだよ。見てたでしょ？」

「ゴミってどれだよ」

「え？」

言われてみれば、手の中にはゴミの破片すら残っていない。手を閉じていたのだから、少しくらい残っていても良さそうなものだが困ってオルクスを見ると、オルクスは流衣にだけ聞こえる言葉で解説してくれた。

『あれは、呪いと祝福に使われる古い文字です。この場合は呪いでしょう。蛇の的まこと書かれていますから。軽い闇属性の魔法だった

ので、魔力が強い坊ちゃんに触ったことで、術が解除されたのです』
言われてみれば、前にも聞いた音が響いていた。あのガラスの割れるような音。

そのままリドに伝えると、リドはアルモニカの前に膝を突き、アルモニカの肩を掴んだ。

「アルモニカ」

真剣そのものの声に、愕然^{がくぜん}としていたアルモニカは、ゆるりと顔を上げる。

「お前、いつから蛇に狙われてた？」

「こ、この森に入ってから……だと思う」

リドは思案気に顎に手を当て、ふいにオルクスの首根っこをつかんだ。

「なっ、何するんですか、このクソガキ！」

じたじた暴れるオルクスを、ひよいとアルモニカの頭に乗せる。

「ルイ、このクソオウム、しばらくアルモニカに貸してやってくれないか？ こいつには呪いが見えるんだろ？ 魔除けにちょうどいい」

「誰が魔除けですか、神仕えの使い魔をお守り扱いとはいいい度胸ですな！」

キーツと怒っているオウム殿に、流衣もお願いする。

「そう言わないで。オルクス、森を出るまででいいから、側においてあげてよ。ね？」

「う……っ、でもしかし！」

「……オルクス、お願いだよ」

じーっとオルクスを見つめていたら、オルクスは十秒ほどで負けた。渋々というように、アルモニカの頭の上で丸くなる。

「仕方ありませんね。ですが森を出たら、戻りますからね」

「流石オルクス！ 頼りになるね」

「ええ、そうですよ。わては頼りになる使い魔なのです！」

引き受けてくれた嬉しさに微笑むと、オルクスはころりと機嫌を

直した。黄緑色の体が誇らしげに膨れるのを見て、流衣はもう大丈夫だと息を抜く。

「くれぐれも姫さんを頼むぞ。というか、高位なんだからそれくらいさらっとこなせよな」

リドの激励を受け、リドをギツと睨みつけるオルクス。ふんとそっぽを向いてしまう。

「はい、アル。続き頑張つてね。大丈夫だよ、オルクスがいるんだから」

へたりこんだままのアルモニカの手を、血のついていない左手でとり、そつと立たせてやつてから、流衣はにこりと笑う。

「すまぬ、ルイ。また怪我を……」

申し訳なさそうに、濃い緑色の目が揺れているので、流衣は苦笑する。

「大丈夫だから、気にしないで。原因追及は課外授業が終わってからにしよう。気を付けてね」

「……………ありがとう」

弱々しく返すアルモニカ。ショックが続いているらしい。

流衣は班リーダーから番号を聞き、リストに印をつけ、リーダーの持つカードにハンコを押す。

「では、お気を付けて」

相変わらず困惑気味の彼らに声をかけると、皆、少し不安そうにしつつも、第四エリアへと踏みこんでいった。

その姿が小さくなると、リドはしれつと言っ。

「オルクスが単純な奴で助かったな」

「はは……………」

空笑いする流衣。

「ま、お前が女神様の言葉限定なんだろうけどな。……………けど、手、大丈夫か？ 右手全部なくならなくて良かったな、ほんと……………」

「うう。ぞわつとするからやめて。怪我なら治してくれたから大丈夫だよ」

想像しただけで怖いデス。

思わず、右手を左手でさする。

うん、大丈夫、ちゃんとある。

「なんだっただ？ 呪いの単語って。あいつ、またネルソフに狙われてんのか？」

「それは分からないけど……。森に入ってからってことは、あの班の中に呪いをかけた人がいるってことになる？ 行かせて大丈夫だったかなあ」

不安がどつと押し寄せてきた。

親友の妹だし、それを差し引いても妹みたいな大事な友達だ。身体的にも精神的にも傷ついて欲しくない。

「俺らにばれたし、そこに犯人がいるんなら、もう手出ししねえだろ」

「だと良いんだけど……」

流衣は心配を詰め込んだ視線で、アルモニカ達の班を見送った。

その後、幾つかの班を見送った頃、流衣はおかしい事態に気が付いた。

何人かの生徒の服や髪に、アルモニカについていたみたいな記号じみたゴミがついているのだ。

それには触れず、リストのチェックとハンコを押すだけで通したが、腑に落ちない。

まるで無作為に選んでいるみたいが付いている。

「アル狙いじゃないのかな……？」
敷物に座っているリドに顔を向けると、リドも難しい顔をしている。

「さてな。狙いをばれないようにする工作なのか、本当に適当に呪いをつけてるんだか分からねえよ。狙いが分からねえ」

全くもってその通りだ。

「焦っても仕方ねえ。様子見してようぜ」

「うん、そうだね」

そうして更に十組ほどが通り抜けた頃、オルクスが戻って来た。

残りは二十組だ。全校生徒なのでなかなか数がある。

「坊ちゃん、呪いの文字をつけられている者は、皆が皆、魔物の的になってるわけではないようですね。意味の分からない単語の断片もあります」

オルクスが小声で教えてくれたことに、流衣とリドは更に頭を抱えた。

「意味分からない。何がしたいんだろう」

「そもそも、術者はどこにいるんだ？」

警戒たつぷりに周りを見て、リドは周囲に呼びかけた。

「精霊、ちよつと行つて、怪しい奴がいなか見てきてくれないか」
そう声をかけた途端、ひゅうとリドの前で風が渦を巻き、突風を
起こして吹きすぎていった。木々がざわざわとざわめく。

やがてしばらくして再び風がざわめきとともにやって戻つてくる
と、リドは首を振った。

「この森の周辺にはいないってよ。町の方には不穏な気配があるが、
姿が見えないらしい」

「町？ 皆、町で文字をつけられたってことかな？」

「それなら、まだ分かるな。町や魔法学校には魔物避けの結果があ
る。そこから出て初めて効果が出たってんなら、分かりやすい理由
だ」

何したいのかは分からねえけど。

冷静沈着に呟くリド。不愉快そうに眉を寄せる。

「理由は不明だが、アルモニカを巻き込んだのはムカつく」

流衣も眉を吊り上げ、同意する。

「そうだね。犯人、捕まえなきゃ」

ただの愉快犯にしても放置出来ない。

「面倒くさそうな相手ですね。一つ一つは小さすぎて、鼻の効く者
でもよくよく見なければ気付かないでしょう。あの白竜や黒竜が見
過ごすのも頷けます。わてとて、坊ちゃんが触ろうとしなければ、
気付きませんでしたし」

オルクスがぼやくのに、リドは笑う。

「呪いをゴミと勘違いする奴はそついなえだろつしな！」

「嬉しくないよー」

流衣はがっくりと肩を落とす。

なまじつか魔力が大きいのも考えものだ。“見えてしまう”のだ
から、気になるわけで。

「あ、サイモン君だ……」

第三エリアから近付いてくる班を見て、流衣は緊張を覚えて一歩
退いた。

ふいつと学校を休んで、また出てきたりするサイモンだが、今回の課外授業はサボらずに出ているらしい。真面目なのかそうでないのかさっぱりだ。

「あのデイルのどこの家臣もいるぞ」

「ほんとだ……」

クレオも一緒にいる。

心なしか、サイモン以外の五人は、サイモンとやや距離をあけて歩いている気がする。気まずそうだ。

流石は敵ばかり作るサイモン。全学年にわたって危険視されているなんて流石としか言いようがない。

斜め上の方向から感心しつつ、受付をする。

その間、クレオが物言わずにじっと睨んでくるので居たたまれない。

使い魔対決以降、すっかり敵視されてしまった。

バキメキメキ、ドシャーーン！

「ぎゃっ」

雷が落ちたみたいなの凄まじい音が突然響き、流衣はカードにハンコを押しそこなつて、変な位置に押ししてしまった。

「あ」

それに焦るも、音の正体の方が気になって振り返る。

第四エリアの向こうから、生徒達が十人ほど、慌ただしく駆けてくるのが見える。

「逃げろー！」

「りゅ、竜よ！ 竜が出ましたわ！」

「やばいやばいやばい死ぬ　　！　いや　っ！」

青い顔をして、全力疾走してくる生徒達は、口々に不穏な言葉を叫んでいる。

そのうちの一人、金髪を三つ編みにした女生徒が、人の姿を見て

気が抜けたからか足元がおろそかになって転ぶ。

その後ろ、木を倒し、地響きとともに水色がかつた白銀に輝く竜ドラゴンが、グギャアアア！ と空に向かって吠えた。

その声に気圧されてか、すくんだまま動けないらしい。

進路に少女がいるのに気付かず歩いてくる竜を見て、あっけにとられていた流衣は、とつさに結界を張る。

「壁かべ！」

音もなく、光が半円状に展開。少女の周囲に壁を作る。それは竜に踏まれても壊れることはなく、そのまま竜はそこを通過し、こちらにのし歩いてくる。

尻尾を振り回し、周りの木々を倒し、また吠え、血走った青い目で周囲を睥睨する。まさに竜ドラゴン。凶悪そのもの。

「教練用に竜ってやりすぎじゃ……」

身じろぎ出来ずに水の七を握りしめ、思わず呟く流衣。

「アホか！ ここに竜なんかいるわけねえだろ！ あの子を助けて、逃げるぞ！」

耳元でリドが盛大に怒鳴り、腰に提げた二本のダガーを瞬時に構える。

「お前らも逃げろ！ って、もう逃げてるか……」

さつきまでそこにいた、来たばかりの班は二人を残してすでに逃走していた。残っているのはサイモンとクレオだけだ。

「クレオ君、何で逃げないの!？」

サイモンはともかくクレオがいるのに驚いて、流衣が声を張り上げると、クレオは青い顔のまま剣を構えている。

「う、うとうとうるせえ！ 女残して逃げられるか!」

それをサイモンが鼻で笑う。

「はっ、単に足がすくんで動けないだけだろ。馬鹿が」

「んだとー!」

青い顔を一变、逆上して顔が赤くなるクレオ。

「ルイ、お前逃げるのは得意だろ！ ちょっとの間、おとじ困こまになつてろ」

「へ！？ ぎゃーっ、リド、何すんのさ！」

ほんと背中を軽く押されて竜の前に出され、流衣はふらりと前に出てから、目をむいた。大岩のような凶悪な竜の顔がすぐそこにあった。

流衣は、へらつと引きつり笑いをすると、囃役を全うすべく、小さな爆発を起こす。

「ファイアー！ うわああ、ごめんなさいーっ！」

そして、大声で攻撃したことを謝りながら、すぐさま身を翻して遁走する。クレオ達のいない、森の奥を進路に取る。

爆発にのけぞった竜は、案の定、獲物を流衣に定めた。のしのしと流衣を追いかけて歩きだすので、その横を通り抜け、リドは生徒の元に駆けつける。生徒は、結界の中で目を回して気絶していた。

それはそうだろう。普通はそうなる。

「ルイ！ 結界、解除しろ！」

「ひー！ 分かったから、この状況、どうにかしてー！」

結界が消え、女生徒を救出すると、リドは女生徒を背負い、クレオとサイモンのいる地点まで戻る。

「すみませんが、彼女を宜しくお願いします」

「え！？ おいつ！？」

クレオに女生徒を預け、すぐさま身を翻すリド。サイモンがそれを面白そうに見る。

「水晶竜クリスタル・ドラゴンか。極寒地帯の洞窟にしかいねえのに、また異常行動か？

しかしここは校長の結界内。となると……」

何やらぶつぶつと呟いているのに、クレオは青い顔で叫ぶ。

「なに悠長にしてるんですか、先輩！ 逃げないと、食われますよ！」

幾らか自身より上背のある女生徒を背負い、必死に言うクレオ。

「きゃんきゃんわめくな、うるさい。水晶竜の背に生える水晶、それに生えるコケは貴重な薬草になる。せっかくだから採取してくる」

「はあー!? 先輩、頭どうかしちゃってんじゃないですか!? 変人変人思ってたけど、頭いかれてるんでしょ!」

「……殺すぞ」

「スミマセンデシタ!」

頬の真横をスロージングナイフが駆け抜け、頬に切り傷をこしらえたクレオは、自らの失言を即座に謝った。サイモンの金の目には物騒な光が宿っていて、竜よりも恐ろしく見えたのだ。

(前に教祖様があのコケが欲しいって言ってたんだよね……)

良くも悪くも、サイモンの世界は教祖中心に回っている。竜を倒す気はないが、採取するくらいは出来るだろうと踏んで、あっさり空に飛ばした。

サイモンの姿が遠のくと、クレオは懲りずに呟いた。

「やっぱおかしい、あの先輩……」

流衣は森を駆けていた。

藪があつてときどき服が枝に引っかかるが、後ろから追いかけてくる大きなトカゲが怖くて立ち止まれない。

「だから森に一人とか嫌だったんだよーっ! なんで竜が出てくるの!? この森、そんなにレベル高いのーっ!？」

半泣きでわめきながらも、必死に走る。

緩やかな坂道があることはあるが、ほぼ平坦の森なのでなんとか立ち止まらずに済んでいる。

『水晶竜は、寝ているところを起こすと凶暴ですが、普段は洞窟で寝ているだけの大人しい部類です。その背の水晶は高値で売れますし、水晶に生えるコケは高価な薬草として取引されておりますよ。』

ほら、ご覧下さい。ブレス攻撃もないですし、危ないのは牙と爪だけですよ」

横を飛ぶオルクスは、能天気な解説する。

「その牙と爪が問題なんだよーっ!」

ひいいと泣きそうになりながら、流衣はオルクスに抗議する。

『うーん、確かにそうですね。あの血走った目！ 睡眠不足みたい
です』

「問題悪化しただけじゃん！」

流衣は更にゾツとする。

睡眠不足なら、どうぞその辺で丸まってお休み下さいって感じだ。誰も止めないから。

オルクスはひらりと流衣の側を離れると、水晶竜めがけて滑空する。そして、その小さな足で、水晶竜の横っ面を蹴り飛ばす。

「グギョルアア!？」

蹴り飛ばされた水晶竜は、横に一回転して転んだ。

流衣は足を止め、せいぜいと肩で息をしつつ、目を白黒させる。

「えー？ほんとにその姿でも強いのか？」

『身が小さい分、タイミングが必要ですがね』

ひらりと杖のてっぺんに舞い降りたオルクスは、しれっと返す。

「前にスノウギガスに吹っ飛ばされて、目を回してたじゃないか」

『不意打ちには弱いのです。制約がかかっているのです、気合を入れないと防げないもので』

なんだか色々調整が大変みたいだ。

(つていうか、気合で防げるのがすごいというか……)

『魔法とて、この姿では制約がかかるので、大魔法は使えませんから。まあ、レベルより質で押すので問題はありません』

「そうなんだ……」

初めて聞いた事実にも、一応はいつもは手加減しているんだと思う流衣。リドと喧嘩している時も、手加減しているのだろう。でなければ、リドがああしてピンピンしていられるわけがない。

「おい、無事か！」

ざざざと草の鳴る音がしたと思ったら、頭上からリドが降って来て、華麗に着地した。

「うん、無事だけど。どこから来たの？」

「木を伝ってきた」

流衣は思わずすぐ側の木を見上げた。

身軽なだけはあるが、実際にそういう動きをした人は初めて見た。すごい。

「困にして悪かったな。あの女生徒は無事だ。他の生徒に預けてきた」

「良かった……」

流衣がほっと胸を撫で下ろした時だ。のたのたと身を起こした水晶竜の背中に、黒い影が降り立ったのは。

「ええ！？ サイモン君、何してんの、危ないよ！？」

が、サイモンにはじろりと睨まれただけで、返事はなかった。

なにやら竜の背中にしゃがんで何かしていたサイモンだが、左手に緑色のふかふかしたものを持って、すぐにその場を離れた。

「あのガキ、どさくさに紛れて薬草採取とはっ」

オルクスが憎々しげにうめいている。

「まさかサイモン君の仕業じゃないよね！？ この竜！」

つい抗議してしまうと、近場の木の枝に降り立ったサイモンは馬鹿にするみたいに鼻を鳴らす。

「お前、俺が竜を呼び出せると本気で思ってたのか？ おめでたい頭してるな」

「うつつ」

そんな、本気で見下した目で見なくてもいいじゃないか。

流衣は精神的ダメージを受けた胸に手を当てる。

「じゃあな。コレを回収できりゃ、用はない」

「ちょ、ちよつとサイモン君ーっ。後生だからせめて報告しといてーっ！」

飛び去る背中に必死で叫ぶと、右手を上げて応える。

「覚えてたらな」

うわあ。報告する気無いんだ。

流衣は頭を抱える。

「せめて他の先生が助けに来てくれたらいいんだけど……」

「だーっ、ルイ！ 他のことはいいから、先にこっち手助けしろ！」
「え？」

水晶竜に視線を戻すと、水晶竜は竜巻に巻き込まれて動きを止めていた。リドが風を使って進行を押さええてくれていたらしい。

「結界に閉じ込めるなり、植物で動き封じるなりしてくれ！ 俺の風じゃ、一時的にしか止められねえ！」

「わ、分かった。ごめん！」

流衣は慌ててしゃがむと、右手を地面につける。

「地よ、緑の腕かひなで彼の者かを包み、戒めいましの鎖と成せ！ 地這いの鎖！」

足止めの術なら習得済みだ。

逃げる時にいいなあと思つて、真面目に習得した。

他にも、足元の地面を泥にして動きを鈍らせる鈍重の術とか、氷をはって滑らせる滑冰かっひょうの術とか、地味だけれど効果的な術もあつて、真面目に習つた。落とし穴の術なんてものもある。

召喚魔法と転移魔法だけ習つつもりだったが、地系統と相性が良いと分かつた途端、セトに課題をプラスされてしまったのだ。何でも、理論だけなら召喚魔法と転移魔法だけ習えば分かるだろうが、実際に使おうとするなら、もしかすると神の園まで出掛ける必要はなくなるので、最低限でも身を守れないと危ないとかで。つくづくセトは親切な人だ。

地からしゆるしゆると這いだした鳶は、水晶竜に絡まってその動きを止める。

「グギャツ？ グギャアアア」

じたばたもがく竜だが、動けないでいる。そこへ、壁の結界魔法をかけ、完全に竜を封じ込んだ。

結界だけでは心もとなかつたので、地の魔法も使つた形である。

「……はあ、なんとか封じた」

流衣はへなへなとしゃがみこむ。杖を握つた両手が、真冬にも関わらず緊張で汗をかいていた。

リドも風を解き、深い溜息を吐く。

「あー、疲れた。あのなルイ、お前、戦闘中に他に意識向けるのやめろよ。まじで死ぬぞ」

小言がついて、流衣は素直に謝る。

「ごめん。フォローしてくれてありがとう」

二人して、積雪した地面にへたりこんでいると、空から黒い影が舞い降りて来て、気軽な動作で飛び降りた。

「ご無事ですか、お二方。遅れて申し訳ありません。生徒達から報告を聞き、すぐさま向かったのですが……。おや、すでに解決なされたようで」

トールドだった。

校長であるグレース・スノウリドの旦那であり、校長補佐をしている男だ。正体が黒竜で、人の姿をしているからか、羽もないのに人外の動きで登場したらしい。

「僕達に出来るのはここまでです。あとはどうにかして下さい……」
流衣がそう言うと、トールドは表情に欠ける顔で頷いた。

「勿論です。ああ、魔法は解いて下さって構いませんよ」

そう言い置いて、水晶竜の方に歩いていく。

流衣は怪訝に思ったが、トールドの言う事を聞いて魔法を解除した。結界が消え、鳶が地面に戻っていくと、自由を取り戻した水晶竜は動き出そうとする。が、トールドに睨まれてすぐに動きを止めた。

「どうも初めまして。私、トールドと申します。あなた、私達の庭で何を勝手に暴れてらっしゃるんですか？」

「グギユルア……」

心なしか、水晶竜の睡眠不足の目に涙が浮かんだ気がする。

「起きたらここにいたと？ ほうほう。つまりは、私どもの餌になりきたと、そういうことで宜しいんですね……？」

「グギヤ、グギヤギヤギヤ！」

慌てたように後ずさる水晶竜であるが、怒れる黒竜には通用しな

い。トードは酷薄な笑みを浮かべる。

その姿が、ゆらりとゆらいだ。

瞬きの後、巨大な黒竜が森に姿を現し、水晶竜を一口で飲み込んだ。そして、思い切り嘔みしめる。

「グギヤアアア！」

水晶竜の断末魔が響き、黒竜の口内から溢れた血が、ぼたたと地面に落ちて黒い染みを作る。

(ヒィヒィッ)

流衣は顔面蒼白で近場の木の影に飛び込んだ。リドも同じく逃げを選び、木を盾にするようにする。

腰を抜かして木の後ろに座り込む流衣と、かるうじて座りこまずに幹にしがみつくようにしているリド。オルクスだけが涼しい顔をしている。

パキパキパキパキ、パリーン！

頭上、どこか遠い所で何かにヒビが入る音がして、ついで、ガラスの割れる甲高い音が辺り一帯に響いた。

濃い血臭の中、ふわりと人の姿に戻ったトードは、口元についた血を拭い、顔をしかめて空を見る。

「ちっ、結界が解けるとは！ コレは罠か！」

うめくように呟くや、黒衣を翻して空に飛び立つ。

「グレース！」

どこか焦っている様子で、妻のいる方に向かうトード。

置いてきぼりをくらった二人と一羽は、意味が分からず顔を見合わせるばかり。

「なんなんだ？ いったい……。　　ってか、マジこええええ」

ずるずると地面に座り込み、バクバクとうるさい胸を押さえて、心からの恐怖を口に出すリド。

「……………こ、怖すぎだよ。トードさん、怒ると怖っ」

流衣もぶるぶる震えながら、わななく声で呟く。

「それはそうでしょう。黒竜は凶暴で冷酷、非情で残忍なのです。こうして人の中で生きている者の方が珍しい。普通なら、人食いドラゴンと恐れられるところです」

何を言ってるんだというように、オルクスが言うので、流衣は思わず尋ねる。

「じゃあ白竜は……？」

「怒らせれば恐ろしいですよ。竜ですからね。ですが、普通は、水や空気の綺麗な寒い土地で、のんびり過ごしている者が大半です。綺麗な水があれば生きていきますからね。黒竜は肉食なので、たいていは魔物を食べていますから、身の内にたまった毒も相当濃いのです。気性が知れるというものでしょう？」

「あの二人、よく結婚出来たな……」

リドが心から不思議そうに言葉を漏らす。

「ですから、世にも奇妙で珍しい取り合わせだと申したのです。ほとんどの白竜は黒竜を毛嫌いしていますからね」

「グレースさん、大物だね……」

あの怠惰な女性が、初めて立派に見えた。というか、変だ。変人だ。いや、変竜か？

「脅威は去りましたし、魔法学校に戻っては？ あの通り、魔法学校にかけられた、侵入者妨害の結界が壊れてしまいましたし、何かあったのかもしれないよ」

オルクスの言葉に、流衣とリドはまた顔を見合わせた。

これまでの奇妙な出来事は、これに由来していたのかもしれないと、口に出さずとも互いに思っていた。

六十二章 異変 2 (後書き)

課外授業はおまけにしようと思ったんですが、本編に組みこんじやいました。

キリの良い所まで書いたので、ちょっと分量多めです。

六十三章 vs ネルソフ 1 (前書き)

この回では、残酷な表現や流血表現などがあります。
そういったのが苦手な方はご注意ください。

流衣達が、森の入口に戻ると、全校生徒の避難に追われているところだった。

「あっ、ルイ！ リド！ 無事でしたのね！」

流衣達に気付いたアルモニカが列を抜けて駆けてくる。

「アルモニカも無事だな。怪我は？」

リドが真っ先に妹の心配をするのに、アルモニカは頷く。

「大丈夫です。オルクス様のお陰で……」

ちらつと流衣の肩に乗るオルクスを見るアルモニカ。オルクスはどういたしましてというように、片方の羽を広げてみせた。

「ごめん、報告しないといけないから、また後でね。気を付けて避難して」

「ええ、そちらも気を付けて」

ぞわぞわするアルモニカのお嬢様言葉を背中に聞きながら、流衣はリドをその場に置いて、避難の指揮を執っているグレースの元に駆けて行く。

「校長先生！ 報告したいことが……」

「あら、ルイ。水晶竜のことなら、トーリドから聞いているわ。結果のことも知ってる」

言外に忙しいと主張するグレースに、念の為に、呪いの単語のことを報告する。

グレースは綺麗な顔をたちまちしかめた。

「なるほど、そういうことね。どうして侵入者妨害の結果が壊れたのか分からなかったのだけだ。つまりは、ランダムに生徒達に文字をつけて送りこんで、ここで演習してる時に水晶竜が倒されると、それが発動合図になり、文字が繋がって結界破壊の魔法が展開する

ってこと。回りくどくいけれど、確実な一手だわ」

敵ながらあっぱれね。

グレースはそう評する。

「報告ありがとう。気付かなかったから助かるわ。これを起こした奴の狙いは分からないけれど、生徒を学校内に戻すのは危険だから、トリードに先に様子を見に行かせているの」

そうして、魔法学校の校舎がある南西の方をちらりと一瞥するグレース。

一応、この教練用の森も学校の敷地内ではあるが、校舎とは違い、魔物避けの境界は無い状態だ。入口であるここは、森ではないので魔物避けの境界が発動している。つまり、それを更に覆う形の、侵入者妨害の結界だけが壊れた形になっているわけだ。

「なんか、煙が上がってますけど……」

流衣は校舎の方を見て、顔色を変える。

「あれは研究棟の方ね」

「研究棟ですか!？」

セトの研究室がある校舎のことだ。

流衣がすつとんきような声を上げると、生徒達を誘導していたセトがハツと強張った顔になる。他の教師達のうちの幾人かも、渋い表情になった。あそこは教師達の研究室が集まっている校舎だから、気にして当然なのだ。

「なるほど。うちの権威ある教師陣の研究内容が目当てってわけ。

それはムカつくわね。ちょっと行ってシメてくるわ。ジョセフィーヌ、ここを頼むわね」

茶色いひつつめ髪と眼鏡をした女教師に声をかけるグレース。

「お任せ下さい。グレース様、頑張ってきて下さいませ」

貴婦人の所作でスカートをつまんで挨拶するジョセフィーヌを横目に、グレースは軽やかに地面を蹴った。長い銀髪を風になびかせ、真っ白なドレスをはためかせながら、ものすごい距離を跳躍して去っていく。灰色の雪雲をバックにしているせい、雪の妖精のよう

に見えた。

「呪いに、いるはずのない魔物？ これではまるでネルソフみたいではないか……っ。だが、塔 襲撃事件で事は鎮静化したのではなかったのか……？」

セトが顎に手を当てぶつぶつと推論を呟いていると、生徒達の中から悲鳴が上がった。

「どうしたのです！ 落ち着きなさ……え？」

ジョセフィーヌが辺りを一喝しかけたものの、妙なところで声がぶち切れる。

集まる生徒達の周囲、三方に、黒いフードを目深に被った人間が立っていた。ゆらりと、まるで影のように。

その首元に下がる、文字のようなものが書かれた首飾りを見て、流衣はハツとする。

「まあそう騒ぐな。余計な真似さえしなければ、危害は加えぬ。そうさのう、杖連盟のギルドマスター・ヘイゼルの弟子と、灰色のセトを出してもらえればの」

しゃがれた声が、言葉を紡いだ。

（あれ？ この声、前にもどこかで……）

流衣は動揺を覚えながら、一番森に近い所にいる黒フードを見つめる。そして、アルモニカの姿を探した。

（いた！）

今、口を開いた老人から近い場所にいる。まだ話していたのか、リドが側にいて、さりげなくアルモニカを背に庇ったのが見えた。

それなら、流衣はセトの側にしよう。

流衣もまた、さりげなくセトの側に寄る。

生徒達は、まさかのネルソフの登場に、不安げにざわめいている。動くに動けず、様子見に回っているらしい。

「何なのです、あなた方は」

ジョセフィーヌがキツとまなじりを吊り上げ、老人を見据える。

「見て分からぬか？ ネルソフと言えば分かるかね。この学校には、

杖連盟の幹部が何人かおるのだ。対立して当然だと思っただけじゃ……」

とても不思議そうに答えてから、ふと、老人はリドに目をとめた。

「おや」

驚いたような、愉快がるような、そんな声を零す。

「その林檎のような赤い髪、見覚えがある。こんな所でも会うとは奇遇じゃのう。白い騎士と、オウムを連れた子どもも一緒かね？」

奇遇？ やっぱり、前にもどこかで会ったんだ。

あいにくと、ネルソフの知り合いで老人など、蛇使いと呼ばれていた老人くらいしか知らないが。

リドも相手が誰だか思い出したらしい、腰に提げたダガーの柄に手を添える。

静かに戦闘態勢に入ったりリドは放置し、老人はゆっくりと周りを見回して、ふいに流衣に目を止めた。視線が合い、流衣はびくりと肩を揺らす。影の中で蛇がのたくっていて、相変わらず不気味な老人だ。

「おお、やはりいるな。白い騎士だけがいないか……」

くつくつと歪んだ笑いを零す老人。

「まったく、また会えて嬉しいぞ。前はよくも邪魔してくれたものだ。グドナーは杖連盟に捕まるし、シーリーはギルドマスターに処刑され、ワシはこの通り、片目をとられてしまうてのう」

フードを下ろした老人の左目には、ぽっかりと黒い穴があいていた。

流衣は息を呑む。

周りの生徒達にも動揺が走った。どよめきが起こるが、すぐにやむ。ネルソフを刺激しない為かそれほど騒がない。

リドは警戒したまま、言い返す。

「何言つてやがる。そんなの自業自得だろ。俺らはただ、拾った少年を最後まで面倒見ようと頼まれた所まで送り届けただけで、そこを襲ってきたから返り討ちにしたただけだ」

リドの言う通りだ。

流衣は息を詰めて内心で同意しつつ、周りをそつと伺う。ネルソフを巻き込まないで結界を張ろうと考える。

「くっくっく。相も変わらずよく口の回る……」

「……俺らのことより、ここに何しに来た？ さっきの口ぶりとい、一年前の塔 襲撃だけじゃ飽きたらねえってのか？」

「いやなに。転移魔法の権威が、更に面白い研究をしていると聞いてな。それを貰い受けたいとギルドマスターがおっしゃるので、ついでにここにいるはずのヘイズルの弟子も探しにきたわけじゃ。一年前には逃げられてしもうたらしくての」

あつさり暴露するということは、逃がす気がないということらしい。

流衣は背中に冷や汗が浮かぶのを感じつつ、機会を伺っていてふと気付く。何も生徒達を結界で守らなくても、ネルソフを三人、結界に閉じ込めればいいのでは？

そうして呪文を唱えようとした瞬間、他の黒服の一人が大袈裟に声を上げた。

「ああつ！ お前！ あの時の！」

またもやビシツとリドを指差し、男が叫ぶ。

「なんだ、カース。お主も小僧と知り合いか？」

老人の問いとともに、リドはちらりと男を見て、首を傾げた。

「誰？」

「誰、だと！？ お前！ 俺の右腕を切り落とすとして、忘れたとは言わせんぞ！」

憤然と返す男に、更にリドは思い当たるところがないのか空を仰ぐ。

「右腕……？」

「てつめえ……！ 影の塔って言えば、少しは思い出すか！？」

「ああ！」

リドはようやく思い出したのか、ポンと手を叩く。

「あーあー、あの時の。クソ忌々しい奴な。思い出した思い出した。なんだ、よく生きてたな、あんた」

流衣は、怒れる男と、突然冷気をまとったリドを交互に見比べる。

（影の塔？ 右腕？ 何の話？）

そうして怒っている男を見て、その足元に大きな黒いトカゲがいるのに気付いた。

（あの時のトカゲ使い！）

ボコボコにされた上に、死の呪いまでかけられたのを思い出し、流衣の顔から血の気が引く。

『坊ちゃん、お気を確かに。大丈夫です、次はわてがあ奴を地獄に落とします故』

肩の上にいる使い魔殿が、流衣の怯えを読みとって、低い声で言った。

……心強いのですが、怖いです、オルクスさん。

「って、あの時のクソガキ!？」

更に男は流衣を見て、驚愕に目を瞠った。

「なんだ、お前。なんで生きてる！ 死の呪いをかけたんだ、生きてるはずがない!」

流衣はぎゅっと杖の柄を握りしめる。

どうして生き残れたのかを説明する気はないが、とにかくあの男は怖い。

死の呪いと聞いて、周りが静まり返る。苛立ったリドが言い返そうと口を開きかけた時、突如、拍手の音が鳴り響いた。

パチパチパチパチパチ……

ぎゅっと音の方を見ると、サイモンが退屈そうに欠伸びながら手を叩いているのが目にとまった。

（何してるんですかー!?!）

挑発しないで欲しいと涙目になる。本当に、恐ろしいくらいに空

気を読まない少年だ。ほんと勘弁して。

「そんなつまらない三文芝居、そこら辺にしといてくれる？ 正直、時間の無駄」

サイモンの辛辣な一言に、生徒や教師陣は冷やりとし、周りを囲んでいるネルソフ三人はやや殺気立つ。

「一ヶ月前から、潜伏してるネルソフがいるのは分かった。やつと尻尾出したかと思えば、これかよ。面白くもない」

「……随分な口をきく。お主は誰じゃ？」

「これから死ぬ奴に教えてどうする？ 無駄だろ。ひとの縄張りですら随分好き勝手してくれたみたいじゃないか。あれだけ潰したのに、まだ手を引かないなんて、お前らつてもしかして馬鹿なの？」

どこからか取り出したスローイングナイフをくるくると手の中で回しながら、サイモンは蔑みたつぷりに言った。

怖い。なんだこの蛇とマンガースの戦いみたいないな光景。

流衣は冷や冷やと蛇使いとサイモンを交互に見る。

「ちょ、え、潰したって何ですか……ね？」

そして、思わず、恐々とサイモンに聞いてしまう。

サイモンはにやりと、切れ味のいいナイフのような笑みを浮かべた。無駄に迫力があつて怖い。

「ただの“掃除”だ」

ひいひいっ。聞くんじゃなかった！

流衣は顔面蒼白で後ずさる。

サイモンは楽しげに笑う。悪魔の笑みにしか見えない笑みで。

「正直、学校とかはどうでもいいんだけど。この辺の町は俺の縄張りなんだよな。余所者がいきなり現れてさあ、いい気にならないでくれる？ ゴミはゴミらしく、焼却炉で燃やされてる」

そう言い捨てた瞬間、サイモンは右手を思い切り振った。

「ぎゃあ！」

横合いから悲鳴が上がり、そちらを見ると、トカゲ使いと蛇使い以外のもう一人が、首から血を吹き出して倒れていくのが見えた。

どしやり。

その人間が倒れると、周囲は一瞬静まり返り、直後、女生徒の甲高い悲鳴が響く。

「うるさいなあ……。こいつらは襲撃者。俺のしてることは正当防衛だ。いちいち悲鳴上げるな」

じろりと金目が睨んだら、気圧された生徒達は瞬時に静かになった。噂を知っているから、怖くなったのだろう。

「そもそも、お前ら、この学校の生徒なら、自分の身くらい自分で守れよ。結界の一つも張れないのか？」

馬鹿にするように言つと、我に返つたらしき教師陣が指揮に回つた。

「そうです、皆さん。避難訓練を思い出すのです。防衛の陣をとりなさい！ 生徒会は指示を！」

「……はい！」「」

そこかしこで返事が上がり、たたと生徒の一番外側の列に、数名の生徒が出てくる。

そして、杖を掲げ持って、それぞれが結界の魔法を使った。

全校生徒を包む結界の壁が現れる。そこにネルソフは含まれていない。

「ルイ！ お前、姫さんの側についてる！」

結界は、外から中には入れないが、中から外に出るのは自由だ。封印目的でなければというただし書きがつくが。

ひょいと結界内から出たリドの言葉に、流衣は目をむく。

「え！？ リド、どうする気なの！？」

「前に報復足りてなかったから、ちょっと黙らせてくる」

「はあ！？」

仰天したが、リドの琥珀色の目が、獲物を見据えたみたいに爛爛と光っているのを見て、何を言っても無駄なのだと悟った。

仕方なく、大急ぎでアルモニカの元に走る。

『坊ちゃん、わても加勢してきます！』

「え！？ オルクスまで！？」

その際、オルクスまでもが肩を飛び立ち、結界の外に出てしまったので、流衣は更に驚いた。

普段は仲が悪い癖に、共同戦線を張る気らしい。共通の敵を得たからか、一時的に同盟を結ぶ気っぽい。

(仲良いのか悪いのか分かんないな……)

苦笑しつつ、アルモニカの元に辿り着くと、アルモニカは青い顔をしていた。

「おおお、おい。兄貴が切れとる。怖いっつ」

小声での訴えに、流衣は苦い顔をする。

「とりあえず、僕らに怒ってるわけじゃないから、大丈夫だと思うよ……？」

説教された時のことを思い出すと恐ろしいけれど。

「ねえ、アル。なんである人とリドが知り合いなの？ 右腕って何の話？」

疑問に思ったことを聞きながら、視線は周りを見回す。

「自分の研究狙いなら私が相手する」と言っつて、セトが結界の外に出たのが見えた。金属製の杖を構えている。更に、「獲物を横取りするな」と不平を言いながら、サイモンも出る。教師と生徒で睨みあいつつ、蛇使いの老人の相手をする気らしい。

これで、世にも奇妙な仲間同士のパーティーがまた一つ出来た。

(セトさんも大変だ……)

サイモンのことが苦手だと言っつていたセトを思い出し、流衣は人生の不思議さを噛みしめる。

「右腕……っつて、ああ！ あの時、横に転がっつた腕はあ奴の者じゃったのか。お主の治療のことしか頭になくて、すっかり忘れとつたわ」

起きぬけに腕が転がっつているのを見た恐怖を思い出し、アルモニカはぶるりと身を震わせる。あれはなかなかのトラウマだ。

流衣はアルモニカの反応を見て、アルモニカもよく事態が分から

ないことに気付き、首を振る。

「アルも分らないならいいや。……リドのこと、怒らせないよう
にしようね」

「ワシは怒らせたことはないぞ。お主が気を付けよ」

「……スミマセン」

流衣は素直に頭を下げた。

六十三章 vs ネルソフ 1 (後書き)

蛇足的な独り言

蛇使いをどこでまた出そうか本気で悩んでましたが、ようやく出せました。

互いにリベンジ戦です。

そして早速蚊帳の外に置かれる流衣。強い力持ってて、すぐはぶられる主人公も珍しい気がします……；

あと、なにやら文章に違和感が。いつもとノリが違う気が……。

すみませんが、また更新の間があきそうな予感がします。

明日から再び留守にしますので。

「オルクス、別におめえは来なくても良かったんだぞ」

「はっ、風を操るしか能のないクソガキがよく大口叩けますネ。わてが光魔法で援護してさしあげます、せいぜい感謝するとよろしい」
ダガーを構えるリドと、リドの傍らでホバリングするオルクス。
それぞれ言い合って、睨み合った。

「……口だけクソオウム」

「……なにか言いましたか、クソガキ」

リドはぼそつと悪態を呟き、もちろん聞いているオルクスも反撃する。ピシャーンと二人の間に緊張が走る。

が、そこへ、ドオンと轟音を立てて黒い雷いかづちが降り注いだ。着弾する寸前、リドとオルクスはそれぞれ横へずれてかわす。

「てめえら、やる気ねえならとつとと退場しな！ 特に赤髪！ てめえには右腕の礼をしてやるから、的になれ！」

カースと呼ばれていた影トカゲ使いの男が、ぶつぶつと高速で呪文の詠唱を始め、まるでスローイングナイフを持つかのような仕草で、右手を振りかぶった。

「ちっ」

舌打ちし、それを全て走ってかわすリド。飛んだ影の塊が五本、生徒達が張った結界の壁に当たり、バチンと音を立てて消滅する。

「仕方ねえから共同戦線はってやるよ！」

走りながら怒鳴り、ただし、とリドは更に言う。

「ただし、この野郎を一発は殴らせる！」

自分の方に飛んできた呪いの塊を光の結界で弾き飛ばしながら、オルクスはふふんと笑う。

「上等です！ わてだって一発蹴りを入れさせてもらいますよ！」

ひゅんと空を飛び、オルクスは小規模の雷の雨をカーズに降らせる。

光属性と闇属性は相反する性質を持つ。当然、カーズは自身の足元にうづくまるトカゲに命じて、盾を作って攻撃を防いだ。

その隙に、風を足に纏ったリドは一気にスピードを上げ、風を巻きつけて鋭利さを増したダガーを構えてカーズに斬りかかる。

カーズは余裕で左手をすいと上げて手の平を正面に向け、上に向けていた盾を引きのばして、リドの剣を止める。

影の盾に、風の剣がぶつかり、小規模の爆発が起きる。ぶわつと風が巻き起こり、ヒュウヒュウと甲高い音を立てて冷気を撒き散らす。

「ふん、そう上手くはいかねえか」

爆発で背後へ吹っ飛ばされたリドであるが、くるりと宙で身をひねって、雪の積もる地面に左手をついて着地し、また跳ねて足から軽々と着地する。見ていると軽業師のような動きだ。

カーズは暗い目でリドを見て、にやりと口元を歪ませる。

「あの時は油断してたが、今は違う。“闇に吞まれて、逝っちゃまえ

”！」

「！」

リドは目を瞠った。

あるうことか、自身の影が伸びて、リドを包む鳥かごのような檻を形成したのだ。

（俺の影を！？）

流星に予想外で、見ているしかなかったが、代わりにリドの側に常にいる風の精霊が憤激する。

私達の可愛い子に！

なにするのよ！

闇のー！！

リドやオルクスの耳には、精霊の怒り声が聞こえた。声と同時に、瞬時にリドの周囲に竜巻を形成し、完全に檻が作られるのを阻む。

「くっ！」

カースは左手をぐっと握りしめようとする仕草をするが、完全に手が握れないので、眉を潜める。

「こんのやるおっ！」

リドも精霊の起こした竜巻を引き継ぎ、檻の形成に抵抗する。

影と風が拮抗している様は、外から見ると圧巻だ。

結界内からそれを見ていたアルモニカは、ぎゅっと手を握って、アルモニカには感じられない風の精霊に懇願する。

「頼む、精霊様！ あ奴を助けてくれ！」

その様子を見ていた流衣は、はたとして、しゃがみこんで右手を地面に付ける。

「僕もお願いだよ、地の精霊さん！」

ワインズ・チェイン

地よ、緑の腕かいなで彼の者を

包み、戒いましめめの鎖と成せ！ 地這いの鎖！」

カースの気を反らせばいいのだと気付き、流衣はカースの足元を狙って足止めの術を使う。

「！」

案の定、足を鳶に絡みとられたカースの集中が切れる。

パキーン！

硬質な音が響いた。

影の檻が四散する。キラキラと黒い粒子を撒き散らしながら消え、リドの足元の影は元の状態を取り戻した。

「クソガキ！ また邪魔を！ 俺達のアジトを半壊にしたらだけでは飽き足らず！」

カースが金茶色の目を細めて、怒りを顕にする。そして、足元の蔓に火を放って燃やすと、足を引いて引きちぎった。

怒鳴られた流衣はひるんで一步下がったが、負けじと言い返す。「そ、そっちが悪いんじゃないですかっ！ 女の子を追いかけ回すから！ 僕は悪いことをしたとは思ってませんよ！」
いつもは頼りない助手少年が言い返したことで、周りの生徒達はざわついた。ネルソフのアジトを半壊？ こいつが？ という声がざわざわと広がる。

「よく言った！ ルイ！」

銅製のダガーを手に、気を散らしている隙にカースに急接近し、再度斬りかかるリド。

「ちい！」

ハッとした時にはほぼ鼻の先まで来ていたリドに目をむいたが、カースは左手に持った杖で剣先を受け止める。そして、その足元では、リドからは死角になる位置で、黒いトカゲが水たまりのように溶けた。

「リド！ 下がりなさい！」

オルクスの声とともにリドが後ろに飛びすざると、頭上から金の光が降ってきて、影の水たまりとリドの間の地面に激突する。まさしく影の水たまりから生え出していた槍は、光に跳ね返されて吹き飛び、宙でトカゲの形に戻って地面に着地した。

間合いをとるリドの肩に、オルクスはひらりと舞い降りる。ここまで一緒に旅してきて、オルクスがリドの肩に降り立ったのは実はこれが初めてである。

「アレは影飼かげかいです。影と契約し、接触した影にも干渉出来る連中ですよ。そこに何度も真っ正直に突っ込んでいくなど馬鹿ですか」
オルクスの言葉に、リドは眉を寄せ、据わった目でカースを睨みつつ返す。

「じゃあどうしろってんだよ。俺は中距離タイプなもんでね、近付けなきゃ、どうしようもない」

「遠距離攻撃も出来るでしょう？ 何の為の風ですか。わてが援護すると言っているでしょう、少しは話を聞きなさい」

そう話しかけるオルクスは、いつものリドに対する子どもっぽいものではなく、まさしく年長者としての語り方だった。

リドは少し面白くない気分になったが、確かに鳥の姿をした魔物であるオルクスは風の領域に強かろうと素直に従うことにする。

「風も使いようですよ」

にやつと笑うオルクスは、更に言う。

「さつき竜巻を作っていたでしょう。あんな感じで、もっと中の気圧を低くするんです。そこはわてがしてあげますから、あの男を中に竜巻を起こしなさい」

「キアツ？ 何言ってるか分からねえけど、話に乗ってやるよ」

現代知識のある流衣ならいざ知らず、元々ただの木こりであったリドに、竜巻の発生原理など分かるわけもない。首を傾げつつ、風の精霊に意志を告げ、無意識に操る。

いいわよ、いいわよ！

可愛い子！

闇のをこらしめてあげましょう！

たまには面白いこと言うじゃない、使い魔さん！

きやらきやらくすくす笑いさざめきながら、風の精霊はリドの頼み通り、竜巻を起こし始める。

「無駄なことを！」

カーズは馬鹿にしたように笑いながら、影のトカゲを使って自身の周りに防御壁を張る。

カーズを中心にした竜巻は、初めは小さかったが、笑いさざめきながら風の精霊が更集まってきたことで規模を大きくしていく。

物凄い暴風が吹き荒れる中、リドとオルクスは平然とその場に立っている。二人とも風を上手く調節して、自身に影響がないようにしているのだ。

「竜巻の中は真空になるんですよ。はてさて、どれだけもちますか

ねえ、あの男」

にやつと笑むオルクスは、もし、今、オウムではなく人の姿をしていたら、魔物らしい酷薄な笑みを浮かべていただろう。

「シンクウ？」

なんだそりゃ？ と首をひねるのはリドである。

中世のような生活をしていて、真空の知識を得ることは稀に等しい。それこそ、流衣のように理科で習うか、真空ポットなどが日常に用意されていなくては難しいだろう。

「なんだそれ？ 意味を教えろ」

よく分からないものの、リドはオルクスの言葉に嫌な予感を覚えたので、意味を教えろとせつつく。

「何でわてが教えなくちゃいけないんですか」

面倒くさそうなオルクスにイラツとして、リドは流衣なら知っているかもしれないと結界の方を振り返る。

「ルイ！ シンクウって何だ？ 知ってるか？」

「真空？ 空気が無い状態のことだよ！ ……そうだよ、まずいよ

！ リド！ もう充分だろうから竜巻を解除して！！」

問われた流衣はハツとして、リドに叫ぶ。

『坊ちゃん、別にこのままでも』

「何言ってるの、オルクス！ 竜巻の中は真空になるんだよ！ 中

の人、死んじゃうよ！」

「空気が無い？ 窒息か！」

驚いたリドは慌てて竜巻を解除した。竜巻を起こし初めてから結構な時間が経っていた。十分くらいは経過しているかもしれない。

風が四散すると、案の定、カースが地面に倒れていた。

「おやおや、運の良い。生きてますねえ、虫の息ですが」

パスツと羽音をさせて降り立ったオルクス。涼しい顔で呟くのを見て、リドは拳をわななかせる。

（この野郎、知らない間に俺に殺人の片棒かつがせようとしやがったな……！！）

忘れていた。

こいつは例え使い魔だろうと、魔物なのだということを。

主人の為ならどんなに酷薄にもなれる、それが使い魔なのだ。

主人があんな風に温和だから、たまたま無害に見えるだけで、オルクスは魔物なのだから、気を抜いたリドがどうかしていた。

流衣には聞こえない程度の小声でオルクスに釘を刺す。

「このクソオウム！ やっぱ俺はてめえが嫌いだ！ あいつが優しいからってつけあがんなよ！」

「何を怒っているんです？ 協力して倒したのですから、もっと喜べばいかがですか？」

「確信犯かてめーっ！」

頭に血が昇りかけるが、あんまり騒いでいると流衣に聞こえるだろうから、気を落ち着けた。オルクスが起こした結果で胸を痛めるのは流衣だ。これはリドの胸の内に秘めておくことにした。それに、気絶しているとはいえ、カースをこのままにしておけない。

「うっ……」

心配通り、カースが目を覚ましかけたので、リドは「ふむ」と呟いて拳を固める。

「とりあえず一発殴っとくか」

報復の一撃を容赦なく入れておく。頬をガツンと殴ったら、起きかけていたカースはそのままガクツと気絶した。

「よっし！」

あとは縛って、呪文を口に出来ないように猿ぐつわかけて、杖連盟に連絡だな！ いや、むしろ校長に引き渡せばいいか。

「わても蹴っておきたかったです」

「てめえが本気で蹴ったら死ぬだろうが。つか、お前の場合、さっきので充分だろ」

そう返しつつ、リドはふうと額の汗を拭う仕草をする。

（はーっ、すっきりした！）

報復出来たことで晴れ晴れと笑顔で結界を振り返る。

「おい、こつち片付いたぞ！」

すると、そんなリドのいい笑顔を見た流衣とアルモニカは何故か頬を引きつらせ、目を反らした。

「ん？ なんだ？」

どうしたんだろうと怪訝に思うリドは、まさか二人が「リドを怒らせる」とまじでやばい」と内心震えあがっていたのには気付かなかった。

六十三章 vs ネルソフ 2 (後書き)

ちょっと短めです。

オルクスの魔物の部分を出せて大満足。

竜巻の中が真空うんぬんは、まあ、中が外より低気圧なだけで中の物に害はないという説もありますが、ファンタジーの王道ってことで流しておいて下さい。

六十三章 vs ネルソフ 3 (前書き)

話中、ぐろい表現があります。注意。

またこの回はセト視点が中心なので、興味ない方はすっ飛ばして下さい。

なんだってこんなことに。

一方、セトは内心で溜息の嵐だった。

セトは杖連盟の幹部だし、敵対組織であるネルソフと一戦交えるのに躊躇はないが、どうして学校で一番苦手としている生徒などと組むような流れになっているのだろう。

「……引け、サイモン。ここは私が相手をする」

「嫌だね。気に食わない奴は潰す。お前に口出しされる覚えは無い」
この調子である。

(誰が“お前”だ)

教師として、いや、年長者として尊敬されていないのは理解していたが、そこまで言われると腹が立つ。

「お前の方が引けよ」

「それこそお断りだ。彼らは私の客らしいからな」

しれっと返す。サイモンが不愉快そうに金目に殺気をこめて睨んできた。セトは口元に笑みを浮かべ、笑っていない目元で見返す。

セトはすぐに視線を 蛇使い に戻す。

金属製の杖を構え、サイモンは無視して呪文の詠唱を開始する。

「ライトアロー！」

光矢の術。初歩よりの中級の術だ。セトはそれを短縮詠唱で使う。この術は光の矢が敵を射る術だが、研鑽すれば矢の数を増やすことが出来るから、初歩よりとはいえあなどれない魔法だ。

セトの呪文とともに光の矢が三十ほど宙に浮かび上がり、それはセトが杖先を 蛇使い に向けることで、一気に 蛇使い へ向かっていった。

「……ふん」

蛇使い は様子見なのか、それが作戦なのか、こちらの様子をじっと見ていたが、軽く頷いた。影から飛びだした蛇の群れが、とごとく矢を喰らいつくす。

(……喰った)

セトは啞然とし、背中に冷や汗が浮かぶのを感じる。

光と闇の属性は相対するのだから、弾くのは分かるが、喰らうのが分からない。

しかも気のせいかな蛇の大きさが増したように見える。

「なかなか美味い魔力らしいのう。ワシの蛇どもは腹を空かせておつたから、喜んでおる」

「……………」

蛇使い の笑いが空気を揺らす。どこか楽しげに響くそれは、不気味そのものだ。目の前にいる老人が、急に得体の知れないもののような気がしてきた。人外ならば納得もするが、同じ人間なのか？ 思考するセトの眼前で、空中に銀の線が三本走る。

それは 蛇使い に向けて飛来し、 蛇使い の足元から伸びあげた影の蛇に弾かれた。

「なるほど。魔法は吸収するが、武器は弾くってわけ。ふうん」

雪の積もった地面に刺さったナイフを見て、サイモンの仕業だと遅れて気付く。子供のくせに、大したナイフ使いだ。それに躊躇なくネルソフの一人を殺めていたのといい、この辺りの街が自分の領域だと言いつ張るのといい、普段、学校を休んで何をしているのか考えたくもない。

サイモンは手の中でくるとナイフを回す。

そうしているうちに、だんだんナイフの数が増えていき、両手を構えた時には十本になっていた。

再び銀の線が空を切る。

ヒュツと鋭い音とともに飛んでいくナイフは、しかし甲高い音とともに 蛇使い の操る蛇の壁によって弾かれた。

投げながら走り出していたサイモンが 蛇使い に近づく。

サイモンが 蛇使い の元に辿り着く直前、伸びあがった蛇が 蛇使い とサイモンとの間に壁を築く。が、サイモンは壁のすぐ手前で立ち止まり、地を蹴ってひらりと老人の背後 から空きの背中側へと降り立った。そして、雷撃のような蹴りをその背へ叩きこんだ。

どがつという音とともに、直前で蹴りを蛇の盾でガードした 蛇使い が、セトのいる方へ一エナ・ケルテルほど吹っ飛ぶ。魔法の壁ごと術師を飛ばすなど、どれだけの威力だと目を剥くセトの前で、蛇使い はずざつと音を立てて足を踏ん張って転倒を防ぎ、杖を構えて何か叫ぶ。

「おっと！」

地面から次々に影の剣が生え出てくるのを、サイモンはバツク転の要領でかわしていく。そして、またナイフを構えて投げた。

蛇の盾が出来、攻撃が止まる。

「へえ、攻撃と防御は一緒に出来ないんだ」

サイモンが面白そうに口元を歪めた。何かを企んでいるような、精神衛生上よろしくない顔だ。

（なるほどな……。しかしサイモンの奴、どこにそんなにナイフを隠してるんだ？）

ついつい見守ってしまっていたセトは、次々に湧いてくるナイフの所在が気になった。

そこで、リド達の方が騒がしくなり、そちらを見る。折しも影の檻にはまろうととしていたリドが竜巻でそれを押しとどめ、離れていた流衣の援護により脱したところだった。

トカゲ使いの方の男の怒鳴り声を聞き、 蛇使い は鼻を鳴らす。「ふん、あの小僧がブラックリストの奴か。まったく、つくづく我らの前に現れる……」

どうも流衣やリドはこの老人やトカゲ使いと知り合いらしい。トカゲ使いの方が、死の呪いだとか気になることを言っていたが、あれを受けて生き残った者の話など聞いたことがないから、きつと負

け惜しみだろつと判断する。どう見たってあの助手少年がまともに生き残れるようには見えない。

蛇使いの老人が、やれやれというように溜息を吐いたところへ、スローイングナイフが三本ほど纏めて飛んでいく。いつの間にか羽ばたいて滞空していたサイモンが、頭上から投げたようだった。

サイモンは正々堂々喧嘩を売る。

「余所見してるんじゃねえよ、耄碌もろろくじじい」

「ござかしい童が……!!」

ぎろつとサイモンをねめつけた蛇使いは空を舞うサイモンめがけて黒い雷を落とす。しかしそれは、後方にいるセトが盾の魔法を使って防ぐ。

「余計な真似するな、セト・オルドリッジ」

「敬称をつけんか、馬鹿者！」

セトは威勢よく怒鳴った。

本当に尊敬の念の欠片も抱いていない様子だ。まったく、サイモンの保護者はどんな躰をしているのか。そもそも、保護者がいる方が不思議だ。あれだけ自立しているのだから、庇護下におさまっているのが理解出来ない。

蛇使いは強く、セトとサイモン二人がかりで少し優勢になるかといったところだ。

セトの魔法が防がれるのならば、セトはサイモンの援護に回ればいいだけだから、近距離型の戦士がこっちにいて良かった。

胸中かなり複雑ながら、セトはサイモンが睨むのは頬の表面で受け流しておいて、次の魔法を用意する。

(こういう時は、季節や地の利を使うもの)

ふとセトは思う。あれだけナゼルを叱ったものの、今ここにいるスノウギガスを作ってくれたら、あれは何故魔物化するのかセトにもよく分からない。場がいい具合に混乱して、攪乱に都合がいいのに、と。しかし、すぐに考えは打ち消した。こちらまで攪乱されるのがいいところだ。

あれを完全にナゼルが制御出来るようになったらと思うとセトは少し不安だ。魔物を操るのは、閻属性の魔法使いの専売特許であり、ということにはスノウギガスを作ってしまうナゼルの魔法は実は閻属性で、ナゼルに何らかの負担がかかっているとも考えられる。代償無しには行使しえないのが閻属性の魔法である。それにそう見なされてナゼルが杖連盟の監督下に置かれるかもしれない。それはどうかと思うのだ。

つらつらと考えていたセトは、そんな場合ではないと自分の思考を切り替え、トンと足元の地面を杖で突く。

「太陽と北風は競いあい、北風が勝ちてここに到る。水よ、荒ぶる風に乗りにて、冬の吐息を吹きかけよ。渦となりて敵を包め！」

ブリザード・ダンス
北風の踊り！」

セトの詠唱が聞こえたのか、サイモンが珍しくぎよっとした顔をして、素早く戦線から離脱した。

吹雪の渦が巻き起こり、蛇使いを包み込む。

冷たい風が頬を撫でて吹きすぎていく。自分でしたことはいえ、とても寒い。

「これは俺に対する当てつけか？」

寒さに弱い亜人であるところのサイモンが、地面に降り立ち、じろりと不機嫌に睨んできた。視線だけで相手を殺せるなら、そうやっていそうな鋭い目だ。しかしながら若干顔色が青い。

「忘れていた。魔法は地の利と季節を利用するのが基本だからな、そうしただけだが。悪いとは思っているから、そうならむな」

サイモンが不機嫌になるのは当然なことだ。だからセトは冷や汗をかきながら謝る。いつか背後から刺されそうで怖い。本当、なんで生徒なんかにおさまってるんだ、この少年。

バシユッ！

その時、皮紐が切れるような音とともに、吹雪が内側から弾かれ

た。風が解けて霧散する。

蛇使い がこちらを見据える。

セトは無意識に、セトとサイモンの周囲に無詠唱で結界魔法・壁を展開した。全方位の地面から突き出した影の槍が、結界に当たって跳ね飛ばされる。

魔法使い同士の戦いは、術の掛けあいだ。攻撃し、防ぐ。隙を突かれた者が負けるか、大魔法で圧倒して相手の結界を破るかのどちらかになる。更に言えば、先に魔力が尽きた方が負けるという意味でもある。

セトは元々は十人十色並みの魔力しか持っていなかったが、魔法を使いながら各地を旅していた時期に、今のような一般魔法使いの三人分くらいまで増えた。大多数は生まれた時に魔力最大保持量が決まるが、少数の例とはいえ、後から増える者もいるのだ。

あの老人がどちらかは知らないが、どうやらセトと同じくらいの魔力を有しているようである。

たいてい、誰でも僅かに魔力を持っているものだから、サイモンのようなすっからかんの者は珍しい方だ。いや、サイモンの場合、持っているのだから僅かすぎて魔法を使えないのだろう。

それに比べれば、助手少年のような魔力の甚大さは異常なのだが、どうも本人の頼りなさや善良さだけが目立って、怖いとも危ないとも思えない上に誰にも頼りにされないのだからある意味稀有な人間である。

それから、先程サイモンが攻撃か防御のどちらかしか出来ないのかと言っていたが、どの魔法使いもそんなものである。一つの術を行使中、別の術を使おうとしたら相当な集中力があるので、どっちも魔法にならなくて消えることになる。例えるなら、水がギリギリまで入ったグラスを両手で持って、零さずに階段を下りるといふようなものだ。稀にそんな芸当が出来る者もいるが、そうそういない。杖連盟にも知っているだけで一人くらいか。

つまり何が言いたいのかといえば、蛇使い に攻撃をくらわせ

るにはこの結界を一度解く必要があるということだ。魔法使いが二人いるなら、一人が結界を、一人が攻撃をすればいいだけの話だが、今は魔法使い一人と、戦士一人なので無理だ。

「面倒だ。俺が出る。力づくで叩けばいいだろ」

「それで呪いをくらったらどうする気だ？ 奴の一撃を少しでもくれば、呪いをもらうことになるぞ」

サイモンの主張を、セトは一言で退ける。

「君に何かあったら、君の保護者が悲しむのではないか？」

とりあえず教室での生徒との喧嘩を見る限り、サイモンは保護者を絶対視しているようなので、そう言ってみたら、劇的に効いた。黙り込んだサイモンは、「そうだな」とまさかの肯定を返す。

(お?)

少し驚いたが、返事を聞いてがっくりする。

「悲しむかは知らないが、俺が死んだら養父を守る駒が減るな。害虫駆除が出来ないのは確かに困る」

「……そ、そうか」

保護者について詳しくは知らないが、もしかして政治的な大物なんだろうか……。それで敵が多いのかもしれない。しかも自分を駒呼ばわりとは、なんて殺伐とした親子関係だ。

「それで何か策があるのか？」

じろつとこつちを睨むサイモンに、セトは案を話す。

「なに、話は簡単だ。ようは、あの老人の攻撃直後に、私の術が完成すればいいのだ。隙をつけるだろう？」

「なるほどな。じゃあ俺が攻撃させるようにおちよくってくればいってことか。ふふん、そういうのは得意だから任せな」

教師に対する口調ではないが、冒険者同士としてなら頼りになりそうだ。色々と問題児はあるが、サイモンは着実に成果を残すタイプな上に発言や行動は男前である。少し血生臭いが、という言葉が付きが。

おちよくるのは得意って、もしかして普段から貴族の生徒へ向け

た言葉もその一貫だったりしないだろうかと邪推しつつ、セトは結界魔法を解く。

結界が解けた瞬間には、サイモンの手元からはすでにスローイングナイフが飛んでいた。初動が早い。

カカカンツと硬質な音がして、蛇使いがナイフを弾いた。そのナイフの動きに合わせて前進したサイモンは地を駆けていく。雪が積もった地面を、黒衣が影のように走る。

それを視認したらしき 蛇使いは落ち着いた様子で呪文を唱え、影から蛇が矢のように飛び出してサイモンに飛びかかった。

きゅつと進路を変え、側転して蛇を避けるサイモン。追撃はバツクステップでかわし、かわしながら右手を振った。

攻撃していた蛇が地面に落ちて水たまりとなり、代わりに蛇使いの足元の影が伸びて盾になりナイフを防ぐ。

ふつとサイモンの口元が歪む。馬鹿にしたような笑いだ。

これには神経が逆撫でされたのか、蛇使いの口元が真一文字に引き結ばれる。

「ちょこまかと……っ」

苛立たしげな声が漏れた。

これは確かに“おちよくる”だ。間違いない。

一方でセトも詠唱を開始する。雷撃系の技がいい。

「降り来たるは神の鉄鎚。光よ、かの者を柱とし、捕縛せよ！」

サイモンは走りながら、どこから取り出しているのだから分らないナイフを次々に投げる。

蛇使いはそれを追い、盾で防ぎ、また足元の蛇が矢のように飛びだした。

「ここだ！」

「サンダーレイン！」

セトの繰り出した魔法は、寸分違わず 蛇使いの杖に落ちる。

「う、ぎゃあああああっ」

雷にうたれた 蛇使いの悲鳴が上がる。

がくりと膝をつく 蛇使い はしかし、不気味に笑っている。

「ふふ、くくくく。ここまでやられたのは久しぶりじゃて」

フードがずれて、左の暗い眼窩がんかが覗く。その暗闇の中で、何かがつごめいた。

「……ちっ、この耄碌じじい、目にも蛇飼ってんのか。いい趣味してるな」

舌打ちしたサイモンが、状況判断の為に間合いを大きめに取る。ずるずると目から黒い影が溢れ出てくる。

「く、うう。しかし、ワシは負けぬぞ……」

影は一向に途切れる様子は見せず、どんどん大きくなっていく。しかし影が目から這い出るたびに、蛇使い は苦悶の表情を浮かべる。

「大蛇まで使うか。苦戦してるようだな、老師」

ふいに冷徹な声が混じり、蛇使い は残る右目を見開いた。そして、老人の発した言葉に、その場にいた人間の誰もが凍りついた。

「……ま、マスター！」

六十三章 vs ネルソフ 3 (後書き)

戦闘シーン、恋愛の次に書くの苦手です。

なんかこう、もうちょっとと格好良く書けないもんですかねえ。知
謀めぐらすとかもいいです。難しい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0698q/>

おまけ召喚 第三部 雪深き学び舎に潜む影

2011年10月24日02時06分発行